
テイルズ オブ ヴェスペリア **赤月の夜**

瑟苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズ オブ ヴェスペリア 赤月の夜

【Nコード】

N1280F

【作者名】

琶苑

【あらすじ】

テイルズオブヴェスペリアのオリジナル設定付き原作沿いの小説。多分ネタバレになります。牢獄の中で出会った少女。ユーリの冒険が始まる。

設定（前書き）

読む前に忠告します。

ネタバレになります。

そして、オリジナル設定付きです。

それでも良いというかたはどうぞ。

設定

名前

シーク

武器

剣（ユーリより長く、十字架に似た形をしていて、柄の下には鎖がついている）・ナイフ（隠し持っている）

髪

肩によりも少し下ぐらいまでの長さの黒髪。

瞳の色

右が銀色、左が赤色。（左右の視力が違う）

服装

膝まである羽織（羽織の袖は肩を少し過ぎた長さ）の下には黒いシャツ（袖は肘の上あたりまで）。下は膝ぐらいまでである半ズボン。ズボンの下には膝より少し上ぐらいまでの長さのスパッツ。膝より下は生足。

基本的にはあまり笑わない。

言葉使いは女らしくない。人を信じず、まず最初に疑う。仕事を第1に考える。帝国と貴族と騎士が大嫌い。ある人を捜している。左

目の視力が悪いため、本を読むときは眼鏡をかける（コンタクトの時もあるが本人いわく取り付けが面倒）。食事はあまり取らない。かなりの少食。食事はあまり取らないせいかあまり料理をしない。戦闘時には剣をよく使うが、時と場合によってナイフや魔法を使用する。

使える魔法は攻撃系と回復系の両方を使う（回復系は体力を回復できるが、毒などの治療系は使えない）。

【使える魔法】

ファーストエイド

ヒール

ヒールウィンド

ヒールストリーム

ホーリーソング

フレイムバースト

イグニートプリズン

アクアエッジ

セイントバブル

エナジーブラスト

タービュランス

ストーンブラスト

グレイブ

プリズムソード

レイ

ジャッジメント

グランドクロス

ライトニング

サンダーブレード

スパークウェイブ

インディゲネーション

ストーリーが進むにつれ、オリジナルキャラクターのことが分かっていきます。

第1夜：牢獄の中の出会い（前書き）

読む前に忠告します。

テイルズ オブ ヴェスペリアの原作沿いオリジナル設定付きの小説です。

多分ネタバレになります。

それでも良いというかたはどうぞ。

帝都ザーフィアスまで

第1夜：牢獄の中の出会い

帝都・ザーフィアスの地下牢。

騎士が一人の青年を牢の中に入れた。

彼の名はユーリ。

ユーリはしばらくして起き上がった。

隣から声が聞こえる。

「うるさいっ！もう少しで食事の時間だ！！」

騎士はそう言い、牢から離れる。

騎士が行くと、隣にいる男がユーリに話しかけてきた。

「ジツとしてるのも飽きてきたでしょ？そろそろ目覚めてもいいんじゃない？」

「それよりさっきの話は本当か？」

「本当よ。世界中の部下が集めてきたんだから。ために何か質問してみない？」

「じゃあ、ここから出る方法を教えてもらいたいね」

「10日たてば出してもらえるでしょうよ？」

「それじゃ下町が水で埋もれちゃうよ」

「そういえば、下町の水が止まらないみたいね」

「・・・」

ユーリは男とは逆の方の牢を見た。
そして、逆の方の牢に話しかける。

「何で牢なんかに入れられたんだ？」

「俺様？」

「アンタじゃない。逆の方の牢に話してんだ」

「誰がいるの？」

「人の気配はする。アンタも気付いてんだろ？」

「まあ、人の気配はするけど・・・話しかけても全然反応なかったわよ」

その時、地下牢の中に誰かが入って来た。

そして、男の牢の前に止まる。

「（騎士団長のアレクセイじゃねえか）」

「出る」

男はアレクセイの言葉に従い、牢を出た。

そしてユーリの牢の前に来ると、わざとらしく転び、ユーリに牢の鍵を渡し、ユーリにだけ聞こえる声で話しかけた。

「（女神像の下）」

「早くしろ」

男とアレクセイは地下牢を出ていった。

ユーリは出ていったことを確認すると牢の鍵で鍵を開けようとした。

「城の出口を知っているか？」

男が入っていた牢とは逆の方の牢から聞こえた声だった。

「あ？ああ。それがどうしたんだ？」

「城の出口まで案内しろ」

「つまり、お前も脱獄か」

ユーリが隣の鍵を開けようとしたら、

「必要ない」と相手は言ってきた。

その者はナイフを取り出すと無理矢理鍵をこじ開けた。

牢の中から出てきたのは肩ぐらいの黒い髪を一つに束ね、右の目が銀色、左の目が赤色のオッドアイの綺麗な顔立ちの少女だった。

「お前、いつでも出られたんじゃないか？」

「出られたが、城の出口が分からないから出るつもりがなかった。騎士が来る前にいくぞ」

「待てよ。俺はユーリ。お前名前は？」

「城の出口までの仲だ。必要ないだろう」

「城の出口までの仲なら名前も必要だ」

少女は溜め息をつき、ユーリと向き合った。

「シーク」

「シークか。城の出口までよろしくな」

二人は眠っている見張りの近くに置いてあった武器を拾った。

シークの武器は十字架のような剣だった。

ユーリのよりも長い剣である。

二人は地下牢を出た。

「シーク、お前は戦えるのか？」

「結界の外を旅したことはある」

「そうか。なら大丈夫だな」

二人は遭遇した騎士と戦おうとしていた。

ユーリが先に動き、あつという間に騎士を倒した。

シークは騎士の武器を弾き、無抵抗になった騎士を剣で刺した。

「お戻りくださいー！」

「例の件は我々が小隊長にお伝えしますので」

「そう言っただけあなた方は何もしなかったではないですか!」

騎士を倒してすぐにその会話は聞こえてきた。

ユーリとシークはこっそりと覗く。

そこには騎士二人と貴族のような少女がいる。

「騎士と貴族か。無駄な時間だ。行くぞ」

「どうしてもフレんに伝えなければならぬことがあるのです!」

「(フレン!?)」

ユーリが飛び出し、騎士二人を倒した。

「フレン!助けに・・・誰?」

貴族の少女は笑顔からすぐに警戒する顔になった。

シークは呆れ、仕方なくユーリの方へ歩いた。

「馬鹿か!?!なぜ自ら姿を見せる!?!」

「俺も何やってんのかね?」

シークは剣を抜き、少女に矛先を向けた。

「見られたのなら仕方ない。お前には死んでもらう」

「え?」

「待てよ。何でもかんでも人を殺してたらきりがないぜ」

「ユーリ・ローウェル！何処であるか！」

「大人しくお縄につくのだ！」

突然、ユーリの名を叫ぶ声が聞こえた。

少女はユーリの名を聞き、少し驚いたようだった。

「ユーリ？フレンのお友達なの？」

「そうだけど？フレンに聞いたのか？」

「はい」

「あいつも話し相手が城の中にいたんだな」

「ユーリ。いつまでもここにいたら見つかる」

「そうだな。アンタ、フレンを捜してるなら部屋まで連れてくぜ」

「ユーリ！？何を！？」

ユーリの言葉に反論するシーク。

だが、城の出口を知っているのがユーリしかないというのに気付くと無駄な抵抗はやめた。

貴族の少女を連れ、やってきたフレンの部屋。
しかし、中には誰もいなかった。
ユーリは部屋を見回した。

「やけに片付いてるな。こりゃフレンの奴、遠出だな」

「そんな・・・遅かった・・・」

「ユーリ。いつまでもここにいるわけにはいかない。私は早く外に出たい」

「そうだな」

シークの言葉にユーリは行こうとしたら少女がユーリをひき止めた。

「待ってください！私はフレンに伝えなければならぬことがある
をです！このままだとフレンの身が危ない！」

「フレンの・・・？」

「はい。詳しいことは分かりませんが、フレンの身が危険なんです」

「そういえば、アンタ名前は」

ユーリが少女に名前を尋ねた時だった。
突然、部屋の扉が激しく開いた。
そして、双剣を持った男が姿を現した。

「フレン・シーフォー！！貴様を殺す！！」

男はユーリをフレンと勘違いし、ユーリを襲う。
ユーリは咄嗟に剣を抜き、攻撃を防ぐ。

「やるなっ！フレン・シーフォー！！」

「いきなり何なんだ！？」

「待ってください！その人はフレンではありません！！」

「細かいことはどうでもいい！！」

男はユーリに攻撃し続ける。

「私も手伝います！！」

少女も剣を持ち、戦闘に参加する。

しかし、シークは戦闘をただ見ているだけだった。
ユーリはシークを見てシークに話しかける。

「シーク、お前は手伝ってくんねーのか？」

「ここで暴れたら騎士に見つかる」

「出口は俺しか知らないぜ」

「それもそうだが・・・仕方ない」

シークが剣を抜き参戦しようとした時だった。

「ザキ！騎士団に見つかった！引くぞ！」

フードを被った男がフレンの部屋に入って来た。

「ちっ！」

ザキという男はフードを被った男を切った。

男は切られ、倒れた。

ザキはユーリを見た。

「フレン・シーフォ！貴様を殺すのはこの俺だ！」

そう言って姿を消した。

「騎士団に見つかる前に行ったほうがいいな」

ユーリとシークが行こうとしたら少女が再びユーリをひき止めた。

「待ってください！」

「フレンに会いたいなら行けよ」

「・・・」

少女はユーリの言葉に黙る。

「分かったよ。城を出るのを手伝ってやる」

「ありがとうございます。ユーリさん・・・」

少女はシークを見たが、シークの名前が分からず黙った。
シークも自分の名前を応える様子もない。

「こいつはシーク」

「シークさん、ありがとうございます。私、エステリーゼっていい
ます」

「エステリーゼか。これから外に出るんだ。その格好だと目立つぞ」
「ならこの先に私の部屋があるんです。そこで着替えます」

エステリーゼが部屋で服を着替え、女神像がある部屋までやってき
た。

ユーリは女神像を動かした。
女神像の下には道があった。

ユーリ、エステリーゼ、シークは抜け道を進み外に出た。

「うわっ！眩し！もう朝か」

「地下に居れば時間の感覚が分からないからな。お前とはここまでの
約束だ」

「そういえばそうだったな」

シークが去ろうとしたとき、エステリーゼがシークを止めた。

「あの、もう行くんですか？」

「ああ。城の出口までだからな」

「短い間でしたがありがとうございます」

エステリーゼはそう言って、手を差し出してきた。しかし、シークはその手を弾く。

「あっ……」

「私は貴族が嫌いだ。馴れ馴れしくするな」

シークはそう言って姿を消した。

シークは色々と旅支度を済ませ、ザーフィアスの下町を出ようとした。

その時、下町が先程より騒がしいのに気付く。

「シーク！待ってください！」

声のした方を振り向くとユーリとエステリーゼがやってきた。
二人の足下には犬がいる。

「ユーリ、エステリーゼ・・・何故ここに？」

「私はフレンを捜しに行きます」

「俺は下町の魔核取り戻さなきゃなんねーしな」

「シークは何処に行くんです？」

「ハルルを指す」

「じゃ、俺達と一緒にか」

「一緒に行きませんか？」

「私は構わない。それよりその犬は何だ？」

シークが犬を指差した。

「こいつはラピード。俺の相棒だ」

「ワフ」

シークはラピードの頭を撫でた。

3人と1匹はハルルの町を指す。

第1夜・牢獄の中の出会い（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第1・5夜（前書き）

第1夜のオリジナルスキットです。

第1・5夜

【どのくらい？】

ユーリ

「シーク、お前牢獄の中にどのくらいいたんだ？」

シーク

「どうしてそんな事を聞く？」

ユーリ

「俺はよく牢獄の中に入れられるからな。いつも誰かの気配があったんだが、お前だろ？」

シーク

「確かに。お前はよく牢に来てたな」

ユーリ

「やっぱ、あの気配はシークか。長い間入れられてるのか？一体何やらかしたんだ？」

シーク

「まるで私がいつも牢にいるような言い方だな。ユーリより先に牢に入れられてるだけだ」

ユーリ

「本当か？」

シーク

「信じる信じないはお前の自由だ」

【理由】

ユーリ

「そういえばさっきの騎士は俺の名前だけ呼んでたな。シークは一言も言っただけだったが・・・」

エステリーゼ

「シークも牢獄に入れられていたんですか？」

ユーリ

「ああ。それで何でだ？」

シーク

「何故かはしらないがたぶん」

ユーリ・エステリーゼ

「たぶん？」

シーク

「いつもこの時間は眠っているからだろう」

ユーリ

「もしかして、俺がいつも話しかけても何も言わなかったのは寝てたからか？」

シーク

「そういう時もあったかもしれないが、面倒だから根本的に無視していた」

シーク

「そのせいか時々見張りに忘れられて食事抜きにされたこともあったな」

エステリーゼ

「そんなに眠かったんですか？」

シーク

「牢獄の中にいると他にすることがなかったからな」

【シークと別れて】

エステリーゼ

「シーク、行ってしまいましたね」

ユーリ

「そうだな」

エステリーゼ

「もう少し一緒にいたかったです」

ユーリ

「本人は一緒にいたくなかったみたいだったが」

エステリーゼ

「私、嫌われているのでしょうか？」

ユーリ

「シークの奴、初対面にはだれだって冷たいんだろ？最初は俺にも名前、教えなかったし」

エステリーゼ

「次に会ったらもう少し仲良くなってみます」

【早い再会】

シーク

「まさかまた一緒に行動することになるとは……」

ユーリ

「嫌なら一緒に行かなくていいんだぜ」

シーク

「結界の外は魔物だらけだ。一人よりはマシか・・・」

ユーリ

「それもそうだな。行けるところまでよろしく頼むわ」

シーク

「行けるところまでか・・・つまりユーリが死ぬまでか」

ユーリ

「案外シークかもしれないぞ。骨だけは拾っておいてやる」

シーク

「私は剣だけ拾って売りさばく」

ユーリ

「・・・」

エステリーゼ

「二人とも、仲がいいんですね」

ユーリ

「今の会話聞いてそう思うか？」

【理由2】

シーク

「二人は何故、ハルルに行くんだ？」

ユーリ「俺は下町の水道アクアプラスチック魔導器取り戻すために。下町には必要だからな」

エステリーゼ

「私はフレンを捜します。シークは何ですか？」

シーク

「・・・仕事」

ユーリ

「何の仕事だ？」

シーク

「実際にはまだ仕事は無いが、ハルルに行けば仕事があるかもしれない。それに・・・」

エステリーゼ

「まだあるんですか？」

シーク

「何でもない」

第2夜：呪い森の中で（前書き）

テイデン 咎々ハルル

第2夜：呪い森の中で

テイドン砦

テイドン砦には騎士の姿がちらほら見えた。

「騎士の姿が見えますね。ユーリを追ってきた騎士でしょうか？」

「さあな」

「エステリーゼ、フレンというやつを追っているなら早くいくぞ」

「あの」

エステリーゼはシークと向き合って口を開いた。

「私のことはエステルと呼んでください」

「分かった、エステリーゼ」

「ですから・・・」

「私がお前を何と呼ぼうと私の勝手だ。それよりフレンを・・・はあ」

エステルは別の物に興味を引かれ、向こうへ行ってしまった。
ユーリとシークは呆れていた。

「本当に分かってるのかね？どこ行くんだ？」

「私が何処で何をしようが勝手だろう」

シークはそう言い、何処かへ行ってしまうた。

それぞれがティドン砦で自由に行動していると。

カンカンカンカン

突然騎士が鐘を鳴らした。

門の先には魔物がティドン砦の方に駆けてくる。

魔物達の中には巨大な魔物も含まれていた。

どうやら、その魔物が魔物達の主ヌシのようだ。

魔物達の前には魔物達から逃げてくる人がいた。

その様子をシークは砦の上から見ている。

すると、小さい女の子と大人の男が走るのをやめ、座り込んだ。

門は二人に関係なく閉まっていく。

「騎士め……まだ人がいるのに……あれはユーリにエステル
ーゼ」

ユーリが女の子を抱き抱え、エステルが男の傷を癒した。

男はエステルに礼を言くと門の方へ走り、エステルもすぐに門の方へ走った。

ユーリは女の子を抱き抱え、門の方へ走る。

女の子が持っていた人形を落とした。

ユーリは砦に戻り女の子を下ろすと、再び砦の外に出て人形を拾う。

しかし、魔物の一匹が予想以上に早くユーリを襲う。

「ヤベッ！」

「『フレイムバースト』」

シークが砦の上から落ちて来て、ユーリを襲おうとした魔物を魔術で撃退した。

「シーク!？」

「走るぞ」

シークとユーリは砦の方へ走り、ギリギリ門が閉まる前に砦へ入った。

ユーリが女の子に人形を渡すと、女の子は笑顔になり、言った。

「ありがとう、お兄ちゃん」

ユーリはシークに近づく。

「さつきは助かった。ありがとう」

「城の出口まで案内してくれた借りを返したただけだ」

シークは

「それより」と付け足した。

「ハルルに行けなくなった」

「どうしよう。フレンに早く会わないと」

二人の隣でエステルが悩んでいた。

すると、騎士が一人ユーリ達に近付いて来た。

「その3人、少し話を・・・」
「何故門を開けないのだ!!!」

ユーリ達の隣で男二人が騎士に言った。

「魔物など、我々が倒してやる!!!」

ユーリ達に近付いて来た騎士は男二人の方へと行った。
ユーリ達はそのすきにその場所から離れた。

「私は道具屋の前にいる。ハルルに行く方法が見つからなかった時は私の所に来い。オススメしない道を教える」

「他に行き方知っているんですか？」

エステルがシークに尋ねた。

「オススメはしないが道がないならそこから行く」

シークはそう言うと言ってしまった。

しばらくして、シークの所にユーリとエステル、ラピードが来た。

「方法は見つかったか？」

「クオイの森を抜ける他ないな」

「やはりな」

「でもそこは呪いがあるって」

エステルがシークに言う。

「そんなものは迷信だろう」

シークは先に行ってしまふ。

「待つてください！一人では危険です！」

エステルは慌ててシークを追いかけた。

ユーリ笑い、ラピードと共に二人の跡をついていった。

クオイの森

「ここが呪いの森・・・」

エステルは少し顔を強ばらせていた。
ユーリとシーク、ラピードは普通に森に入っていく。

「待ってください！」

エステルは慌てて二人の跡を追いかけた。

「蒼破刃」

「スターストローク」

「魔神剣」

ユーリ、エステル、シーク、ラピードは森の魔物を蹴散らしていく。

「シークは魔術を使えるんですね。何で使わないんですか？」

エステルはシークに突然尋ねた。

シークは剣を仕舞い、エステルを見ずに答えた。

「使って欲しいか？」

「そういう訳では・・・」

「使えると言っても多くは使えない。少しだけだ」

「それでも使った方が戦闘は楽になるぞ」

ユーリが二人の会話に割って入った。

シークは顎に手を置き、考えた。

「それもそうか・・・エステリーゼ!!!」

突然エステルの背後に魔物が現れた。

シークはエステルを庇い、代わりに傷を負った。
傷はなかなか深い。

シークは魔物の方を睨んだ。

ユーリとラピードが魔物から二人を守るうと前に出て戦っている。

シークは気を集中させ、呪文を唱えた。

「『炸裂する力よ。エナジーブラスト』」

シークの魔術が魔物に直撃した。

シークは魔物が倒れるのを確認すると気を失った。

「シーク!!!」

エステルの声が森中に響いた。

しばらくして、シークが目を覚ます。
起き上がるとユーリとラピードがいて、何故かエステルが倒れてい
る。

「目が覚めたか？思ったより早く起きたな」

「傷が癒えてる・・・？それに何故エステリーゼが倒れてる？」

「その傷、エステルが治したんだよ。その後、休める所を探してた
らこの魔導器が光ってエステルが倒れた」

ユーリがそう言い、指差した先には魔導器があった。
シークはチラッと見ただけで興味なさそうだった。

「そうか・・・、迷惑かけたな。それと、一応感謝しておく
するとちょうどエステルが目を覚ました。」

「あ・・・あれ・・・わた・・・し・・・一体？」

「魔導器が光って突然倒れたんだよ」

ユーリがエステルに説明した。

「そうですか。エアルに酔ったのかもしれませんが」

「エアルって魔導器を動かすのに使う燃料みたいなものだろ？」

「濃度の濃いエアルは人体に影響を及ぼす」

エステルはシークの声を聞き、シークが目に入った。

そして、目の色を変えた。

「シーク！目が覚めたんですね！良かったです！！」

「傷を癒してくれたらしいな。感謝しておく」

「いいえ。あの時、助けていただいたのは私の方ですから。ありがとうございます」

「お前より私の方が頑丈だから私の方が傷が浅くすむ。それに、お前に倒れられたら、傷を癒す奴がいなくなる」

「エステル、シーク、これでも食って体力回復しとけ」

ユーリは二人の会話に割って入り、二人にサンドウィッチを渡した。

エステルは手に取り食べるが、シークは食べようとしなない。

その間にエステルは食べ終わってしまった。

「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした」

「おいしかったです。あれ？シーク、食べないんですか？どこか具合が悪いんですか？」

エステルがシークの心配をするがシークはエステルを見ずにそっぽを向きながら口を開いた。

「私は少食なんだ。食事は余り必要としない」

「お前、昨日の夜から何も食べてないだろ？腹、減ってなくても食べた方がいいぞ」

ユーリにそう言われ、仕方なくサンドウィッチを口にするシーク。

「・・・口には合うが、やはりあまり食欲はすすまない。早く行くぞ」

シークは立ち上がり、先に進む。

「待つてください！まだ病み上がりなんですから無理はよくないです！」

エステルも立ち上がり、そのようなことを言いながらシークを追いかけた。

ユーリも立ち上がり、ラピードと共に二人についていく。

しばらく歩いているとラピードがグルルと声を出し、シークは目を鋭くし、剣の柄を手にした。

「エツグベア！覚悟！」

少年が突然、飛び出してきた。

少年には大きすぎる剣を振り回して来たが、ユーリはそれを難なく避ける。

少年は剣を持ったままグルグルと回り始めた。
ユーリは回る少年の剣を半分に割り、少年は倒れた。
そして、少年はラピードを見るなり。

「わあ！ぼ、僕なんか食べても美味しくないんだから！」
と叫んだ。

「ガウツ！！」

「わあ！こ、殺される！！！」

ラピードが吠えると、少年はラピードを怖がった。
エステルがラピードと入れ替わり少年に近付いた。

「大丈夫ですよ」

「あれ？魔物が女の人に」

少年の行動にユーリは呆れていた。
シークは敵ではないというのを認知すると、剣の柄から手を放した。

「僕はカロール・カペル。魔物を狩って世界を渡り歩くギルド、“魔
狩りの剣”の一員さ！」

先ほどまでラピードに怯えていた姿はどこにもなく、カロールという

名の少年は自己紹介した。

「俺はユーリ、それにエステルにラピードにシーク。じゃあな」

「待つて！三人は森に入りたくてここに来たんでしょ」

ユーリが簡単に自己紹介し、行こうとしたらカロルが呼び止めた。

「逆だよ。俺達は森を抜けてここまで来たんだ」

「私たち、ハルルを目指しているんです」

ユーリとエステルが言った。

すると、カロルは再び口を開いた。

「この呪いの森を。じゃあさ、エッグベア見なかった？」

「さあな」

カロルの問いかけにユーリをはじめ、エステルもシークも首を横に振った。

「そつか。じゃあ、僕もハルルに戻ろうかな」

「ついてくる気かよ」

「こう見えて僕は魔導器を持っているんだよ」

「俺達も持つてるよ」

ユーリの言葉を聞き、カロルはユーリたちの身を見た。

「じゃあ、これはどうだ」

カロルはカバンから本を一冊取り出した。

「モンスター図鑑？」

ユーリはその本を手取る。

しかし、本は途中までしか書かれていない。

「ほとんど白紙だな」

「こ、これから増やしていくんだよ」

カロルはユーリから本を取った。

「エースの腕前も剣が折れちゃ、披露できねえな」

「そんなのハンデだよ」

カロルはユーリにそう言い返し、折れた剣を降り始めた。

「あれ？いいかんじ」

「あれ？ラピードとシークは何処です？」

エステルがラピードとシークがいないことに気づき、周りを見渡すと、ラピードとシークは先に行っていた。ユーリとエステルは追いかける。

「ねえ！ちよつと！ハルルは森を抜けて北の方だよ！」

カロールもあわてて追いかける。

森を抜け、4人は花の街ハルルにやって来た。

「ここがハルルなんですよね」

「この街には結界がないのか？」

「3人はこの街は初めてなんだね。この街の結界魔導器は樹についてるんだよ」

「魔導器の中には植物と融合して、成長を続けるものもあると本で読みました」

エステルが説明し終わると、カロールは話を続けた。

「満開の季節になると結界が弱まるんだけど、その弱まったところを魔物に襲われて魔導器が壊れちゃったんだ」

そのせいで花が枯れてきているらしい。

「あれ？シーク、どこ行くの？」

シークが勝手に何処かに行こうとしたのをカロルが気付き、尋ねた。

「ハルルまで一緒の筈だ。私は用事がある。お前達に付き合ってる暇はない」

シークはそう言い、三人から去った。

シークは街の人通りの少ない所に来ていた。

すると、一羽の黒い鳥がシークの肩に乗った。

鳥は手紙をくわえている。

シークはそれを読み、破り捨てた。

鳥は再び空へ飛び去った。

「早々に面倒な仕事だ。カプワ・ノールに行けば早いが、アスピオにも行くか……。仕事だけやる訳にはいかないからな。他にやることがあるし」

シークは自分の首を触り、あることに気付くと、顔を真っ青にし、突然走りだした。

ハルルの街を出て向かった先はクオイの森だった。

シークは地面を見渡し、何かを探しているようだった。すると森の奥が騒がしい。

木に隠れ、覗くとユーリ達がエッグベアと戦っている。

「そういえば、カロルはエッグベアを探していたな。しかし、何故ユーリとエステリーゼ、ラピードまでもいる？」

しばらく様子を見ているとエッグベアに攻撃をしたカロルの攻撃をエッグベアが防御し、カロルはエッグベアの目の前でバランスを崩し転んでしまった。

「カロル!!!」

ユーリとエステルの声が同時に響く。

「わあああ!!!」

カロルは動けないようだ。

ユーリもラピードもエステルも助けが間に合わない。

「あれは・・・!」

シークがエッグベアの足下に何かあるのを発見した。エッグベアがカロルに攻撃しようとしたその時。

「『アクアエッジ』」

水のブーメランがエッグベアを襲い、エッグベアが怯んだ。ユーリはその隙を狙い、エッグベアにとどめの一撃を喰らわした。
「大丈夫か？カロール」

エステルがカロールに近付き、治療術をかけた。
カロールはゆっくり立ち上がる。

「うん。でも一体誰が？」

シークが木から姿を現し、落ちていた物を拾う。

「シーク、今の魔術は貴女が？」

「私は落とし物を拾いに来ただけだ。そして偶然お前達がいて、エッグベアの足下に落とし物があった。踏み潰される訳にはいかなかったから攻撃しただけだ」

シークはエステルの問題に素っ気なく答えると落ちていた物を首にかけた。

「ま、何にせよお前がいなかったらカロールがヤバかったな」

「本当だよ。ありがとう、シーク」

カロールがシークにお礼を言ってもシークは
「偶然だ」としか言わなかった。

「ところで、シークの落とし物って何です？」

「あ、それ僕も気になる。一人で呪いの森に行くぐらいだからよっぽど大事な物なんだよね？」

シークは首にかけた物を見た。
それはユーリ達からは見えなかった。

「・・・確かに大事な物だ。だがお前達に見せるつもりはない」

「えー！」

カロルは残念そうに声をあげた。

「見せたら困るもんなのか？」

「困りはしないが・・・エステリーゼ、そんなに見たいのか？」

「え？」

「『絶対に見たいっ』って顔、してるぜ」

ユーリがエステルに言った。

当の本人は自覚していないようだ。

シークは溜め息をつき、首にかけた物を首から取った。

「エステリーゼには傷を手当てしてくれた借りもある。仕方ない、
見せてやる」

全員が注目する。

それはとても綺麗で美しい物だった。

「綺麗……。見たことのない石ですね」

シークは再びそれを首にかけた。

「とても大切な物だ」

シークは優しく微笑んだ。

「・・・シークが初めて笑いました」

「ワンッ」

「お前も素直に笑えたり出来るんだな」

シークはユーリ達が色々言ったのに気付くと微笑みを止め、そっぽを向いた。

「ところでお前達は何故またクオイの森にいる」

シークに言われ、ユーリ達はハッと気付いた。

「そうだ！パナシアボトルを作るのにエッグベアね爪が必要だったんだ」

カロルは少し怯えながらもエッグベアから爪を取った。そして、来た道に戻っていると、森の奥から聞き覚えのある声が響いた。

「ユーリ・ローウェル！！森に入ったことは分かっている！」

「大人しくお縄につくのである！！！」

城の中で城を抜け出す途中で聞いた声だ。

「ルブランの奴、結界の外まで追って来たのかよ。ってか何で俺だけなんだ？ シークは？」

「私、あいつらに姿を見せてない。お前と私が一緒にいるなんて思っ
てない筈だ」

全員は騎士の言葉を無視してハルルの街へ戻った。

ハルルの街に着くと、ハルルの長からルベリエの花びらを貰い、カ
ロルとエステルはパナシアボトルを作り、道具屋に向かった。

「で、どうしてパナシアボトルが必要なんだ」

「ハルルの樹を復活させるのにパナシアボトルが必要らしいぜ」

シークがユーリに聞き、ユーリは答えた。

シークは納得したようだった。

しばらくし、カロルとエステルが戻って来た。

そしてそのままハルルの樹がある所まで足を進める。

樹がある所まで着くとカロルは樹にパナシアボトルをかけた。
しかし、樹は何の反応もしめさない。

「嘘！？量が足りないの？」

「パナシアボトルをもう一度！」

「駄目です。ルベリエの花びらがもうありません」

長が言った。

諦めきれないエステルは樹の前に立ち、両手を合わせ、祈った。

「お願い……」

すると、光の粒が表れ、光の粒が樹を覆った。

信じられないことに樹に花が咲き、結界が復活した。

これにはその場にいる誰もが驚きを隠せない。

街の人々は喜び、エステルにお礼を言う。

ユーリとカロール、ラピードはエステルに近寄った。

シークはただその場で呆然と立ち尽くしていた。

そして、小言を言い始めた。

「こんなこと、ありえない。エステリーゼ、お前は一体……。あの方に聞けば分かるかもしれない」

「シーク！逃げるぞ！厄介な連中がいる」

ユーリが突然シークに声をかけた。

突然のことでユーリの言葉に理解が出来なかった。

ユーリはシークの腕を引っ張り、街の入り口に走りだした。

入り口まで来てようやく足を止めたユーリ達。

「一体、何なんだ？それにフレンはどうした？」

「フレンって誰？」

「私は知らない。エステリーゼが探している奴らしいが」

カロルの問いかけに首を傾げながらも答えたシーク。
背後から誰かがやってきた。

どう見ても街の人間ではない。
そして、どうやら狙いは自分達らしい。

「ここで戦うと街の迷惑だな」

ユーリが逃げようとしたその時。

「見つけたぞ！ユーリ・ローウェル！」

城と森の中で聞いた騎士の声がした。

騎士が三人現れ、ユーリに剣を向けた。

「大人しくお縄につくのである！」

「騎士の心得。街の人間を守るだったよな。そういうことだから仕事頑張れよ。あいつら頼むぜ」

ユーリは追いかけて来た騎士にユーリ達を狙って来た奴等を任せ、
街を出た。

しばらくし、ユーリ達はようやく足を止めた。
シークはユーリに尋ねる。

「これから何処に行くんだ？」

「アスピオに行くんだ」

答えたのはユーリではなく、カロールだった。

「そうか。私もアスピオに行く予定だった」

「そうなんですか！一緒にいられて私、嬉しいです」

エステルはシークと一緒にいられることを知り、とても喜んだ。

「ところでフレンはどうした？」

「フレンは別の所に行っちゃったよ」

「なるほどな」

「ねえ、フレンって誰なの？」

カロールがフレンについて聞いたが誰も答えてくれなかった。

「いつまでもここにいたらさっきの奴等、追って来るのではないか」

「そうだな。行くか」

「ねえってば！」

カロールのことを無視し、アスピオを目指し、ユーリ達は歩いた。

「待ってよ！」

遅れたカロールがあわててユーリ達を追いかける。

第2夜：呪い森の中で（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第2・5夜（前書き）

第2夜のオリジナルスキットです。

第2・5夜

【何してた？】

ユーリ

「シーク、お前一人で行動してたとき、何してたんだ？」

シーク

「探索」

ユール

「探索？お前、前に結界の外に出てたって言ったよな。それなのに探索が必要なのか？」

シーク

「私が何をしようと自由だろう」

ユーリ

「それはそうだが、砦の上から落ちて来たのには驚いたな」

シーク

「そつでもしないとお前、死んでたぞ」

ユーリ

「魔法をぶつばなすなら別に落ちなくとも・・・」

シーク

「・・・す、過ぎたことは考えるな」

ユーリ

「（今気付いたって感じだな）」

【エステルって呼んで】

シーク

「エステリーゼ、もう少し後ろに下がって戦え。前衛はユーリに任せとおけ」

エステル

「あの・・・エステリーゼではなく、エステルって呼んでください」
突然、砦から出てきたからな」

シーク

「分かった、エステリーゼ」

エステル

「分かってませんよ。エステリーゼではなくエステルと呼んでください！」

シーク

「エステリーゼの何が悪い」

エステル

「悪い訳ではありませんが・・・」

シーク

「なら、エステリーゼでいいだろう」

エステル

「エステルって呼ばれたいです」

シーク

「なるほどな。お前の気持ちはよく分かった、エステリーゼ」

エステル

「ですから、エ・ス・テ・ルです！はい、言うてみてください。エステル、はい」

ユーリ

「エステル、お前一人で何やってんだ？」

エステル

「あれ？シークは？」

ユーリ

「ラピードと先に行った。俺たちも行こうぜ」

エステル

「いつか絶対にエステルって呼ばせてみせます！」

【運びかた】

ユーリ

「シークが倒れたから休む所を探すか」

エステル

「誰がシークを運びますか？」

ユーリ

「そうだな・・・何で俺を見るんだ？ラピードまで」

エステル

「女性を運ぶのは殿方の役目ですよ」

ラピード

「ワンツ！」

ユーリ

「分かったよ　　うわっ！こいつ軽っ！」

エステル

「ユーリ！女性を運ぶのに肩に担じゃダメですよ！」

ユーリ

「じゃあ、こっか？」

エステル

「あの・・・肩に担がなければいいという訳ではないのですが」

ユーリ

「ならどうすればいいんだ？」

エステル

「お腹を持っている時点で間違ってます。女性なんですからもっ少し優しく扱ってください」

ユーリ

「どうやって運べばいいんだよ」

エステル

「例えばお姫様だっこです」

ユーリ

「両手が塞がって魔物を倒せないだろ」

エステル

「魔物なら私とラピードが倒します。ですから」

ユーリ

「ラピード、行くぞー。片手は空いてるからいつも通りでなー」

ラピード

「ワッ」

エステル
「ユーリ、待ってください!」

【クールな彼女】

カロル
「なんかさ、シークってクールで話しかけにくいね」

エステル
「そうですか?」

カロル
「そうだよ。会話しても長続きしない感じだよ」

ユーリ
「実際に話は長続きしないな。いつも『何をしようが私の勝手だろ』で済まされるからな」

エステル
「言われてみればそうですね。私、もう少し楽しくお話がしたいです」

カロール

「そいえばラピードってき、シークには普通に接してるよね。僕には吠えたのに」

ユーリ

「そついや、初対面なのにラピードの奴、なついてたな」

エステル

「私、うらやましいです・・・」

カロール

「きつとシークは動物好きだから動物との接しかたがわかるんだよ」

エステル

「シークはクールで動物好きなんですな」

カロール

「意外と僕たちが見てない所で動物と戯れてたりして」

ユーリ

「想像出来ねえな」

エステル

「楽しそうです！」

シーク

「お前達、グレイブとセントバブルどっちがいい？」

ユーリ・エステル・カロール

「！」

【大切な物？】

カロル

「シーク、あの石を持っていたとき、凄く嬉しそうだったよね」

エステル

「微笑んでいましたし、とても大切な物だったんですね」

シーク

「さっきのことは忘れてくれ」

ユーリ

「誰かから貰った物なのか？」

シーク

「ああ、貰った物だ」

エステル

「両親から貰った物ですか？」

カロル

「意外と好きだった人とか、恋人とか貰った物だったりして」

シーク

「私の大切な人の形見だ」

エステル

「ごめんなさい。私、失礼なことを聞きました」

シーク

「別に気にはしていない」

第3夜：天才魔導士少女（前書き）

アスピオ〜ハルル

第3夜：天才魔導士少女

「ねえ、シークはどうして魔導器、持ってるのさ？」
アスピオに向かう途中カロルがシークに尋ねた。
ユーリたちは足を止める。

「なぜ、聞く？」

「魔導器なんて簡単に手に入らないんだよ」

「ユーリやエステリーゼ、ラピードも持っている」

シークはユーリたちを見て言った。

「ユーリたちには聞いた。ユーリは昔、騎士団にいて騎士をやめた時に饑別に貰ったらしいよ」

「それは盗品だろ」

「ラピードは前のご主人様の物でエステルは貴族のお嬢様だから」

「なるほど。私の魔導器は・・・拾った」

カロルはシークの言葉に首を傾げた。

そして、もう一度尋ねる。

だが、何度聞いても答えは同じだった。

「魔導器は拾えないと思うけど・・・」

「落ちてたから拾った」

「落ちてたって、魔導器はそこら辺に落とさねえだろ」

ユーリが横から口を挟んだ。

「とにかく魔導器は落ちてた。だから拾った。それより、早くアスピオに行くぞ」

シークは話を終了させると先に行ってしまった。

「シーク、待ってください！」

「あ！ちょっと待ってよ！」

エステルとカロルはシークを追いかけた。

ユーリは溜め息をつき、ラピードと共に3人の後をついていった。

学術閉鎖都市アスピオ

アスピオは太陽の光が当たらない洞窟の中に存在していた。

「ここがアスピオみたいだな」

「肌寒くてジメジメした所だね」

「太陽の光がないせいかもしれませんね」

「太陽の光が当たらないと性格がねじ曲がるのか？魔核盗んだり」

ユーリ、エステル、カロルが何かかしら言っている間にシークはただ一人、入り口の方に歩いていった。

ユーリたちもシークの後をついていった。
すると入り口には騎士が立っていた。

「通行証を提示してください」

「通行証が必要なのか？」

シークが騎士に尋ねる。

騎士はシークの問いに答えた。

「ここは帝国の所有地になっております。一般人は入れません」

「中に知り合いがいるんだけど」

ユーリが会話に割って入り言う。

「知り合い？」

「モルディオって奴なんだが」

モルディオの名を聞き、兵士は驚く。

「あの変わり者……とにかく知り合いがいるのでしたらそちらに

許可証が届いてるはずですよ」

騎士はどうあっても通すつもりはないらしい。
すると今度はエステルが尋ねる。

「人を呼ぶこともできませんか？」

「できません」

「こちらにフレンという名の騎士が尋ねて来ませんでしたか？」
「施設に関することは些細のこともお教えできません」

「フレンが来た目的も？」

「勿論ですよ」

「ということはフレンはここに来たんですね」

「とにかく許可証が無いのならことは通すことはできません」

騎士はどうしても通すつもりはなく、ユーリたちは諦めた。

「どつやって通るっか？」

カロルが聞くとシークが突然、剣を抜き、騎士の方に向かって歩く。
ユーリたちは目を丸くし、シークをつれ戻す。

「シーク、お前何するつもりだよ？」

「実力行使」

「ちょっとそれは不味いんじゃない？」

「ならどうする？」

シークが剣を仕舞いながら聞く。

「他に入り口がないか探すぞ。それで無かったら
「
「実力行使」

シークはユーリの言葉をさえぎり、先に行ってしまった。

「僕、今シークが凄く怖く思えた」

「カロル、俺も同じ気持ちだ」

「シークは照れ隠しであんな風に言ってるんですよ。本当は話し合
うつもりです」

ユーリとカロルが怖がる対象にエステルは照れ隠しと言っ。

「今のでそう思うか？普通」

ユーリの呟きはエステルには届いてないようだ。

「ここから入れそうだな」

入り口らしき物を見つけたユーリたち。
しかし、扉には鍵がかかっていて開かない。

「ここは僕に任せて」

カロルが扉の前に立ち、鍵をいじり始めた。
すると扉が開く。

「さすがカロル先生だな」

中は本がたくさんあり、ローブを着た人間がいっぱいいた。

「モルディオみないなのがいっぱいだな」

エステルは近くにいた男性に話かけた。

「あの、フレンという名の騎士が訪ねてきませんでしたか？」

「フレン？ああ、遺跡荒らしを捕まえるとか言ってたな」

「もう少しいいですか？」

「何だよ」

「モルディオさんが何処にいるか教えてもらえませんか？」

モルディオという名を聞くと男性は驚く。

反応は騎士と同じだった。

「あの変わり者に客！？奥の小屋に一人で住んでるから勝手に行つてくれ！」

男性はそれだけ言うと去ってしまった。
ユーリたちは男性が言った通り奥に進む。
その道中、シークはユーリに話かけた。

「フレンとは騎士なのか？」

「ああ」

「エステリーゼとはどういう関係だ？」

「エステルの思い人じゃないのか？」

「やっぱり？そんな感じしてたんだ」

カロルが二人の会話に割って入った。
シークもその答えで納得したようだった。
話してるうちに小屋についた。

「『絶対入るな。モルディオ』ここだな」

ユーリはドアを開けようとしたが鍵がかかっていて開かない。
次に扉を叩いた。

「普通は逆ですよ」

エステルがユーリに注意する。

「開かないなら壊せばいい」

シークが剣の柄に手を添える。

「それはもつとダメです！」

「ここは僕の番だね」

カロルが元気いっぱい言い、鍵をいじり始めた。そして扉が開く。

「・・・」

「どうしたんです？シーク」

シークが何かを考えているのに気付いたエステルはシークに話しかけた。

「私の目的は街に入ることでもルディオは関係ないのだが」

「そうだな。後で合流するってことでいいんじゃないか？」

「じゃあ、雑貨屋前に集合ってことで」

カロルの提案にシークは了承すると、シークは街の方へ行ってしまった。

ユーリたちは中に入る。

中は本や研究材料で埋め尽くされていた。

それらしい人物はいなかったが、本の中から少女が姿を現した。

ユーリが少女に魔核を返すと言うが少女は何も知らないようだった。

話しているうちにその少女の名前がリタ・モルディオと分かった。リタは騎士から聞いたシャイコス遺跡に盗賊団が入った話を思い出して、ユーリたちについてくるように言い、リタの家を出た。

「あの、リタ」

「何？エステリーゼ」

エステルはリタに話しかける。

「実はもう一人仲間がいるので、その仲間と合流してもいいですか？」

「じゃあ、早く行きましょ」

合流場所に向かう。

そこにはシークの姿があった。どうやら本を読んでいるようだ。

「シーク！」

エステルが声をかけ、シークは顔をあげた。

「あれ？人・・・違い・・・でしょうか？」

「シーク・・・だよな？」

リタを除くユーリたちは首をかしげた。

「人違いではない。私はシークだ」

「シーク!? 何で眼鏡かけてんのさ?」

カロルの言う通り、シークは眼鏡をかけていた。シークは本を閉じ、眼鏡を外した。

「言っただけだったが、私は左右の視力は違う」

「そいつ、誰よ?」

リタが会話に割って入り、聞く。

シークは自分のことを話す様子はなく、代わりにエステルが答えた。

「彼女はシークです。シーク、彼女はリタ。これから一緒にシャイコス遺跡に行くんです」

「シークはどうすんだ?」

「シャイコス遺跡に盗賊団が入ったみたいだな。私も行く」

「そう。私は気にしないわ。早く行きましょ」

リタはさっさと行ってしまった。

シャイコス遺跡

シャイコス遺跡は所々崩れており、草が茂っている。

「ここがシャイコス遺跡・・・」

シークは周りを見渡した。

「シークはここ、初めてなのか？」

ユーリが尋ねるとシークは頷いた。

「ああ。アスピオに行くのも初めてだから。とても静かで悪くない」

ユーリたちは先に進む。

しかし、盗賊団の姿も騎士団の姿もなかった。そのことを話しているとリタが考え込んだ。

「まさか、地下の情報が漏れたんじゃないでしょうね」

「地下？そんな物があるの？」

カロールがリタに尋ねた。

「最近になって地下が発見されたの。まだ一部の魔導士にしか知らされてないはずだけど」

リタは近くにある銅像を動かすように言った。

カロールが動かそうとするがビクともしない。

「どけ」

シークがカロールに退くように言い、銅像に両手をかけ押す。するとカロールではビクともしなかった銅像が動き始めた。それに全員が驚く。

「何か、男として自信なくしてきた・・・」

カロールだけがショックを受け、落ち込んでいた。

「あんだ、見かけによらず力あるわね」

「シーク、凄いです！」

銅像の下には地下に繋がる階段があった。全員は地下に降りていった。

「そこ、滑るから気をつけて」

遺跡を見渡すエステルに注意するようにリタは言った。ユーリがリタを見ているのにリタは気付いた。

「何よ」

「モルディオさんは意外と優しいなと思ってな」

「はあ。面倒を引き連れてきた気がする。一人で来るんだっただわ」

「リタはいつもは一人でここに来ているんです？」

「そうよ」

「畏とかあつて危なくないですか？」

「何かを得るためにリスクがあるのは当たり前じゃない。得るためなら私は危険でも構わないわ」

「遺跡の中には魔物もいるのか」

シークが指差した先には魔物がいる。

魔物はまだこちらに気付いていないようだ。

リタが気を集中させた。

「『ファイアボール』」

リタは魔術を使い、簡単に魔物を蹴散らした。

「リタは魔術が使えるのか」

シークがリタを見て言った。

リタは頷く。

「そうよ」

「僕はあれで黒こげにされたよ」

カロルが小さな呟きをする。

しばらく奥に進むと、行き止まりになり、先に進めなかった。行き止まりの場所には魔導器があった。

「これは魔核か」

「その魔核にこれ撃つてみて」

リタがユーリに渡したのは一つの指輪だった。

「それはソーサリーリングですね。本で読みました」

ソーサリーリングで魔核を撃つてみると術式が浮かび上がる。

「これはストリムの紋・・・移動を示す紋章ですね」

仕掛けが作動し、道ができる。

それと同時に罾も作動した。

一行は先に進む。

更に奥に進むと、大きい物体があった。

「これは、ゴーレムか」

「俺はこんな人形じゃなくて水道アクエラフラスティア魔導器の方が欲しいんだけどな」

リタがゴーレムに近付き、ゴーレムをよく見始めた。

「この子を調べれば自立術式が・・・あれ？この子にも魔核がないわ」

その時、リタ以外の全員が魔導器の右側の方に視線を向けた。

そこにはローブを着た人間が立っていた。
どうやら男のようだ。

「リタのお仲間がいるぜ」

リタはその男が見える所に移動し、そいつに言った。

「あんた誰よ？」

「私はアスピオの魔導器研究員だ！貴様達こそ誰だ！ここは立ち入り禁止だぞ！」

「あんた、救いようのない馬鹿ね。アスピオの人間ならあたしを知らないはずないでしょ？」

男はゴーレムの右腕の後ろに回り、魔核をゴーレムに付けた。

するとゴーレムは動きだし、近くにいたリタを攻撃する。

リタは壁にぶつかり、グツタリとした。

エステルがリタに治療術をかけるとリタはエステルを見て驚いている。

「あんた・・・！」

「動けるなら手伝え！」

ユーリ、ラピード、カロール、シークは武器を手に取り、ゴーレムと対峙していた。

エステルとリタも戦いに身を構える。

「円閃牙」

「臥龍アッパー」

「双牙斬」

ユーリ、ラピード、カロル、シークが同時にゴーレムに攻撃するがビクともしない。

ゴーレムはユーリたちに攻撃してきた。

ユーリとシークは攻撃を避けるが、ラピードとカロルは攻撃をもろにくらってしまう。

「大丈夫ですか！ナース」

エステルが二人を回復した。

「硬いな……。皆！ここはリタと私の魔術で攻めていく！ユーリ、ラピード、カロルは私とリタの援護を、エステリーゼはユーリたちの援護だ！」

シークが素早く指示をすると、全員が頷き、シークの言われた通りにする。

ユーリ、ラピード、カロルはゴーレムに向かって攻撃をし、エステルは傷付くユーリたちを癒した。

その間にリタとシークは詠唱をする。

「『シャンパーニ』」

「『セイントバブル』」

シークとリタの魔術が同時に発動し、ゴーレムは怯み、ダメージを

受ける。

ユーリはゴーレムが怯んだのを見逃さず、ゴーレムにとどめの一撃をくらわした。

ゴーレムは機能停止した。

リタとシークが機能停止した魔導器に近付く。

その時突然、ゴーレムが動き出した。

「リタ！シーク！」

エステルが二人の名前を叫ぶ。

ゴーレムは二人に腕を振り落とそうとした。

その時、シークはリタを突き飛ばした。

リタをユーリは受け止める。

シークに突き飛ばされたことによって、リタはゴーレムの攻撃を受けずに済んだが、ゴーレムはシークに腕を振り落とす。

「シーク！」

今度はカロールがシークの名を叫ぶ。

砂煙があがり、何がどうなったのか分からない。

その時、シークが砂煙から転がって姿を現した。

「無事だったんですね！」

全員が安心する。

地面に倒れていたシークはゆっくりと体を起き上がり、壁に寄りかかり、座り込んだ。

そして、気を集中させ魔術を詠唱する。

「炸裂する力よ『エナジーブラスト』」

魔術でゴーレムの体と腕を切り離し、今度こそ完全にゴーレムの機能を停止した。

エステルがシークに近付き、傷を癒そうとしたが、シークは回復を拒んだ。

「治療術はいい」

「でも・・・」

「私よりリタを。私は自分で回復する」

エステルは躊躇いながら、シークから離れ、リタの所に行き、リタに治療術をかけた。

「くっ！右腕をやられた・・・。癒しの力よ『ファーストエイド』」

ファーストエイドを何回かかけ、ようやくシークは立った。

体勢が立て直ったところで、先ほどの男を追いかけることにした。

男を追いかけるため、来た道に戻っていると目的の男がいた。

男は魔物に襲われているようだ。

軽く魔物を蹴散らすとラピードを先頭に男を追いつめる。

あきらめたのか男は情けない声をだした。

「ひいひいひい！や、やめてくれ！」

「ガウツ！」

ラピードが男に吠える。

「お、俺は魔導器の魔核を持ってくるように頼まれただけだ！そうすれば報酬をやるって……！」

「お前、帝都の魔核、盗んだよな？」

「帝都？俺は違う。デ、デデツキの野郎だ」

「そいつはどこにいる」

「今頃、依頼人から金を貰ってるよ」

ユーリの質問に男は怯えながらも答える。
今度はシークが男に質問した。

「依頼人は誰だ？どこにいる？」

「く、詳しいことは知らねえよ。トリム港にいる。顔の右に傷があつて、バカに体のしっかりした男だ」

「なるほどな」

男の話を聞いていると、事態は思っていたよりも面倒だった。

そのあと男は“ついてない”とか“騎手に邪魔された”とか言う。

リタは男を一発殴る。

リタに一発殴られた男は気絶してしまった。

「気絶しちゃったよ。どうすんのさ？」

「そんなもん、警備に報告してあとで取りに行かせるわよ」

「アスピオに戻るか」

一行はアスピオに戻って行った。

アスピオ

「疑いは晴れた？」

リタがユーリに言う。

ユーリはリタに頷き、

「お前は盗みより研究の方がお似合いだな」と言った。

その後リタは警備に行ってくると言い、行く前にユーリに通行証を渡す。

渡すさいに

「あたしの家で待ってて。勝手に行ったら酷いめにあわすからね」とリタは言った。

リタに言われた通りにユーリたちはリタの家で待つことにしたが、シークだけは遅れて行くことにした。

リタの家で待つユーリたち。

カロールとラピードは普通に座り、ユーリは横になり、一番くつろいでいる様子。

エステルは立ち部屋中をうろちよろしてどこか落ち着きのない様子だ。

「フレンが心配なら黙って出て行くか？」

「いえ……。リタにもちゃんと挨拶しないと」

「なら落ち着けて」

しばらくしてシークが戻って来た。

そして壁に寄りかかる。

「シーク、何してたんだ？」

「医者に腕、診てもらいに行った」

「大丈夫ですか？」

「2、3日安静にしてるば悪化することなく治るらしい」

エステルは大丈夫だと分かると笑顔になる。

その後、ユーリたちはこれからどうするかそれぞれ話し合った。

ユーリは魔核泥棒の黒幕を追うため、ノール港に向かうことにした。カロールも港には行くつもりだったため、ついていく。

シークもトリビキア大陸に行くため、ノール港は必ず通る道だ。

エステルはフレンを追うため、ハルルに行くらしい。
ハルルは途中にあるため、ユーリたちも付き合つことにした。
今後のことを決めたところでリタが帰ってきた。
そして、ユーリを見るなり呆れている。

「待つてるとは言ったけど・・・どんだけくつろいでんの？」

「疑って悪かった」

ユーリは起き上がりリタに軽く謝罪した。

「軽い謝罪ね。まあ、いいわ。こっちにも収穫あつたし」

リタはユーリの軽い謝罪を特に気にすることなく言った。

「んじゃ、世話になつたな」

「何？もう行くの？」

「急ぎの用があるしな」

「分かつたわ」

リタの家を出ようとするユーリたちにリタはついて行くつもりとする。

ユーリはついて行くつもりとするリタを見て

「見送りならここでいい」

と言う。

しかし、リタが返してきた言葉は予想外だった。

「あたしもついていく」

「待ってるってごういごうごうか」

「うん」

「うんって・・・」

リタは

「それに」その後で付け足した。

「ハルルの結界魔導器も見ておきたいのよ。壊れたままじゃまずいし」

「それなら僕たちで直したよ」

カロルが自慢気にリタに言った。

リタはカロルの言葉を信じられないようだ。

「はあ？素人がどうやって？」

「蘇らせたんだよ。エステ」

「素人もあなどれないもんだぜ」

カロルの言葉を遮り、ユーリが言った。

「ふーん。ますます心配」

「確かめに行かないと」と付け足したリタ。どうしてもついてくるようだ。

ユーリは諦め、片手をあげ、

「勝手にしてくれ」

と言った。

リタと一緒に来ることになったことが分かったエステルはリタに近付いた。

「な、何よ？」

「私、同年代の友達って初めてなんです」

「初めてって……。シークがいるじゃない」

リタがシークを見た。

「シークは友達とか好きじゃないみたいで」

「それに私は四捨五入するとまだ10代だ」

「え!？」

シークの言葉に全員が声を出し目を丸くした。

「シーク、僕と同年代なの？」

「リタより年下なのか？」

「いくつなんです？」

「14」

「人は見掛けによらないわね」

ユーリたちはアスピオを抜け、ハルルに向かう。

ハルルは相変わらずの満開だった。

リタはその光景に驚く。

「なにこれ！もう満開の季節だっけ？」

「だから言ったじゃん。僕らで蘇らせたって！」

リタはカロルに近付きカロルの頭を一発叩いた。

そしてすぐに木の方に走りだした。

「何で殴るのさ」

カロルが頭を抑え、痛がっている。そしてたまたまシークが目に入った。

「シーク、治療術できたよね？」

「そのうち痛みはひく。だから回復はしない」

カロルが全てを言う前に答えた。

カロルは少し残念そうな顔をしていた。

二人が会話している間にユーリとエステルはハルルの長と話していた。

カロルとシークは二人に近付き会話を聞く。

「フレンは？」

「申し訳ありません。入れ違いになりました。結界が直っていたのには驚かれましたが」

エステルは長の言葉を聞き、ガツクリした。

次にフレンから聞いていないか聞いたが、長は首を横に振る。

「ですが、手紙を預かっております」

長はそう言い、手紙をユーリに渡した。

中を見てユーリは驚いた。

「手配書・・・俺が！」

「一体どんな悪行重ねてきたんだよ？」

「これって・・・私のせい・・・」

「目をつけられたな」

カロール、エステル、シークの順番にそれぞれ言った。

「しかもたった5000」

「脱獄にしては高すぎだよ。他になんかしたんじゃないの？」

「手配書で思い出した。アスピオで見つけたんだが・・・」

シークはそう言い、一枚の紙をユーリに渡した。
ユーリは紙を見て驚く。

ユーリの様子を見たせいかエステルとカロルも覗く。
そして二人もユーリと同じ反応だった。

「シークも指名手配されてる！しかも30万も！」

「俺の賞金が小さく見えるな。どんなことしたらこうなるんだよ」

「騎士にでも聞け。それより、手紙には何て書かれてる？」

シークが話題を変え、手紙について尋ねた。

シークに言われ、ユーリは手紙に目を通した。

「『僕はノール港にいる。早く追いついてこい』か……」

「暗殺者にも気を付けるようにも書いてますね」

エステルが手紙を覗き、続きを読んでもらった。

「なら早く出発するか。リタ迎えに行くからエステルたちはここで待ってる」

ラピードをつれ、ユーリはリタを探しに行った。

ユーリが姿を消してすぐにシークも何処かに行こうとする。
それをカロルは呼び止めた。

「シーク、どこに行くの？」

「用事がある。すぐに戻ってくる」

そう言い、姿を消した。

カロールとエステルが待っていると、シークが戻ってきてその後ユ
ーリとラピードとリタが戻ってきた。

「カロール、ノール港はどっちだ？」

「西だよ。エフミドの丘を越えなきゃならないんだ」

ユーリたちはノール港を目指し、西に向かった。

第3夜：天才魔導士少女（後書き）

ヴェスペリアの隠しダンジョンはクラトスに会いたくてやりましたが、クラトスに会うまでがとて長かったです。

やっとのことでクラトスと戦ったけど、クラトスは強いし何度も死にました。でもその中でエステルだけが生き残り全滅は免れたけど、どんなにクラトスにダメージを与えても守護方陣で回復され、今までの苦勞が水の泡に……。

それでも何とか勝てましたが、TPは底をつき、エステル以外のキアラがほぼ瀕死状態に。

クラトスと戦って分かったのが、エステルは思っていたより打たれ強いことでした。

いつも転んでも傷一つ付かないコレットとどっちが打たれ強いか試してみたいですね。（笑）

私のどうでもいい話まで見ていただきありがとうございます。

ここは時々テイルズについて語ってみたいと思います。

第3・5夜（前書き）

3夜のオリジナルスキットです。

第3・5夜

【大切な時間】

カロール

「シークがいきなり剣を持って騎士の所に行こうとした時には驚いたよ」

ユーリ

「実力行使で通ろうとするからな。あんまし目立つとヤバイぞ」

シーク

「考えている時間がもったいないからな。目立つ行為をしようが時間は大切だ」

ユーリ

「あんまり時間をかけれないのは分かるけどよ時間がないから実力行使はどうかと思うぜ」

シーク

「実力行使はまずいのか。今までもそうしてきたが・・・」

カロール・ユーリ

「・・・」

ユーリ

「俺、何でシークが牢に入れられてたのかなんとなく分かった気がする」

カロル

「僕も」

【眼鏡】

エステル

「シークは眼鏡をかけるんですね」

シーク

「そうだ」

エステル

「普段はかけないんですか？」

シーク

「細かい物が見えにくいだけで、普段の生活には眼鏡無しでも困らない。本を読むときに見落としがあると情報が漏れるからな」

カロル

「その眼鏡、両方とも度が入ってるの？」

シーク

「片方だけだ。もう片方はただのレンズだ」

ユーリ

「片方だけ視力が悪いなら片方にだけコンタクト入れればいいだろ？」

シーク

「それも考えたが結局眼鏡にした」

エステル

「何でコンタクトにしなかったんですか？」

シーク

「面倒だった」

カロル

「それだけ？」

シーク

「それだけだ」

【呼び方】

カロル

「僕たちってエステルのことあだ名で呼んでるよね。他の人にはあだ名で呼ばないの？」

ユーリ

「別に必要ないだろ。エステルの場合は名前が長かったからエステルって呼んでるだけだ」

カロル

「でもさたまには呼び方を変えてみるのもいいと思うよ」

ユーリ

「カロル先生は何か考えてんのか？」

リタ

「二人とも、何してんのよ？」

ユーリ

「カロル先生が俺たちにあだ名をつけてくれるみたいだぜ」

カロル

「エステルはエステルでいいよね。ユーリは真っ黒剣士」

ユーリ

「真っ黒って……」

リタ

「見たまんまじゃない。案外合ってるかもよ」

カロール

「リタはツンツンデレデレ天才魔導士」

リタ

「何よ！それ！」

カロール

「ラピードが尾行探知機犬」

ラピード

「ガウツ」

ユーリ

「考えるならもっとましなのを付けろってよ」

カロール

「シークがナゾナゾ1人行動っ娘」

シーク

「ひどいあだ名だな」

カロール

「どう？みんな、気に入った？」

リタ

「気に入るわけないでしょ！」

カロール

「いたっ！」

シーク

「いつも通りで」

ユーリ

「そうだな」

ラピード

「ワンツ」

【見掛けによらず】

ユーリ

「シークが銅像を動かした時は驚いたな」

エステル

「シーク、凄かったです」

ラピード

「ワンツ」

リタ

「ガキンチヨ、あんたもつと頑張んなさいよ！あんた、さっきの恥

ずかしがったわよ」

カロル

「うっ……だって……」

ユーリ

「あんな細っこい腕のどこにあんな力があるんだ？」

エステル

「シークに聞けば分かりますよ」

リタ

「聞いたってどうせ『あるからある』とか言ってまともに答えないわよ」

ユーリ

「人は見掛けによらないな」

リタ

「そんなことより早く行きましょ」

エステル

「あっ！待ってくださいリタ！」

ユーリ

「カロル、いつまで落ち込んでるんだ？」

カロル

「僕だって一生懸命だんだよ。それなのに……」

【感謝の言葉】

エステル

「シーク、大丈夫ですか？」

シーク

「右腕を少し打撲したが問題ない。アスピオに戻ったら医者に診せる」

ユーリ

「まっ！無理しないでお前は後衛にいる。前衛は俺とラピードとカロール先生がやる」

ラピード

「ワウツ」

カロール

「僕に任せて！」

シーク

「信用出来ないが今は言葉に甘えるか・・・」

リタ

「シーク」

シーク

「何だ？」

リタ

「さっきは・・・その・・・助けてくれたのよね？」

シーク

「気にするな」

リタ

「それで・・・その・・・あ、ありがと・・・」

シーク

「別に・・・」

【栄養が行く所は】

カロル

「シークって14歳なんだ」

シーク

「それがどうした？」

カロル

「僕と2歳しか変わらないのに身長が違うからもっと年上かと思った

よ

リタ

「あんたが小さいだけじゃないの？」

カロル

「リタなんてシークより年上なのにシークより小さいじゃないか！」

リタ

「うるさい！」

カロル

「痛っ！」

リタ

「私の場合は栄養が頭に行ってるのよ！」

ユーリ

「エステルと身長同じくらいだけど何cmあるんだ？」

シーク

「166cmだ」

エステル

「私より高いです」

カロル

「何食べたらそんなに大きくなったの？」

シーク

「さあ。自然とこうなった」

リタ

「栄養が頭に行く分も身長に行っただんじやないの」

シーク

「否定はしないな」

ユーリ

「そこは否定するところだぞ」

カロル

「じゃあ、僕の場合は栄養はどこに行くのさ？」

リタ

「あんなの場合は栄養が頭にも身長にも必要ないと思ったたんじやないの？」

カロル

「そんなの酷いや！」

エステル

「ユーリの場合は栄養が身長に行っただんですね。私は胸に栄養が行って欲しいです」

ユーリ

「エステル、何か言ったか？」

エステル

「何でもないです！」

【賞金について】

カロール

「ユーリの賞金にはビックリしたけどシークの賞金にはもっとビックリしたよ」

ユーリ

「一体何したんだよ」

シーク

「さっきも言ったが騎士団にでも聞け」

リタ

「あんたらが賞金にかけられてるのは勝手だけどあたしに迷惑かけないでよね」

エステル

「私のせいで・・・」

ユーリ

「これは俺たちが自分で起こした面倒ごとだ。エステルは関係ないぜ」

シーク

「エステリーゼがどう思おうがエステリーゼの勝手だ」

エステル

「はい・・・」

カロール

「賞金の額が凄いから僕たちにも面倒かかるよね」

シーク

「騎士に追われてもその辺は自分で何とかしろ」

カロール

「酷い・・・」

第3・5夜（後書き）

200人斬りがラピードとユーリしかできません。
いつもクラトスで負けてしまいます。
レベルが低いのかな？

最近はアビスにもはまっています。

アビスはF O Fのシステムが楽しいですね。アビスではF O Fのシステムを楽しむため、ティアを使いF O Fを発生させてます。F O Fの発生に夢中になり他の人の回復を忘れ、死にかけたこともありました。
ですからF O Fで遊ぶ時はナタリアを入れるようにしています。

アビスでお気に入りの決めゼリフはルーク、ジェイド、アニス、ガ
イの

「俺たちの武器は最低」
ですね。

アビスは全テイルズシリーズの中では一番パーティの仲が悪いですね。
シンフォニアが仲良しに対し、アビスは仲が悪いように作ったのでしょうか？

ここまで読んでいただきありがとうございました。

オリキャラの使用術技（前書き）

以前、シークの使用魔術を書きましたが、今度は技も載せてます。魔術は消えてたり増えてたりしています。

技はオリジナルの物もあります。

オリジナルはうまく言葉で表現出来ていません。

それでもいいから見たいという方だけどうぞご覧ください。

オリキャラの使用術技

オリジナルキャラクターの使用術技決定版

【技（オリジナル含みます）】

魔神剣

双牙斬

崩襲脚

牙連崩襲顎

紅蓮襲撃

襲爪雷斬

空破絶風撃

守護氷槍陣（TOAのルークの守護方陣のFOF技です）

（オリジナル）

刹那^{セツナ}

敵を横から素早く斬りつける。斬りつけるときは2HITする。

セツゲキレスショウ
刹鬨烈晶

敵を剣で攻撃しながら鎖で縛り、更に横から敵を斬りつける。

ラセツ
羅刹

素早く敵の背後に回り、下から剣で敵を斬りつける。

ラゼツ・イザヨイ
羅刹・十六夜

敵に斬りつけたと同時に敵の背後に回り、剣の柄の下にある鎖で更に敵を攻撃する。

スイケツショウ
水結晶

氷をまとったナイフを投げ、ナイフに当たった相手を氷付けにし、一定時間、行動不能にする。

【魔術】

ファーストエイド
ヒール
キュア
ヒールストリーム
ホーリーソング
フレイムバースト
イグニートプリズン
アクアエッジ
セイントバブル
グレイブ
ロックマウンテン
エナジーブラスト
タービュランス
福音（TOSのユニゾンアタックと同じです）
プリズムソード
ジャツジメント
サンダーブレード
インディグネーション

【バーストアーツ】

無双^{△ソウ}

鎖で敵の身動きを封じたあと剣で連続して敵を斬りつけ、ナイフを3本投げる。

無双・朱雀^{△ソウ・スザク}

鎖で敵の身動きを封じたあと炎をまとった剣で敵を連続して斬り、爆発させる。

無双・玄武^{△ソウ・ゲンブ} 鎖で敵の身動きを封じたあと水をまとった剣で連続して敵を斬り、水で襲う。

無双・青龍^{△ソウ・セイリウ}

鎖で敵の身動きを封じたあと風をまとった剣で敵を連続して斬り、風で敵を切り裂く。

無双・白虎^{△ソウ・ヒヤッコ}

鎖で敵の身動きを封じたあと打撃をくわす剣で敵を連続して斬り、大地の攻撃をくわす。

【秘奥技】（オリジナルです）

ラセツ・ゼツカイクム
羅刹・絶皆無 敵を空中に蹴り上げ、空中で敵を連続して斬りながら鎖で縛り、身動きを封じ、8本のナイフを敵に投げつけ、刺し、最後に鎖から解放するさいに、敵を鎖で攻撃する。

オリキャラの使用術技（後書き）

うまく言葉で表現できず申し訳ありません。

ようやくアビスのアニメが放送されましたね。

CMで予告を見てから約3カ月近く待ちました。

テレビの中でルークたちが動いたのには感動しました。

そして、OPはカルマでした。

2話目にはあの鬼畜眼鏡、死霊使い《ネクロマンサー》が出てきます。

早く2話目が見たいな。

第4夜：再会（前書き）

エフミドの丘
カプワ・ノール

ちょっとオリジナルあります。

第4夜：再会

エフミドの丘

「ここがエフミドの丘・・・」

「その筈なんだけど。おかしいな、結界がなくなってる」

カロルはそう言って首を傾げた。

「人のいない所に結界か。贅沢すぎだな」

「あなたの思いすごしじゃないの？結界の設置場所ならあたしが把握してるはずよ」

「最近設置されたってナンが・・・」

「ナンって誰です？」

エステルの質問にカロルは突然慌てた。

「えっと、ぎ、ギルドの仲間だよ。ぼ、僕、その・・・情報集めてくるよ」

不自然にそう言ってあわただしく人のいる所へ行った。
気付けばリタの姿もなかった。

「そつえばシークもいませんね」

エステルの言葉に初めてシークがないことに気付いたユーリ。

「いないのはいつものことだろ。また姿を見せるって」

ユーリは特に気にしていない様子だった。ユーリ、エステル、ラピードも人のいる所へ行つた。

そこに行くとリタが壊れた結界魔導器を見ていた。

周りにいる人が止めてもリタは気にすることなく結界魔導器を見ている。

そんなリタを見てユーリが

「俺もあんな強引さが欲しいね」と言っていた。

今度はカロールが慌ててユーリたちの所に来た。

そして、結界魔導器が壊れた時の様子を説明しだした。

「一瞬だったらしいよ！槍でガツン！魔導器ドカン！空にピューって飛んで行つて！」

「意味が分かりませんが・・・」

「誰が何をどうしたって？」

カロールの説明がイマイチ分からず、ユーリはカロールにちゃんと説明をするように言った。

カロールは今度は落ち着いて説明した。

「竜に乗ったやつが、槍で魔導器を壊したんだよ！」

「竜にねえ・・・」

「何人もの人が竜使いを見たらしいよ！」

「世の中、まだまだ広いな」

カロルの話を聞いていると、ユーリたちの横から騎士が通り過ぎた。気付けば魔導器のあるほうが騒がしい。

「ちよつと！放しなさいよ！」

リタの声が聞こえた。

見ればリタが騎士に拘束されていた。

「山火事だぁー！！！」

カロルが突然叫び、大嘘を吐いた。

「そこのお前、少し我々と来てもらおう」

騎士にはすぐに嘘とバレてしまい、カロルは騎士に目をつけられた。カロルは騎士から逃げ出した。

その様子を客観的に見ていたユーリたちだが、騎士の一人がユーリが手配書の人間だと分かると今度はユーリたちが逃げ出した。

「なんとか振り切ったな」

ユーリ、エステル、ラピード、リタはなんとか逃げる事が出来たが一人、逃げ出したカロルの安否は不明だった。

「リタはあんなに無謀な人だったんですね」

「あの魔導器、おかしかったから」

「厄介事なら自分でなんとかしてくれ。もう、両手はいっぱいっばいだからな」

「厄介事ならまだかわいいほうよ。何とかできるかしら」

ユーリ、エステル、リタが会話をしていると、茂みの方から声がした。

「遅かったな」

聞き覚えのある声だった。

「シーク！」

シークが姿を見せた。

「今まで、どこにいたんだ？」

「ここで隠れていた」

「どうしてですか？」

「騎士に目をつけられているなか、魔導器が壊れたとなると騎士に連絡しない奴はいないからな」

「つまり先に逃げてたわけね」

リタが言い終わると茂みの方から音がした。

シークは剣の柄に手を添えた。

姿を見せたのはカロールだった。

「なんとか逃げれた」

「カロール！無事だったんですね！」

「うん。あ、シーク！今までどこにいたのさ！」

「ここで隠れてたらしいぜ」

カロールの質問に答えたのはシークではなくユーリだった。

「丘を越えるなら早く行くぞ。魔物が出るがそれほど強くはないはずだ」

シークはそう言うと、先に行ってしまった。

ユーリたちもシークのあとを追った。

しばらく進むと花が咲いていた。その花は見慣れない花だった。

「山の中じゃこんな花が咲いてんのか」

「見たかぎりだと毒素の花か。効能は麻痺系か？」

リタが花に近付こうとしたとき。

「ダメです！！！」

エステルが叫んだ。

エステルが言うにはこの花はビリビリハといい、花粉を吸うとひどい目眩と脱力感がするらしい。

「ふーん」

リタは花から離れたと思ったらカロルの後ろに行き、カロルを花の近くに押した。

その時にカロルは花粉を吸い込んでしまった。

「ダメです。治療術では治りません」

「自然に回復するのを待つしかないな」

「これ、いつ治るんだ？」

「カロル、頑張ってください！」

「うう、ひどいよリタ」

「だからごめんって言うてるでしょ」

しばらくして、ようやくカロルが回復した。

カロルがリタを責め、リタはカロルに対し謝っている。

「動いて大丈夫なのか？」

「うん。大丈夫だよ」

シークはカロルに大丈夫か声をかけると、カロルは平気らしい。

シークはユーリが自分を見ているのに気付いた。

「何だ？」

「いや、随分と優しいと思っただけ」

「途中で倒れられても助けないからな」

「なるほどな。平気なら先に進むぞ」

先を進むとビリビリハの花が思ってた以上にあっただけの気が付いて通ることにした。

しばらく歩いていると地面が揺れた。全員が足を止めた。

「何!?!」

シークが崖の上を指差した。

崖の上には魔物が立っている。

カロールが言うにはその魔物はハルルを襲った魔物らしい。

「ほつといたらまたハルルを襲うな」

「でも、今は結界があります!」

「結界があつたとしても周りにこんなのがいたら迷惑だな」

魔物はジッとこちらを見ている。

どうやら戦うきらしい。

全員が武器を構えた。

それと同時に魔物が崖の上から降りてきてユーリたちを襲った。

「『ストーンブラスト』」

リタが魔術で魔物を攻撃するが魔物にはあまり効いていないようだ。

魔物はエステルを狙って来た。

エステルは魔物の攻撃を防御し、魔物に攻撃をする。

「ピコハン」

やはり魔物にはあまり効いていなかった。

エステルは魔物に攻撃され、ダメージを受けた。

魔物はエステルに休む暇も与えず続けてエステルに攻撃を仕掛ける。

「エステル！」

ユーリがエステルの名を叫ぶ。

全員がエステルを守ろうとしたが間に合わない。

エステルは思わず目を瞑った。

「（あれ？痛みがこない？）」

エステルがおそろおそろ目を開けるとシークが魔物の攻撃を受け止めエステルを魔物から守っていた。

「動けるなならば早く移動しろ！長くはもたない！」

エステルはシークに言われた通りにその場から移動した。

ユーリが魔物を怯ませるとシークはその隙を狙い、魔物の攻撃から逃れた。

「聖なる光よ『ヒール』」

シークがさかささエステルを回復させた。

「ありがとうございます」

「礼はいいからお前は後方につけ」

エステルはシークに言われた通りに後ろに下がりは後方で援護をすることにした。

シークは魔物に突っ込んで行く。

「刹那」

素早く魔物を横から斬りつけた。

「爆砕ロツク」

「三散華」

ユーリとカロール、ラピードがかさず魔物に攻撃し、魔物が少し怯んだ。

しかし、それだけだった。

魔物にはあまり効いていないようだ。

「これならばどうだっ！紅蓮襲撃」

シークが魔物に蹴りをいれると炎が魔物を襲う。

攻撃を受けた魔物は今までと違う反応を見せた。

そのことに気付いたシークは魔物から目を離さずリタに言った。

「こいつ、もしかして・・・リタ！炎系の魔術を使え！」

「え！？何ですよ？」

いきなり言われて戸惑うリタ。

「こいつは火に弱い！」

「分かったわ。『ファイアボール』」

リタが炎系の魔術を使うと魔物は怯む。

「（確かに効いてるがこれで倒すのはキツいな・・・）」

そんなことを考えていたユーリはビリビリハの花が目に入った。

「（そうだった）」

そして一人魔物に突っ込んで行き、魔物を自分の方に引き付け始めた。

そして、ビリビリハの花の前まで来るとユーリの動きが止まった。

魔物はユーリの動きが止まったことを確認するとユーリに向かって走って行った。

「ユーリ！」

エステルがユーリが危険だと感じると無意識にユーリの名を叫んだ。そんなエステルとは裏腹にユーリは魔物の攻撃を簡単に避けた。

そして魔物はビリビリハの花にぶつかった。

花は当然、花粉を出し花粉は魔物に当たり、魔物は動きを止める。

「今だった！」

ユーリの声を含図に全員で動きを止めた魔物に一齐に攻撃を仕掛ける。

ラピードが最初に瞬迅犬を使う。

「行きます！ピアズクラスター」

「雷撃ウェーブ」

「紅蓮襲撃」

「爆砕陣」

魔物は倒れた。

全員がその場に座り込む。

しばらくしてからエステルがみんなに回復術を使った。

エステルがシークに近付いたとき。

「先ほどはありがとうございました」

とお礼を言った。

「別に・・・」

「その腕、私を守ってくれた時についた傷ですよね。ごめんなさい、私をもっとしっかりしていれば・・・」

エステルがシークに謝るとシークはため息をつき、エステルに言った。

「お前・・・謝りたいのか感謝したいのかわからないな。第一この傷は私の力不足でついたもの。お前は関係ない」

「はい・・・」

シークはそう言ったがエステルの気持ちはまだ晴れないようだ。

シークはまたため息をついた。

「まだカロルが残ってるだろ。私は自分でやるから早くカロルの所に行け。以外に一番頑張ってたからな」

エステルはシークを気にしながらもカロルの所に行き、カロルに治療術をかけた。

「聖なる活力、ここに『ファーストエイド』」

エステルが去ったあと、シークは自分で治療術を使い、傷を癒した。

「これでハルルの街も安全ですね」

「さっきので生き残りならな」

そんなことを話しながら歩いているが、その会話はピタリと止まった。

「うわあー！」

目の前に現れたのは広大な海。
その美しさに感動していたのだ。

「すごい……。ユーリ！海ですよー！海ー！」

「分かってるって」

「本で見て知っていましたが、本物を見るのは初めてです」

エステルは海を見て、一番感動していた。

そして、海を見つめながら言った。

「旅が続けばもっといろんなことを知ることができる」

「そうだな。俺の世界も・・・狭かったんだな・・・」

「あなたにしては珍しく素直な感想じゃない」

ユーリの言った言葉にリタが珍しい物を見るような目をしながら言った。

「お前も海は初めてだろう？」

「まあ、ね」

シークの言葉にリタは少し戸惑いながらも答えた。

そんなリタにカロルは哀れな目をした。

「そっか。ずっと研究ばかりで寂しい生活してたんだね」

「あなたに同情されると死にたくなるんだけど」

そんな3人のやりとりを背景にエステルはまだ海を見ている。

「この水は世界を回ってここにたどり着いたんですね。海を通して大陸は繋がっている」

「大げさね。ただの水溜まりでしょ」

「リタも感動してたくせに」

リタはカロルを叩く姿勢になり、カロルは叩かれる姿勢になったがリタはカロルを今回叩かなかった。

「もっと前にフレンはこの景色を見たんだろうな」

「そうですね。任務で各地を回っていますから」

「たく、『早く追いついて来い』なんて無茶言っぜ」

ユーリの言葉に隣にいたエステルはクスクスと笑った。

「いつまでもここにいと騎士団が来るんじゃないか？」

「そうだな。よし、行くか」

シークの言葉を聞き、ユーリは出発するようにみんなに言った。全員は頷くと再び歩き始めた。

【港の街カプワ・ノール】

カプワ・ノールに近付くにつれ、天気荒れてきてカプワ・ノールに着く頃には雨が降っていて、雷も鳴っていた。

「なんか急に天気が荒れたな」

「びしょびしょになる前に宿を見つけようよ」

カロルの意見に賛成し、ユーリたちはその場から動く。しかし、ユーリたちが歩き始めてもエステルだけはその場から一歩も動かずに街を見渡していただけだった。

「どうした？エステル」

「港街というのは活気に溢れているものだと思いますが・・・
エステルの言葉にユーリも街を見渡す。」

「確かに想像していたのとは違うな」

「でも、アンタの探してる魔核泥棒はいそうよ」

「デデツキの野郎が行ったのはトリム港の方だろ」

「どっちも似たようなもんでしょ」

「違うよ。ノール港の方が厄介なだけだよ」

ユーリとリタの会話に割って入ったカロルはリタの言葉を否定した。
エステルはカロルの言葉に首を傾げる。

「どういうことですか？」

「ノール港はさあ、帝国の圧力が・・・」

「お願いです！息子を返してください！」

カロルが理由を言おうとしたとき、突然、声が聞こえてきた。声の主の方を見ると夫婦と思われる人達と男二人がいた。

男二人はどうやら役人のようだ。

夫婦は男に頭を下げ、お願いをしている。

「税金を払え！払えないならリブガ口の角を税金代わりに持ってこい！」

声の主の方を見ると夫婦と思われる人達と男二人がいた。

男二人はどうやら役人のようだ。

夫婦は男に頭を下げ、お願いをしている。

「税金を払え！払えないならリブガ口の角を税金代わりに持ってこい！」

「そんな・・・」

ユーリたちは外野から様子を見ていたが、あまり良い表情をしてはいなかった。

「カロル、今のが厄介の種か？」

「うん。カプワ・ノールは帝国の威光がものすごく強いらしいんだ。特に最近来た執政官は帝国でもかなり地位が高くらしくてやりたい放題らしいよ」

「その部下が横暴なことをしても、誰も文句が言えないという訳か・・・」

シークがそう言うとりタが
「最低ね」と言った。

「そんな・・・」

エステルが暗い表情をした。
夫婦と男二人のやり取りを黙って見ていたシークだったが、その人達の方へ足を進めた。
夫婦と男二人はシークの存在に気付いた。

「何だ　　グワツ!!!?」

シークは男一人の服の襟を掴み、男を宙に上げた。

「くそっ!この女!!」

もう一人の男がシークを止めようとシークに顔面を蹴られ、気絶してしまった。

「てめえ!こんなことをしていいと思ってるのか!俺たちの上司の執政官様が黙っていないぜ!」

襟を掴まれている男はシークに言ったが、シークは何も動じない。

「なら、その執政官に伝える。私はここのルールを知らない」

男を壁に突き付けると男の耳元で何かを囁いた。
その後、男をすぐに解放すると夫婦を見て言った。

「税金が払えないなら代わりにリブガ口の角を持ってこい！」

男は気絶している男を抱えると立ち去った。

「もうやめてティグル！その怪我では・・・今度こそ本当にあなたが死んじゃうわ！」

「だからって・・・俺が行かないとうちの子はどうなるんだ、ケラス！」

ティグルという夫をケラスという妻が止める。

どうやらリブガ口に挑戦するみたいだ。

ティグルの頭や腕には包帯が巻かれていて、今までもリブガ口に挑戦しているようだ。

一番近くにいたシークはティグルに溜め息をつき、ティグルに声をかける。

「やめた方がいいと思うが・・・」

「アンタには関係ない！」

ティグルはシークに怒鳴った。

遠くで見ていたユーリは夫婦の方に近付く。

ティグルが走り出すとユーリはティグルを引っ掛け、ティグルは転ぶ。

「痛っ！アンタ、何すんだ！」

「悪い。引っ掛かっちゃった」

転んだティグルに妻のケラスとエステルたちは近付く。

「もう、ユーリは！ごめんなさい。今、治します」

ユーリの代わりに謝罪したエステルはティグルの怪我を治癒術で治した。

「あの、私たち払えるお金がありません」

「その前に言うことがあるだろ。ったく、金と一緒に常識まで絞り取られてんのか」

「ごめんなさい。ありがとうございます」

ユーリの言葉にケラスは謝罪と感謝の言葉を同時にした。ユーリは暗がりの方に目を向け、みんなに気付かれないように人の少ない裏路地の方へ歩いて行った。路地裏に着くと、ユーリは背後から気配を感じ背後を振り向く。

そこには剣をユーリに向けた男たちがいた。

ユーリは剣を抜いた。

男たちが一斉にユーリに襲いかかる。

ユーリは一番早くユーリの所に来た奴に剣を振りかざす。

ユーリの攻撃は当たり、男は倒れるがユーリに休ませる暇を与えず次々に襲いかかる。

「さすがに一人はキツツ！」

ユーリが一人の男の攻撃を受け止めている間にもう一人がユーリの背後に回り、ユーリに攻撃をする。

「ヤバッ！」

しかし、その攻撃はある人物の介入により、当たることはなかった。ユーリの背後には金髪の騎士が立っていて、ユーリの背後に攻撃を仕掛けた男を攻撃したのだった。

ユーリは剣を交えていた男を攻撃し、その人物を見て驚いた。

「大丈夫か？」

「フレン！おまつ！それ、俺のセリフだ！」

「まったく、探したぞ」

「それも俺のセリフだ！」

ユーリは金髪の騎士をフレンと呼んだ。

男たちは立ち上がり、再び二人に襲いかかった。

ユーリとフレンは呼吸を合わせ、同時に男たちを攻撃した。

二人は息の合った戦いだった。

男たちを倒し、一息ついたと思いきやフレンは突然ユーリに剣で攻撃してきた。

ユーリはすぐに反応しフレンの剣を自分の剣で防いだ。

「ちよっ・・・おまつ・・・何しやがる・・・！」

「ユーリが結界の外に出てくれたことは嬉しく思うよ！」

「なら、もっと喜びやがれ！」

「これを見て喜ぶ気が失せたよ！」

フレンはそう言い、ユーリに一枚の紙を見せる。

「10000ガルドに上がってる。やり」

その紙はユーリの指名手配の紙で、しかも賞金の値が上がっていた。

「騎士団を辞めたのは犯罪者になるためではないだろう！」

「それには色々と事情があつて・・・」

「事情があつても罪は罪だ！」

「相変わらず頭がお固いことで」

そこにエステルが姿を見せた。

ユーリはエステルに気付くと口元を吊り上げた。

「ちょうどいいところに」

「フレン！」

エステルはフレンの存在に気付くとフレンに抱きついた。

それをユーリは横で安心して見ていたが、エステルの背後に誰かがいるのに気付いた。

「エステル！危ないっ！」

「え？」

「いつの間にな！」

ユーリに言われ、エステルとフレンはエステルの背後にいる人物に

気付く。

その人物はローブに身を包み、頭までローブを被って顔が見えづらい。更に仮面までしてその人物の姿はまったく分からなかった。その人物の手には小剣があり、小剣をエステルとフレンに剣を振りかざしてきた。

フレンは剣でエステルを守り、その隙にユーリがローブの被った人物を攻撃する。

その人物は攻撃を避け、もう一本の小剣を抜いた。

「エステリーゼ様、お下がりにください」

フレンはエステルを後ろに下がらせ、剣を構える。

ユーリも剣を構えるが、ローブを被った人物はなかなか襲って来ない。そして、双剣を仕舞い、何処かに姿を消してしまった。

ユーリとフレンもそれを確認すると、剣を収めた。

「何だったんだ？」

「さあな。フレンを殺しに来た暗殺者かもな」

「フレン！」

エステルがフレンの名を呼び、フレンに近付いた。

「怪我はありませんか？無事だったんですね」

エステルはフレンが無事なのを確認すると安心した。

フレンはエステルの手を掴んだ。

「エステリーゼ様、こちらに」

フレンはエステルを連れ、何処かに行ってしまった。
取り残されたユーリは

「カロールとリタとシークを先に拾うか」と言い、三人がいる所へ向かった。

向かった場所にはカロール、リタ、ラピードはいたがシークの姿がなかった。

「シークはどうした？」

「いないのはいつものことですよ」

「シークならさっきの夫婦の傷を治すつて。ついでに他に怪我人がいないか見てくるから先に宿に入つててだつて」

カロールがシークからの伝言を話した。

ユーリたちはエステルとフレンがいるだろうと思われる宿の部屋に入った。

そこにはエステルとフレンが予想通りいた。

「用事は済んだか？」

「はい」

ユーリの声に振り向いたエステルは頷いた。

「今までの話を聞かせてもらった。賞金首になった話も含めて」

フレンは今までエステルを守ってくれた礼を言った。
続けてエステルも礼を言う。

「魔核を探すついでだよ」

「問題はそつちだな」

「ん？」

フレンの言葉にユーリは首を傾げた。ユーリの犯した罪……公務の妨害、脱獄、不法侵入だの言い始めた。

「仕方ないな。やったのは事実だし」

「ではそれ相応の処罰は受けて貰うよ」

「別に構わないけど、ちょっと待ってくんない？」

「下町の魔核を取り戻すのが先決だと言いたいのだろう」

話をしていると騎士の姿をした女性とアスピオの魔導士と同じ姿をした少年が入って来た。少年はリタを見るなりリタに対抗意識を燃やし、リタにつっかかっていた。当のリタは特に興味なさそうだ。

「紹介するよ。僕……私の部下のソディアとウィチルだ」

ソディアは軽く一礼し、ウィチルは眼鏡をあげた。

フレンがユーリの紹介をしようとした時、ソディアはユーリが指名手配の人物だと気づき、剣の柄に手をかけた。フレンはソディアを止めた。

「待つんだ！彼は濡れ衣だ！」

ソディアは納得がいかない様子だが仕方なく剣を納めた。

その後、フレンに言われソディアはウィチルに説明するように言った。

「この連続した雨や暴風は魔導器のせいだと思われます」

「ラゴウ執政官の屋敷にそれらしき魔導器が運び込まれたとの証言もありません」

リタはその報告に驚いた。

「ありえない。魔導器が天候を変えるなんて……。下町の水道魔導器……。遺跡の盗掘……。まさか……」

「執政官様が魔導器で天候を変えてるって訳か」

「あくまで可能性ですが……」

執政官は魔導器で悪天候にし、海を荒れさせ、港を封鎖させた。船を勝手に出港させるのは違反だと言っているらしい。

「ラゴウの悪さはそれだけではない。リブガロという魔物を野に放し、市民と戦わせて遊んでいるらしい。リブガロを捕まえてくれば

税金を帳消しにしてやると言っただけだ」

「そんな、ひどい……」

「あの夫婦も執政官に……。そういえば子供が……」

フレンがカロルの言葉に反応し、追求してきたがカロルはなんでもないと口を閉じた。

その時、部屋の扉が開いた。入ってきたのはシークだった。

「ここにいたのか。随分と人が多いな……」

フレンとソディアはシークを見るなり目の色を変えた。

ソディアは剣を抜き、シークに矛先を向けた。

「貴様は指名手配犯の！覚悟！」

ソディアはシークに襲いかかる。

しかし、シークは慌てることなく、ナイフを取りだしソディアの剣を弾き、ソディアを床に倒し、ソディアの腕の自由を奪い、ソディアの顔にナイフを突きつけた。

「くっ！」

「女騎士、少しでも動けば首が飛ぶと思え。その騎士とガキもだ。少しでも私に危害を加えるならばこの女の首が飛ぶ」

フレンとウィチルは身動きがとれなかった。

そしてフレンはシークに言った。

「分かった。今は君に危害は加えない。だから彼女を解放してくれないか」

シークはフレンの言葉を聞き、ナイフを仕舞うとソディアを解放した。

シークは何事もなかったようにユーリを見た。

「ユーリ、思った以上に怪我人が多い。先に休んでいてくれ」

シークはそれだけ言うと部屋を出て行った。シークが部屋を出て行ったあとフレンはユーリを見て尋ねた。

「ユーリ、君は彼女の知り合いなのか？」

「シークとはここまで一緒に旅したぜ」

「そうか。彼女はシークと言うのか・・・」

カロールは何か思い出し、フレンに話しかけた。

「そうだ。シークって何で指名手配されてるの？」

カロールの質問にフレンは少し驚いた。

「彼女から聞いていないのか？」

「シークの奴、何したんだ？」

「彼女の罪に比べたら君の罪は軽い方だよ」

フレンの言葉にユーリ、エステル、カロール、リタは首を傾げた。そしてフレンはゆっくりと口を開いた。

「彼女は・・・3年前に貴族と騎士合わせて30人を殺したんだ」

その言葉にユーリたちは驚きを隠せない。

カロールはフレンに反論した。

「待つてよ！3年前って、シークは当時11歳ではないか！そんな小さな子供が人殺しなんてあり得ないよ！」

「僕だつてそう思ったさ！だが、貴族と騎士が殺された現場には彼女しないかつたし、彼女の近くには血のついた剣が落ちていた！そして彼女自身、そのことには反論も何も言わなかつたさ！」

フレンがカロールにそう言うと、カロールも誰も何も言わなかつた。しばらく、沈黙が続いた。

「あの・・・」

沈黙を破つたのはエステルだつた。全員がエステルに注目する。

「私はシークがそんなことをする人とは思えません。シークは私を助けてくれました。リタも助けてくれました。シークはそんなことをする人ではありません！」

「そつだな」

「シークのことと一緒に旅をした僕たちが分かるもんね」

エステルの言葉を聞き、ユーリ、カロル、リタは頷いた。フレンは驚いていたが、すぐに笑顔になった。

「君たちはシークを信頼しているんだね」

話を終えるとユーリたちはそのまま宿で休むことにした。

休んだあと、ユーリたちはラゴウの屋敷に行くことにした。

フレンと話を終えたエステルを連れて。一行はラゴウの屋敷に行き、ラゴウに会おうとしたがやはり門払いされた。

「やっぱりダメだったね。どうにかして入れないかな？」

「リブガ口の角を持ってきたらどうだ」

「シーク・・・」

シークがいつの間にか姿を現していた。

皆は複雑な顔をする。そんな中、エステルがシークに話しかけた。

「あの、シーク・・・3年前に貴族と騎士を殺したのは本当ですか・・・」

「騎士に聞いたのか・・・」

「はい。シークはやってませんよね？シークは私を何度も助けてくれました。リタも助けてくれました。シークはそんなことをする人ではありません」

「私がやったと言えばお前たちは私とは絶交するか？」

シークの質問に誰もが沈黙した。

「この件に関してはしばらくは伏せさせてくれないか。いつれ真実を知ることになるかもしれない」

シークの言葉に全員が納得がいかないようだったが、この件は伏せることにした。

「話しは戻すが、リブガ口の角を渡すのを口実にすればラゴウの屋敷に近付けろぞ」

「そういえば、役人の人たちが言ってました。角を渡せば一生分の税金を払えるって」

一行はリブガ口を探すことにした。

リブガ口を探しに行こうとしたら、シークが止めた。

「その前になぜラゴウの屋敷に行きたいのか説明してくれ」

シークに頼まれ、フレンとの話を説明した。

その後、リブガ口を探しに街の入り口に向かう途中、フレンたちと遭遇したが、軽く挨拶をして、結界の外へ出た。

リブガロは案外簡単に見つけた。

「あれがリブガロ・・・」

「行くぞ」

ユーリたちはそれぞれ武器を構える。

リタが呪文を唱える。

「トラクタービーム」

リブガロを宙に上げ、地面に叩きつける。

リブガロが倒れたところをエステルとリタ以外の人たちがリブガロに接近する。

「落破ペインショット」

「襲爪雷斬」

「爆砕陣」

そしてラピードは流影牙を使う。

リブガロはダメージを喰らった。

しかし、リブガロもやられっぱなしではなかった。

反撃し、ユーリたちに攻撃する。

「バリアー」

しかし、リブガ口の攻撃はエステルがかけた魔術により、防御力の上だったユーリたちにはあまり効いていなかった。

「これなら楽勝ね」

「一気に決めるぞ！」

勝機を確信した。

ユーリの合図に全員が襲いかかる。

珍しくリタも接近した。

最初にラピードがリブガ口に閃空烈破を喰らわす。

「デイトライトロール」

「撃槌フロウアッパー」

「 〃 (ルドルフ) 」

「牙連崩襲顎」

「爪竜連牙斬」

同時にリブガ口に攻撃し、リブガ口は倒れた。

そしてリブガ口から角を取り、カプワ・ノールへ戻った。

第4夜：再会（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

今回は自分が投稿している小説の内容について語ります。

・・・と言っても多分オリジナルキャラクターについて語るのがほとんどです。

以前感想で、『こういう小説は大抵誰かとくつついたりしますよね』と書かれましたが、この小説を書き始めた当時は恋愛系にしようか友情系にしようか悩みました。

もし、恋愛系にするならば、シークは14歳ですが私は「愛に年の差なんて関係ない」と思っています。

でも、20を越えた大人が14歳に手を出すのはさすがにヤバいだろうと思います。だからといってカロルにはあの子がいます。

友情系にするか恋愛系にするかはこれから考えていきます。

ですがシークはまだ仲間の輪にまだ入れないようなのでまずは仲間の輪に入れさせようと思います。

第4・5夜（前書き）

第4夜のオリジナルスキットです。

第4・5夜

【伝言相手は？】

カロル

「シークって姿隠したり、突然現れたり神出鬼没だよね」

シーク

「指名手配されてる今は目立つような行動は避けたいから姿を隠したりするし、必要がなければ姿を見せる」

カロル

「うっ・・・何か言い返す言葉がない・・・」

ユーリ

「だからっていきなり姿を消すのはやめた方がいいと思うが・・・」

エステル

「そうですね。せめて誰かに一言、伝えたらどうですか？」

シーク

「一応伝えた」

リタ

「がきんちよ！あんた伝言くらいちゃんと伝えなさいよ！」

カロル

「僕、知らないよ！」

エステル

「え？では、誰に伝えました？」

シーク

「ラピード」

リタ

「犬の言葉なんて分かる訳ないでしょ！」

シーク

「ユーリなら分かると思ってラピードに伝えた」

ユーリ

「俺が？」

エステル

「そうですね」

カロル

「ユーリなら分かる感じするよね」

リタ

「誰かに」

【シークについて】

エステル

「シーク」

シーク

「何だ」

エステル

「先ほどは助けをいただきありがとうございます」

シーク

「別に・・・」

カロール

「シークにさ、お礼言っても『別に』って言うよね」

リタ

「素直じゃないわねー」

カロール

「それ、リタが言うんだ」

リタ

「とっつ」

カロル

「いたっ！」

エステル

「傷は本当に大丈夫ですか？やっぱり治癒術、かけましようか？」

シーク

「必要ない」

カロル

「それにエステルが傷、治そうとすると断るし」

ユーリ

「自分で治せるから必要ないみたいだからな」

リタ

「本人はそれでいいみたいだからいいんじゃないの」

カロル

「それにさ、野宿の時はシークが必ず見張り番してるし、『代わるうか？』って言っても代わってくれないし……」

リタ

「あんだ、よく見てるわね」

ユーリ

「カロル先生はよく気が効くなー」

カロル

「まあね」

ユーリ

「シークの奴、無理しすぎじゃねえか？」

カロル

「もう少し僕たちのこと頼ってもいいのになあ」

ユーリ

「シークが俺たちのことを頼らないならなるべくシークの負担を減らすようにすればいいだけだな」

カロル

「うん！」

リタ

「仕方ないわね」

【くしゃみをすれば噂】

エステル

「雨が降ってきましたね」

カロル

「濡れちゃうよ！早くカプワ・ノールに行こうよ！」

シーク

「ハックシヨン」

エステル

「シーク、風邪ですか？」

シーク

「違う」

ユーリ

「誰かが噂してるんじゃないか」

エステル

「噂をすればくしゃみは出るんですか？」

リタ

「そんな訳、ないで・・・クシュンッ」

カロル

「リタも誰かが噂して・・・ハックシヨン」

リタ

「あんたのことも誰かが噂してんじゃない？」

カロル

「僕のことを？ギルドのみんなかな？もしかしたらナンかも・・・」

エステル

「風邪は治療術では治りませんから早くカプワ・ノールに……ク
シュン」

ユーリ

「エステルのこと誰かが噂してるかもな。フレンとかさ」

エステル

「フレン、大丈夫でしょうか？」

ユーリ

「フレンが心配なら早くカプワ・ノールに行くぞ」

【謎の暗殺者】

ユーリ

「フレンの奴、相変わらず頭が固いな」

ユーリ

「それよりも気になったのはあのローブを着た野郎だ。フレンを狙った暗殺者だとは思うが、エステルを狙ったようにも見えた」

ユーリ

「次、出てきたら取っ捕まえてやるか」

【シークについて 2】

カロル

「30人殺し……。まさか、シークにあんな過去があったなんて・・・」

エステル

「私、『シークのことは知っている』と言いましたけど、本当は何

も知らないのかもしれませんが」

リタ

「そうね。普段シークが振る舞っている態度は本当のシークじゃないかもしれないわね」

ユーリ

「くよくよ悩んでも仕方ないだろ。このことはシークに聞くしかないだろ」

エステル

「はい・・・」

カロル

「それでもし、本当に人を殺してたら僕たちはシークと今までみたいに出来るかな？」

全員

「・・・」

【怒っているのは？】

エステル

「あの・・・シーク、本当は人を殺してませんよね？」

シーク

「エステリーゼ、その件に関しては今は伏せると言ったばかりだ」

エステル

「あ・・・ごめんなさい・・・」

シーク

「今、優先することはリブガ口を探すことだ。無駄な時間を作るな！」

ユーリ

「シークの奴、何かピリピリしてないか？」

カロル

「言われてみればそうだね」

リタ

「何か、カプワ・ノールでラゴウとかいう奴の手下を見てからピリピリしてたわね」

カロル

「いきなり役人は人に襲いかかってたもんね」

ユーリ

「フレンたちを見たらもっと機嫌悪かったな」

シーク

「私は怒っている訳ではない！」

エステル以外

「！」

シーク

「あ……悪かった。少し頭を冷やす……」

ユリ

「やっぱり怒っているな……」

第4・5夜（後書き）

今回のスキットは真面目なのが多い感じがしました。
やはり本編が暗い感じがだからでしょうか？

ここまで読んでいただきありがとうございました。

おもしろかったのでしたら感想、お待ちしております。

第5夜・執政官と紅の絆傭兵団へフラッドアライアンス（前書き）

カプワ・ノール〜カプワ・トリム

第5夜：執政官と紅の絆傭兵団へブラッドアライアンス

【カプワ・ノール】

カプワ・ノールに戻って来たユーリたち。

「あれ？あの人達」

ティグルとケラスの夫婦がいた。

傷は治っているようだが、またリブガロに挑戦しようとしている。
シークが夫婦に近付き、話しかけた。

「せっかく治癒術かけて傷が癒えたのに、まだやる気が」

「貴女は・・・先ほど夫の傷を治してくださった・・・。その拙は
ありがとうございます」

ケラスがティグルに代わり、シークにお礼を言った。

「お前、まだやる気が。やめておけ」

「うちの子を助けるためにはリブガロの角がどうしても必要なんだ
！」

その時、ユーリがリブガロの角を地面に捨てた。

「！」

ユーリの行為にシークが驚く。

「それはリブガロの角だ。俺はそれを捨てた。好きにしな」

ティグルはリブガロの角を拾った。

そして、夫婦はユーリに深々と頭を下げ、お礼を言った。

「ありがとうございます！」

夫婦はリブガロの角を持って去って行った。

「ユーリ、リブガロの角なしにどうやって執政官に入るのさ？」

カロルがユーリに言ってきた。

ユーリは何事もないような顔をしている。

「さあな。とりあえず、執政官に行くか」

ユーリの言葉に執政官のある所に向かった。

執政官には相変わらず見張りがある。

ユーリたちは隠れながら屋敷の様子をうかがっている。

「正面突破でよくないか？」

「やっぱり言うと思った」

シークの意見をカロルは予想していたようだ。

シークの意見は却下される。

今度はエステルが意見を出す。

「裏口からの侵入はどうですか？」

「残念。あそこ、外壁に囲まれあそこ通らにゃ行けないのよね」

聞き覚えのない第三者の声が聞こえた。

声が聞こえた方を見るとそこにはおっさんがいた。

シークは不審な人物だと判断すると、剣の柄に手を触れた。

「わー！待って！待ってよ！」

「待てるか」

おっさんはシークに言ったが、シークはあっさりとおっさんの言葉を拒否した。

「どちら様です？」

「そっちのかっこいい兄ちゃんちょっとした仲なのよ」

おっさんはそう言い、ユーリを見るが、ユーリは

「違う」と言い、おっさんを否定する。

シークはとりあえず剣から手を放すが、おっさんに対する警戒心はあった。

「お前の声・・・何処かで・・・」
シークはおっさんの声がどこか引っ掛かっていた。

「このおっさんとは牢を脱出するときに色々と世話になったんだよ」

「牢・・・思い出した」

ユーリがエステルたちにおっさんとの関わりを説明していると、シークが“牢”というキーワードに引っ掛かっていたものが思い出したようだ。

「おっさんの声、牢の中で聞いたことがある。私が無視してもしつこく話しかけてきたな」

「牢・・・？もしかしてお嬢ちゃん、あの牢の中に入ったの！まさか、こんな可愛い子だったなんて・・・それより、おっさんは酷いじゃないの」

「じゃあ、名前教えなさいよ！」

リタが名前を尋ねるとおっさんは

「とりあえずレイヴンで」と言った。

「とりあえずって・・・」

「中に入りたいたいなら俺様に任せとけ」

「信用できない」

シークはレイヴンが信用できず、レイヴンに任せることが出来ない

ようだ。

だが、中に入る手段がない以上、結局レイヴンに任せることにした。レイヴンは見張りの所に行き、見張りに話しかけた。

見ていると、レイヴンはユーリたちがいる方に指を指してきた。見張りはこっちに近付いている。

そして、レイヴンは一人裏口から侵入した。

シークはため息をついた。

「だから、信用出来ないと云ったんだ」

どうやら逆にレイヴンが中に入るのに利用されてしまったようだ。

「あのおっさん、馬鹿にして！あたしは利用されるのが大嫌いなんですよ！」

リタは怒りの言葉を口に出し、近付いてくる見張りを魔術でぶっ飛ばした。

そして、ユーリたちも裏口に向かう。

裏口の入口にはレイヴンがいた。

「よう。また会ったね。んじゃ」

レイヴンはそう言い、エレベーターに乗り、上へあがって行く。

ユーリたちも追いかけるため、隣のエレベーターに乗るが、レイヴンとは逆の方に進み、エレベーターは下へくだった。

「あれ？下・・・」

「あのおっさん、知ってたな」

エレベーターが止まった。

エレベーターを上へ動かそうとするが、ここからでは操作できず、リタが腹を立てた。

エステルは部屋の匂いをかぎ、口を抑えた。

「うっ……」

「血の臭い……。それと何か腐った臭いだな」

「死臭だ！」

「どうやらそうみたいだな」

ユーリが目線を落とした先は、骨と魔物があった。よく目を凝らして見ると、所々に骨がある。

「パ……パ……、マ……マ、た……すけ……、て」

声が聞こえた。

声は弱々しい。

「ちよっ！今度は何なの！」

「人の声だな。ここに人がいるならばかなり危険な状態だ」

ユーリたちは人を探すため、声がした方に足を進めた。

しばらく進むと別の部屋にたどり着いた。

そこは最初にいた所と似ていて、骨が転がっていた。

「パパ・・・ママ・・・助けて」

部屋の隅で声が聞こえた。声に気付くとエステルが真っ先に声の持ち主である子供の所へ行つた。

子供の名前はポリーといい、カプワ・ノールで出会つた夫婦の子供らしい。

「シーク、大丈夫か？顔色が悪いぞ」

「心配ない・・・」

ユーリがシークの顔色が悪いことに気付き、シークに声をかけたが、シークは

「大丈夫」と言葉を返した。

ユーリたちは子供をここに置いておくのは危険だと思い、子供も一緒に連れて行くことにした。

しばらく進むと一番奥の部屋であるう場所にたどり着いた。鉄格子があり、出られそうにない。

「はて。これはどうしたのか。おいしい顔が増えてますね」

聞いたことのない声が聞こえた。声の方を振り向くと、高貴な服を着た老人が立っている。

「あんたがラゴウさん？随分と悪い趣味をお持ちで」

「趣味？ああ、地下室のことですか。あれは私のような高雅な者にしか理解できませんよ」

「高雅……か……。本当に貴族の考えることは理解出来ないな」
シークが声を出すと、ラゴウはシークに初めて気付いたようにシークを見た。

「おや、貴女は“30人殺し”の……。手紙を差し出しましたのに、なかなか来ませんから少し焦りましたよ」

「手紙？シーク、どういうことですか？」

ユーリたちがシークに注目するなか、エステルがシークに尋ねた。シークは一枚の手紙を取り出し、口を開いた。

「私は“雇われ屋”というものをやっている」

「それがシークの言っていた仕事なんだ」

「雇われ屋ってのは何よ？」

「金さえ払えばなんでもやる仕事だ」

「そして、今回私は貴女を雇いました。手紙に書いてね。更に私は貴女が3年前にやった殺人の疑いを末梢して差し上げるのですよ。仕事をやってくれますよね？」

ラゴウが笑って言ったが、シークの顔は厳しいままだった。そして、シークは答える。

「この仕事は受けない」

ラゴウはシークの答えに驚き、そして、不満の顔をした。

「金はたっぷり払うんですぞ！貴女の犯した罪も末梢して差し上げるのですぞ！何が不満なんですか？」 「確かに私は3年前に貴族と騎士を30人殺した」

シークの言葉に今度はユーリたちが反応した。

「シーク・・・では本当に・・・」

シークはエステルの放った言葉に特に気にすることはなく、話を続けた。

「だが、いくら雇われ屋でも仕事は選ぶ。今回、私が断ったのは人間性だ。この街を見て断ると決めた。それに私はお前の手下に伝え

た筈だ、『仕事は受けない』とな」

「ああ、部下がそのようなことを言いましたね。・・・私を理解出来ぬとは、貴女も下民の一人という訳ですか・・・仕方ありませんね」ラゴウはシークを諦めたらしい。その後、ラゴウはリブガロを連れて帰ると言ったが、リブガロが倒してしまい、もういない。リブガロを倒したとラゴウに言うと、ラゴウは怒りをあらわにした。しかし、その怒りは声には出さない。

「まあ、いいでしょう。金さえ払えばいつでも連れて来れます」

「ラゴウ！あなたはそれでも帝国の人間ですか！」

エステルが前に姿を現し、ラゴウに言った。

ラゴウはエステルの姿を見て、驚いている様子だ。その隙にユーリは鉄格子を剣で攻撃する。

鉄格子は壊れ、その反動でラゴウは後ろに突飛ばされる。

「き、貴様！誰か！この者たちを捕らえなさい！」

ラゴウはそう言い、逃げていく。

「誰か来る前に魔導器を調べた方がいいな」

鉄格子を抜け、階段を上った先にその魔導器はあった。

リタは魔導器を見ると、すぐに魔導器の所へ走り、魔導器を調べ始める。

「複数の魔導器が組み合ってる。無茶な使い方して！」

リタは魔導器を見て、怒っている。

「これで証拠は確認できましたね。リタ、調べるのはあとにして・・・」

「もう少し調べさせて・・・」

エステルはリタに声をかけるが、リタはまだ調べたいらしい。リタはねばっていたが、騎士団を屋敷に入れさせるため、有事を起こさせることにした。

「あゝもう!」

リタが怒りながらファイアボールを連発する。

「うわあ!」

流れ弾がカロルに当たった。

ユーリはやりすぎだと思い、リタを止めるが、リタは・・・
「やるならこれぐらいやった方が騎士団も来やすいでしょ!」
と言って、聞く耳を持たなかった。

「あの者たちを捕らえなさい!」

突然、ラゴウが姿を現し、雇った傭兵に命令した。
傭兵はユーリたちを囲む。

ユーリたちはそれぞれ武器を取り出し、構えた。
その時、シークがユーリに話かけた。

「・・・ユーリ、しばらく詠唱する時間をかせいでくれ」

ユーリはシークの頼みに頷くと、シークは詠唱を始め、ユーリはシークの盾となる。

「汚れ無き光、彼の者たちに裁きの光を降らせたまえ……裁きの光よ『ジャツジメント』」

シークが詠唱を終了させ、魔術を発動させた。光が降り注ぎ、傭兵たちを一層する。

魔術が強力すぎて、壁や柱などを少し壊したが、本人は全く気にとめてはいなかった。

エステルはシークの魔術に感動していたが、ユーリとカロルは啞然としていた。

リタに関してはファイアボールを放ち続けていて、特に気にしていない様子だった。

「初めて使用した魔術だったせいか、加減がうまく出来ないな。敵味方の区別もうまく出来ない」

「上手く制御出来なかったの？」

「そうだ。今回、お前たちに当たらなかったのは運が良かっただけだ」

シークに質問したカロル自身は恐怖を感じ、

「次は確実に死ぬ」と心の中で思っていた。

「そ、そんじゃフレンが来る前にさっさと逃げるぞ」

「まだ、暴れ足りないわよ」

ユーリがフレンが来る前にこの場を去ろうとするが、リタはまだ暴れ足りないと言う。

「早く逃げないとフレンとご対面だぜ。そんなマヌケだけは勘弁だけどな」

「こんなに早く来るわけ・・・」

リタが扉の上にファイアボールを放ったが、扉の前にはフレンの姿があった。

ガシャンッ

その時、ガラスが割れる音が響いた。

音が響いた方にみんなが注目すると、竜に乗った人が窓を割って入って来た。

「うわあ！竜使いだ！」

竜使いは魔導器の前に立った。

「ちょっと、アンタ！何するの！やめて！」

リタが竜使いにやめるように叫んだが竜使いはリタの言葉に聞く耳を持たなかった。

そして、槍で魔導器を破壊した。

「アンタ！何てことしてんのよ！」

竜使いは魔導器を破壊すると、竜に股がった。

リタは怒り、竜使いにファイアボールを放つ。

竜使いは全てのファイアボールを避けると、竜が炎を吐き、飛び去

って行った。

「早く船の用意を！」

この事件の際にラゴウが逃げようとしていた。

「逃がすか……」

ラゴウが逃げようとしたらシークは真つ先にラゴウを追いかけた。ユーリたちもすぐにラゴウを追った。

「たくつ！何なのよ、あいつは！」

「あれが竜使だよ」

「私の魔導器を壊して！あんな奴に竜使いなんて勿体ないわ！バガドラで十分よ！」

「リタの魔導器じゃないし。それにバガドラって……」

外に出てもリタの竜使いに対する怒りは治まらなかった。急いでいるため、家まで送り届けることが出来なくなった子供は自分で帰れると言ってくれたので、そのまま別れた。

そして、ラゴウを追い続ける。

屋敷の裏手から船が出ようとしていた。

走りだし、その勢いで船に乗り込んだ。そして船を見回す。

みんながある物が目に入った。

「これ、魔導器の魔核じゃない！」

「何でこんなに魔核だけたくさん」

「知らないわよ。研究所にもこんな数の魔核なんてないのに」

箱の中には大量の魔導器の魔核があった。

だが、水道魔導器は無いようだ。

色々あさっていると、奥から誰かが姿を現した。

カロールがその人たちを見て、口を開いた。

「やっぱり、あの人たち、紅の絆傭兵団だ！」
ブラッドファイアンス

「紅の絆傭兵団？何よそれ」

「金さえ払えば何でもやるギルドだ」

リタの質問に答えたのはシークだった。その紅の絆傭兵団たちはおそらく手下だろう。手下たちはユーリたちに襲いかかってきたので、そいつ等を簡単に倒した。

ユーリとカロールが船室の扉の前に立つ。

「どきやがれ！」

「うわあ！」

扉が突然、勢いよく開き、カロールを突き飛ばした。中から姿を現したのは隻眼の太った男だった。

「ラゴウの奴はこんなガキ共から逃げてたのか」

「お前は紅の絆傭兵団の頭領、バルボスか……。ラゴウはお前を雇ったか」

シークは男をバルボスと呼んだ。

バルボスはシークを見ると、大声で笑いだした。

「ガハハハハ！騎士団に捕まっていたお前が姿を現すとはな！手配書にお前が写っていた理由がようやく分かったぞ！」

二人の会話を聞いているとどうやらシークとバルボスは知り合いのようだ。

カロルはそのことに驚いている。

「え？シークと紅の絆傭兵団は知り合いなの！？」

「私は、8歳から10歳までの2年間、紅の絆傭兵団に入っていた。シークは混乱しているカロルに説明した。」

「え！うそ！！」

シークの言葉にカロルは凄く驚いていた。

バルボスの後ろにいたユーリはバルボスに話かける。

「アンタが人を使って魔核を盗ませてんのか」

「さあ、しらねえなあ」

バルボスはユーリに持っていた武器で攻撃する。

ユーリは攻撃を避け、みんなのいる所に着地した。

ラゴウがバルボスの後ろに姿を現し、バルボスにユーリたちを始末

するよつに言った。

しかし、騎士団が来る前に逃げたほうがいと判断すると、小舟で逃げて行った。そして、ラゴウは“ザキ”と言うと、姿を現したのは城でユーリとフレンを間違え、ユーリを襲った双剣の男だった。

「誰を・・・殺らせてくれるんだ？」

「あなたはお城で！」

「どうやら縁があるみたいだな」

「また、こいつか・・・」

「え！3人とも知り合いなの！」

「以前、襲われたことがあるんです」

「うわっ！」

ザキはいきなり襲いかかってきた。

寸前のところで攻撃を避けたユーリだが、ユーリが攻撃を避けたことで、大砲に攻撃が当たり、船が炎上してしまい、船が沈んでいく。みんながザキとの戦いに集中している最中、シークはラゴウとバルボスが小舟で逃げて行った方向をチラチラ見ていて、集中できていない。

「シーク！危ない！」

カロールの声がシークの危険を知らせた。

カロールの声を聞き、シークは初めてザキが自分に目掛けて攻撃をしてきたのに気付いた。

攻撃を避けようにもザキとの距離はもう避けることができないまでに短い。

ガキンツ

「ボーツとしてんなよ!」

ユーリがシークとザキとの間に入り、ザキの攻撃を受け止めた。

「・・・ゴメン・・・」

シークは戦いに集中し始める。

しかし、ザキが狙っているのはユーリばかり。

「何で俺ばかり!」

「ユーリ!命を照らす光よ、ここに『ハートレスサークル』」

ユーリはザキと戦い続けて体力が無くなっていく。それを見ていたエステルはユーリを回復させた。

「僕たちもユーリの援護しよう!」

カロルの言葉に全員が頷き、ザキに攻撃していく。

「爆砕ロツク」

「スターストローク」

「『アイヴィーラッシュ』」

「ガウツ」

ラピードの閃空烈破。

「羅刹」

みんなの攻撃が当たり、ザキはひるんだ。その隙をユーリは見逃さない。

「」

ユーリの攻撃が当たり、ザキは倒れた。しかし、すぐに立ち上がる。

ザキはまだ戦おうとしたが、船の上はすでに炎で包まれていて、永くはもたない。

「フレン・シーフォ！お前を殺るのは俺だ！」

「俺はフレンじゃねえ！ユーリだ！」

「ユーリ！ユーリだな！覚えてぞ！ユーリ、お前を殺るのは俺だ！覚えておけ！」

ザキはそれをユーリに言うと、船から飛び降り、海の中へ。

「俺たちも海に飛び込んだほうがいいな」

ユーリが海に飛び込もうとしたその時。

「ゲホツゲホツ！誰か・・・いるんですか！」
その声がした。

ユーリは声がした方へ真っ先に走っていく。

「ユーリ！」

エステルがユーリの方へ行こうとしたが、リタに腕を掴まれ、かなわなかった。

「今は海に飛び込むほうが先よ！」

ユーリ以外の全員が海に飛び込む。

エステルたちが海に飛び込んですぐに船は沈んだ。

「ユーリ！」

「ぶはっ！少し水飲んじまった」

エステルがユーリの名前を呼んですぐにユーリは海の中から出てきた。

誰かを連れて……。

エステルはユーリが連れてきた少年を見て驚いた。

「ヨードル！」

「知り合いなの？」

シークは首に触れた時、例の石が無いことに気づき、顔色を悪くした。

海に潜ろうとした時、ユーリに腕を掴まれた。

「探し物はこれだろ」

ユーリがシークに渡したのはシークが大切にしていた石。
シークは石をユーリから受け取る。

「あ、ありがとう・・・」

シークは少し戸惑いながらもユーリにお礼を言った。

「おーいー！」

その時、フレンの声が聞こえ、声がした方を見ると、帝国の船があり、その船にはフレンが乗っていた。
フレンによって、ユーリたちは船に引き上げられた。そして、カプワ・トリムへ船は進む。

【カプワ・トリム】

カプワ・トリムはカプワ・ノールと違い、活気に溢れていた。
ユーリたちは助けた少年でフレンと向かい合って話をしていった。

「みなさん、ありがとうございました」

少年がユーリたちに頭を下げ、お礼を言った。

「で、こいつ誰なの？」

リタが少年を指差し言った。

それにエステルは言いにくそうにしている。

「宿を確保してきます。詳しい話はそこで・・・」

フレンは少年を連れて行った。

そのさいに少年はシークを見て

「ぜひ、貴女も一緒に」と言った。

フレンたちが去ったあとにユーリたちはしばらく街を見ることにした。その後で、宿に向かう。

第5夜：執政官と紅の絆傭兵団へブラッドアライアンス（後書き）

ようやくおっさんとシークを対面させられました。

おっさんが仲間になるのはまだまだ先ですが、なんかおっさんと対面させられたのに喜びを感じました。早くジュディスとシークを会話させたいですね。

勢いでシークと紅の絆傭兵団とは知り合いという形にしてしまいました。が、14年間の人生は凄く複雑ですね。3年間牢に入っていたり、2年間紅の絆傭兵団に入っていたり……。でも、これでシークの8歳〜14歳までの過去が分かったと思います。

それから、以前感想で「ユーリ落ちにして欲しい」と書かれましたが、みなさんはどうですか？

まだ、友情系にするか恋愛系にするか悩んでいます。うーん、そろそろ決めないとなあ……。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

第5・5夜(前書き)

オリジナルスキットです。

第5・5夜

【次に会ったら・・・】

リタ

「あのおっさん、ムカつく！あたしを利用して！」

シーク

「だから、信用できないと言ったんだ」

リタ

「次会ったら一発殴ってやるわ！」

ユーリ

「リタなら絶対やるな」

シーク

「一発殴るだけでは足りない。ファイアーボールで燃やすのがいい」

カロル

「一発殴った後にリタ、やりそうだね」

リタ

「そんなら、シークのエナジーブラストでもいいんじゃない？」

シーク

「ああ、それもいいな」

リタ

「それともトラクタービームでどう?」

シーク

「グレイブというのもいいぞ」

リタ

「いつそのこと一発殴ったあと、ファイアーボールとエナジーブラストとトラクタービームとグレイブを喰らわせるのはどう?」

シーク

「賛成だ」

エステル

「あの・・・話がとんでもない方に進んでませんか?」

カロール

「進んでるね」

ユーリ

「あのおっさん、次に会ったら死ぬかもな」

【シークの体調不良】

シーク

「・・・」

ユーリ

「お前、本当に大丈夫なのか？本当に顔色が悪いぜ」

シーク

「本当に・・・なんでも・・・ない・・・」

ユーリ

「どうでもいいが、倒れるなよ。倒れても運ぶ余裕はないからな」

シーク

「ラゴウの野郎をぶつつぶすまでは倒れるわけにはいかない・・・」

ユーリ

「確かに、ラゴウのやってることには俺も頭にくるな」

シーク

「それにこの状況を見ていると昔の・・・」

ユーリ

「何か言っただか？」

シーク

「・・・なんでもない・・・」

ユリ
「？」

【ジャツジメント】

カロル
「シークのさっきのあれ、凄かったよね！その分、怖かったけど……」

エステル
「はい！凄かったです！」

カロル
「えーっと、確かじゃつち……」
シーク
「『ジャツジメント』のことか？」

カロル
「それぞれ！」

エステル

「『裁き』という意味ですね」

ユーリ

「あんな凄い術、どこで覚えたんだ？」

シーリ

「昔読んだ本に書かれていた。読んただけで試したことはなかったからな制御が難しかった」

リタ

「その魔術、あのおっさんに喰らわすのはどう？『裁き』でちよっどいいし」

シーク

「その手もあるか・・・」

カロール

「ちよっど待つてよ！制御に失敗したら僕たちまで今度こそ当たるよ！」

シーク

「・・・気合いで避ける」

ユーリ

「あのおっさんの命と同時に俺たちも命が無いかもな」

【入っていたのは？】

カロル

「シークが紅の絆傭兵団に入っていたのにはビックリしたよ」

リタ

「何よ、それってそんなに驚くことなの？」

カロル

「当たり前だよ！五大ギルドに入ってたなんて凄いよ！」

ユーリ

「何で入ってたんだ？」

シーク

「あの頃は生活のよりどころがなかったならな。ギルドにでも入ってなければ死んでいたかもしれない」

カロル

「フーン。でもさ、なんで紅の絆傭兵団なのさ、他にもギルドはいっぱいあるのに」

シーク

「特に手先が器用という訳でもないし、まだ小さかったからどこも簡単に入れなかった。紅の絆傭兵団に入れたのはバルボスの気まぐ

れだ」

ユーリ

「“雇われ屋”ってのをしたの？」

シーク

「紅の絆傭兵団の収入が良かったから真似た」

【ハイタッチ】

エステル

「勝利の合図！」

エステル・カロル

「はいっ！」

カロル

「息ピッタリ！」

シーク

「・・・あれは何だ？」

ユーリ

「あれか。勝利の合図に互いにタッチしてるみたいだぜ。エステル

とカロルがよくやっつてるみたいだな」

リタ

「勝ったぐらいで大げさね」

ユーリ

「リタだってやっつてるだろ」

リタ

「あんだだっつてやっつてるでしょ！」

ユーリ

「せっかくのお誘いを断る訳にはいかないからな」

シーク

「互いに叩き合って何が楽しいのだろうか？」

ユーリ

「そっぴやシークだけやっつてないな」

エステル

「ごめんなさい、シーク。私、次はシークとやります」

カロル

「僕もやるよ！」

リタ

「どっついてもっていつなら付き合っつてやっつてもいいわよ」

ラピード

「ワンッ」

ユーリ

「ラピードもやる気満々だな」

エステル

「酷いですラピード……。私の時はしてくれませんでしたのに……」

ユーリ

「俺も付き合ってたってでもいいぜ」

シーク

「……興味ない」

(シーク去る)

カロール

「シーク、行っちゃったよ」

エステル

「もしかして忘れられてると思って怒ってしまったのでしょうか？」

ユーリ

「本当に興味なかったただけだと思うぞ」

【食事】

カロール

「いったただきまーす！・・・美味しい！」

ユーリ

「エステルも料理が上手くなったな」

エステル

「ありがとうございます」

シーク

「確かに最初に比べれば格段に良くなったが・・・もう少し塩を減らした方がいい」

エステル

「シーク、凄いです！」

リタ

「何が凄いのよ？」

エステル

「実は少し塩を多く入れてしまいました」

カロール

「え？そつなの？」

リタ

「よく分からないわよ」

シーク

「それから」

ユーリ

「まだ何かあるのか？」

シーク

「私の食事の量をもう少し減らしてくれ」

エステル

「それではあまりにも少なくありませんか？」

シーク

「ただ・・・少食なだけだ」

第5・5夜（後書き）

ヴェスペリアの勝利時の決めは“ハイタッチ”がいいですね。

エステルは全員とタッチし、リタとは2種類ありますね。

そして、「私たちの武器は」シリーズでは、ユーリ、カロール、レイヴン、ジュデイスの「無い物ねだり」が好きです。

話題は変わりますが、この小説は“友情あり、愛情あり”にしたいと思います。

女同時、仲間同時の友情も愛もいいですね。

愛情に関してはまだお相手を決めてません。

今はユーリと白髪英雄の二人を考えています。

私は愛の小説を上手く作れるか分かりませんが精一杯頑張ろうと思います。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第6夜：魔狩りの剣と巨大な魔物（前書き）

カプワ・トリムへリオード

第6夜：魔狩りの剣と巨大な魔物

くカプワ・トリムく

ユーリたちはフレンが待つ宿へと足を運ぶ。

シークは乗り気はしなかったが、金髪の少年の言葉を思いだし、仕方なく行くことにした。

フレンが待つ部屋に入るとそこにはラゴウの姿があった。

「こいつー！」

リタがラゴウを見てラゴウに近付こうとしたがユーリが阻止し、それはかなわなかった。シークは鋭くラゴウを睨むが、その場からは一歩も動かない。

「おや？どちら様ですか？」

ラゴウは初めてユーリたちを見るように接してきた。

「船の事故のショックで都合のいい記憶喪失か？いい治療術師、紹介するぜ」

「はて？記憶喪失も何もあなた方とお会いするのはこれが初めてですか？」

どうやらラゴウは何が何でも初対面で通すつもりらしい。
そんな態度をとるラゴウにフレンが話しかける。

「執政官、あなたの罪は明白です。彼らがその一部始終を見ています」「私の名を語った誰かが私を陥れようとしたのでしょう」「

フレンが言っても聞く耳を持たないラゴウ。ラゴウの態度に頭にきたリタはラゴウを怒鳴るがラゴウは聞く耳を持たない。
更にラゴウはフレンに

「どちらを信じるか」と言った。

フレンは口を開かない。

リタは怒鳴るのを辞めない。更にカロールまで文句を言い始めた。

シークは溜め息をつき、前に出てラゴウに頭を下げた。

「疑って申し訳ありません。ラゴウ殿のような高貴な方が罪を作るなどもつての他です。ラゴウ殿を陥れようとした輩はその罪、償いきれるものではありません」

シークの行いに一同は驚きを隠せない。

ラゴウは口元を吊り上げた。

「あちらも私は無罪だと言っておりますな。では私はこれで・・・」

ラゴウは金髪の少年に一礼し部屋を出ていった。

ラゴウが部屋を出て行って、リタとカロールはシークに詰め寄った。

「何であんな奴に頭を下げたのよ！」

「そうだよ！シークは何がしたいのさ！」

「いや、彼女の・・・シークのしたことは正しかったよ」

答えたのはシークではなくフレンドだった。
リタとカロルはフレンドを見る。

「どうということ？」

「君たちはラゴウに言い続け、辞めようとしなかった。立場上はラゴウの方が有利だった。シークがああしていなければ君たちの立場が悪くなるだけだったよ」

「必要があればプライドを捨てるが・・・ラゴウに頭を下げるのは最悪だったな」

シークは機嫌が悪くなった。

「それにしてもあいつ腹立つ！それにこいつは何なのよ！」

「落ち着けて」

リタは金髪の少年を指さしながら言い、ユーリはリタに落ち着くように言った。

「この方は・・・」

フレンドは金髪の少年を紹介しようとしたが途中で口を止め、顎に手をおき考え始めた。

それを見かねたエステルはフレンドに近付きフレンドの変わりに口を開いた。

「この方は次期皇帝陛下候補のヨーデル殿下です」

「またまたエステルは〜」

カロルはそう言いながらエステルに近付いたがそれが真実だと知ると驚きを隠せないでいた。

「あくまで候補の一人ですよ」

「本当なんだ。先代皇帝陛下の甥御にあたられる方だ」

「ほ、ほんとうに？」

「はい」「俺は殿下ともあるうお方が執政官ごときに捕まってた理由が知りたいね」

ユーリの言葉にその場の空気は悪くなる。

「市民には聞かせられない話って訳か・・・」

「あ・・・それは・・・」

「エステルがここまで来たのも関係してんだな」

「・・・」

ユーリの言葉にエステルは何も答えられない。

ユーリは興味がなさそうに

「まあ、好きにすればいいさ」と言った。

「目の前で困ってる連中をほっておく帝国のごだごだに興味はないからな」

「ユーリ・・・。そうやって背を向けて何か変わったか？人々が安定した生活を送るには帝国の正しい法が必要だ」

「けど、その法が、今はラゴウを許してるんだろ！」

「だから、それを变えるために僕たちは騎士になった。下から吼えているだけでは何も変わらないから・・・。手柄を立て、信頼を勝ち取り内部から帝国を訂正する。そうだったろ、ユーリ」

「・・・」

「ユーリ・・・」

ユーリはフレンに背を向けたまま押し黙る。

「・・・だから出世のために目の前でガキが魔物の餌になるのを黙って見てろってか！！下町の連中が厳しい取り立てにあってるのを

黙って見過ごすのかよ!!!・・・それができないから俺は騎士団を辞めたんだ」「知ってるよ。でも、辞めて何か変わったのか?」

「・・・」

「騎士団に入る前と何か変わったのか?」

ユーリはフレンの言葉に居ても立ってもいらなくなり、エステルたちを残して部屋を出ていった。残された者たちは黙り込み、沈黙が続いたがその沈黙をシークが破る。

「私はユーリに賛成だな」

「何故、そう思っんだい?」

フレンはシークの方を向いて聞いた。

フレンはシークに視線を合わせようとしますが、シークはフレンと視線を合わせないように顔を下に向いた。

「私は騎士を信用していない」

「フレンは信用できる人です!」

エステルがシークの言葉を否定する。

するとシークはエステルを鋭く睨んだ。

シークの目付きにエステルは恐怖を感じ、一步後退した。

「エステリーゼがこの騎士をどう思ったところで私は騎士を信用しない!私が助けを求めても何もしなかつたくせに!」

「君が騎士団に助けを求めた?どうということだ?」

シークはハツとした。

「・・・所詮、騎士も薄汚い貴族や 帝国と同じ・・・ということ

だ……。そんなことより私が用があるのはヨーデル殿下だ」

シークはヨーデルを見た。
ヨーデルもシークを見る。

「お前、先程私に来るように言ったな。私に用があるのか？」

「はい。是非、貴女とお話をしたいと思ひまして」

「話？手短に用件を言え」

「まず、私は貴女が3年前の“30人殺し”というのを知っていました」

シークは“30人殺し”という言葉に気を悪くした。

「確かに私はやった」

フレンはシークの言葉に冷静だった。

「やはり、君が……」

「私を捕らえるか？騎士」

「今はヨーデル殿下をお守りすることが先だ」

フレンとの会話が一段落ついたところでヨーデルは話を続ける。

「一目見て思いました。貴女は人殺しをするような人には見えません。貴女は優しい目をしています」「私が……優しい……？」

「はい。その首にかけてある石を見ている時は優しい目をしていません。何故人殺しを？」

シークはヨーデルを鋭く睨み付けた。

そして口を開く。

「私は優しくない！私は！私には・・・人を憎むことばかりで、優しいくない！」

シークはそう言い返すと勢いよく部屋を出ていった。

シークが部屋を出て、部屋近くにユーリがいた。
ユーリは壁に手を押し付けていた。

「まったく、痛いところつきやがって・・・。何も変わってないのは俺にだって分かってる」

「ユーリ・・・」

「シークか・・・。みっともねえところ、見せちまったな」

「別に・・・。誰にだったそういうところはある・・・ユーリ？」

ユーリは宿の入口の方に歩きだした。それをシークは止め、どこに行くのか聞いた。

ユーリは足を止め、答えた。

「魔核の情報集めに行くんだよ」

「私もついていっていいか？ここに、いたくないんだ」

シークもユーリについて行くことにした。

「ご両人、久しぶりじゃないの」

魔核の情報を集めにカプワ・トリムの町を歩いていると、レイヴンと遭遇した。

レイヴンは何事も無かったかのようにユーリとシークに接してくる。

「挨拶の前に行うことあるだろ」

「挨拶の前に行うこと？うん・・・」

「思い出させてやろうか？仕返しもかねて・・・」

シークはレイヴンにそう言い、気を集中し始め、魔術を使おうとする。

「こ、こここここれはちょっと酷くない？」

レイヴンはシークが自分に魔術を使おうとするのに気付くと顔を真っ青にする。

しかし、シークは途中で辞める。

「辞めだ・・・今は気が進まない・・・」

「うひゝ助かった」

レイヴンは安心した。ユーリは話を戻し、再びレイヴンに
「先に行きがあるだろ」と言った。
しかし、レイヴンはまた
「うん」と言いつて首を傾げる。

「ま、騙した方より騙された方が忘れないみたいだからな」
「俺様つて誤解されやすいのよね」
「無意識で人に迷惑をかける病氣、医者に治してもらったら？」
「そつちもその口の悪さ治してもらったら？」
「口の減らない……。あんまふらふらしてつとまた騎士団にとつ
捕まるぞ」

「騎士団も俺相手にしてるほど暇じゃないつて。さつき物騒なギルドの
一団が北西に向かったのを見かけたしね。騎士団はああいうの
ほつとかないつしょ」

「物騒、か……。紅の絆傭兵団か？」

「さあ？どうかな？」

「そもそもおつさん、あんな屋敷に何しに行ったんだよ」

「ま、ちよつとしたお仕事よ。^{アパライア}“聖核”つてやつを捜しにね」

「聖核！？」

今まで二人の会話に加わらず、横で黙つて聞いていたシークだが、
“聖核”という単語に驚き、思わず声をあげた。

そのシークの反応にユーリは首を傾げ、レイヴンは驚いていた。

「お嬢さん、聖核を知ってるの？」

「あ、いや……。その……。わ、私の知り合いと同じ名前だったか
ら……。少し驚いて……。その……」

明らかにシークは不自然な対応だった。

「聖核って何だ？」

ユーリはシークの反応に気にはしていたが特にとがめず、レイヴンに聖核の存在を聞いた。

レイヴンもシークの反応に気にはしていたがとがめずにいた。

「魔核の凄い版、らしい。あそこにあるって話だけど見込み違いだったみたい」

「聖核ね……。シークは聖核について知ってるみたいだが、言う気はないみたいだな」

しばらく話をしていると宿からエステル、カロル、リタが出てきた。リタはレイヴンを見つけると恐い顔をして真っ直ぐとユーリたちの所へ走って来る。

「逃げた方がいいのかね、これ」

「一人好戦的なのがいるからな」

「次に合ったら魔術を一発使うからな」

「お嬢さん、怖いこと言うね」

レイヴンが走って姿を消したのと入れ替わり、エステルたちがやって来た。しかし、リタだけは足を止めずレイヴンを追って行く。

「はあ……。はあ……。何で逃がしちゃうんだよ。シークなんてあのおっさん、殺る気満々だったじゃんか」

「誤解されやすいタイプらしいぜ。シークは気乗りしないらしいぜ、今は」

「え？どういうこと？」

「逃がしたわ。いつか捕まえやる」

リタが戻って来た。

どうやらレイヴンは捕まえられなかったらしい。

「やめとけ。あんなおっさん、まともな相手にするだけ疲れるぞ。それより行くぞ」

「行くって……どこへ行くの？」

「紅の絆傭兵団を追う。魔核、返してもらわねえと」

「足取りは掴めたんです？」

「北西に怪しいギルドの一団が行ったらしいぜ」

シークはユーリのエステルに対する答えを聞き、ユーリを睨む。

「あんなおっさんの情報を信じるのか……」

「他に足取りがないんだ仕方ないだろ」

「一度騙されている。私は信用できない」

「帝都の時の抜け道はあのおっさんの情報だけ。もし紅の絆傭兵団だったらどうするんだ？」

「……行くだけなら……」

シークはユーリの説得に納得し、溜め息をつき乗り気もしなかったが一応ついて行くことにした。

「北西っていうと……あるのは地震で滅んだ町ぐらいだけどなあ」

「そんじゃ、そこに行くか」

一行は北西にあるという地震で滅んだ町を目指した。

【亡き都市カルボ・クラム】

北西には滅んだ都市があった。
建物が崩れ、木々が生い茂っていた。

「これは完全に廃墟だな」

「こんな所に誰が来るっていつのよ!」

「またいい加減な情報、掴まされたな」

「だからあのおっさんの言うことは信用できないと言っただ」
「そこで止まれ!」

突然だった。

亡き都市カルボ・クラムを見回していると、何処からか少女の声が
聞こえた。

声の持ち主は崩れた建物の上にはいた少女だった。

「当地区は我々“魔狩りの剣”により現在、完全封鎖中にある。こ
れは無力な部外者に危険を伴わないための措置だ」

「ナン!」

少女が言い終わると同時にカロルが表情を喜びに変え、少女の名前
を読んだ。

少女・・・ナンはカロルの存在に気付くとカロルを睨んだ。

「僕がいなくて寂しくなかった? ティゾンや首領^{ボス}は?」

「逃げ出した奴に用はないわ」

ナンの言葉にムツと不機嫌顔になるカロル。

「逃げ出してないよ。ハルルの花だって蘇らせたし」

「嘘ばかり。あんたはいつもそう。すぐに逃げ出して・・・」

「ワー！ワー！」

「せっかく私が魔狩りの剣に誘ってあげたのに・・・。あんた、もうクビよ。お前たちもさっさと立ち去ることだ！」

ナンはそう冷たく言うと、滅んだ町の中に入って行った。ナンに言われたことですっかり落ち込むカロル。

カロルが落ち込んでいる間、ユーリたちは話し合いをする。

「しかし、何で魔狩りの剣とやらがここにいいのかね」

「獲物があるんでしょ。魔物を狩るギルドみたいだし」「こんな所にか？」

「もう崩壊してるし、魔物が住み着いてもおかしくないでしょ」

リタの言う通りだった。

周りを見渡すと魔物の姿がちらほら見える。おそらく奥に行くともっといるだろう。

リタが滅んだ町の中に足を踏み入れる。

それに気付いたエステルがリタを止める。

「待ってください。忠告されましたよ」

「入っちゃダメとは言ってないでしょ」

「そうだな。紅の絆傭兵団がいるかもしれねえし」

リタに続き、ユーリ、ラピード、落ち込んでいたカロル、エステルが町の中に入っていく。

そんな中、シークだけは足を進めなかった。

「お前たちは行くのか？」

「はい。シークは行かないんですか？」

「私に行かない。紅の絆傭兵団がいる気がしないからこの先にあるヘリオードで待っている。明日まではいると思うが、明日まで待つても来なければ私は一人で行く」

シークとの別行動に了承したユーリたち。

エステルは残念そうにしていた。

シークはみんなと別れ、ユーリたちは中を進んで行く。

中をどんどん進む。扉のパスワードを解除し、扉の中に入る。

「水が浮いてる」

「あの魔導器の仕業みたいだな」

「この異常も多分・・・」

天井にあるのは魔導器。

あの魔導器から異常な量のエアルが放出されていると思われる。そのせいで、みんなは辛そうだ。

「あの魔導器、エフミドの丘やカプワ・ノールの子に似てる・・・」

その時、魔物の声が大きく響いた。その声に反応し、下を見ると結界の中に入っている魔物がいた。その魔物は今までの魔物と比べ物にならないくらいに大きい。一同はその魔物に驚いていた。

「あれ・・・魔物ですか・・・？」

「結界が破られるぞ！」

「大丈夫よ。あれは逆結界だから」

リタが言うには逆結界とは魔物を閉じ込めておく為の強力な結界らしく、そう簡単に破られることはないらしい。

そして、リタはこのエアルの量は異常だと言う。

「見てください！結界が！」

エステルが結界を見るように言い、結界を見ると今にも結界が破られそうだった。

それを見かねたリタが結界の所へ走っていく。

「リタ！」

「待っててね・・・。すぐに直してあげるから・・・。」

リタが行くと同時にラピードが何処かに向かって吠える。

ラピードが吠えた先には先程、ユーリたちに忠告をしたナンと知らない男が二人いた。

リタもそいつらに気付くと足を止める。

「俺たちの優しい忠告を無視する奴はどこのだいつだ？」

「忠告を素直に聞くほど優しい奴は俺たちのなかにはいなくてね」「なるほどな・・・ってクビになったカロル君もいるじゃねえか」

カロルは言われて表情を暗くをする。

その時、聞き覚えのある鳴き声が響く。

天井の水が流れている所から竜使いが姿を表し、逆結界の魔導器を破壊した。

逆結界が破壊されたことにより、魔物が外に出た。そして、エアルが濃かったが薄くなり楽になる。

「け、結界壊れたよ！」

「結界張ってた魔導器が壊れたんだから当たり前でしょ、バカ！またあのバカドラは！」

リタは竜使いがまた魔導器を破壊したことに腹を立てている。竜使いは魔物を倒そうとする魔狩りの剣の前に立ちばばかる。最初にナンが竜使いに向かって武器を投げる。

カキン

しかし、ナンの投げた武器は竜使いに届く前に何者かに邪魔をされた。

ユーリとエステル、そして魔狩りの剣のナン以外はその人物を見て驚いた。

「あの人は・・・！」

「あのフードに仮面！忘れる筈がねえ！カプワ・ノールでエステルとフレンに剣を向けた奴だ！」

ユーリの言う通り、その人物はフードを着て仮面を付けた、カプワ・ノールで会った人物だった。

大剣を持った魔狩りの剣の大男は剣を抜き、仮面の人物を睨み付けて言った。

「久しぶりだな！また邪魔をしに来たか・・・ガーネット」

「首領、師匠、お知り合いですか？」

「あいつは俺たちの魔物狩りを邪魔する奴だ。名は『ガーネット』」
ナンが尋ねると師匠と呼ばれた顔が見えずらい方の男が答えた。

ガーネットと呼ばれた仮面の人物は仮面に手をかけ、声が聞こえるように・・・しかし、顔は見せないように仮面をずらした。

「魔狩りの剣がここにいるという情報を得たから来てやった」「何だと・・・」

「魔狩りの剣に挨拶に来ただけ、だ！」

仮面の人物が言い終わるか終わらないか、その時にナンが師匠と呼ぶ男が攻撃して来た。

ナンも続いて攻撃して来る。

「あいつ・・・！」

「ガウツ！」

ラピードが吠えたことでユーリは仮面の人物から結界の中にいた魔物に目を向けた。

みんなはその魔物の威圧感に恐怖さえも感じている。

「・・・足、震えてやがる・・・」

「こんな魔物、初めてです」そんな恐怖さえも感じる魔物相手にユーリは武器を手にする。

そして、魔物に攻撃をする。

「蒼破刃！」

「ガウツ！」

ラピードも魔物に攻撃をする。

「サンキュ、ラピード」

「私もお手伝いします」

「たくつ、見てらんないわね」

エステルとリタも途中参加する。

「シャープネス」

エステルの補助で攻撃力が上がったユーリとラピードは魔物に攻撃を仕掛ける。

「円旋牙」

「ガウツ！」

ラピードの紅蓮剣もユーリの円旋牙も当たるが魔物にはビクともしない。

しかも魔物はユーリとラピードに攻撃を仕掛け、魔物の攻撃は見事に命中。

「ハートレスサークル」

エステルがすかさず回復させる。

今度はリタが魔物に魔法攻撃をする。

「スパイラルフレア」

魔法は魔物に命中するがあまりダメージがない。

「スタースト」

エステルが剣で魔物を攻撃しようとしたが、途中で手を止めた。不思議に思ったユーリとリタはエステルを見た。

「どうしたのよ？」

「あの魔物、様子がおかしくありませんか？」

「確かに敵意がないな。なんかこっち見てねえか？」

ユーリの言う通り魔物に敵意はなく、ユーリたちを見ている。

しばらくして魔物はユーリたちに背を向けると帰って行く。

それを遠くから見ていた仮面の人物は魔狩りの剣の首領に話かける。

「・・・じきにここは崩れる。そしてお前たちの目的の魔物も帰った。今日のところは互いに引かないか？」

「いいだろう。だが次に会ったときはそのふざけた仮面を剥ぎ取ってやる」

仮面の人物は姿を消した。竜使いはそれらの様子を上空から見ていた。

「あれ？カロルは？」

リタはカロルがいないことに気付くと、周りを見渡す。

そして、竜使いの姿が目に入ると竜使いに魔法で攻撃をしようとするが、竜使いは去って行った。

竜使いが去った後で天井が崩れ始めた。

危険を察知した魔狩りの剣はその場から撤退した。竜使いはそれらの様子を上空から見ていた。

「あれ？カロールは？」

リタはカロールがいないことに気付くと、周りを見渡す。

そして、竜使いの姿が目に入ると竜使いに魔法で攻撃をしようとするが、竜使いは去って行った。

竜使いが去った後で天井が崩れ始めた。

危険を察知した魔狩りの剣はその場から撤退した。竜使いはそれらの様子を上空から見ていた。

「あれ？カロールは？」

リタはカロールがいないことに気付くと、周りを見渡す。

そして、竜使いの姿が目に入ると竜使いに魔法で攻撃をしようとするが、竜使いは去って行った。

竜使いが去った後で天井が崩れ始めた。

危険を察知した魔狩りの剣はその場から撤退した。ユーリたちも撤退しようとするが、エステルが止めた。

「待つてください。カロールは？」

「外にいるだろ。戻りながら捜すぞ」

「そうね。瓦礫の下敷きになるのは勘弁よ」

ユーリたちも脱出をした。

外に出るとカロールとナンがいて、カロールがナンに一方的に何かを言われていた。

「あんたはいつつもそう！すぐに逃げ出して！」

「うっ・・・みんな」

カロールはユーリたちの存在に気付き、ユーリたちの方を見る。

「カロール、無事で良かったです！」「まったくよ。どこ行ってたんだか、こっちは大変だったのに」

「ごめんなさい・・・」

「ま、無事で良かったな」

ユーリはそう言い、カロールの頭をポンポン撫でる。

「仲間が来たみたいね。じゃあね」

ナンはカロールにそう言うと、走って去って行った。

「でも、とんだ大ハズレね。紅の絆傭兵団なんていなかったじゃない」
「い」

「まったくだな。次にあのおっさんに会ったら注意しないとな」

そんな会話をしながらユーリたちは来た道に戻って行った。
入り口の所に誰かがいる。それは騎士団だった。

騎士は全員で3人いる。

その中で隊長と思われる真ん中の人物が話かけてきた。

「ようやく見つけたよ愚民共」

「キュモールか。わざわざ海まで渡ってきて、暇な下っ端共だな」
「くっ、君に下っ端呼ばわりされる筋合いはないね」
キュモールはユーリにそう言つと、ユーリたちの方に歩み寄る。
そして、あることに気付いた。

「おや？報告ではもう一人愚民がいるはずだけど何処に隠したんだい？」

「さあな。あいつとはここに来たときに別れたからな。今どこにいるのか俺には見当がつかねえな」

「まあいいよ。さ、姫様こ・ち・ら・へ」

「姫様つて誰？」

カロルはキュモールの言葉をいまいち理解出来ていなかった。

「姫様は姫様だろ。目の前にいる」

ユーリはそう言つとエステルを見た。

「ええ！エステルつてお姫様だったの！」

「ユ、ユーリ、どうしてそれを？」

「やっぱりね。そうじゃないかと思つてたわよ」

「リタまで・・・」

カロルが驚くなか、ユーリとリタはエステルが姫だというのを分かっていたようだ。

エステルはユーリたちの前に出てキュモールと向き合った。

「彼らをどうするつもりですか？」

「もちろん、姫様誘拐の罪で八つ裂きにするよ」

「待つてください。私は誘拐されたのではなく・・・」「あゝ、うるさい姫様だね！さっさとこちらに来てくださいよっ！そっこのハエは死んじゃえ！」

男の両脇に控えていた騎士が剣を出し、キュモールも剣を出す。その時、新たな騎士が3人現れる。

「ルブラン！それにデコ、ボコ！」

「デコでないのである！」

「ボコではないのだ！」

ユーリは3人を見て、名前を言った。

しかし、そのうち2人は同時に『違う』と否定した。その3人はハルルの町を離れるさいに出会った騎士だった。

「お前たちはシュバーン隊。何しに来た！こいつらは僕が見つけた獲物だ！」

「獲物、ですか。任務を狩り気分で行われては困りますな。それに

先程、“死ね”と聞こえましたが・・・」

「そうだよ。犯罪者には死を与えるのさ」

「犯罪者は法のもとで裁くべきでは？」

剣を持っていたキュモールは剣を仕舞い、ユーリたちに背を向けた。

「フン、そんな小物お前たちにくれてやる。シュバーンといい、フレンといい、愚民のくせに」

キュモールは帰って行き、シュバーン隊と名乗る騎士はユーリたちを取り囲んだ。

「さぞ、姫様はこちらへ」

姫であるエステルだけは丁重に扱われ、残りは犯罪者扱いだった。

「ちょっと、私を誰だと思って・・・！放せー！」

「僕だつて何もしてないのに」

「彼らに乱暴しないでください」

「エステル、心配しなくてもいい」

「ユーリ・・・」

騎士はユーリ、リタ、カロールを捕らえる。

「むっ、報告ではもう一人いるはずだが」

「ユーリ・ローウエル、いったいどこに隠したである！」

「素直に言うのだ！」

「どうやって隠すんだよ」

「とりあえず今はこいつらを連行するぞ。シュバーン隊長、ヘリオードに連行いたします」

ルブランの先にはユーリたちに背を向けている男がいて、ルブランの声に軽く手を挙げる。

そして、ユーリたちはヘリオードに無理矢理連れて行かれてしまった。

ヘリオードに連れて来られたユーリたちはエステルを除いて一室で取り調べを受けていた。

「次、罪状第18番確認するぞ」
「どうぞ」

ユーリはルブランの言うことにきとうに返答した。
カロールとリタも飽き飽きしている。
ラピードは近くでくつろいでいる様子だ。

「滞納された税の徴収に来た騎士を川に落とした。間違いないな？」
「そんなこともあったな。それ、デコだっけ？」
「そうである！おかげで風邪をひいて3日間寝込んだのである！」

ユーリもいい加減飽きてきていた。
その時、扉が開き男女一人づつ部屋に入ってきた。
ルブランたちはその人物を見て驚き、慌てて姿勢を正した。

「ア、アレクセイ騎士団長閣下！どうしてこちらに！？」
アレクセイという騎士の姿にはユーリも驚いていた。

「エステリーゼ様、ヨーデル様、両殿下のお計らい君の罪は免除された」
「な、なんですとお！こいつは帝都の平和を乱す大罪人ですぞ！」
「ヨーデル様の救出、及びエステリーゼ様の護衛、騎士団として礼を言う」

「別に騎士団のためにやったんじゃないやねえよ」
ユーリの返答にアレクセイは
「そうか」と言った。

「それよりエステルだが・・・」
「帝都に戻られる。姫様なら宿でお休みになられてる」

アレクセイはそう言うと言性と一緒に部屋を出ていった。

ルブランたちは納得いかない様子だったがユーリたちを釈放した。

ユーリたちは外へ出る。

「エステル、帰っちゃうんだね」

「アンタ、これでいいの？」

「エステルが決めることだろ」

「それもそうね」

「そういえばシークってこの街にいるはずだよな」

「ま、宿にでもいるだろ。エステルも宿にいるみたいだし宿を集合場所にして自由行動にするか」

みんなが頷いた。

ラピードも含めそれぞれ自由に行動する。

ユーリは街の中を一人で歩いていた。

「騎士団に捕まるとは間抜けだな」

「シーク、連行されてるとこ見てたのか」

シークが姿を現し、ユーリに話かけた。
ユーリは歩む足を止める。

「紅の絆傭兵団はいたか？」「いなかった。また、おっさんに騙されたな」

「だからあのおっさんの言うことは信用出来ない。ユーリは何をしている？」

「てきとうにぶらついてるぞ」

「ユーリ・ローウェル！」

ユーリは背後から名前を呼ばれ、振り向くとデコとボコがそこにいた。

「誰だ？」

「デコとボコだ」

「違うのである！」

「違うのだ！」

また同時に『違う』と否定した。

「私は『アデコール』である！」

「『ボツコス』なのだ！」

騎士はそれぞれアデコールとボツコスと名乗る。

「別にデコ、ボコでいいだろ」

「よくないのである！」

「よくないのだ！」

二人はまた見事にハモって言った。

「アハハハハ！」

突然シークが口を開けて笑いだした。ユーリはそんなシークをポカ
ンと見ていた。

「シーク？」

シークは笑い声をやめてもまだ顔は笑ったままだった。

「こんなにおもしろい騎士は初めてだな」

「（シークもこんなふうに楽しそうに笑うのか・・・）」

「ユーリ、お前は随分と騎士団に好かれているな」

「こいつらが勝手に追っているだけだつて」

「好きで追っているのではないのである！」

「そいつが悪さばかりするから追っているのだ！」

シークはやっと笑った表情からいつもの表情に戻るとユーリに

「宿の前で待つ」と言って去って行った。

シークが去った後でアデコールはボツコスに話しかけた。

「今の少女、見たことあるのである」

「うむ。思い出せないのだ」

二人の会話を聞いてユーリは

「（指名手配犯だからだろ）」

と思ったが口には出さないことにした。

その後、ユーリはアデコールとボツコスから“バーストアーツ”と
いうものを教えてもらった。

シークは宿の近くには行かずに人のいない建物の裏にいた。
そして、おもいつきり壁を叩く。

ダンッ

そして、唇を噛み締めた。

「騎士にあんな顔をするなんて……！相手は騎士だ。私を見捨てた騎士だ。いい奴はいない……！」

シークは先程、ユーリと騎士の会話を思いだし、その時の自分の表情を思い出した。

「……不思議だ……」

「何が不思議なんだ？」

「……！」

突然の背後からの声にシークは驚き振り向いた。

シークの背後にはいつの間にかユーリがいた。

「ユーリ！どうしてここに？」

「宿に行く途中で壁を叩く音がしたんで行ったらお前がいたんだよ。それにしても……」

ユーリはシークをジッと見た。

見られているシークはいい気がしなかった。

「なんだ？」

「シークでも取り乱すことがあるのかと思ってな」

「人間だから取り乱すことくらいある。お前は取り乱さないのか？」

「さあな。それより何が不思議なんだ？」

「先程の騎士だ。私は騎士は嫌いだが、あの騎士は嫌な感じがしなかった。更に私は騎士に笑顔を見せた。なぜあんな行動をとったのか不思議だ」

「シークが楽しかったからだろ」

「楽し、かった？」

「つまらないなら笑ったりしなれと思うぜ」

「楽しかった・・・か・・・」

シークは人通りのある方へ歩きだした。

「どこ行くんだ？」

「宿だよ。ユーリは行かないのか？」

「悩み事はもういいのか？」

「解決した。楽しかったから笑う、当たり前のことだったな」

ユーリとシークは一緒に宿に向かった。

宿にはエステルその他にすでにカロルとリタ、ラピードがいた。どうやらユーリを待っていたらしい。

「シーク！」

エステルとカロルがシークの存在に気付くとシークに近付いた。

「カルボクラムはどうだった？」

「最悪だったわよ！魔狩りの剣は現れるわ、魔導器はバカドラに壊されるわ、魔物に攻撃されるわで、いい加減にしろって感じよ！」

リタがシークに言い、腹を立てた。
イマイチ理解できないシークは状況を詳しく聞いた。

「成る程な・・・」

「それにさ、エステルはお姫様なんだよ！」

カロールがシークにエステルの正体について言った。

「そうか」

「あれ？あんまし驚かないね」

「他人がなんだろうが興味ない」

「シークは何してたんだ？」

ユーリがシークに聞いた。

「紅の絆傭兵団の情報を聞き出していたが・・・やはりギルドならばダングレストに行くべきだな」「ダングレスト？」

「ギルドの街だよ」

ユーリの疑問に答えたのはシークではなくカロールだった。
その答えにユーリは納得した様子だった。

「とりあえず今日はもう休みたいわ」
「そうだな」

リタが『休みたい』と言ったので、ユーリたちも賛成し、今日は宿で休息をとることにした。

夜。

ユーリとラピードが部屋で眠っていると外が騒がしいのに気がき、目を覚ました。

その時、激しく部屋の扉が開いた。

扉を開けたのはシークだった。

「ユーリ！」

「何だ？」

「外に出ろ！魔導器が、結界魔導器が暴走している！」

「！？」

驚いたユーリは立ち上がり部屋を出て外に出た。

もちろんラピードも一緒だ。

外にはすでに騎士団がいて、魔導器の暴走を止めようとしていた。だが、なかなか近付けない様子だ。

騎士団の中には騎士団長のアレクセイの姿もあった。

「このままだと街が吹っ飛ぶかもしれない」

「どうしりゃいいんだよ！」

「魔導器を止めればいいだけの話だろう。魔導器には触れたこともある」

シークはユーリにそう言い、魔導器に近付こうとした………
が、ユーリは突然シークの腕を掴んだ。

「何をする！放せ！」

「あ、悪い……」

ユーリはシークに言われ、手を放す。

シークが魔導器に近付こうとしたとき、いつの間にかいたリタが魔導器の方に歩いていく。

「待っててね。今、治してあげるから」

リタは魔導器にそう語りかけ、魔導器に近づいていく。

「リタ！危険です！」

いつの間にかエステルも現場にいた。

その近くにはカロールもいる。

魔導器に触れることが出来たリタは色々と操作を行い、魔導器の暴走を止めた。

魔導器の暴走が止まるとリタはその場に倒れた。

「リタ！」

エステルが真つ先にリタに近付いた。
シークとカロールもリタに近付き、シークがリタを宿まで運んで行った。

カロールはユーリがその場に立って、ぼーっとしているのに気付き、ユーリに話しかけた。

「どうしたのさ、ユーリ」

「悪い、何でもない」

カロールは『ふぐん』と言って宿の方に歩いて行った。

カロールが行ったあともユーリはしばらくその場に立ち尽くしていた。そして自分の手を見た。

「（何でシークの腕を掴んだ？）・・・悩んでも仕方ねえな。リタの様子でも見てみるか」

ユーリは宿に行き、リタの部屋に向かった。

部屋にはリタの他にエステルもいて、治療術をリタにかけていた。

「治療術も無限に使えるわけじゃない。リタも落ち着いているしそのへんにしとけ」

「・・・はい」

エステルは治療術はやめたが、視線はリタに向けたままだった。

「たく、無茶するぜ」

「そうですね。一度決めたら意地でもやりますから」

「他人事じゃない、エステルもだろっ」

「すみません・・・」「今日はもう休め。あとは俺が見てるから」

ユーリが休むように言ったがエステルは首を横に振り、リタを見ている。

「どうやら代わる気はないようだ。」

「ユーリが休んでください」

「倒れられでもしてフレンに怒られたくないんだけどな」

「怒られてください」

「倒れたら言えよ。代わってやるから」

「倒れては言えません」

ユーリは溜め息をつき、部屋を出ようとしたときエステルが口を開き声を出した。

「私、リタが羨ましいです。大切なものがあるから……」

「なら、これから見つければいい」

ユーリはそうエステルに言って部屋を出た。廊下の突き当たりを曲がり、部屋に戻ろうとしたら、突き当たりを曲がってすぐの所にカロールが座っていた。

カロールはユーリに気付くとユーリを見て話しかけた。

「どうしようもない奴だっと思ってたよね。初めて会った時もカールボクラムの時もさっきだって……」

「今日のはさすがにビビったよな。騎士団長もあれにはお手上げだったぜ。大の大人だって出来ないこともあるさ」

「世の中簡単じゃないってことだね」

「そういつことだ」

カロールは立ち上がりユーリと向かい合う。

そしてユーリに話しかけた。

「ねえ、ユーリ」

「ん？」

「僕とギルド作んない？」

「ギルドか・・・そういう手もあったな。分かった、考えとくよ」
「ええっ！」

ユーリの返答に驚くカロル。

「何だよ？」

「ユーリのことだから『厄介事はごめんだ』とか言うと思った」「大人にも色々あるんだよ。いいから今日は休んどけ」

「うん・・・。あ、ユーリ」

ユーリがカロルに背を向け、歩きだそうとした時、カロルがユーリを呼び止めた。

ユーリはカロルを振り返る。

「ギルドにはシークも誘おうね」

「何で？」

「ほら、シークって元・紅の絆傭兵団だから頼りになるんじゃないかなって思うんだ」

「カロルの好きにすればいいさ」

「分かった・・・あ、それから」

「今度は何だ？」

「ユーリとシーク、何で手、繋いでたの？」

カロルの質問にユーリは驚く。

「カロール、よく魔導器の暴走中に見たな」

「だって偶然見たんだもん。それで何で？」

「大人にも色々あるんだよ」

ユーリは手をてきとつに振って、部屋の方に向かって行った。

部屋の前にはシークがいた。

シークはユーリに気付くとユーリに近付いた。

「ユーリ、一つ聞きたい」

「何だよ？」

「何故あの時、私の腕を掴んだ？」

「さあな、俺自身も分かんねえよ。危なかったから腕を掴んで止めたのかもな」

シークはそれを聞くとユーリに背を向けた。そして、背を向けたままユーリに言う。

「私の心配は無用だ。だが、ありがとう」

シークはそう言うとユーリの前から姿を消した。

ユーリは部屋に入り、そのまま休んだ。

第6夜：魔狩りの剣と巨大な魔物（後書き）

久しぶりの投稿です。

テストのため、しばらく休ませていただきました。何のお知らせもなく申し訳ありません。

さて、第6夜では魔狩りの剣がようやく出ました。カロールとナンを書けてとても嬉しいです。

そして、キュモールも初めてです。

本編を知っている人はユーリはこの話以前にキュモールとは面識があります。あまり書きたくないキャラクターだったなあ。

それから、魔導器の暴走のシーンでユーリがシークの腕を掴むという行動を見せましたが、ユーリ寄りの恋愛を書くならこれぐらいはしないと駄目だろうと思い、書きました。

それからシークは初めて声を出して笑いました。シークは笑えないのではなく、笑わないだけです。これからどう彼女の心を開いていくのが悩みどころです。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第6・5夜（前書き）

第6夜のオリジナルスキットです。

第6・5夜

【機嫌が悪い】

ユーリ

「エステルたちはどうした？」

シーク

「まだ中にいる。話があるのだろう」

ユーリ

「お前は残らないのか？」

シーク

「残りたくない」

ユーリ

「何でだよ」

シーク

「残りたくないものは残りたくない！しつこいぞ！」

（シーク去る）

ユーリ

「シークの奴、機嫌悪いな……。一体なにをしたんだ？」

【女の子ならば・・・】

カロル

「意外だよな。シークがあのおっさん、逃がすなんて」

シーク

「そうか・・・」

カロル

「この前、リタと一緒にどうするか話してたのに」

ユーリ

「シークは意外と優しいってことだな」

シーク

「また、その話が・・・」

ユーリ

「何か言ったか？」

シーク

「いや、何も……。今回は逃がしたが次はないぞ。とりあえず
発殴っておく」

リタ

「私も手伝うわよ」

エステル

「女の子なんですから暴力はダメです！」

シーク

「では……。女はおしとやかにするものなのか？」

エステル

「そうですよ」

ユーリ

「リタとシークがおしとやかか？」

カロル

「想像できないね」

リタ

「とっつー！」

カロル

「ぶぎゃー！」

【女について（女性編その1）】

シーク

「エステリーゼ、リタ、女らしいとはどうすればいい？」

リタ

「何よ突然」

エステル

「どうしたんですか？」

シーク

「エステリーゼが『女の子だからおしとやかにすべきだ』と言った。だから“女らしい”とはどうすればいいか聞きたい」

リタ

「くだらない質問だけど、料理が上手ければいいんじゃないの？」

カロール

「その点でいうとリタ、女の子として失格だよね」

リタ

「あなたは女同士の会話に入ってくんな！」

「ふぎゃー！ごめんなさい！」

(カロール去る)

シーク

「料理が上手か……。エステリーゼはどうなんだ？」

エステル

「そうですね……。可愛い服を着たりすればいいと思います」

シーク

「可愛い服を！？……。女らしくとは複雑で難しくな……」

(シーク去る)

リタ

「なんだったのよ？」

エステル

「きっとシークも女の子らしくしたかったんですよ」

リタ

「違うと思うけど……」

【コンボ！シークとカロール】

カロール

「やったあ！僕たちの余裕勝ちだね！」

シーク

「余裕と言っている本人が一番ダメージが大きいかな」

カロール

「は、ハンデをあげたんだよ。僕が本気を出せばダメージなんて受
けずに終わるんだから」

シーク

「そうか・・・」

カロール

「でもさ、シークも凄いや。剣と魔術の使い分けが上手いよね」

シーク

「そうか？」

カロル

「そうだよ。両方を究める人ってあんまりいないしさ、シークは凄く役立ってるよ」

シーク

「両方を究めるということは半端者ということなんだがな・・・そう言われて悪い気はしないな」

カロル

「次の戦闘でさ、僕とシークが力を合わせてみれば楽に戦えるよ」

シーク

「油断は出来ないが・・・やってみる価値はあるな」

カロル

「次はやるつよ!」

シーク

「了承した」

カロル

「やったあ!」

【仮面の人物】

リタ

「全く何なのよ！結界はバカドラに壊されるし、魔物は出てくるし、変な奴らは出てくるし！もう最悪よ！」

ユーリ

「確かにさっきの戦闘はキツかったな」

エステル

「カロルもシークもいませんでしたから」

カロル

「ごめん・・・」

エステル

「でも、カロルが無事で良かったです」

カロル

「そういえば、ユーリとエステル、あの仮面をつけた人、知ってるみたいだったけど知り合いなの？」

ユーリ

「まあな」

エステル

「あの人はカプワ・ノールでお会いしました」

カロル

「どういう関係なの？」

ユーリ

「エステルとフレンに剣を向けた」

カロル

「え！！それって殺しに来たんじゃ・・・」

ユーリ

「多分な」

カロル

「もっと慌てなよ！エステル、命狙われてるかもしれないんだよ！」

ユーリ

「こういつときだからこそ冷静にするべきなんだぞ」

カロル

「ユーリは命狙われてないから冷静でいられるんだよ」

リタ

「私としてはあのバカドラさえなんとかしてくれれば問題ないわ」

ユーリ

「とりあえずここに長居は無用だな。早く行くぞ」

ラピード

「ワンッ」

【“楽しい”と“憎悪”】

シーク

「騎士は憎い……」

シーク

「だが、先程の騎士は“憎悪”を感じなかった」

シーク

「“楽しい”という感情は“憎悪”を消すのか？」

シーク

「分からなくなってきた……。ユーリたちと共にいれば答えは見つかるのか？」

シーク

「何故、こんなことで悩む……？……あの方に会いたい……」

【魔導器の暴走】

エステル

「リタ、昨日みたいな危険なことはやめてください」

リタ

「あの子、苦しそうだったわ。それを黙って見てるなんて私には出来ないわよ」

シーク

「リタがいてくれて助かった。私が行ったところであの魔導器を止められるかどうか分からなかった」

リタ

「何？あなた、魔導器の中身知ってんの？」

シーク

「少し触れた程度だ。細かには知らない。どうやらあの魔導器は複雑だったみたいだな」

リタ

「まったく！誰よ、あの子たちをあんなふうにしたのは！見つけたらただじゃおかないわよ！」

エステル

「私もリタのお手伝いしたいのですが、城に帰らなければなりませんから残念です」

シーク

「・・・城にいる方が安全だからな。お前たちの話だと仮面の奴はエステリーゼを狙っているかもしれないからな」

エステル

「そうですね・・・」

【シークの笑顔】

エステル

「シークって笑いませんよね」

カロル

「そっぴえばそっだね。結構永くいるのに笑ったところ見たことないね。微笑んだところは見たけど」

リタ

「どっちも同じようなもんでしょ」

エステル

「私、シークが笑ったところ見てみたいですよ」

ユーリ

「俺、昨日見たぞ」

エステル・カロル

「え!!!!」

カロル

「本当に!？」

ユーリ

「本当だ」

エステル

「どうでしたか？シーク、可愛かったですか？」

ユーリ

「（普段よりも可愛かったが・・・こいつらに言う必要もないか）
さあな」

カロル

「僕も見たいよ〜!」

エステル

「私も見たいです」

リタ

「私はどうでもいいけど」

エステル

「私、シークにお願いしに行きます」

カロル

「僕も」

シーク

「その要望は拒否する」

エステル・カロル
「シーク!!!」

リタ

「あんだ、いつからそこにいたのよ」

シーク

「エステリーゼが私の笑顔を見たいと言っていたあたりからだ」

カロル

「それってほとんど最初からいたようなもんじゃ……」

エステル

「何で笑顔を見せてくれないんですか？」

シーク

「楽しいときに笑う、みたいだからな」

エステル

「私、シークの笑顔を見れずに城に帰らなければならぬんですね・
・・」

ユーリ

「シークは脱獄中だろ。いずれは城に戻るんだ。牢の中で会えばいいだろ」

エステル

「そうですね……。シーク、牢の中に戻るのを待っています」

カロル

「エステル、シークに牢の中に入って欲しいみたいだね」

第6・5夜（後書き）

ついにテイルズオブハーツが発売しましたね。皆さんは買いましたか？

皆さんにお知らせします。

しばらくはハーツをやるため、小説の更新が遅れるかもしれませんが、小説は少しずつ書いていきます。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第7夜：ギルドの街（前書き）

ヘリオード } ケープ・モック大森林

第7夜：ギルドの街

「……はあ、寝坊をしてしまった。他の皆は起きているんだろうな……」

シークが部屋を出て、ユーリたちを捜しに行こうとしたとき、ある一室が騒がしいのに気付いた。その部屋はリタが休んでいた部屋だった。

『キュアアアアア』

人間とは異なる声が聞こえた。

その声はリタが休んでいる部屋だった。

シークは驚き、激しく部屋の扉を開けた。

部屋には竜と竜使いがいて竜を睨み付けながらリタを守っているエステル、竜の攻撃を剣で防いでいるユーリの姿があった。

「これは一体……！」

「シーク、加勢頼む！」

「分かった」

シークはユーリに言われて剣を抜き、竜を攻撃しようとした時、竜は炎をシークに向けて放った。シークが竜の炎を避けても次々に炎を放ってくるため、シークは竜に近付くことが出来ずにいた。

「すごい音がしたけどどうしたの　　ってギャーッ……！」

カロルが部屋に入って来て竜と竜使いを見て大声をだした。

竜はカロルの声に驚いたのか飛び去ってしまった。

「な、な、なに！？なんだったの!？」

「私にも理解出来ないな・・・」

シークとカロルが状況を飲み込めていないなか、ユーリとリタが普通に話していた。

「大事な話の途中だったのに・・・」

「エステルの治療術の話はここまでだな」「ま、私はだいたい理解したけど」

「んじゃ、エステルをフレンの所に連れて行くか」

「ちよつと、勝手に話を進めないでよ!」

ユーリとリタがカロルを無視し、勝手に話を進めていったのでカロルは文句を言いながら先に部屋を出たリタのあとを追った。

カロルが出ていって次にエステルが部屋を出る。

ユーリも部屋を出ようとした時、シークが何かを考えているのに気が付き、シークに声をかけた。

「シーク」

「治療術・・・それにあの竜・・・まさかエステリーゼは本当に・・・」

「おい、シーク」

「!・・・ユーリ、どうした?」

「みんな、もう外に行ったぞ」

「あ、ああ。分かった」

「エステルがどうかしたのか?」

「いや、なんでもない」

シークはユーリにそう言い返すと部屋を出た。
ユーリもシークのあとをすぐに追う。

「帝都までの道中、気を付けてな」

「はい……」

宿屋の前でユーリがエステルにそう言った。

「忘れ物とかないか？途中で思い出して迷惑かけんなよ」「忘れてらユーリが届けてください」

「馬鹿なことやってねえで行くぞ。フレンの所までは送ってやるから」

「あの……、ユーリたちはこのあとどうするんですか？」

「そうだな、紅の絆傭兵団の足取りが途絶えちまったし……」「ダングレストに行ってみてはどうだ」

今まで二人の会話を横から見ていたシークが言った。

「そついや、ギルドの街だったな。そこに行くか。道は分かるか？」

「私よりカロールの方が詳しいと思うが……」

シークの言葉にユーリはカロールに視線を向けた。

「あ、うん。西に行けばダングレストに着くけど……」

カロルはダングレストへの道のりを言ったがダングレストへ行くのは乗り気ではないらしい。

「それじゃ行くか。ギルド作るにも色々参考になるしな」

「え？ギルドのために？それじゃ行こう！」

カロルはユーリが『ギルドを作る』と言うと、ダングレスト行きを賛成したようだ。

「ギルドを作るのか・・・」

「うん。あ、そうだ。シークもギルドに入らない？」

「私が・・・？私は紅の絆傭兵団に失望し、ギルドの信用を失っているぞ。たとえ、仮に入ったとしてもギルドより個人の仕事を優先するぞ」「で、入るのか？入らねえのか？」

ユーリの言葉を聞き、シークは溜め息をついた。

そして、ユーリとは逆の方向に顔を向け、口を動かした。

「もし、私を信用させることが出来たら名前だけでもギルドに入つてやらないこともない」

シークはそれだけ言うと、何処かに行こうとする。

そんなシークをエステルが呼び止めた。

「何処に行くんですか？」

「騎士がいるところに行くんだらう。私はなるべく騎士とは対面したくない」

「そういえば、シークはまだ指名手配されてたな」

シークが去ろうとした時、エステルがシークの手を掴んだ。

「何のつもりだ？」

「フレンは悪い人ではありません。話せば分かってくれるはずですよ」

シークはエステルの腕を振りほどき、エステルを睨んで言った。

「30人も人を殺めておいて事情を話したところで言い訳にしか聞こえないだろう！」

「それでも、話さないよりはいいと思います！」

エステルの眼はシークを強い意志で見ている。

シークはその眼にたえられないのかエステルから視線をそらす。

「話したところで・・・何も変わらない・・・。信じられない・・・」

シークは突然走りだし、街中に姿を消した。

「待つてください！」

「待てよ、エステル」

「ユーリ？ですがシークが・・・」

「シークが心配なのは分かるが、エステルはフレンの所に行けよ。」

シークはラピードに追わせる

「ワンッ！」

ラピードは返事をする。シークの匂いを追ひ、街中を走り出した。

「シークのこと俺たちに任せろって。途中まで送ってやる」

「はい・・・」

エステルはシークを気にしつつも返事をした。
ユーリたちはエステルを連れてフレンが待つ所へと向かった。

シークは人の少なく、日の当たらない建物の裏の方に座っていた。

『フレンは信用できる人です』

「無理だ。信じられない……」

『フレンは悪い人ではありません。話せば分かってくれるはずです』

「分かってくれない、くれるはずがない」

シークはエステルが過去にシークに言った言葉を思い出し、それに小さく呟っていた。

「……に会いたい……」

「誰に会いたいですか？」

「!?!」

突然背後から声がしてシークが背後を振り向くとユーリとラピードがそこにいた。

「ユーリ・・・ラピード・・・。用事は済んだのか？ならば行くか・・・」

シークは立ち上がり、日の当たる所へ足を進める。

「シーク、ちょっと待て」

「何だ？」

ユーリに呼び止められ、足を止めユーリがいる方を向いた。

「お前の事情は知らねえけど、エステルには一言謝れよ。あの態度は良くないぞ」

シークはユーリの言葉に無言だった。

顔を下に向け、しばらくその状態だった。

そして顔を上げ、口を開いた。

「・・・他の奴はどこだ？」

「あいつらなら・・・」

「シーク！」

名前を呼ばれ、シークが呼ばれた方に振り向くと、そこにはエステルがいてシークの方に走ってきていた。

その後ろにはカロールとリタがいる。

エステルがシークの所まで走ってきた時にはエステルは息を切らし

ていた。

「はあ、はあ……。シーク、心配しましたよ。突然走り出して行くんですから」

「……エステリーゼ、騎士団と帰ったのではなかったのか？」

「それは……」

「リタが騎士団からケーブ・モック大森林を調べるように依頼されたんだよ」

「それとエステリーゼがどう関係している？」

「リタってば、エステルと一緒にいたくてさ。エステルはリタと一緒に行くために来て来るんだよ」

カロルがシークとユーリの会話に横入りし、シークの質問に答えた。リタはカロルに近付き、カロルの頭を叩いた。

「いたっ！」

「余計なこと言うんじゃないわよ！」

「んで、俺はエステルの護衛」

騒ぐカロルとリタの二人を無視し、ユーリは話を進めた。

「なるほどな。ダングレストには行くのか？」

「はい。ケーブ・モック大森林に行くまえにダングレストに行きますよ」

「そうか。なら早く行くぞ」

「シーク」

シークが歩こうとしたら、エステルがシークを呼び止めた。

シークはエステルの方を振り向く。

「もうしばらくよろしくお願いします」

エステルは笑顔になり、丁寧にお辞儀をした。

「……」

しかし、シークはエステルを見ているだけで無言だった。そして再び歩きだす……が、シークは再び足を止めた。

「エステリーゼ」

「はい」

「さっきは睨み付けたりして悪かったな」

「シーク……」

「だが、私は騎士団を信用できない」

シークはエステルにそれだけ言うと、再び歩きだした。

「待ってください、シーク」

エステルもすぐにシークを追った。

「素直じゃないわね」

「それ、リタが言うんだ　　いたっ！」

リタはカロルの頭を叩いた。

「皆さん！早く行きましょうー！」

エステルが声を出し、ユーリたちを呼んだ。

「んじゃ、俺たちも行くか」

【ギルドの巣窟ダングレスト】

「にぎやかなとこだな」

ダングレストについたユーリは街を見渡して言った。

「帝都に次いで第2の都市だしギルドを統治する街だからね」

「もつとじめじめした悪党のいる巣窟だと思った」

「それってギルドに対して偏見だよね」

ユーリの言葉にカロルはムツとした。

実際、ユーリは下町の魔核を取られているため、ギルドの印象は悪いだろう。

「きっと紅の絆傭兵団の印象が悪いからですよ」

「僕まで悪党なのかと思ったよ」

「あんたが悪党ならこいつはなんなのよ」

リタはそう言いながらユーリを指差した。

「それもそうだ。さて、バルボスの野郎にはどこから手をつけりゃいいのか・・・」

「ユニオンに顔を出すのが一番早くて確実だと思うよ」

「ユニオンとはギルド束ねられている集合組織で、5大ギルドよって運営されている”ですよね”」うん。それにこの街の自治もユニオンが取り仕切ってるんだ」

「でもいいわけ？紅の絆傭兵団だって5大ギルドでしょ」

「てことはバルボスになにかあったらユニオンを敵にまわすな」

「それはドンに聞いてみないと・・・」そのドンってのがユニオンの親玉なんだな？」

「そうだ」

ユーリの問いに答えたのは今まで会話に参加せず横でずっと会話を聞いていたシークだった。

「ドン・ホワイトホース。天を射る矢の頭領であり、ユニオンを仕切る者」アルトスク「んじゃ、そのドンに会うか。カロール、案内頼む」

「ちよつと、簡単に言うけどドンに簡単に会えるわけないよ。僕だってあんまり会ったことないし・・・。シークなら紅の絆傭兵団に入ってたしドンによく会ってたんじゃないの？」

カロールはドンに会うのは難しいと言うが、シークならば会えたのではないかと思い、シークを見た。

しかし、カロールの期待をよそにシークは首を横に振った。

「紅の絆傭兵団に入っていたとはいえ、私は下っ端だぞ。バルボスならばよく会っていたかもしれないが・・・」「とりあえずドンがいるユニオンに行ってみるか。カロール、どっちだ？」

「ユニオンの本部は街の北側にあるよ」

とりあえずユニオンに行くことにし、カロールにユニオンまでの案内をしてもらうことにした。

街の中心部まで来るとカロールは突然キョロキョロし始めた。

「あんだ、さつきから何見てんの？」

「な、なになんて、べつに……」

怪しく思ったりタガカロールに言うと、カロールは目を開いて動揺しながら答えた。

あきらかにおかしい。

「おやく？誰かと思えばカロールじゃねえか。どの面さげて来たんだ？」

カロールを見掛けた男二人がカロールに近付き声をかけた。

口調からカロールを馬鹿にしているようだ。

「ナンがないじゃねえか。ついに見放されたか」

「ち、違うよ！あんまりしつこいから僕のほうから逃げて来たんだ」

！」

カロルは一生懸命弁解をするが言い訳にしか聞こえなかった。そんなカロルを見てユーリは

「これがあるから最初ダングレスト行きを嫌がったんだな」と小さく呟いた。

「お前達がこいつを拾ったギルドか？」

カロルを馬鹿にしている男の一人がユーリたちを見て話しかけてきた。

「こいつはやめといたほうがいいぜ。自慢できるのは所属したギルドの数だけだし。あ、それ所属になんねえか」

男二人は再びカロルを馬鹿にし、笑う。

カロルは言い返せず黙り、下を向いた。手は強く握りしめている。

「カロルの友達か？相手は選んだほうがいいぞ」「な、なんだと！」

ユーリの言葉に男は顔を引きつらせた。

続けてエステルが男を指差し言う。

「あなた方の品位を疑います」

「あんたら言うわね。ま、私も同感だけど」

エステルに続けてリタも言う。

そして、シークも参加した。

「相手を馬鹿にするとは、お前達、器が小さいな」

「言わせておけば　　！」

男二人はシークの顔を見ると顔を真っ青にした。そしておそろおそろシークを指差し言った。

「お、お前、その赤と銀色の瞳に黒い漆黒の髪・・・まさか、“赤銀の修羅”!？」

「マジかよ！帰って来たのかよ！くそっ！」

男二人はシークをそう言っさつさつと行ってしまった。

男二人が行ったあと、カロールがシークを見て驚いていた。

ユーリ、エステル、リタには驚く意味が分かっていないようだ。

「シーク!“赤銀の修羅”だったの!？」

「周りはその呼ぶ奴もいたな」

「ちよつと、二人で勝手に話を進めるんじゃないわよ」

「“赤銀の修羅”ってなんです？」

リタはシークとカロールの会話に割って入り、エステルが質問をした。その質問に答えたのはカロールだった。

「ギルドの中だと有名ならしいよ。前にナンに聞いたんだけど、5年くらい前にダングレストに魔物の群れが来たんだ。その時たまたま結界魔導器が壊れてて、ギルドのみんなが魔物を退治しようとダングレストで待ってたんだけど魔物がなかなか来なくて様子を見に行つたんだ。そしたら魔物の群れが一人の人間に退治されてたんだ。その様子を見てたひとは『まるで修羅のようだ』って言ってたから“赤銀の修羅”って呼んだんだ」「説明が長いが、とにかくさつきの様子だとシークが“赤銀の修羅”なんだな」

「まあ、そう呼ぶ奴もいた」

説明が長すぎて理解出来ているのか分からないが、ユーリはそう言う
うと、その言葉にシークは頷き言った。

「修羅は分かったが赤銀つてのは・・・」

「瞳の色が赤と銀だかららしい」

「やっぱりそうか」

カンカンカン

突然、街中に鐘の音が激しく鳴り響いた。

「なに、この音・・・」

周りを見るとギルドの人間と思われる者は全員武器を持って街の入口へ向かって行った。

「魔物がここに来ている・・・。この鐘はそれを知らせる音だ」

シークはそう言うと、剣を手に入口へ向かって走る。

ユーリたちも行くこうとするとカロルは

「大丈夫」と口にした。

「この街の結界は頑丈でちょっとやさつとで壊れな」

カロルが

「壊れない」と言おうとした時、街の結界が突然壊れた。

「あれ？ええ！？」

「何で結界が壊れるのよ！」

リタとカロルが結界が壊れたことで焦り、エステルは目を見開いて空を見上げていた。

「たくつ、行く場所行く場所厄介事起こりやがって」
「なんか憑いてるかもよ、あんた」
「かもな」

ユーリとリタの会話が終わると全員は街の入口へ走って行く。

街の入口にはすでに魔物がいて、ギルドの人間は魔物と戦い、一般市民を守っていた。

ユーリたちも応戦する。エステルはケガをした者の治療をする。

「イラプション」

「雷撃ウェーブ」

「ガウツ」

「蒼破追蓮」

ラピードも紅蓮剣を使い、それぞれ技を出し、魔物を退治していく。

「あー、もう！しつこいわね！てゆーかシークはどこに行ったのよ！この忙しい時に！」

「シークならあそこにいるぜ」

リタが愚痴を言いながらシークを出し、文句を言っていた。リタがシークを探しているみたいだったのでユーリはシークがいる方向に視線を向けた。

ユーリの視線の先にはシークがいて、魔物を退治していた。シークは剣を魔物ごと上に上げ、シークより先に地についた魔物を雷と一緒に上から斬りつけた。

「襲爪雷斬」

魔物を倒したら別の魔物に目を配り、ナイフを投げた。

「水結晶」

ナイフに当たった魔物は氷づけになり身動きがとれなくなった。魔物が動けなくなった隙にシークは呪文を唱える。

「『刹那の輝きに時を見よ』福音」

数量の光の十字架が魔物を襲う。

シークは休む暇も与えず、再び呪文を唱える。

「『大気の刃よ 切り刻め』タービュランス」

それを戦いながら見ていたユーリたちは感心していた。

「すげーな」

「やっぱり“赤銀の修羅”の話、本当だったんだ」

シークやユーリたちがどんなに魔物をなぎはらっても魔物は次から次へと増えていく。

「くそっ！間に合わねえ！」

街の人達が魔物に襲われそうになった。

その時、一つの影が魔物を退治し、街の人達を助けた。

その人物は見た目は老いているが、老いているとは思えない動きで魔物を蹴散らす。

「くそ野郎共！いくらでも来い！この老いぼれが胸、貸してやる！」
「とんでもねえじーさんだな」

ユーリが老人を見てそえ呟いているなか、カロルはとても興奮していた。

「ドンだ！ドン・ホワイトホースだ！」

「あれがドンねえ……」

ユーリはドンを珍しい物を見るような目で見た。

「ようやく来たか……」

シークはドンを見て呟く。

「ドンだ！ドンが来たぞ！」

「俺たちの街を守るんだ！」

ギルドの人間はドンを見るなり気迫を増した。その時、騎士団が現れた。

騎士たちの先頭に立っている人物、フレンはドンに対して叫んだ。

「魔物の討伐に協力させていただく！」

「騎士の坊主はそこで生まれ！帝国の力は借りねえ！」

「今はそんなことを言っている場合では！」
「隊長！横に魔物が！」

騎士の一人がフレンの横に魔物が迫っているのを知らせた。
フレンは剣で魔物を斬ろうとした時、

「『炸裂する力よ』 エナジーブラスト」

フレンが剣で斬る前に誰かが魔術で魔物を倒した。

「ドンが今言ったばかりだ。帝国の力は借りない、と」
「君は、シーク。今のは君が？」

声が出たほうを見ると、シークが立っていた。
どうやら先程、魔物を魔術で倒したのはシークらしい。

「どいつもこいつも、てめえの意思で帝国を抜けてギルドを作ったんだ！いまさら危ねえからって帝国の力を借りるような恥知らずはいねえ！」
「しかし！」「そいつがてめえで決めた“ルール”だ！てめえが守らなくて誰が守る！」

ドンの言葉に納得させられたのかフレンは剣を納める。

「自分で言ったことは芯を曲げない。あれが本物の“ギルド”か・・・」

ドンを見てユーリはそう呟いた。

「ちよつと、そのアンタ！案内しなさいよ」

「僕？それに案内って・・・？」

「バカ！魔導器を治すのよ！」

リタはカロールに魔導器の所まで案内しろという。
どうやら結界魔導器を治すらしい。

ユーリ、エステル、ラピードもリタと共に行ってしまった。
ユーリたちが去った後、シークは魔物を斬り捨てながらドンの傍へ
移動した。

ドンはシークに話かけた。

「おめえか」

「久しぶりだな、ドン」

「おめえが紅の絆傭兵団を抜けて以来か？」

「ああ。ドン、お前に話がある」

「話？なんだ？」

「これを片した後、謁見はできるか？」

「わりいがこいつら片した後は行くところがある」

「そうか　　どうやら結界魔導器が治ったようだな」

空を見上げれば、結界がダングレストの街を覆っていた。
魔物はダングレストに入ることが出来ず、帰って行く。
ダングレスト内にいる魔物は数えるほどだった。

「じゃあな。残ったモンは頼むぜ」

ドンはシークにそう言い残すと行ってしまった。

シークはドンが去った後、魔物に目を向け、ため息をついた。

「人使いの荒い老人だ」

シークが魔物を倒し終わるとちょうどユーリたちが来た。
エステルは真つ先にシークに近付き、シークの心配をした。

「シーク、無事だったんですね・・・シーク怪我をしています。治療
しますか？」

「ほっときなさいよ、エステル。どうせ『必要ない』とか言っ
て自分で治すに決まってる」

「ならば頼む」

「はい」

「え？」

リタの考えとは逆にシークは素直にエステルの好意を受け、自分の
怪我を治療させた。

それにはリタだけではなく、カロルもユーリも驚いていた。

「これからどうする？ドンの所へ行くのか？」

エステルの治療を終えたシークが意見を述べた。
ユーリは首を横に振り、シークの意見を否定した。

「ドンのところにはさっき行ったがドンは留守中だ」
「（やはりか）」

シークは口に出さずにそう心の中で言った。

「手詰まりみたいだし、私はケーブ・モックの調査に行ってくる」
リタが突然、言った。

「そんな、勝手に」

「面倒な仕事は早く終わらせたいの」

「リタが行くということは私も行かないといけませんね」

「二人だけで行く気か？」

「二人でも大丈夫です」

「ケガでもされたら俺がフレンに殺されるから辞めてくれ」

「どうやらユーリも行くらしい。」

「カロールも・・・成り行き上、行くみたいだ。」

「シークはどうしますか？」

全員がシークに注目した。

「聞いてもいいか？」

「何だ？」

「何故、ケーブ・モックを調査するんだ？」

「騎士が言うにはケーブ・モックの魔物とは植物に異常があるみたいよ」

「そうか・・・暇だしな。私もいいか？」

「結局全員行くことになるんだね」

カロールが小さく呟いた。

そして、みんな進路をケーブ・モック大森林へ向けた。

【ケーブ・モック大森林】

「世の中にはこんなに大きな木があるんですね」

森の中に入ったエステルは木々を見て素直に感想を述べた。

「ここまででかいと逆に不健康って感じがするな」

ユーリも木々を見て率直に感想を言う。

リタは周りをキョロキョロと見ていた。

「やっぱりヘリオードで魔導器が暴走した感じになんとか似ている」

「気を付けて。誰かいるよ」

リタが考え込むと同時にカロルが言った。
皆は身構えた。

「そこだ！」

シークは茂みの方にナイフを投げた。

ナイフが当たった気配はない。

そして、茂みから姿を現したのは

「よっ！偶然！」

茂みから姿を現したのはレイヴンだった。

「こんなとこで何してんだよ？」

ユーリがそうレイヴンに質問するとレイヴンは手を顎につけ、答える。

「自然観察と森林浴ってところかな」

「うさん臭い……」

レイヴンの答えにカロルは呟く。

カロルの呟きが聞こえたのかシークは頷いた。

「ところでさっきナイフ投げたの誰？当たったら俺様、死んじゃうわよ」

レイヴンの手にはシークが先ほど投げたナイフがあった。

シークはレイヴンに近付き、ナイフをレイヴンから強引に取った。

「ナイフに一本当たったくらいで死ぬような体ではないだろう」

「俺様、こっに見えて結構弱いよ。優しくしてちょうだい」

「つてか、あんた歓迎されてると思ってるの?」「そんなこと言わずにさ、俺様、結構役に立つわよ」

「役に立つって・・・まさかついてくる気?」

カロールがおそろおそろ尋ねるようにレイヴンに言った。

レイヴンは笑いながら答える。

「いいじゃない。一人じゃ寂しいしさ」カロールはユーリの方に顔を向け、ユーリに言った。

「どうする?ついてくる気満々だよ」

「ほっておいても勝手についてくるだろ。それに近くに置いたうが監視もできるしな」

「そうね。何かしたらぶっ飛ばせるし」

皆は監視下に置くなら同行してもいいようだ。

「私は納得出来ないな。ソイツは私に危害を加えた。ここで始末した方が安全だ」

だが、シークだけは納得がいかないようだ。

「だから監視下に置くんじゃねーか。俺たちだって信用してねーんだから」

「それでも・・・」

シークは顎を手に置き、考え込んだ。

そして、レイヴンを睨むように見て言った。

「私を納得させられるようなモノを見せろ」

「それは俺も賛成だ。何か納得できる芸でも見せてくれ」「大道芸かなんかと勘違いしてない？」

レイヴンはそう言い、うーんと声を唸らせた。だけどすぐにスタスタと歩いていく。

「ちよいちよい、こっち来て」

「え？ボ、ボク？」

カロルは周りを見渡し、自分に指を差した。

カロルをつれ、レイヴンは森の奥へ行ってしまう。だけどすぐにレイヴンだけが戻って来た。

「ん？カロルはどうした、おっさん」

ユーリがレイヴンを見て聞いた瞬間、カロルの悲鳴が聞こえてきた。

「ちょっと一人にしないでよ！わあああ！」

カロルがたくさん魔物をつれて戻って来た。

「ほれ、ガンバレ少年」

カロルは武器を手にし、魔物と向き合う。

するとレイヴンが弓で魔物を射る。

だが、魔物は倒れたりせず、レイヴンもそれだけだった。

「もういやあー！」

何度か攻防戦が続き、ユーリたちが助けに来てくれないと分かったカロルは逃げようと反対を向いた。

「もうそろそろかね？」

レイヴンがそう呟いた瞬間、魔物が爆発した。それには全員が驚き、目を丸くした。

「中から爆発した!？」

「何をしたんです!？」

「防御がゆるんだ瞬間に矢を打ち込んで中からボンッ」

質問をしてきたエステルにレイヴンは答えた。

シークはレイヴンをじーっと見つめている。

それに気付いたレイヴンはシークを見て言った。

「もしかして俺様に惚れちゃったりしちゃったりして？」

「そんなわけないだろう」

レイヴンの言葉にシークは冷静に答えた。

「戦力としては申し分ないな。近くにおいたほうが何かしたときすぐに殺れるし・・・好きにしる。認めた訳ではないからな」

シークはそう冷たく言うときさつさと森の奥の方へ行ってしまった。

「シーク、一人では危険です!」

エステルもそう言い、シークを追うため走って行った。

「ちょっと」

「待ってよ!」

リタとカロルも森の奥へ入って行く。

「さっきの女の子、“殺る”って言ったよね」
「ま、何もしなきゃ生きてるだろ」

そんな会話をしながらユーリとラピード、レイヴンも森の奥へ入って行く。

森の奥へ行くと、濃いエアルが充満していた。

そのエアルを見てリタは、

「やっぱりヘリオードの時と似ている」
と呟いた。

「エアルが濃いけど間違いないわ」

リタが考える仕草をした瞬間、地面が揺れた。

そして、上から通常の魔物より倍はある魔物が降ってきた。

「ダングレストを襲ったのと魔物と様子が似ています！」

襲ってくる魔物を目の前にエステルはそう叫んだ。

「たくっ！どいつもこいつも・・・邪魔をするなあ！」

シークは剣を抜き、襲いかかって来る魔物を斬ろうとしたが、魔物はシークを攻撃してきたので、シークは防御をとった。

「ブラッティハウリング」

「レイスティング」

「崩襲ブレーク」

「ガウツ」

エステル、リタ、カロール、ラピードが応戦する。

「おっさん、サボんな、よ！」

「もう少し、優しくして欲しいね。時雨」

レイヴンは文句を言いながらも弓で魔物を射る。

「プリズムソード」

シークの魔術で魔物が怯んだ隙をユーリは見逃さず、魔物に突っ込んで行った。

「峻円華斬」

ユーリの技が見事に当たり、魔物は倒れた。魔物は動く気配がない。

「木も、魔物も、みんなあのエアルのせいだ！」

リタは突然そう叫び、エアルに近付こうとしたその時。

「ウソッ！」

今度は四方から先ほどの魔物と同じ魔物が現れ、ユーリたちを囲ん

だ。

「ああ、ここで死んじまうのか。さよなら、世界中の俺様のファン……」

レイヴンが空を仰ぎながらそう呟いた。

「『世界一の軽薄男、ここに眠る』って墓立ててやるぜ」

「そんなこと言わずにさ、『一緒に生きようぜ』とか言えないの？」

「お前達は随分と余裕だな。そんな余裕があるならこの状況をどうにかする作戦でも考える。」

背中合わせでユーリとレイヴンがそんな会話をしているとシークが二人に言った。

魔物が近付くとユーリ達が後ろに下がるが、互いの背中が触れ合う。

「……私は……ここで……死ぬ、のか？」

シークは誰にも聞こえぬように呟いた。

シークは顔を下に向けた。

「あの方にまだお会いしてもいない……。……をしていない……。それは、嫌だ！」

最後の『嫌だ』だけは大声で言ったため、周りの人にも聞こえた。

シークが顔を上げた時、先ほどとは違う眼をし、魔物を睨んだ。

そして剣を手に魔物に襲いかかるうとしたその時、上から白い長髪の男が現れた。

男の手には剣があり、男の下には術式がある。

そして、光を放つ。

みんなは眩しさに目をふさいだ。

光が収まり、目を開けるとエアルも魔物も消えていて、白い長髪の男が一人立っていた。

「誰……？」

「デューク……」

エステルが頭にクエスチョンを浮かべて言い、レイヴンが小さく咳いた。

シークは目を丸くして男を見て誰にも聞こえぬように呟いた、

「デューク、様……」

と。

第7夜：ギルドの街（後書き）

久しぶりの投稿です。長い間、投稿出来ずすみませんでした。

皆さんはテイルズオブハーツをやりましたか？

ハーツをやって私は男キャラ（シング、ヒスイ、クンツァイト）がお気に入りです。戦闘メンバーもその3人が多いかも・・・。

さて、1月29日はレディアントマイソロジー2の発売日です。

皆さんは買う予定はありますか？

私はもちろん買います！

それでは、ここまで読んでいただきありがとうございますございました。

第7・5夜（前書き）

第7夜のスキットです。

第7・5夜

【エステルとシーク】

シーク

「エステリーゼは帝都には帰らないんだな」

エステル

「はい」

シーク

「騎士団の連中は困るのではないか？」

エステル

「そうですね。私、騎士団を困らせているかもしれないね。でも、皆さんと再び旅ができて嬉しいです」

シーク

「（城の中の方が安全なのに……。何故、自ら危険を選ぶ……。）

」

エステル

「シーク？何か言いました？」

シーク

「何でもない……。騎士に謝れよ」

エステル
「はい」

【お仕事内容】

カロル

「シークってさ、紅の絆傭兵団にいたころどんな仕事してたの？」

シーク

「・・・色々」

カロル

「色々って……」

ユーリ

「隠されると気になってくるな」

シーク

「隠してる訳ではない。本当に色々やった」

カロル

「例えばどんなのやったの？」

シーク

「そうだな……、酒場にいる酔っぱらいを大人しくさせたり、街の道端にいる酔っぱらいを大人しくさせたり、他人の家で暴れている酔っぱらいを大人しくさせたり……」

ユーリ

「なんか酔っぱらいの相手ばっかだな」

シーク

「あとは酔っぱらい同士の喧嘩を止めたり……」

カロル

「もういいよ」

【仲良し】

シーク

「魔神剣！

しまった！」

ラピード

「ガウツ！」

シーク

「ラピード、助かった！」

ラピード

「ワフ」

シーク

「術の詠唱をする！ラピード、援護頼む！」

ラピード

「ワンッ」

ユーリ

「あの二人、仲いいな」

カロル

「本当だよな。連携、とれとるよ」

リタ

「どうして犬と連携がとれるのよ」

ユーリ

「一緒にいて長いしな」

リタ

「長く一緒にいてもあんなふうには出来ないわよ」

ユーリ

「一緒にいれば分かるさ」

エステル

「シークがうらやましいです」

カロル

「エステル、どうしたのさ？」

ユーリ

「なに、羨ましそうにシークを見てんだ？」

エステル

「私もシークと同じくらいラピドと一緒にいるのだからラピド、私に全然なついてくれないんですよ」

シーク

「よくやったぞ、ラピード」

ラピード

「ワフ」

エステル

「ああ！ラピードの頭まで撫でてます！私には撫でさせてくれないのに・・・」

カロル

「なんかエステルのテンションがどんどん下がってくね」

ユーリ

「そうだな。エステルが落ち込む前にあの二人呼んでさっさと行くうぜ」

エステル

「私もラピードの頭、なでなでしたいです」

【赤銀の修羅】

カロル

「シークが赤銀の修羅だったなんてビックリだよね」

シーク

「驚くことはないだろう」

カロル

「驚くよ！普通」

ユーリ

「そっぴやカロルを馬鹿にしたあの二人、シークが赤銀の修羅だと分かったらすぐに逃げてったな」

シーク

「ただの肩書きでそんなに脅える必要はないだろう」

カロル

「脅える人だけじゃなくてさ、赤銀の修羅を自分のギルドに入れようとした人もいたみたいだよ」

シーク

「ただの肩書きだと思ってたが、結構、効果があるな」

ユーリ

「シークが赤銀の修羅だって名乗り出ればドンにも簡単に会えるんじゃないかねえか？」

シーク

「無駄だ。ドンは肩書き程度に恐れはしない」

ユーリ

「あのじいさん、魔物相手に一步も引かなかったしな」

シーク

「ドンに会いたければ取り次ぐしかないな」

【女性としての自覚】

レイヴン

「とゆうわけでよろしく!」

リタ

「何が』とゆうわけ』よ!こっちは歓迎してないわよ
レイヴン

「……リタっち、いくつ?」

リタ

「15、だけど?ってゆうか変な呼び方しないでよ!

レイヴン

「15でこの大きさかあ。嬢ちゃんはいくつ?」

エステル

「私は18です」

レイヴン

「なるほどねえ。シークちゃんは?」

シーク

「信用出来ない相手に個人情報と言つつもりはない」

カロール

「シークは14だよ」

シーク

「(言った直後に言うし・・・)」

レイヴン

「14でこの大きさ!? 触り心地は・・・」

レイヴン意外の全員

「!!!!!!」

レイヴン

「まだまだ発展途上ってところ?」

リタ

「女の胸、勝手に触るなー!!! 吹っ飛べ、ロックブレイク!!!!」

レイヴン

「ウギヤー!!!!」

(レイヴン、ぶっ飛ぶ)

ユーリ

「さっきから何、見てんのかと思えば胸見てたのかよ」

カロル

「年齢を聞いてたのも胸の大きさと年齢を比較してたんだ・・・」

エルテル

「最低です。シーク、大丈夫ですか?」

ユーリ

「触られた本人は落ち着いてんな」

シーク

「レイヴンは私の胸を触っただけだろう。人前で服を脱がした訳でもないし。何故、怒るんだ？」

ユーリ

「お前、それ本気で言ってるのか？」

シーク

「そうだが？」

エステル

「シーク！女性としての自覚を持ちましょう！私が女性を教えてくださいます！」

リタ

「エステルが教えるなら私もつき合ってもいいけど……」

エステル

「では3人であちらに行きましょう」

(エステル、リタ、シーク去る)

(レイヴンがゆっくり起き上がる)

レイヴン

「誰かおっさんの手当てして……。おっさん、今にも死にそう……」

ユーリ

「自業自得だろ」

カロール

「レイヴンが悪いよ」

レイヴン

「うう・・・」

【女として（男性編）】

シーク

「おしとやか」とはどうすればいい？

ユーリ

「いきなりどうしたんだ？」

シーク

「先程、エステリーゼに女らしさとというものを学んだ。それで“おしとやかさ”も女の魅力の一つらしい。だが、私はおしとやかには出来ない。どこを改善すればよいだろうか」

カロル

「シークの場合、おしとやかにしていると戦力が下がるんじゃないの？」

ユーリ

「おしとやかにしなくても他に女らしく出来るんじゃないか？」

レイヴン

「この俺様がシークちゃんのために女らしさを教えよう！」

シーク

「グレイブ」

レイヴン

「ちよつと、俺様は肩に触っただけでしょ、ギャー！……！」

シーク

「男が女に無断で触れ、女が嫌がった場合はこうすべきだとリタが言っていた」

カロル

「肩に触っただけでシークは嫌なの？」

シーク

「レイヴンの場合には近付いて来るだけでも気を付けるべきだとリタが言っていた」

ユーリ

「納得」

レイヴン

「ちょっと、青年、納得しないでよ」

カロール

「でもさ、シークはちゃんと女の子らしくなってるよ」

シーク

「そうか。それは良かった」

ユーリ

「そうだな。無理におしとやかにしなくても大丈夫だろ」

レイヴン

「ちょっと、おっさん無視して勝手にまとめないでよ」

第7・5夜（後書き）

テイルズもやっていますが、最近は戦国BASARAにもはまっています。

ちなみに私の好きな武将は伊達政宗と長曾我部元親（以降、兄貴）です。

弟がBASARAを買ってきて初めてBASARAを見た瞬間に政宗は気に入りました。

そして、兄貴は部下思いで頼りになるところがいいですね。思わず私も「兄貴！」と呼んでしまいました。

今回はテイルズとはかけはなれた話をしてしまいました。ここまですべて読んでいただきありがとうございます。

第8夜：騎士団とユニオン（前書き）

ケープ・モックゥダングレスト

第8夜：騎士団とユニオン

ユーリたちの目の前にいる白い長髪の男。

男が光を放つと魔物は消えていた。驚くユーリたちを男は見た。シークの姿を見たとき、男は一瞬驚いたようだがすぐに元の表情に戻る。

男はユーリたちを見ると去ろうとした時、

「待って！」

リタが男を呼び止めた。

男は足を止めた。

「その剣は何？見せて！」

リタはそう言つて男に近付き、男の持っている剣を真剣に見た。

「今、何したの？エアルを斬るっていうか……ううん……そんなこと無理だけど……」

「知つてどうする？」

「そりやもちろん……いや、それがあれば魔導器の暴走を止められるかも……。前にも魔導器の暴走を見たの。エアルが暴走してどうにも出来なくて……」
「それはひずみ。当然の現象だ」

「ひずみ？」

リタと男が話しているとエステルが男に近付いて行き、男に頭を下げた。

「あの、危ないところを助けていただきありがとうございます」
「どうやらお礼を言いたかったようだ。」

男はエステルを一瞬見て、口を動かした。

「エアルクレーネには近付くな」

「え？」

「エアルクレーネってなに？ここのこと？」

「世界に点在するエアルの源泉、それがエアルクレーネ」

「エアルの、源泉……」

「あんだ、一体……。こんなところに散歩つてわけでもないよな」

ユーリは男に近付いて行きながら聞いた。だした。

男は黙る。

「どうやら答える気はないようだ。」

「ま、おかげで助かったけど。ありがとうな」

男はユーリたちに背を向け、去ろうとした時、

「お待ちください！」

シークが突然、男に止まるように声を出した。

しかし、男は止まることなく木々に姿を消した。

シークは立ち上がり、男を追いかける。

「シーク、どこに行くんです？」

「あの方に話を聞くだけだ。先に行っている」

エステルの問いに足を止めるが、問いに答えると再び走り出す。

「お、お待ちください!! デューク様!!」

シークは先程の白い長髪の男を“デューク”と呼び、止めた。
デュークと呼ばれた男は足を止め、シークを見て、小さく呟くように言った。

「シーク・・・」

「デューク様、捜していました、ずっと・・・。お聞きしたいことがありますし、なにより」

シークはデュークに抱きついた・・・微笑みながら。

「なによりデューク様にお会いしたかったです」
「・・・シーク・・・」

デュークもシークの頭を優しく撫でた。

ユーリたちは先に行ったシークを追いかけて来た道に戻っていた。

「シーク見つけ！おーい、シー　　むぐ」

カロルがシークを見つけ、シークを呼ぼうとしたら、レイヴンがカロルの口を塞いだ。「おっさん、なにしてんだ？」

「少年、あれはどうみてもシークちゃんがさっきの男に抱きついてるっしょ。邪魔しちやいけないわよ」

ユーリ、エステル、リタはシークを見た。

「シーク、先程の方に抱きついてます」

「しかもシーク、笑ってるわよ」

「シーク、あいつと知り合いなのか？」

「分かったかい？少年」

レイヴンに口を塞がれ、声を出せないカロルは頷き、ようやく解放してもらえた。

「はあ、レイヴン、なんか臭かったよ」

「失礼しちゃうわね。俺様、こっから見えて綺麗好きよ」

「おっさんは“うさんくさい”からな」

「それ、俺様の匂いと関係なくない？」

「シークがあの人から放れました」

ユーリとカロルとレイヴンがどうでもいい会話をしている間もエステルとリタは真剣にシークを見ていた。

エステルの言葉にユーリたちもシークを見る。

「なんか話してるのかね？」

「ここからじゃ聞こえねえな」「あの人がいなくなりました」

ユーリたちはシークが一人になると、シークに近付いて行った。

シークは近付いて来たユーリたちに気付く。

「来たか」

「さっきの男と知り合いか？」

「知り合い以上の関係に見えました」

ユーリがシークに質問をするとエステルが自分の思っていたことを素直に言った。

「先程のこと、み、見てたのか!？」

「見てたわよ。シークちゃん、熱烈に抱き締めてたわね」

レイヴンが見ていたことを率直に告白すると、シークはそっぽを向

きつつ顔が赤くなっていく。

「どういう関係？」

エステルとカロルはとても気になるみたいで、シークに迫ってくる。シークは観念したのか、溜め息をつき、白状する。

「あの方は私の恩人だ」

「恩人？」

「そうだ。聞きたいことは話した。さっさと行くぞ」

さっさと先に行ったシークを残りのメンバーは追いかけた。

前を歩くシークの足が突然止まった。

「どうしたんだ？」

ユーリが尋ねるとシークは指差した。

シークが指差した方にはドン・ホワイトホースの姿があった。

ユーリたちはドンに近付いて行く。

ドンはユーリたちの存在に気付くと、こちらを振り向いた。

「てめえら、何かしたのか？」

「何かってなんだ？」

「暴れてま魔物が突然大人しくなって帰りやがった。てめえら、何いやらかしやがった？」ドンの問いにエステルは何か思い付いた顔をして、ユーリに言った。

「ユーリ、あれです。エアルの暴走が止まったから」

「僕たちがエアルの暴走を止めたから魔物が大人しくなっただんです」

「エアルの暴走を・・・ほう」

カロルの言葉にドンは納得した様子だった。

ドンの様子からするとエアルの暴走について知っているようだ。

それを不思議に思ったリタは

「何か知ってんの？」

とドンに尋ねた。

「“ベリウス”っていう俺の古い友達ダチがそんな話したことがあってな・・・」

「南のベリウスとドンが友達って本当だったんだ・・・」

「なによ？そのベリウスって」

「ノードポリカで闘技場の首領をしてる人だよ」

「で、エアルがどうしたって？」

ドンの言葉に話は戻った。

ドンの質問にカロルは張り切って答えだす。

「本当大変だったんです！次から次へと強い魔物がたくさん！でも・・・」

「坊主、そういうのは胸のうちに秘めておくもんだ」

「へ？」

カロルは首を傾げた。

「誰かに認めてもらうためにやってるんじゃない。街や人のためにやってるんだ」

「ごめんなさい・・・」

ドンはカロルとの会話が終わると、レイヴンとシークの方を初めて見た。

レイヴンは顔がひきつったが、シークは何でもない顔をしている。

「シークにレイヴンじゃねえか！」

ドンは二人に近付いて行く。

「うちのもんが人様に迷惑かけてんじゃないやあるめえな」

「迷惑つてなによ。ここの魔物を大人しくさせるのに頑張ったんだから。主に俺様が」

「え！？レイヴンって“天を射る矢”だったの！！」

「どうやらそうらしいな」

「それに何でドンはシークを知ってるし！」

「なんでい。シーク、おめえ、仲間に俺と知り合いだっってこと隠してたのか」

「ドンはあまり会っていないが、『知り合いではない』とは一言も言っていないぞ。だが、ドンと知り合ったのは私が“赤銀の修羅”と呼ばれるようになってからだかな・・・」

「俺はおめえがそう呼ばれる前から目え、つけてたがな」
「ドン・ホワイトホース」

ユーリは話に横入りをし、ドンを自分の方に向けさせた。
「ドンは名前を呼ばれ、ユーリを見る。」

「何だ？」

「会ったばかりで悪いがあんたに折り入って話がある」

「ドン！お話し中失礼します」

ユーリがドンに話をしようとした時、ドンの部下らしき者がユーリとドンの会話に割って入り、ドンに耳打ちをした。

「ドンは内容を聞くと」

「分かった」と言い、ユーリを見て言った。

「急用でダングレストに戻らにやらねえ。悪いがユニオンを訪ねてくれ。そしたら優先して話を聞いてやる」

「いや、約束してくれたらそれがかまわねえよ」

「俺相手に物怖しなしか……。てめえらしいギルドになるぜ」

「ドンはそう言って走ってダングレストに戻って行った。」

「で、どうよ。俺様の偉大差が分かったかね？」

「偉大なのはレイヴンじゃないんじゃない？」

「同感だな」

レイヴンの言うことをカロルは否定し、それにシークも同意する。

「もう！すぐ、ケチつけるんだから！」

「俺たちもダングレストに戻ってドンと話をつけたらバルボス捜しだ」

「リタ、ユーリの用事が終わったら私たちもアレクセイへ報告を・・・リタ？」

「・・・え・・・何？」

「ユーリの用事が終わったらアレクセイへ報告・・・リタ、どうしました？」 「なんでもない！ほら、戻るわよ！」

リタはそう言って先に戻って行く。

ユーリたちもリタを追い、ダングレストへ戻る。

ダングレストに戻るとユーリたちは真っ直ぐにユニオンへ向かった。ドンがいる部屋に入るとそこにはフレンの姿があった。レイヴンはドンの横に歩いて行く。

「ヨーデル殿下はユニオンと協力し、バルボスを止めることを願っています。こちらがヨーデル殿下の書状です」

「ほお、次期皇帝陛下の書状か」

フレンは一枚の手紙を出すとそれをドンに渡した。

ドンは受け取った書状を早速見る。見たあとにドンはレイヴンに書状を渡した。

そして

「読んで聞かせてやれ」

と言った。

レイヴンが書状の内容を読み上げる。

「『ドン・ホワイトホースの首を差し出せばバルボスの件に関してユニオンの責任は不問とする』」

その内容を聞いた時、ドンとレイヴン意外の者は驚いた。

「何だつて!？」

フレンはレイヴンから書状を受けとると書状に目を通した。

書状を持つ手が震えている。

「どうやら殿下の考えは騎士どのとは天と地ほど違うみたいだ」

ドンはそう言うと言を上げて笑った。

「これは何かの間違いです！ヨードル殿下がそのようなこと

」!

「おい、客人を特別室に案内しろ」

フレンの抗議も無視され、ドンは部下に命令し、フレンを“特別室”に連れて行った。

「フレン、どうして・・・!」

「落ち着けて！へたに動けば逆にフレンを危険にさらすことになるぞ」

フレンを追いかけようとするエステルを止めるユーリ。
今まで椅子に座っていたドンは立ち上がり、部屋にいる部下たちに声をあげて言った。

「帝都との全面戦争だ！総力あげて帝都に攻めのぼれ！二度となめた口きかせるな！客人は見せしめに奴らの目の前で八つ裂きにしてやれ！」

そう言つて、ドンは部屋を出ていった。

「た、たいへんなことになっちゃった」

「おかげであたしらのこと忘れられてるみたいよ」

「ドンも話どころじゃねえな」

「私、帝都に戻って確かめてきます」「待て、少し様子を見ようぜ」「あれ？シーク、どこ行くの？」

シークが扉に向かって歩いていているのに気付いたカロルはシークを呼び止める。

シークは立ち止まり、ユーリたちの方を向いて答える。

「調べたいことがある・・・」

「調べたいことですか？」

「こんな時に何言ってるのよ！帝都とユニオンの戦争が始まることしてるのに！」

「戦争があるうとなかろうと私には関係ない。帝国の人間でもギルドの人間でもないしな・・・」

シークは素っ気なく言った。

「調べたいことって何だ？」

ユーリがシークに尋ねる。

シークはユーリを見て答える。

「バルボスの居場所だ。私としてはバルボスとラゴウさえ始末すればどうでもいいからな」

シークは答えると部屋を出て去ってしまった。その後すぐにユーリたちもユニオン本部を離れる。

「あれ？おかしいな」

ユニオン本部を離れてすぐのことだった。
ユーリが突然自分の身の回りをさぐり始めた。

「どうしました？」

「財布、落としたみたいだ」

「こんな時に何やってんのよ！」

「ドンのところで落としたのかもな。探してくるから待ってる」

「う、うん。早く探してきてよ」

ユーリは再びユニオン本部へ向かい、ドンのいた部屋……ではなく、牢の方へと足を運んだ。ユーリはなるべく音を立てずに静かに歩いた。

「ユーリ、か」

しかし、ユーリが来たことはすぐにバレた。

ユーリは諦め、今度は普通に歩き、牢に近付いた。

牢の中にはフレンがいる。

「なんだ、もうバレたのか」「僕の無様を笑いに来たんだろう」

「そうそう、どんな神妙な顔をしているかと思ってるな」

「たまに牢に入れられる立場も悪くないな」「あんな物騒な書状持つてきて何呑気なこと……」

「あるは赤眼どもの仕業だ。ユーリと別れた後で襲われたんだ」

「らしくねえミスしてんな。部下が原因か？」

「それも含めて僕のミスだ」「奴等の狙い、分かってんのか？」

「多分、ギルドと騎士団の武力衝突だ」「だとすると、騎士団にも似たような偽の書状が行ってんじゃないか？」

「騎士団を煽るためのね」

「たく、そこまで分かってんなら、本物の書状、取り返してこいよ」

ユーリはそう言うと剣を抜き、フレンが入っている牢の鍵を壊した。フレンは牢が開くと立ち上がった。

「ユーリがその忌々しい鍵を開けてくれるのを待ってたんだ」

フレンは牢から出て、ユーリと正面に向き合い口を開いた。

「君はここにいてくれ」

「俺、お前の身代わりかよ。お前、俺を殺す気だろ」

「そうだな。僕が戻って来なかった時は僕のために死んでくれ」

「ああ……」

ユーリはそう答えると牢の中に入り、反対にフレンは牢屋から出ていった。

ユーリがしばらく牢に入っていると足音がして、牢屋に誰かが近付いているのに気付いた。

「友の代わりに牢に入るたあどついう酔狂だ、小僧」

牢屋に近付いて来た人物はドンだった。

ユーリはドンを目線だけで見た。

「わざわざ見張りを無くした間抜けに言われたくないな」

「フン、騎士の坊主に秘密の頼みごとがあつたんだよ」

「頼みごと?」

「こんな茶番を仕掛けた連中だ。近くで高見の見物としゃれこんでるだろうよ」

「茶番だつて分かつてんならギルド煽んなよ」

「やる気見せねえと黒幕が見物に来ねえだろうよ。それに血の気の多いうちの連中だ。こうでもしねえと納得しねえだろうよ」

「・・・・・・・・」

「そんなわけだ。騎士の坊主が戻らねえ時はめえの命を貰う」

「わかつてる・・・・・・・・そうだ。あんた、何でギルドなんて作つたんだ」

「帝国の作つたルールじゃあ、俺の大事なものは守れねえ。そう思つただけだ」

「帝国にいた方が守りやすかつただろ。下町でさえ結界に守られてんだ。魔物の心配はいらねえ」

「だからって他のことを我慢できんのか？」
「・・・」

ユーリはドンの言葉に無言だった。ドンは話を続ける。

「帝国のルールが気に入らねえなら選択肢は2つだ。あの騎士の坊主のように帝国のルールを変えてやろうとするか、帝国を飛び出してめえのルールを作るか、だ」

「はつきりしてんのな」

「そうそう、うちの大事な人質、逃がした責任はちゃんと取れよ」
「身代わり以外に何かやれつてののか？」

「この茶番を仕切ってる黒幕が近くにいたはずだ。騎士の坊主に捜させようとしたんだが・・・」

「それを俺にやれつてののか？」

「責任の取り方はめえに任せる。つれの娘っ子がケガ人相手に駆けずり回ってたんだ。めえだけのんびりしてるってのは性に合わねえだろ」

「エステルらしいな・・・」

ドンはユーリに背を向け、去ろうと牢から離れようとした時。

「あんたに聞きたいことがある」

ユーリがドンを呼び止めた。

ドンは再びユーリの方を向いた。

「何だ？用事なら手短に頼むぜ」

「あんた、シークについて何か知ってないか？」

「シークについてか・・・」

「何か知ってたら教えてほしいんだ」

「俺もよく知らねえ。シークを初めて見たのは6年前で、紅の絆傭兵団に入ってて、“赤銀の修羅”って呼ばれたぐらいしか知らねえな。あいつ自身、何も話さねえからなあ……」

「そうか……。呼び止めて悪かったな」

「そんなにシークについて知りたきゃ、シークの親にでも聞くんだな。俺はあいつの親なんて知らねえがな」

ドンはそう言い残すと牢屋を出ていった。

ドンが出ていってすぐにユーリも牢屋から出て行く。

ユニオン本部を出てしばらく広場を歩いていると、エステルとカロルの姿を見つけた。

二人もユーリに気付いたらしい。

「ユーリ！」

「ケガ人の治療、終わったのか？」

「どうしてそれを？」

ユーリの言葉に驚くエステル。

「ドンに聞いたんだよ」

「そんなことより大変なんだよ！」

「みりゃ分かる」

「そうじゃなくて・・・」

「私たち紅の絆傭兵団を見かけたんです。バルボスの姿はありませんでしたが・・・」
「今、ラピードとリタがあとを追ってるからさ
！」

「ドンの狙い通りか・・・」

「早く行こう！」

カロルはそう言って走って行った。

ユーリとエステルもカロルのあとを追う。

しばらくしてリタとラピードと合流し、バルボスがいるであろう、酒場の二階へ足を進めた。そこにはバルボスとラゴウの姿があった。

「この一連の騒動はすべてあなたの仕業ですね」

「だったらどうする？ 貴様達にワシを捕らえることはできん」「はあ？ なに、訳の分かんないこと言ってるのよ」

「悪党つてのは負ける時のことを考えてねえのさ」

「なら、ユーリも悪党だね」

「ああ、極悪人だ」

「ガキ共が・・・？」

バルボスが合図をするとユーリ達の周りに紅の絆傭兵団が集まって来た。

ユーリ達はそれぞれ武器を取り出す。

「やれ！」

バルボスが合図を出すや紅の絆傭兵団がユーリ達を襲う。

しかし、それらは簡単に倒されてしまうのだった。ユーリがバルボスに剣を向けようとしたその時。

ドン

外から爆発音が聞こえた。

外を覗くとドンが騎士団に向けて攻撃を開始していた。

「馬鹿が！これで邪魔なドンも騎士団もボロボロに成り果てる」「ドンを消すためにこんなことを・・・！」

「ラゴウ！騎士団がボロボロになったら誰が帝国を守るんですか・・・あ！！！」

「騎士団がボロボロになった隙を見て評議会が帝国を乗っ取るってことか」

バルボスは大声で笑い出した。
そして、笑ったあとに言った。

「今さら知ったところでこの戦いは止められん！」

「それはどうかな？」

突然、外から足音が聞こえて来た。

外を見るとフレンが馬に乗っていた。

そして、手には紙があった。

「本物の書状はここにある！双方、武器を修めてくれ！」

フレンはそう叫んだ。

「チツ！」

バルボスが再び部下に合図を出すと、部下は弓を構え、フレンを狙った。

「あの人、フレンを狙ってます！」

エステルがそう言うと、カロルはラピードがくわえていた煙管をそいつに投げた。

「当たった！」

「ナイスだ、カロル」

煙管は見事に命中し、弓を弾く。

「邪魔は許さんぞ！ガキ共！」

バルボスは怒りが頂点に達し、武器を構えてユーリ達に放った。

バルボスの攻撃を避けたが、後ろにある壁は崩壊し、火を吹いていた。

「ここにいたら不味いな……。みんな、逃げろ！俺はあいつを倒す！」

ユーリはそう言って武器を構えてバルボスに向かって行った。

「ユーリ！危険です！」

「大丈夫よ。エアルを充電するまで時間があるわ」

「馬鹿が！」

バルボスは武器をユーリに向け、先ほどの攻撃をユーリに放とうとした。

「ウソ！？充電が早い！」

リタが驚いていると、リタの頭上を誰かが素通りし、バルボスを攻撃する。

そのせいでバルボスの攻撃は失敗した。

「あいつ、バカドラ！」

「リタ、敵を間違えるな」

「私の敵はあつちよ！」

竜使いは宙に浮いたままこちらを見ている。

「貴様達、ワシを敵にしたこと、後悔させてやる！」バルボスを攻撃する。

そのせいでバルボスの攻撃は失敗した。

「あいつ、バカドラ！」

「リタ、敵を間違えるな」

「私の敵はあつちよ！」

竜使いは宙に浮いたままこちらを見ている。

「貴様達、ワシを敵にしたこと、後悔させてやる！」

バルボスは武器を掲げ、武器の力で宙に浮いた。

そしてそのまま外へと飛び出して行った。

竜使いはバルボスを追おうと竜の羽を羽ばたかせたその時、ユーリが竜使いに話しかけた。

「バルボスを追うなら俺も載せてくれ！」「何言ってるのよ！こいつは敵・・・！」

「俺はバルボスを捕まえなきゃなんねえ！頼む！」

ユーリの真剣な眼。

竜使いは頷き、竜をゆっくり下ろした。

「すまねえ」

「ボク達も一緒に・・・」

「定員オーバーだ」

ユーリはそう言って竜に乗った。ユーリの言う通り、竜にはもう乗れない。

「ちょっと行ってくる」

「ユーリ！」

「ちゃんと歯を磨いて街の人に迷惑、かけんなよ」

「ユーリのばかぁ！」

「・・・行ってくれ」

ユーリは竜使いにそう言うと、竜は宙に浮き、バルボスを追って砂漠の方へと消えて言った。

第8夜：騎士団とユニオン（後書き）

ティルズ オブ ヴェスペリア 赤月の夜をご覧になっている皆様、大変永らくお待たせいたしました。なかなか作業がすすまず、申し訳ありません。

ようやくシークがデュークと対面できました。（永かった・・・）皆さんはデュークとは物語の序盤のデイドン砦で会えることは皆さんはご存知ですか？

最初はそこでシークと対面させるという考えもありましたが、「さすがにそれは早すぎだろう」と思いやめました。

ちなみに、この話ではユーリとエステルはデイドン砦でデュークには会っていない設定になっています。

今回はいよいよジュディスと会えます。次回も投稿が遅くなるかもしれませんが、なるべく早く完成させたいと思います。

では皆様、次回お会いしましょう。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第8・5夜（前書き）

第8夜のオリジナルスキットです

第8・5夜

【シークとの関係は？】

レイヴン

「シークちゃん、さっきの男とどっいう関係よ？」

シーク

「あの方は恩人だ」

レイヴン

「そんなこと言っちゃって！本当はコレなんじゃないの？」

シーク

「小指を出して何を言っている？」

エステル

「コレとは何ですか？」

レイヴン

「コレっていったらアレよ。コ・イ・ビ・ト」

エステル

「ええ！そんなんですか！？」

レイヴン

「シークちゃん、熱烈に抱き締めてたし恋人でしょーよー！」

シーク

「『グレイブ』」

レイヴン

「うぎゃーっ！ー！」

カロール

「レイヴンが上に見えるよ」

ユーリ

「落ちたな」

シーク

「あの方に“恋”などという感情は持てない！『エナジーブラスト』」

「

レイヴン

「なにも2回も魔法

うぎゃーっ！ー！」

【コンボ！シークとラピード】

シーク

「今のタイミングはいいなラピード」

ラピード

「ワンツ！」

ユーリ

「同感だ、とち」

シーク

「だが、一度だけ技の出すタイミングを失敗したがラピードはどう思う」

ラピード

「ワウツワウツ！」

ユーリ

「確かに遅かった」

シーク

「やはりか………迷惑をかけた」

ラピード

「ワンッ」

ユーリ

「それはカバーしたから気にするな」

シーク

「そうか」

カロール

「ユーリ、さっきから何やってんの？」

ユーリ

「シークが『さっきの戦闘に関してラピードと反省会をしたいから
通訳してくれ』って言ったんだよ」

カロール

「やっぱりユーリ、ラピードの言葉分かるんだ」

ユーリ

「さあな。これで合ってるかは確信はないぜ」

カロール

「いい加減に伝えたら反省会にならないんじゃないか………」

ユーリ

「本人が納得してるからいいんじゃないかねえか？ラピードも否定してねえし」

カロル

「そうかなあ？」

【シークとの関係2】

カロル

「シークとドンが知り合いだったなんて驚いたよ」

ユーリ

「いつから知り合いだったんだ？」

シーク

「赤銀の修羅と呼ばれてからだ」

エステル

「ドンはそれ以前からシークを知っているようでしたが？」

シーク

「紅の絆傭兵団にいたころ天を射る矢が私のところに来て勧誘しに来たときがあったからな。ドンは私を知っていた」

カロル

「紅の絆傭兵団を辞めて天を射る矢に入れば良かったじゃん」

リタ

「紅の絆傭兵団が居心地良かったんじゃないの？」

シーク

「居心地は悪かったぞ」

エステル

「どうして紅の絆傭兵団に居続けたんですか？」

シーク

「……ドンのような奴がいるギルドに入ったら辞めるに辞めれないだろ……」

エステル

「え？」

シーク

「いや、ただの気まぐれだ」

ユーリ

「成る程な」

【パニック】

ユーリ

「フレンが捕まって大変なことになったな」

エステル

「フレン、大丈夫でしょうか・・・」

カロル

「帝国とユニオンの全面戦争なんて・・・」

リタ

「まったく！こんな時にシークのやつ、勝手に行動して！」

ユーリ

「落ち着けて」

カロル

「こんな時に落ち着けないよ！」

エステル

「フレン・・・」

ユーリ

「だから落ち着けて！」

ラピード

「ヴウツ！ワウツ！」

エステル・カロル・リタ

「！！！！」

エステル

「ユーリ……」

ユーリ

「やっと落ち着いたか」

エステル

「ユーリ……」

ユーリ

「こういう時こそ落ち着いているもんだ。シークは落ち着いたら、すぐに行動したぞ」

カロル

「勝手な行動はしてたけどね」

リタ

「まったくよ」

ユーリ

「その点は問題だけだな」

【シークについて3】

ユーリ

「牢の中は相変わらずジメジメしてんな」

ユーリ

「……『シークについて知りたきゃシークの親に聞け』、
か……」

ユーリ

「そついやシークのやつ、8歳の時には紅の絆傭兵団に入ってたっ
て言ってたな。親に心配かけまくりじゃねえか」

ユーリ

「・・・本人に聞けば一番早いな。今はエステルたちを捜すか」

【早く合流を】

ユーリ

「リタとラピードは紅の絆傭兵団を追ってるんだよな？」

エステル
「はい」

カロル
「早く行こうよユーリ！」

ユーリ
「ちょっと待って。そういやシーク、バルボスを探すとか言ってたな」

エステル
「ではシークとも合流できるってことですね」

ユーリ
「かもな」

カロル
「シークが片付けてたりして」

ユーリ
「だとしたら楽でいいな」

エステル
「ユーリ！そこは心配するところです。シークが一人で紅の絆傭兵団に挑むなんて危険です。シーク、無事でしょうか？」

カロル
「心配なら早く行こうよ！リタとラピードと合流しないと！」

ユーリ

「そうだな。行くぞ」

エステル

「はい！」

第8・5夜（後書き）

完成させるのに時間がかかり、すみません。

第1部もそろそろ終わりですね。

つぎの話も完成させるのに時間がかかると思いますが、なるべく早く完成させるよう頑張ります。

では、ここまで読んでいただきありがとうございます。

第9夜：新たなる旅立ち（前書き）

ガスファロスト〜ダングレスト

第9夜：新たなる旅立ち

竜使いの竜に乗り、バルボスを追いかけたはずのユーリは牢の中にいて、捕まっていた。ユーリの他にも人が数人捕まっていた、ユーリの隣にはクリティア族の女　　竜使いの正体がいる。

「あんだ、何で魔導器なんて壊してんだ？」

「……」

「言いたくないならいいけどな」

竜使いはユーリを見てニツコリと笑った。

「聞いて感動できる美談ではないわよ？壊したいから壊してる」

「確かに感動できる話じゃねえな。確かに感動できる話じゃねえな。だからバルボスの魔導器も壊そうとしてるのか」

「完全ではないけど」

「これはいいのか？」

ユーリはそう言って自分の魔導器を竜使いに見せる。

「それは壊しても面白くないもの」

ユーリは牢の出入口に近付き、小さな窓口から外を覗く。出入口には門番が二人……。

ユーリは竜使いの方を見て言った。

「なあ、もうちょい協力しないか？」

「いいわよ。魔導器も壊しそこなつたし」

「とりあえずここから出るぞ」

「どうやって？」

「手が無いわけじゃねえけど」

「ならその手を使えばいいんじゃないかしら。出来る人は手、抜いちやいけないと思うの」

「お手柔らかに頼むよ。美人相手に緊張するけど」

「ちゃんとエスコートしてね」

二人は拳をつくり、構え、互いに向いた。

始めにユーリが動く。そして竜使いを殴る。

次に竜使いがユーリを殴る。

そしてユーリがまた相手を殴る。

『少しやりすぎか？』と思うくらい二人は強く相手を殴っていた。

扉の前でそんな激しい殴り合いをしていたらさすがに門番も気付き、窓口から二人にやめるように言ったが二人は全くやめる気配がない。仕方なく門番の一人が中に入って来た。

「やめる！」

門番は剣を抜き、叫んだ。

門番が中に入ったとたん二人は殴り合いをやめ、門番の方を向いた。そして門番を思いつき殴る。外にいた門番も殴られ気絶した。

「ありがとうございます」

牢の中に閉じ込められていた人たちはユーリと竜使いにお礼を言いながら牢を出て行った。

「そんなじゃ、俺たちも魔導器を探すか・・・っとその前にあんた名前は？俺はユーリ」

「ジユデイスよ」

「ジユデイスか・・・長いな、ジユディでいいか？」

「じゃ、それでいきましょう。それから一発は一発よ」

ジユデイスはユーリにそう言うと、ユーリを思いっきり殴った。どうやら殴った数はユーリの方が多かったらしい。

ユーリを殴るとジユデイスはさっさと行ってしまった。

「少し強くやりすぎたかね？」

ユーリもジユデイスを追って牢から出た。

「騒ぎがあつたのはここか？」

「何だ、お前たちは？」

ユーリが外に出ると同時にそんな声が聞こえてきて、牢の前をバ

ルボスの部下と思われる者たちが囲んだ。
部下たちはユーリとジュデイスを見るて剣を抜いた。

「武器がねえな」

「武器は自分の手だけよ」

ユーリとジュデイスが武器を持つ敵を相手に殴ってその場を逃れようとした時……。

「グワツ！」

「グツ！」

背後から誰かに斬られた。

バルボスの部下たちが邪魔で誰が斬ったのか分からなかったがバルボスの部下全員が倒れたところでその姿がようやく見えた。
ユーリはその人物を見て少し驚いた。

「シーク！？」

「ユーリか……。なぜここに？」

シークは剣を仕舞いながらユーリの顔を見た。

「俺たちはバルボスを追って来たんだ。ま、とりあえず助かったぜ。
で、何でシークがここにいんだ？」

「バルボスの居場所をバルボスの部下を一人取っ捕まえて無理矢理
ここを聞いた」

「シークらしいな。にしても何で脱獄のことがバレたんだ？」

「おそらく脱獄には気付いていない」

「？」

「先ほどの奴等は私を追って来た」

「ねえ、お話中悪いけれど彼女は？」

ジュデイスが割り込んでユーリにシークを尋ねた。

「こいつはシーク」

「そう。私はジュデイスよ」

「・・・」

ジュデイスが挨拶してもシークは無言だった。

「こいつはこいつ奴だから気にするな」

「あら、そうなの」

「いつまで話してるつもりだ。さっさと行くぞ」

「ちよつと待て。武器がねえんだ」

ユーリが武器がないことをシークに伝えたとシークは部屋の扉を指差した。

「あの部屋は武器庫になっていた。あそこから適当に武器を取れ」

武器庫の中でユーリとジユデイスはそれぞれ自分の武器を手にしたが、ジユデイスは不満そうな顔をしていた。

「不満そうだな」

「あの槍が気に入っていたのだけれど・・・」

「仕方ないだろ」

「そうね」

ユーリの『仕方ない』という言葉に本当に仕方なさそうに武器庫にあった槍を持ったジユデイスだった。

それから武器庫を出て、階段を上になり3人は外に出た。

「ユーリ！」

外に出た途端に聞き慣れた声が聞こえてきた。

やはり、声の主はエステルだった。

エステルはユーリに抱き付いた。

「うわっ！」

「どこも怪我してませんよね？大丈夫ですよね？」

「エステル落ち着けて！」

ユーリに言われ、エステルは落ち着き、ユーリから離れた。

エステルの後ろにはカロール、ラピード、リタ、レイヴンもいた。

「おまえら、大人しくしとけって言った筈だぜ」

「ユーリが心配で・・・」

「僕も！」

「あたしは別に心配しなかったけど」

「俺様は心配で心配で・・・」

「嘘つけ。何でおっさんがこけにいるんだ？」

「聞いてよ！ドンが『バルボスになめられちゃいけねえ！』とか言
つて俺様に『バルボスを倒してこい』とか言うのよ」

「お前たち、何処から入ろうとしてたんだ？」

シークが声を出すと、今までユーリにだけ注目していた一同がシークを見て驚いた。

「シーク！無事だったんですね！」

「仕方ないでしょ。正門が開かなかったんだから・・・っていうか
あんたもここに忍び込んだの？」

「そうだ。バルボスがここにいると聞いたからな」

「シークもここから入ったんじゃないの？」

「私は紅の絆傭兵団の一人を取っ捕まえて正門を無理矢理開けさせ
た」

シークのカロルに対する質問に答えると一同は沈黙するがジュディ
スだけは笑っていた。

「あら、凄いわね」

ジュディスが言葉を発したことでみんなは初めてジュディスに気付
いた。

「だ、誰だ！このクリティアっ娘は！どこの姫さまだ！？」

レイヴンはジュディスを見て興奮していた。

「おっさん、食い付きすぎ」

「はじめまして、ジユデイスよ。ユーリとは一緒に捕まってたの」

「エステリーゼといいます。エステルとお呼びください」

「ボク、カロール！」

「リタ・モルディオ」

「そして俺様は」

「おっさんは無視してもかまわない」

レイヴンが自己紹介をジユデイスにしようとした時、シークが口を挟み、レイヴンの自己紹介を邪魔した。

「シークちゃん、酷いじゃないの！」

「フフ、楽しい人たちね」

「お！好印象！」

「それより早くバルボスのところに行かないか？」

シークはそう言うともう一度建物の中に入った。ユーリもシークのあとを追って中にもう一度入ろうとした時、リタがユーリを呼び止めた。

「あのバカドラはどうしたのよ？」

「（ジユデイスが竜使いつてのは秘密にしとく約束だったな）さあな。ここについた時に別れたからな。多分、生きてるだろ」

「生きてなきゃ困るわよ！殴れなくなるじゃない！」

会話が終わるとすぐに一同はシークを追った。

「性懲りもなくまた来たか・・・馬鹿共め」

「待たせて悪かったな」

シークはバルボスの手にある剣の魔導器を見て何かに気付いたような顔をし、ユーリに尋ねた。

「あの魔核、ユーリの探していた下町の水道魔導魔か？」

「だろうな」

「カプワ・ノール、ダングレスト、ついにはガスファロストまで・・・忌々しいガキ共が！」「ここまでです！大人しくお縄につきなさい！」

「ふんっ！まだ終わりではない！十年の歳月を費やしたこのガスファロストがある限りワシの野望は消えぬ！あの男と帝国を利用してできたこの魔導器があればな！」

バルボスは剣の矛先をユーリたちに向け、衝撃波を放ってきた。

ユーリたちは『ヤバイ』と感じると今立っている所から離れ、バルボスの攻撃を避けた。

「下町の魔核をくだらないことに使いやがって」

「くだらなくなどないわ！この力でホワイトホースを片付け、ワシ

がギルドの頂点に立つ！ギルドの次は帝国だ！そしてワシが世界の支配者となる！」

シークはユーリたちより前に出てバルボスに話かけた。

「やはり貴様の元を去って正解だったな。そんなくだらないことに付き合わされるのは我慢ならないな」

「ワシの元を去って“正解”などではない！“間違い”だったのだ！貴様はまだまあ使えたからな」

「初耳だな。私をそんなふうに思っていたとは」

「今となつては邪魔者以外の何者でもないがな。話は終わりだ！失せろ、八工共！」

バルボスはもう一度剣の矛先をユーリたちに向けてきて、先ほどの攻撃をもう一度やろうとした。

「あの剣はヤバいだろ」

「ヤバいつてか反則でしょ」

「圧倒的ね」

「どっちにしる死ぬならば奴の攻撃を止めれるか試した方がいい」

シークはそう言うつとバルボスの方へ走って行った。

「シーク、危険です！」

エステルの静止にもかまわずシークは真っ直ぐバルボスの方へ走って行く。

「バカめが！ダングレストごと消える！」

バルボスが攻撃を放とうとした時だった。

「伏せろ」

そんな声が聞こえてきた。

声の方を見るとそこにはデュークがいて、彼が手に持っていた剣を上空に掲げるとバルボスの剣を真つ二つにしてしまった。

「なにっ!？」

バルボスは驚き、舌打ちをした。

デュークはそれだけするとシークを一瞬だけ見て、すぐに姿を消してしまった。

「あいつ……!」

「リタ、今はよそ見すんな!」

「デューク……」

「……デューク様」

ユーリはバルボスを見て、バルボスに剣の矛先を向けた。

「形勢逆転だな」

「……賢い知恵と魔導器が得る力などまがい物にすぎん、か」

バルボスはそう言うと真つ二つに割れた剣を捨て、別の剣を取り出した。

「所詮、最後に頼れるのは己の力のみだったな!さあ、貴様等、剣を取れ!」

「あちゃ〜、力に酔ってた分、さっきの方が扱いやすかったのに」
「開き直ったバカほど扱いにくいものはないわね」
「ホワイトホースと並ぶ兵鋼嵐のバルボスと呼ばれたワシの力、とくと味わうがいい!」

バルボスがそう言うと、四方から紅の絆傭兵団が姿を見せた。数は数えきれないほどに多い。

ユーリたちは武器を手にし、紅の絆傭兵団を撃退し始めた。

「『スプレッド・ゼロ』」

「円月・鳶」

「サツと吹いてサツと斬れ『ウィンドカッター』」

「『フォトン』」

次々と倒しているが、次々と敵が湧いて出ている。

「これじゃ、キリがないよ」

「カロール、弱音はいてるくらいなら手を動かせ・・・っても確かにこれじゃキリがねえな」

「あの橋から敵が出て来ているんでしょ。ならあの橋を壊せばいいんじゃないかしら?」

ジユデイスがそう言うと、みんながジユデイスの指差した橋を見た。ジユデイスの言う通り、橋から敵が湧いて出て来ている。

「誰が壊しに行く?」

「おっさんに決まってるでしょ!」

リタが速攻でレイヴンを指名した。

「リタっち、酷いじゃないの。橋を壊してる間に敵に狙い打ちされたらヤバいじゃない。それにシークちゃんと犬っころは？」
「シークとラピードならさっきからバルボスと戦ってるよ」
レイヴンがバルボスの方を見るとカロルの言う通りシークとラピードはバルボスと戦闘中だった。

「ガウツ！（魔神犬）」
「効かぬわ！」
「ならばこれはどうだ！『グレイブ』」
「ぐうっ！」

ラピードがバルボスを攻撃してバルボスを足止めしている間にシークは後ろで呪文を唱えてバルボスに魔術を放った。
魔術の攻撃にバルボスはダメージを受けた。

「あのこたち、仲良しね」
「いいコンビネーションです」
「僕たちも頑張ろう！」
「というわけでおっさん、よろしくー！」
「ちょっと、おっさんまだ『やる』って言ってないっしょ」
「つべこべ言わずさっさと橋を壊してきなさいよー！」
「おっさん、やりたくないっば」
「私、みんなのために頑張れる人って素敵だと思うわ」
「おっさん、頑張っちゃー！」

絶対の橋壊しをしたくないと言っていたレイヴンだったが、ジュデイスがレイヴンにそう言うと、レイヴンは速攻で橋を壊しに行った。ジュデイスは笑っていたが、他の人は呆れていた。

そして、遠くからその様子を見ていたシークとラピードは……。

「あっち、何か余裕ありそうだな」
「ワフ」

という話をしていた。

「余所見をする暇はないだろう！」
「！」

バルボスがシークとラピードに攻撃してきた。二人はバルボスの攻撃を避けたが、シークの背後に敵がいてシークに攻撃しようとしていた。

「しまったっ！」
「ガウツ！」
「グワツ」

だが、ラピードが敵を撃退した。

「助かった、ラピード　ラピード後ろだ！」

ラピードが後ろを見ると今度は敵がラピードに攻撃しようとしていた。

「水結晶」

シークが氷をまとったナイフを敵に投げ、ナイフに当たった敵は身動きがとれなくなった。

その隙にシークはラピードを攻撃しようとしていた敵を斬りつけた。

「しかし、これではキリがないな。ラピード、道を作るからあの橋を壊してきてくれないか？」

「ワンツ」

シークの提案にどうやらラピードは賛成のようだ。

シークは呪文を唱え始めた。

シークが呪文を唱えている間、ラピードがシークを守る。

「『プリズムソード』」

光の剣が敵に降り注ぎ、撃退する。

そして橋までの道が出来た。

そしてラピードは橋まで走って行った。

そしてラピードとレイヴンの力で橋を壊し、これ以上、敵は増えなくなかった。

シークは近くにいたザコを一掃するとバルボスに攻撃をする。

「空破絶風撃！」

「くっ！」

シークの攻撃でバルボスは怯んだ。
その隙をユーリは逃さない。

バルボスのところにまで走って来て攻撃をした。

「蒼破牙王撃！」

「なにい！」

バルボスに攻撃は当たり、バルボスは倒れた。

他のみんなも残党も倒し、ユーリたちは勝利した。

「もう部下はいない。器がしれたな。分をわきまえないバカはあんなのほうだったな」

ユーリ倒れているバルボスにそう言った。

しかし、倒れたはずのバルボスはまた立ち上がった。

ユーリたちは再び武器を構える。

しかし、バルボスは武器を投げ捨て、地面のギリギリのところまで移動した。バルボスの後ろは一步でも下がれば奈落の底だった。

とりあえず落ちれば助からないだろう。

「分をわきまえないバカか・・・フハハハ！どうやらそのようだな！」

バルボスは笑いをやめるとユーリを見た。

「ユーリ、とかいったな。貴様は若いころのドンに似ている。いずれあのドンのようになるだろう」

「俺があのようにさんみたいになるってか。ゾツとしない話だな」

「貴様はいずれドンのように世界に大きな敵をつくるだろう！」

「.....」

「そして世界に喰い潰されるだろう。悔やみ、嘆き、絶望した貴様を先に地獄で待っていていよう！」

バルボスはそう言うと、落ちた。ユーリはバルボスがいた場所まで走って行き、バルボスが落ちていく姿を最後まで見た。

「地獄で待ってる、か。やなこと言っぜ」

シークはバルボスが投げ捨てた剣を拾い、剣から魔核を取った。

「ユーリ」

「サンキュ」

シークはユーリを呼び、ユーリがシークの方を向いた時に魔核をユーリに投げた。

ユーリは魔核を受け取るとシークに礼を言う。

「魔導器も取り戻したし、これで一件落着だね！」

カロルはそう元気よく言った。

「まだ一件落着じゃねえぞ。魔導器がちゃんと動くか確かめねーと」

「大丈夫よ。魔導器はそう簡単に壊れないわ」

「そういえばレイヴンがいないや」

カロルの言葉に初めてレイヴンがいないことに気付いた。

「どうせダングレストに戻ったんだろ。ダングレストに行けばまた会えるって」

「どうでもいいが早くダングレストに戻らないか？」

シークは先に階段を降りていた。
ユーリたちもシークに続いて階段を降りていく。
階段を降りながらもみんなは話をしていた。

「早くこのことをフレンに報告しないと」「フレンっていやあ、ダングレストの方はまとまったのか？」

「ええ。フレンのおかげで双方、武器を収めたみたいです。フレンはそのままラゴウの所へ行ったのでラゴウも捕まるはずですよ」

「それじゃ私はここでお別れね」

建物を出るころには話が終わり、ジュデイスが『お別れ』と言った。

「相棒の所に戻るのか？」「相棒？誰ですよ？」

「ここからは別行動。お互いの干渉はなしね」

「そっか。じゃあね、ジュデイス」

「ジュデイスといる間、楽しかったです」

「私も楽しかったわ」

ジュデイスとそんな別れの言葉を掛け合っているとジュデイスと別れ、ユーリたちはダングレストを目指した。

ダングレストに戻ると、騎士団がいてその中心にはラゴウがいた。どうやら押し攻められている様子だ。

「私は無実です！これは評議会を潰さんとする騎士団の罠です！」
ラゴウはそんなことを住民に訴えている様子だ。
するとフレンが姿を見せ、ラゴウの前に立った。

「あなたは・・・フレン・シーフォ！」

「今、帝国とユニオンの間で友好協定が結ばれようとしています」

「そんなバカな・・・」

「ドン・ホワイトホースとヨードル様の間で話し合いをしています。
正式な調印も時間の問題でしょう」

「そんな・・・今、アレクセイは別事で動けぬはず」

「確かに騎士団長はこちらにこられたあとすぐに帝都に戻られまし
た」

「く・・・こんな若造に私の計画が潰されようとは・・・」
ラゴウは大人しくなり、大人しくなったラゴウを騎士団はつれてい
く。

「これでカプワ・ノールの人々も任務から解放されますね」

「次はまじな執政官がくるといいな」

「お城に戻ったらかけあってみます」

「お城について・・・エステル帝都に帰っちゃうの？」

「はい、ラゴウも捕まりましたしお城も安全だと思えますし・・・」

エステルはそう言ったが、全く嬉しくない様子だった。

「帰りたくない」

「え？」

「って顔、してるぞ」

「そんなこと、ないです……」

「ま、好きにすればいいさ。決めるのはエステルだ」

「帰ります。これ以上フレンに迷惑をかけられません」

「そうか……、寂しくなるなラピード」

ユーリはそう言ってラピードの方を見た。

シークはユーリに近付いてユーリに話しかけた。

「ユーリも下町の魔核を取り戻したんだ。下町に帰るのだろうか？」

「そうだな……。シーク、お前大丈夫か？」

「何がだ？」

「顔色悪いしフラフラだぞ」

ユーリの言う通りシークは足下がフラフラで顔色も悪かった。

突然、シークが倒れようとした。

倒れようとしたシークをユーリは受け止めた。

「シーク！大丈夫ですか！？」

シークを心配してエステルたちはシークに近付いた。

シークはユーリに支えてもらいながら立ち上がった。

「最近、バルボスとかラゴウとかのことを考えててまともに睡眠し
てなかったから……。少し眠くなっただけだ……」

心配したエステルはシークのおでこに手を当てた。

「大丈夫ではありません。熱が少しあります。宿まで運んだ方が良さそうです」

「大丈夫だ・・・自分で歩ける・・・」

「ダメです！大人しく運ばれてください」

「シーク、あきらめた方がいいぞ。こうなったらエステル、あきらめないからな」

「・・・」

「で、誰が運ぶの？」

カロールがそう言うと、エステルもラピードもカロールもリタも一斉にユーリを見た。

「運ぶのは当然、男の仕事よ」

「ぼくじゃシークと身長、合わないから」

「ユーリ、よろしくお願いします」

みんなにそう言われてユーリは仕方なくシークを背負った。

「ユーリ、すまない」

「気にすんなって」

「・・・ユーリの背中、暖かい・・・」

シークはそう言うと眠りについた。

「（やけに素直だな。熱にうなされるとどうなのか？）それにしても相変わらず軽いな」

ユーリはそんなことを思ったり口にしたりして宿に向かった。

シークが目を覚ましたのは周りが暗くなつてからの夜だった。
シークはベッドの上で眠っていた。
もう一度眠ろうとした時。

コンコンコン

窓を誰かが叩いた。

窓を見るとハルルの時の黒い鳥が窓を叩いていた。

「ロア、今までどこに・・・」

ロアと呼ばれる黒い鳥はシークが自分に気付いたことに理解すると
飛んで行った。

「ロア？ついてこいというのか？」

シークは宿を出て、飛んで行くロアを追いかける。

「何処まで行く？」

ロアが止まり、シークの肩に乗った。

シークがたどり着いた所はダングレストの街で人通りの少なそうな所だった。

シークがその周りを見回すと誰かがいるのに気が付いた。

暗くて見えなかったため、近付いてみるとシークはその人物を見て驚いた。

「え……？デューク……様？」

デュークもシークに気付いたようだ。

「なぜ、ここに……いえ、それよりもデューク様に言うことが……あの、バルボスとの戦いの時は助けていただきありがとうございます」

「シーク、あまり無茶はするな」

「ですが、あの時はどちらにしろやられました。確かに無謀でしたがああするしか……」

シークが言い終わる前にデュークはシークを突然、抱き締めた。

デュークが抱き締めたことでロアはシークの肩から離れる。

「！」

「……無事で良かった」

「デューク様……私はまだ死ねません。あの方との約束、守ってませんか」

シークがそう言うとデュークはシークを放した。

「でも、私をそこまで心配してくれてありがとうございます」

デュークはシークに背を向けた。

そして背を向けたままシークに言った。

「シーク、やれるのか？」

「・・・やらなければなりません」

「そうか・・・」

デュークはそれだけを言うと姿を消した。

ロアはデュークが去ると、再びシークの肩に乗った。

シークも無言でその場を離れた。

「わ、私は評議会の人間ですぞ！あなたなど簡単に潰せるのですぞ
！」

シークが宿に戻ろうとした時、突然そんな声が聞こえた。気になったシークは物陰に隠れながらその声の主を確認する。声が出た方からは人影が二人あった。

「あれは……ラゴウと……ユーリ？」

見るとユーリは剣を持ち、ラゴウを追い詰めていた。

「く、来るな！」

ユーリがゆっくりと前に歩くとラゴウは後ろに下がる。

しかし、ラゴウの後ろには足場がなくラゴウはこれ以上下がれない。

「なぜ、ラゴウがここに……？ラゴウは騎士団に拘束されたのでは？あんなユーリを見るのは初めてだ……」

「法や評議会がお前を許しても俺はお前を許さねえ」

ユーリがそう言った瞬間ユーリはラゴウを斬った。

「くっ……！もう少しで“デインノモス宙の戒典”が手に入るはずだったのに……」

ラゴウはそう言って落ちた。

ラゴウの言葉はシークの所までは聞こえなかった。

ラゴウが落ちた後、ユーリは剣を見詰めた。

「ユーリ」

声がしてユーリが振り向くと、シークが物陰から出てきていた。

「シーク、お前大丈夫なのか？」

「今はそんなことよりユーリ、お前ラゴウを……」

「見てたのか？」

「ああ。途中からだが……」

「俺が恐いか？」

ユーリがシークを見て言うとシークはユーリから視線を反らして答えた。

「恐くはない。私も人を斬ったから……それに……」

シークは再びユーリに視線を戻した。

「お前が殺らなければ私が殺っていた。ただ……」

「ただ？」

「ただ、ユーリのそんな姿を見たくなかった。それだけだ……」

シークはラピードもいることに気付いた。

「ラピードもいたのか……」

「他の奴には内緒にしてくれないか？」

ユーリがシークにそう言った。

シークは静かに頷いた。

「今日はもうおそい。宿に戻るう……!」

シークが歩こうとした時、シークはバランスを崩し、倒れそうになった。

しかし、倒れそうになったシークをユーリは支えた。

「あんま無理すんなよ」

「ああ・・・すまない・・・」

「宿まで運んでやる。背中に乗れよ」

「大丈夫だ」

「お前に倒れられるとエステルがうるさいんだよ」

ユーリはそうシークに言ってシークを無理矢理お姫様抱っこをした。

「ユーリ!？」

「お前でも顔を赤くすんのか」

「こ、こんなことをされるのは初めてだから・・・」

シークは顔を赤くしてユーリにそう言った。

「お前の肩に乗っている黒い鳥は何だ？」

「私の友人だ。名前はロア」

そんな会話をしてシークはユーリに抱かれたまま宿まで運ばれた。

次の日の朝

帝都に帰るエステルの見送りにみんなは集まっていた。

ユーリとシークを除いて。

エステルとリタとカロールが互いに別れの言葉を交わしているとき、
シークがエステルたちの前に姿を見せた。

シークの肩にはロアもいた。

「シーク！大丈夫なんですか？」

「ああ。熱も下がったし、十分な休息もとった。心配かけたな」

「シークが無事で良かったです」

エステルは笑顔でそうシークに言った。

「エステル、行く前に聞きたい。ラゴウはどうなった？」

「そっか。シーク、知らないんだっけ」

「ラゴウは評議会を利用して少し地位が低くなるだけですみました。
ラゴウの件、私から話してみます」

シークはそれを聞いて目を丸くした。

そして昨夜の出来事を思い出す。

「（・・・だからラゴウはあんな所に・・・。それにしても地位が

低くなっただけか……。これが今の帝国……」

「姫様、実はそのことなのですが……」

エステルのお付きの騎士がエステルにラゴウのことについて口を挟んだ。

「実はラゴウは昨夜から行方が分からないのです」

その言葉にシーク以外の人は目を丸くする。そしてシークは下を向いた。

「ところでさシークの肩に乗ってる鳥、何？」

「私の友人でロアだ」

「かわいいです！触ってもいいですか？」

ロアに興味津々のエステルはシークに触れてもいいか訪ねる。シークが頷くとエステルはロアの身体に優しく触れた。

「私もそろそろ行くわ。エアルクレーネってのを調べてみるわ」

リタはそう言ってエステルたちに背を向けた。そしてそのままダングレストを出ていく。

「カロールとシークはこれからどうするんです？」

「僕はユーリとギルドを作りたいと思う。できればシークにも入って欲しいけど……」

「せっかくの誘いで悪いが私はギルドに尽くすことは出来ない。昨日、ロアが仕事を持ってきたから依頼人の所へ行く」

「姫様、そろそろ……」

「わかりました」

「ユーリは呼ばなくていいの？」
「まだ休んでいるようなので」

エステルはシークとカロールにお別れの言葉をかけるとお付きの騎士と共にダングレストの入口へ向かった。

「僕、ユーリを呼んでくる！」

カロールはそう言って宿へと走って行った。
取り残されたシークは空を見上げる。
すると空の異変に気付く。

「何だ？鳥・・・？」

空から大きな鳥が降りてきた。
シークは鳥を見て目を丸くする。
その大きさは普通ではなかった。
鳥はエステルのいるあたりに止まった。

「あれは・・・！」

「何だ、あれは？」
「魔物？」

いつの間にか宿からユーリとラピードとカロールが出てきていた。
シークと合流したユーリたちは魔物に近付いて行く。
魔物がいる橋には騎士団が倒れていた。

「くっ・・・！ユーリ、エステリーゼ様を頼む・・・！」

隊長服に変わっていたフレンは剣を地面にさして体を起こした。

エステルは倒れている騎士の治療術をかけている。

「・・・あの魔物、エステリーゼを見ていないか？」

シークが魔物を目を見て魔物の見る先にはエステルがいることに気付いて言った。

シークの言う通り魔物はエステルを見ていた。

エステルも魔物が自分を見ていることに気付いた。

ザッザッザッ

足音が聞こえた。足音がした方を見ると騎士団が歩いて来て先頭にはアレクセイの姿があった。

「騎士団長、なぜこちらに？」

「やむを得ん、ヘラクレスをうて」

ユーリたちはエステルに近付く。

『忌まわしき世界の毒は消す』

突然、そんな声が聞こえてきた。その声は魔物の方からだった。

「あの魔物がしゃべったの？」

今度は突然魔物の周りが爆発した。爆発の現況は大きな物体だった。

「あれがヘラクレス・・・」

ヘラクレスは魔物に攻撃するが魔物は避けてあたらない。橋の上にいるユーリたちも安全とはいえない状況だった。

「俺はこのまま旅を続ける」

「え？」

ユーリはエステルにいきなりそう言った。

「お前はどうしたい。帝都に戻りたいならフレンの所まで走れ。決めるのはエステルだ」

「私は・・・」

ユーリの言葉にエステルは悩んだ。

しかし、すぐに何かを決断した表情になって言った。

「私は旅を続けたいです！」

「そこなくつちな」

ヘラクレスの攻撃が橋に当たり、橋にヒビができた。

カロールとシーク、ラピードは急いで街の外の方へ。そのあとに続いてユーリはエステルの手を掴んで街の外の方へ走る。

走っている途中でエステルの目にジュデイスの姿が映った。

ジュデイスは橋が壊れそうなのにも関わらず、慌てずに橋の上に立っていた。

「ジュデイス！危険です！」

「私は心配しなくても大丈夫よ」

「さあ、早く！」
「あら、強引なのね」

エステルはジユデイスの手を掴むと走り出す。
ジユデイスは抵抗もせず、エステルに引つ張られながらも走った。
橋は壊れ、向こうの方にはフレンの姿があつた。
エステルはフレンに向かって大きな声で言った。

「ごめんなさい、フレン！私、やっぱり帝都には戻りません！学ばなければならぬことがありますから！」

「それは帝都に戻ってからでも！」

エステルの声が聞こえたフレンも大きな声でエステルに言葉を返す。
エステルの耳にもフレンの声が聞こえ、エステルもフレンに言い返す。

「帝都ではノール港で苦しむ人々の声が聞こえませんでした。自分から歩み寄らなければ分からない。それをこの旅で知りました。私は旅を続けます！」

フレンがいくら言ってもエステルの答えは変わらない。

ユーリは壊れた橋のギリギリの所まで歩き、フレンに向かって下町の魔核を投げた。

フレンは魔核を上手にキャッチする。

「それ、下町に届けてくれ！」「ユーリ！」

「俺、ギルド始めるわ。ハンクスじいさんや下町のみんなに伝えてくれ。しばらく帝都には帰らないってな」

「ギルド・・・それが君の道か」

「腹は決めた」

「それはかまわないがエステリーゼ様は・・・」

「頼んだぜ」

「ユーリ！」

フレンはユーリにまだ何か言いたげだったがユーリはフレンを無視し、カロルと向き合った。

「言うのが逆になっちまったがよろしくな」

「うん！」

カロルとユーリは互いに手を合わせた。

「仲良くするのはいいが、今はここから離れた方がよい。騎士団も追ってくるはずだ」

「そうだな」

シークの言葉にみんな頷き、ダングレストから離れて行く。

それが新たな物語の第一歩だった。

【第一部 完】

第9夜：新たなる旅立ち（後書き）

ようやく第一部、完結です！

ようやく一段落ついたという感じですよ！

第二部ではメインキャラクター全員の会話が出るので楽しみです。

これからは今まで以上に大変なことになりそうですが、仲間と一緒になら大丈夫でしょう。

PS3に新キャラなどが出て話が少し変わってるみたいですね。

それでは皆さんここまで読んでいただきありがとうございました。

第9・5夜（前書き）

第9夜のオリジナルスキットです。

第9・5夜

【ジュデイスから見た関係1】

ジュデイス

「あなたの彼女、可愛いわね」

ユーリ

「はあ？誰が彼女だって？」

ジュデイス

「違うのかしら？私はてつきり将来を誓い合った仲かと思ったのだけれど」

ユーリ

「全然ちげーよ。シークとは脱獄仲間ってところだ」

ジュデイス

「じゃあやっぱりあの中にあなたの彼女がいるの？」

ユーリ

「違っって」

ジュデイス

「そう。期待してたのに残念だわ」

【槍使い】

シーク

「ジユデイスは槍使いか？」

ジユデイス

「ええ、そうよ」

シーク

「・・・」

ジユデイス

「どつしたの？」

シーク

「いや、私が知っている奴で槍を使う奴がいて、そいつは魔導器を壊して回ってるらしいんだ」

ジュデイス

「あら、そうなの？でも、槍使いなんて世界中にたくさんいるわよ」

シーク

「そうだな……。疑ってすまなかった」

ジュデイス

「じゃあ、私は先に行ってるわ」

(ジュデイス去る)

シーク

「・・・竜もないし、考え過ぎか・・・」

【ジュデイスから見た関係2】

ジュデイス

「ねえ、一つ聞いていいかしら？」

レイヴン

「俺様にどーんと聞いてちょうだい！」

エステル

「何ですか？」

ジュデイス

「貴女達、ユーリの彼女？」

エステル

「ええ！？」

ジュデイス

「違うの？」

リタ

「全く違うわよ！」

ジュデイス

「じゃあやっぱリシックが彼女かしら？」

レイヴン

「ジユディスちゃん、シークちゃんには心に決めた人がいるのよ」

エステル

「ええ！シーク、そうだったんですか？」

レイヴン

「ほら、ケープ・モックでシークちゃんあの男に熱烈に抱き締めてたじゃないの」

シーク

「そうだったのか？」

(周りのみんながシークに気付き引き下がる)

レイヴン

「そうなのよ、シークちゃ・・・」

シーク

「私とあの方はそんな関係ではないと言っている！』フレイムバースト』！」

レイヴン

「ウギヤーツ！」

【綺麗なものには棘がある】

レイヴン

「青年、随分とうらやましいじゃないの」

ユーリ

「は？何、言ってるんだ？」

レイヴン

「両手に花じゃないの」

ユーリ

「花？」

レイヴン

「ジュディスちゃんとシークちゃんを両手に抱えちゃって」

ユーリ

「ああ、そういつことが」

レイヴン

「青年はどっちかに手を出したわけ？」

ユーリ

「手？んなもん出してねーよ」

レイヴン

「青年が手を出さないならおっさんが手を出しちゃつわよ」

ユーリ

「勝手にしろよ」

レイヴン

「そんじゃ遠慮なく！シークちゃん、ジユデイスちゃん！」

(レイヴン、シークとジユデイスの所へ走る)

ユーリ

「手を出すってもあの二人・・・」

(レイヴン、ボロボロで戻ってくる)

ユーリ

「棘があるぞ」

レイヴン

「そうみたいね・・・」

【続・仲良し】

ジユデイス

「あたた達、随分と仲良しなのね」

シーク

「は？」

ラピード

「ワフ？」

エステル

「どうしたらラピードとあんな風にいられるんですか？」

シーク

「いや、私はただラピードに合わせて戦っているだけだ」

ラピード

「ワンツ」

ユーリ

「ラピードも同じだとお」

カロール

「なんか呼吸も合ってたし、いいコンビだね」

シーク

「呼吸までは合わせてないが……」

ラピード

「ワンツ」

ユーリ

「同じく、だよ」

エステル

「何でラピードは私にはなついてくれないんですか？」

ジュディス

「あら？そつなの？でもさすがにそろそろなつくんじゃないかしら。

一緒にいて長いんですよ」

エステル

「そうですね。と、いうわけでラピード、頭を撫でさせてください・
・あね？」

ユーリ

「ラピードならシークと先に行っただぞ」

エステル

「そんな・・・ラピード、待ってください」

(エステル、ラピードを追い走る)

カロール

「やっぱりシークとラピード、呼吸合ってるよ」

【カロルとハイタッチ！】

カロル

「僕たちの勝利！」

シーク

「そうだな」

カロル

「勝ってやることってばあれだよね！」

シーク

「・・・カロル、なぜ右手を挙げている？」

カロル

「あれだよ、あれ」

シーク

「あれ？」

カロル

「勝利の合図のタッチだよ！」

シーク

「やればいいだろ」

カロル

「え？やってくれないの？」

シーク

「なぜ私がやらなければ・・・」

カロル

「そんなあ」

シーク

「・・・今回だけだ。やるからその哀しそうな顔をやめろ」

カロル

「やったー！！」

カロル

「勝利の合図！」

シーク

「やるからには上手くやれ」

カロル

「はいっ！」

パチンツ

カロール

「やったー！」

シーク

「悪くはない」

【可愛い寝顔】

エステル

「シーク、ぐっすり眠ってますね」

カロル

「本当だ」

リタ

「そういえばこんな無防備なの初めて見るわね」

カロル

「ねえ、ユーリ重くない？」

ユーリ

「重くないっていえば嘘になるけど女にしてはけっこう軽い方なんじゃないのか？」

エステル

「ユーリ、そこは嘘でも軽いと言つべきです」

ユーリ

「そうか？でも実際、けっこう軽いぜ」

エステル

「シークの寝顔、可愛いです」

カロル

「そうだよね。シーク、顔は綺麗なのに起きてる時、難しい顔してるから勿体ないよね」

リタ

「おっさんがいなくて良かったわね」

エステル

「え？なぜです？」

ユーリ

「確かにな。今のシークを見ればおっさん、何するか分かんねえしな」

カロル

「確かに。レイヴンならやりかねないね」

リタ

「ま、仮にやったとしても起きた時、シークにボコボコにされるのがオチだけど」

ユーリ

「だな」

カロル

「自業自得だけど、どっちかっていうとレイヴンの方が心配だよね」

エステル

「あの、そこはシークの心配をすべきでは・・・」

ユーリ

「エステルはおっさんが無事だという保証があるのか？」

エステル

「いえ、やっぱりレイヴンの方が心配かもしれません」

ユーリ

「だろ」

【大きな鳥】

カロル

「さっきの鳥、大きかったよね」

ユーリ

「そうだな」

シーク

「人の言葉も話していた」

カロル

「あの鳥ってやっぱり魔物なのかな？」

ジュデイス

「さあ？どうなのかしら」

エステル

「・・・」

シーク

「エステリーゼ、先程から黙っているがどうした？」

エステル

「さっきの鳥、私を“毒”と言っていました。どういふことなのでしょう？」

ジュデイス

「・・・」

ユーリ

「そればかりはあの鳥に直接聞かないとな」

エステル

「……はい、分かっています……」

【ジュデイスとの再開】

ジュデイス

「みんな、またよろしくね」

カロル

「うん！」

エステル

「はい、よろしくお願ひします」

ラピード

「ワンツ」

シーク

「・・・」

エステル

「シークもちゃんと挨拶してください」

シーク

「いつまで一緒か分からないが、よろしく頼む」

ジュデイス

「ええ、よろしくね」

ユーリ

「ジュデイ、相棒はどうしたんだ？」

ジュデイス

「別行動中よ」

カロル

「ジュデイスの相棒ってどんな感じ？」

ジュデイス

「頼りになるいい子よ」

エステル

「もし会ったらちゃんと挨拶しませんと」

シーク

「別々に行動している。いつ会えるか分からないうえに会えないまま旅を終わらせるかもしれないぞ」

カロル

「別に今から会えない話をしなくても・・・」

ジュデイス

「会えるといいわね」

エステル

「はい」

【昨夜の出来事】

シーク

「ユーリ、昨夜のことだが・・・」

ユーリ

「ラゴウのことか？」

シーク

「それは過ぎたこと。今さら掘り返すつもりはない」

ユーリ

「じゃあ、俺がお前を抱いたことか？」

シーク

「・・・そつだ」

ユーリ

「別にラピードぐらいしか見てないからいいだろ。気にすんな」

シーク

「確かにあれも過ぎたことだが、今でも気になる」

ユーリ

「お前が過ぎたこと気にすんななんて珍しいな」

シーク

「やはり初めてだからか、気になって・・・。わ、私、重いだろ？」

ユーリ

「なに、言っただけ？お前を抱えるの3回目だぞ」

シーク

「そうだな……。そのことは誰にも言つな。特にレイヴンには」

ユーリ

「分かったって（取り乱してんな）」

【ロアの役割】

シュデイス

「ねえ、シークの肩に乗ってる子は何かしら？」

エステル

「シークの友人でロアといいます」

ジユデイス

「そう。よろしくね、ロア」

ロア

「パイ」

カロル

「でも、なんで最初からシークといなかったんだろ？」

シーク

「ロアは私に仕事を運んできてもらっている」

カロル

「仕事？」

シーク

「色々な街に行き、依頼者からの手紙を加え、私に持ってきてもらっている。いわば、伝書だ」

ジユデイス

「でもどうやって依頼者から手紙を貰うのかしら？」

シーク

「色々な街に箱を置いてある。それを数日の間、ロアには調べてもらっている」

カロル

「それってただの雑用……」

シーク

「そこは言わない約束だ」

【食事当番は？】

ユーリ

「今日の飯、うめえな」

エステル

「お城の料理より美味しいです」

ユーリ

「カロル先生もやればできるな」

カロル

「え？僕はてつきりジュデイスだと思ったけど」

ジュデイス

「私はエステルが作ったのかと思ったこと」

エステル

「私はユーリだと思ってました」

ユーリ

「違っつてことはまさか・・・」

シーク

「私を作った」

カロル

「え！シークって料理できたの!？」

シーク

「人並みには」

ユーリ

「ずっと料理しないから料理できないのかと思ったぜ」

シーク

「しなだけでできないとは言っていない」

ジユデイス

「みんなできないと思ってたから料理当番表にシークが含まれてなかったのね」

エステル

「次からシークも料理当番に含まれますね。良かったです」

シーク

「料理をする面倒を良かったと言っべきなのか？」

第9・5夜（後書き）

これで本当に第1部が終了です。

PS3でヴェスペリアが新しくなって出ますね。

PS3では新しい仲間のパティやフレンが加わりますね。

この小説はXboxで進めていきます。

買うかはまだ未定のPS3の方を書くとしたら短編という形になるか、新しく書くという形になると思います。

では、ここまで読んでいただきありがとうございます。

第10夜：新たな目的（前書き）

第2部スタート〜ヘリオード

第10夜：新たな目的

騎士団から逃げるためダングレストから離れたユーリ一行。しばらく走りある程度ダングレストから離れた。

「ねえ、少し休憩しようよ」

「大丈夫ですか？カロール」

カロールはかなり疲れた様子。

心配したエステルはカロールに声をかける。

「騎士が追いかけて来ているのではないのか？」

「その心配はないわ。誰も追いかけて来てないみたいだから」

シークの心配をよそにジュデイスはそう言った。

ジュデイスの言葉に不思議に思ったエステルはジュデイスに話かけた。

「どうして分かるんです？」

「・・・勘かしら」

「勘？」

「ま、なんにしてもここなら大丈夫そうだし休むか」

「そうだね。休んだらギルドのこと話し合わないと」

「休みたいのはカロール先生だけだな」

「あなたたち、ギルドをつくって何をするの？」

「何をする、か・・・」

ジユデイスがそう質問するとユーリは考えた。

カロルは何をするのかはつきりしているようでカロルは答えた。

「ボクはギルドを大きくしたいな。そしてドンのようにダングレストを守るんだ。それが街を守るドンへの恩返しになると思うんだ」

「俺は首領についてくぜ」

ユーリはカロルを見てそう言った。

カロルは首領を言われて動揺した。

「え！ボクがボ、首領！？」

「言い出しっぺはお前なんだからお前が首領だろ」

「う、うん！まずは何からやるうっか」

「落ち着けて」

「うん！」

興奮しているカロルにユーリは落ち着くように言ったがカロルはまだ興奮していた。

「うふふ。ギルドって楽しそうね」

「こんなギルドもあるのか・・・」

そう言ったジユデイスとシークにエステルは思い付いたことを二人に言った。

「ジユデイスとシークもギルドに入ってはどうです？」

「あら、いいのかしら。ご一緒して」

「ギルドはそんなに簡単ではないのだが」

「そうだよ。ギルドには掟があつて掟を守ることが一番大事なんだ。掟に反したら厳しい処罰を受ける。たとえ友達でも兄弟でも。ギル

ドは掟を誇りにしてる。だから誓いをたてずにギルドに入ることはできないんだ」

「ではこのギルドの掟は何です？」

エステルは小首を傾げて言った。

「それは・・・」

「お互いに助け合う。ギルドのことを考えて行動する。人として正しい行動をする。それに背けばお仕置きだな」

「え・・・」

カロルはユーリの言ったことにぼかんとした。

「1人はギルドのために、ギルドは1人のために。義をもつと事をなせ、不義には罰を」

エステルはそうユーリの言った掟にそう言い直した。

「掟に反しないかぎり是个々の意志は尊重する」

「ユーリ、それ・・・」

「だろ、首領」

「うん！それがボクたちの掟！」

「今からは私の掟でもあるのね」

ジュデイスはそう言った。

それはカロルのギルドに加入の意味をする。

「そんな簡単に決めていいのか？」

ユーリがジュデイスにそう言うと、ジュデイスは頷く。

「ええ、気に入ったわ。誓いを立てさせて。私と……あなたたちのために」

「相棒はどうすんだよ」

「彼なら大丈夫よ」

「相棒って？」

カロルは小首を傾げてジユデイスに尋ねた。

「前に一緒に旅をしていた友達よ」

「……ギルドは1人のために、1人はギルドのために……かなかなかおもしろい掟だな」

シークは呟きながら掟を言い、掟についての感想を述べた。

「じゃあシークも……」

「だが、私は遠慮させていただく」

カロルが『シークも入るんだね』と言う前にシークは『ギルドには入らない』と言った。

カロルはシークが入らないことになって残念そうだった。

「私は……」

「今日はとりあえず休むか」

「そうだね。クタクタなの忘れてたよ」

エステルが何かを言おうとした時、ユーリはエステルの言葉を遮り、休むように言った。

夜、シークは焚き火から少し離れた場所に座っていた。肩にはロアが乗っている。
するとユーリがシークに近付き話かけてきた。

少し間が空いたあと、ユーリはシークに質問した。

「・・・お前、何で俺たちと一緒にいるんだ？」

「別に、新しい仕事上」

「新しい仕事って何だ？」

そう言いながらシークの隣に座るユーリ。

シークは手紙を出し、ユーリに渡した。

ユーリは手紙の中身を見る。

キルト・ト・マ・マレンヘ

「幸福の市場の護衛の仕事。カプワ・トリムに来て欲しいらしい」

「なるほどな。行き先は同じ方向だから途中まで一緒ってわけか」

ユーリは手紙の中身を読み終わるとシークに手紙を返した。

手紙を受け取ったシークは手紙を仕舞う。

「カプワ・トリムに行くまではお前たちの厄介事に付き合ってもいいと思っている」

「そうか……。お前も物好きだな」

「少し前ならそんなもの、気にしなかつたんだが……。人とは変わるものだ」

「今日は見張り番はしなくていいぞ」

「そうか……。ではゆっくり休むとしよう。おやすみ」

「おやすみ」

ユーリはシークにそう挨拶するとユーリはシークから離れ、エステル
の所へ行った。

次の日

「エステルはどうするんだ？」

ユーリは突然エステルにそんな質問をした。

エステルはみんなを見て答える。

「私はあの喋る魔物を捜します。なぜ私が狙われたのか気になりま
すし……」

「でもどこにいるのかもわからない魔物をどうやって捜すの？」

「魔物はカロルの専門だろ」

「あんな化け物、ボクも見たことないよ」

「化け物ではなくてあの子はフェロー」

ジユデイスの言った言葉にみんなはジユデイスに注目した。

ジユデイスはみんなに背を向けてダングレストで見た魔物について話した。

「知っているんですか？」

「前に一緒に旅をしていた友達と見たの。友達が彼の名前を知ってたわ」

「見たってどこですか？」

「デズエール大陸にあるコゴール砂漠よ」

エステルは何かを思い付いたような顔をして、そのことを口に出した。

「もしかしておとぎ話の・・・」

「おとぎ話？」

それまで全く会話に入らなかったシークが口を開いたことで初めて会話に入った。

「おとぎ話とは砂漠に住む人の言葉を使って話しかけてくる魔物のことか。他にも海の中から語りかけてくる声なんかもあるがただのおとぎ話だろ」

「それはきつと逆ね」

「逆？」

「実在するから、その一部を見た内容を物語にしたってこと」

ジユデイスはユーリたちの方を向いて言った。フェローについて一

通り話し終えたらシークはエステルを見て口を開いた。

「エステリーゼ、まさか一人で砂漠に行くつもりか？」

「えっと・・・それは・・・」

シークの言葉に戸惑うエステル。どうやら凶星らしい。

そのことにユーリは呆れている様子。

「マジで1人で行くつもりだったな」

「ならばエステリーゼの護衛をギルドの初仕事にしたらどうだ？」

「そっか、エステルを1人で行かせたら掟に反するね」

「そうということね」

カロルは右手に拳をつくりを高く上げて元気よく言った。

「勇気凛々元気いっぱい団、出発〜！」

「は？」

「何ですか、それ？」

カロルの言った謎の単語にみんなは首を傾げてカロルを見た。

「ギルドの名前だよ」

「ギルドの名前・・・だったのか・・・」

シークはそう言ってため息をついた。

「だめです！名前をつけるときにはズバツと言いやすいのをつけなくては」

「じゃあ、どうしよう」

エステルの言ったことを真に受け、カロルはユーリを見て悩んだ。

ユーリは俺を見るなよという顔をし、肩をすくめた。
するとエステルから提案が出た。

「凛々の明星はブレイブヴェスperiaどうです。夜空で最高の輝きを放つ星です」

「一番の星か・・・」

「じゃあそれに決定だね。改めて凛々の明星、出発！」

カロルは再び右手に拳をつくり手を上げて元気よく言った。
カプワ・トリムで船に乗って行かなければならない為、途中にある
ヘリオードに魔導器の様子を見るついでに寄ることになった。

ユーリたちがヘリオードに着いた時にはすっかり辺りが暗くなっていた。

ヘリオードに着いた一行はすぐに異変に気付いた。

「人の数が前に来たときより減っているな」

「もしかしてあの噂、本当だったのかな？」

「噂ってなんです？」

カロルが何か知っている様子だったのでエステルが小首を傾げてカロルに尋ねた。

「人が突然消えるって噂」

「その噂なら私も聞いたことがある。ただの噂と思って無視してたが……本当だったとは……」

カロルとシークがそう言ったあとにユーリはエステルの顔を見て言った。

「ほっとけない」

「え？」

「って顔、してるぞ」

「だってほっとけないじゃないですか」

「とりあえず今日は暗いし、調べるのは明日でもいいだろ」

エステルは今すぐ調べたかったが、みんなに押しきられ調べるのは明日にして今日のところは休むことにした。

夜。

宿の部屋のベッドで眠っているカロルとエステルが姿があった。ベッドの数が足りないせいかユーリはソファアの上で眠っていた。シークにいたっては床の上で座ったまま眠っている。

ギィ・・・バタン

扉が閉まる音が聞こえた。

ユーリはその音に反応して目を覚ます。

「・・・俺も“ほっとけない病”だな」

ユーリはそう言って立ち上がり、部屋を出ていった。

ユーリが部屋を出て行ってすぐにシークは目を開き、立ち上がった。

「・・・ようやく行った、か。エステリーゼとカロールはともかくユーリとジュディスは油断ならないからな。私が起きるとすぐに気付く」

シークは剣を手に持つとエステルを見た。
エステルはよく眠っている。

「フェローが言っていたことが本当ならばやはりエステリーゼは・・・」

シークはゆっくりとエステルに近付いて行こうとし、2、3歩足を進めたその時。

「フフウ」

ラピードの声に反応し、その足を静止させてラピードの方を見た。
ラピードは伏せたままシークを見ている。

「ら、ラピード・・・」

シークは目を閉じ、すぐに目を開けると剣を持って扉の方へ歩いて行った。

扉の前に立つと振り向かずにラピードに言った。

「少し、散歩してくる」

そうラピードに告げると部屋を出て行ってしまった。

シークは宿の外に出たあと、すぐに人気のない場所まで走った。人気のない場所まで来ると、そこに座った。そして、自分に言い聞かせるように呟いた。

「焦るな……。焦りは禁物だ……」

そう何度も呟き、呟きは終わると自分の首にある石を優しく握った。しばらくシークはその状態を続けると立ち上がり宿へ戻った。

宿に戻り部屋の扉を少し開け、中の様子を覗いた。

エステルとカロルはよく眠っている。

次にソファアの方を見た。

そこにはユーリの姿がある。

それも確認してシークは部屋の中に足を踏み入れる。

「夜中の散歩か？」

「！」

声が聞こえたのでシークは驚き声が聞こえた方を見るとユーリが起き上がり、シークを見ていた。

「・・・目が覚めたから散歩をしていただけだ」

「散歩をするにはあわててたな」

「・・・気付いていたのか？」

「たまたま見かけただけだ。宿に戻ろうとしたらお前が出ていったからな。本当に散歩か？」

「・・・・・・・・」

シークはユーリから視線を反らし、口を閉じた。

「別に言いたくないならいいけどな」

「すまない・・・」

「俺、寝るわ。お前も早く寝ろよ」

ユーリはそうシークに言うともう一度ソファアの上に横になった。その後すぐにシークも眠りについた。

日が昇り、宿を出て街の様子を見ていた。

「あ！あの時のお姉ちゃん」

子供の声が聞こえてきた。

声が出た方を見るとそこにはカプワ・ノールで会った夫婦の妻“ケラス”とラゴウの屋敷で助けた子供“ポリー”の姿があった。ケラスは深々と頭を下げた。

「あの時はありがとうございました」

「どちら様？」

「前にノール港で助けたんだよ」

事情の分からないジュデイスにカロルは完結に説明した。

「お父さんは一緒じゃないの？」

エステルがそうポリーに尋ねるとポリーは一気に表情を暗くした。ポリーの代わりにケラスが質問に答えた。

「主人は行方不明で・・・」
「なるほど、あの噂も全くの嘘、というわけではないな」

シークはそんなことを言っただけで噂が本当だと知ると納得した様子だった。

「手がかりはないのか？」

「はい。行方不明になる前も貴族になろうと働きに出て・・・」

ケラスの言葉にシークは疑問に思い、ケラスに質問した。

「どうやって貴族になるんだ？」

「この街が完成したら私たちを貴族としてこの街に住めるんです」

「それ、ちよつとおかしいです」「え？」

ケラスの答えにエステルは否定した。

エステルが否定したことでケラスは不思議に思った。

「貴族は帝国に対する功績をあげ、皇帝陛下から信認を得ることができた者に与えられる、です」

エステルの話を聞いてケラスは驚いた。そして、貴族になれなかったのがショックなのか悲しい表情をする。

「誰だ？そんなでたらめを言った奴は？」

「キュモール様です。この街の現執政官代行の」

「キュモールの野郎か・・・」

「でもそれが嘘だとしたらティグルは・・・？」

話を聞いていたポリーはケラスの服をギュッと掴んで更に悲しい表

情をした。

「お父さん、帰ってこないの？」

エステルはユーリを見てユーリに話にくそくに話かけた。

「あの、ユーリ……」

「ギルドで引き受けれないかって言うんだろ？」

「報酬は後で私が一緒に払いますから」

ユーリはカロルを見た。

ユーリに合わせてエステルもカロルを見る。

「えっと……じゃあ、いいよ」

「私は無関係だからこの件に関わる必要はないのだが……手伝おう」

「無関係なら無理に関わる必要はないんじゃないかしら？」

ジュデイスが目線だけシークの方へ向けてシークにそう言った。

シークはジュデイスの方を向いて答える。

「キュモールって奴が気に入らない」

「そう。次の仕事は人捜しね」

ジュデイスはシークの答えに納得したのかそれ以上はシークに追及しなかった。

「え？ですが……」

突然のことで困惑するケラス。

「キユモールが馬鹿やってんなら殴って止めねえとな」

「あくまで行動は慎重にね。騎士団に睨まれたら僕らみたいな小さなギルド簡単に潰されるから」

「了解」

どうやら依頼として受けることが正式に決まり、それが分かるとケラスは頭を深々と下げた。
そして礼を言う。

「ありがとうございます」

エステルはポリーの頭を優しく撫でた。

「お父さん、見つけてあげるからね」

「うん！ありがとう！」

ポリーはようやく笑顔を取り戻した。
ケラスとポリーは去って行った。

「探すにしてもアテがあるのか？」

「あそこが怪しいわよ」

ジュデイスは騎士が前に立っているリフトの方へ指を指した。

「そうか・・・」

シークは剣を持ってリフトの方へ足を進めた。

その行動にカロルは驚き、ジュデイスは笑っていた。

カロルはあわててシークを止める。

「僕言ったよね！慎重って言ったよね！」

「だがあの騎士をどうにかすれば問題はない」

「さすがにそれはどうかと思っぞ」

シークは剣を仕舞った。

「どうやら強行突破をやめたらしい。」

「ならばどうするつもりだ？」

「とにかくさ、見張りを連れ出せばいいんだよ」

「どうやってです？」

カロルは連れ出す方法を考え、一つの方法を思い付いた。

「・・・色仕掛けとか？」

「誰がやるんだ？」

「あなたが決めればいいんじゃないかしら？」

ジユデイスがユーリに決めるように言うとユーリはラピード以外の仲間を一通り見た。

そしてシークの所で目を止めた。

「（・・・いやな予感が・・・）」

その視線に気付いたシークはそんなことを思っていた。

「シークで良くないか？」

「（予感が的中した）なぜ私が・・・」

「シークなら大丈夫ですよ！」

「女らしくしたことなんてないぞ」

シークはどうしてもやりたくないようで何とか反論している。

「大丈夫よ。そこは私たちがなんとかしてあげるわ」

「ジュディ、やる気満々だな」

「おもしろそうなもの」

「こういうことはジュディスが適任ではないか？」

「私じゃ適任すぎておもしろくないわ」

「かわいさを追及するならカロールを・・・」

「ぼくにやれって言うの!？」

カロールはシークの発言に驚きと怒りが同時に表れた。

「エステリーゼもなんとかすれば色仕掛けできるのではないか？」

「それ、私が出来ないと言っているみたいです」

エステルはシークの言葉に落ち込んだ。

反論の予知がなくなったシークは逃げようとしたがユーリに腕を掴まれた。

「やったたらこれ、返してやる」

ユーリはそう言ってシークの大切にしていた首飾りを見せた。

シークはその首飾りを見た瞬間、自分の首を見て初めて石が無いことに気付いた。

「いつの間に・・・仕方がない・・・」

シークは諦めたのか色仕掛けを承諾した。

「このこに似合う服が欲しいんだけど」

店に行き、服を注文する。

着替えてから騎士を誘惑するみたいだ。店の人はシークを一通り見る。

「そのこに似合う服ねえ。どんなのがいいの？」

「スカートは断固反」

「スカートがいいわ」

シックは『スカートは反対』と言い終わるまえにジュディスがシークの言葉を遮り、『スカートがいい』と言った。

「・・・」

「シックのスカート楽しみです」

「そうね」

女三人の様子を見ていた男二人と一匹。

「なんか、表情が明るいのと暗いのに別れてるね」

「そうだな」

「ワンツ」

その後、ジュディスとエステルを中心に服のデザインを注文した。服を着る本人は隅でロアに愚痴っていた。

その後、服の材料を集め、服を作ってもらった。

「・・・屈辱だ・・・」

「フフ・・・似合ってるわよ」

シークの着せられたのはウェディングドレスの下が短くなったものだった。

白いドレスは首から続いて行って胸や背中を出さないようになっており袖がなく、白いウェディング用の手袋は肘よりも長い。

下は前の方は膝よりすぐ上のところまでの長さである。

腰にはリボンが結ばれていた。

そして、シークの長くない髪は2つに結ばれていた。

「エステルの言う通りお色気よりかわいさを重視して正解ね」

「シーク、可愛いです」

「すごい！シークが別人に見えるよ」

「人は見た目もすごく変わるな」みんなが喜び、シークに色々言っている間もシークは表情は暗かった。

そして、“お色気作戦”をするため、外に出る。

みんなは噴水の後ろに隠れて様子をつかがい、シーク1人だけが見張りをしている騎士の方へ足を進めた。

「・・・あの」「なにか・・・」

「!?!?!」

声をかけたシークに騎士はシークを見て驚いている様子だった。

「あ、あああの、わ、私になにかご用ででですか？」

騎士は緊張しているのかかなり動揺しているのがしゃべり方ですぐにわかった。

「実は大切な方からいただいたペンダントを亡くしてしまいました・・・見ていませんか？」

「みみみみ見ていませんか？どどどどどうしました？」

「今日、婚儀がありましてそれをして行こうと思いましたが・・・私、あれないと・・・」

シークは騎士に話していくうちに表情を暗くしていった。

騎士はそんなシークを見て何を思ったのか突然シークの手を握った。

シークはいきなり握られ驚いた。

しかし驚きは顔には出さないようにした。

そして騎士はシークに話かける。

「悲しまないでください。私も一緒にお探しします」

「あ、ありがとうございます・・・。私はこの辺りを探しますのであなたは向こうを探してくださいませるか？」

シークはそう言って噴水の奥の方を見た。

「はい、お任せください」

騎士はそう言って持ち場を離れ、噴水の奥へ歩いて行った。

ドカツバキッ

そこを狙って噴水に隠れていたユーリたちは騎士を殴り気絶させた。
シークはユーリたちと合流する。

「騎士が自分の仕事をほったらかしにするとは……」

シークは少し信じられないような顔をして気絶している騎士を見た。

「シークすごかったです」

「本当だね。ボク、ビックリしたよ」

「以外と演技派なのね」

「ワンッ」

シークはみんなが自分を誉めていることに驚いていたが、表情は暗かった。

「……これは喜ぶべきところか？」

「ま、とにかくすごかったな」

ユーリはそう言ってシークに首飾りを返した。

シークはユーリから強く奪い取ると素早く首につけなおした。

シークが首飾りをつけなおしている間にジュデイスは倒れている騎士から鎧と兜を剥ぎ取る。

「何してんだ？ジュデイス」

「騎士の格好したほうが動きやすいでしょう？」

「そうですね。それで誰がやります?」

「ユーリがやれ」

「は?」

誰がやるのかこれから話し合いをしようとしたが、話し合う暇も与えずシークはユーリを指名した。

「私がこんな格好をすることになったのはお前の責任だ。だから次はお前がやれ」

「・・・お前って意外と根にもつタイプだな。分かった、俺がやる」

ユーリはそう言って今着ている服の上から鎧を装着したが、兜は被らなかつた。

ユーリが鎧を装着している間にシークはウェディングドレスを脱ぎ、荷物の中に綺麗にしまった。

シークが着替え終わるころにはユーリも鎧を装着していた。

「よりよって騎士の格好かよ」

「ユーリ、似合ってますよ」

そんな他愛のない話をしていると騎士があわててやってきてユーリに言った。

「おい、こんなところで何やってるんだ!」

「どうした?」

「捕らえた魔導士が暴れて手がつけられない!手伝ってくれ!」

「魔導士・・・暴れる、まさかな」

騎士の話聞いてシークはその暴れた魔導士について考え小さく呟いた。

「分かった。ちょっと行ってくる」

ユーリは騎士と一緒に走って行ってしまった。
残されたエステルはユーリを心配した。

「ユーリ、大丈夫でしょうか？」

「彼なら大丈夫よ」

心配するエステルをよそにジュディスは大丈夫であると言った。

ドゴンッ

騎士団本部から激しい音がした。
気になったエステルたちは騎士団本部へ足を進めた。

窓から中を覗くとユーリがおそらく暴れていたという魔導士の腕を掴んで止めている・・・様子だった。
エステルはその魔導士を見て驚きと喜びが同時に表情に出た。
そして中へと入って行く。

中は魔導士が倒したと思われる騎士が倒れていた。

全員息はしていたため命に別状はないようだ。

「リタ！」

暴れていた魔導士・・・リタはエステルを見て驚いた。

エステルはリタの手を握る。

「とりあえずここから出ないか？」

「そうだね。いつまでもここにいたら新手の騎が来て土危ないかもしれないし」

ユーリとカロルが騎士団本部から離れることを提案するとみんなはその提案に賛成した。

ユーリは騎士の格好をやめ、リタと改めて話し合いをした。

「リタはどうしてここにいますか？」

「この魔導器が気になってたから調査の前に調べておこうと思っ
て・・・」

やっぱりリタはリタだとみんなは頷いていた。

「それで面倒なことに首を突っ込んだってか。面倒な性格してんな」

「だって夜中にこっそりと魔導器が労働者キャンプに運び込まれて
たから、その時点で怪しいでしょ」「それでこそそこそ調べ回って
たことか」

「それで捕まっただ」

「だって魔導器、怪しい使われ方してたし、そしたら無理矢理人を
かりたてて働かせて・・・」

リタの話聞いていて全員の表情が険しくなった。

「リタの話が本当ならもしかして・・・」

「当たり前なことだな」

「きつとティグルさんもそこで無理矢理・・・そんなの許されませ
ん」

エステルは拳を強く握りしめ、表情を強ばらせた。

そんなエステルに対し、ユーリはあくまでも冷静だった。

「リタ、お前が見た魔導器ってどんなやつだ？」

「兵装魔導器よ。あんなに集めてどこかに攻めるのかしら」

「まさかダングレストを!？」

カロルは攻められるのがダングレストなのではないかと考えると顔

を青くした。

「今は友好協定が結ばれています!」

「キュモールのことだそんなこと何とも思っていないだろ」

ユーリはそう言って顔を険しくした。

すると突然カロルはユーリに質問した。

「ユーリその人知ってるの?」

「お前も前に一度カルボ・クラムで会っただろ」

「ああ、あの気持ち悪いしゃべり方してたひとだね」

カロルはカルボ・クラムで会ったキュモールを思いだしそう言った。

「話し込むのもいいけれどやることがあるんじゃないかしら?」

「そつだ! ティグルさんたちを助けなきゃ!」

ジユデイスに言われカロルは思い出したよつい声を上げた。

エステルはやることを指を折りながら確認していった。

「強制労働させられている人を助けて・・・魔導器を回収して・・・

回収した魔導器を捨てて・・・」

「魔導器は捨てちゃダメ。ちゃんと管理しないと」

リタは魔導器を捨てることを反対し、管理するように言った。

「アスピオの魔導士に連絡を・・・」

「慎重に行こうよ」

話を大きくしていくエステルにカロルはストップをかけた。

「とにかく行動しなければ何も始まらないだろう」
「そうだな。とりあえず労働者キャンプに行くぞ」

ユーリが合図をするとリフトの方へ足を進めようとしたとき。

「隠れる！」

リフトの前でキュモールとキュモールの仲間と思われる人間が立って話をしていた。

ユーリたちは見つからぬように隠れて様子を伺った。

「オー！マイロード、本当にゴゴール砂漠に行かなくていいんですか？」

「フン、アレクセイの命令に耳なんて貸す必要ないね。僕はこの金と武器ですべてを手に入れるのだから」

「このしゃべり方・・・」

シークはキュモールの仲間と思われる人間は変わったしゃべり方を
する青い髪の男に何か気付いた様子だった。

「その時はミーの海凶シヴァイアサンの爪を誉めて欲しいデース」
「分かってるよ、イエガー」

キュモールが男の名前らしきものを口にした。
男はイエガーというらしい。

「ミーの集めたウエポンでユニオンにアタックです！」

「フン、ユニオンなんて眼中にないね！」

「ドンをあなどってはノンノン。彼はワンダホーなナイスガイです。それをリメンバーです」

「おや、ドンを尊敬しているようだね」

「尊敬はしてます。バット、海凶の爪の仕事は別デース」

「フフ、僕は君のそういうところが好きさ。でも心配ない。ボクは騎士団長になる男さ。ユニオン監視しろってアレクセイも馬鹿だよ。そのくせ友好協定だって」

「イエー、オフコース！」

二人が話している間にリフトが上がってきて二人はリフトの上に乗る。

「ユニオンなんかボクが潰してあげるよ。君たちから買った武器でね。ボクがユニオンなんかにひざまつくわけなんかないんだ！」

「フフ・・・イエース、イエース・・・」

リフトが下に降りるまえにイエガーは隠れて様子を伺っていたユーリたちを一瞬見た。キュモールとイエガーが下に降りたのを確認するとユーリたちは緊張の糸を切り、リラックスした。

そしてリフトの前まで歩いて行った。リフトが来るまでの間、リタはみんなに話かけた。

「あのイエガーとかいう男、こっち見てたわよ」

「俺たちのこと、気付いてたな」

「あの男が私の知るイエガーならば気付かぬはずがないと思ったが・・・」

「シーク、その男知ってんのか？」

シークの言葉に疑問を抱いたユーリはシークに聞こうとした時、リフトが来てユーリは答えを聞けずにリフトに乗った。

リフトから降りてすぐのことだった。
キュモールの声が聞こえたのだった。
一同は隠れて様子を伺う。

「ほら、働けよ！お金ならいくらでもあげるよ！」

見たところ、キュモールが誰かを蹴っているようだ。

「ねえ、あの人ティグルさんじゃない？」

カロルの言う通りキュモールに蹴られている人物はティグルだった。

「愚民のくせにボクに逆らう気？働けよ！」

そのキュモールの行為に嫌気がさしたのかカロルやリタ、エステル

だけでなくユーリとジュデイスまでもが顔をしかめた。
エステルが飛び出そうとした時。

ドカッ

いつの間にかシークがキュモールのところまで行き、キュモールをおもいつきり殴ったのだった。
ユーリたちは驚きつつもシークと同じようにキュモールたちの前に姿を現した。

「くっ！愚民のくせにボクに傷をつけるなんて・・・！」

キュモールがシークを傷付けようと剣を抜こうとしたその時。

「よしなさいっ！」

「ひ、姫さまっ！？」

エステルが飛び出していった。

その行動にはユーリたちもシークも驚いた様子だった。

キュモールにいたっては驚きと同時に顔も歪めた。

エステルが出ていったため、ユーリたちもキュモールの前に姿を現す。

キュモールはさらに驚く。

「ユーリ・ローウェル！どうしてここに？！」

厳しい顔でエステルがキュモールに向かって言った。

「あなたのような人に騎士を名乗る資格はありません！力で帝国の威信を示すようなやり方は間違っています。その武器を今すぐ捨てなさい。騙して連れてきた人々もすぐに解放するのです！」

エステルに言われ、後退りをしたキュモールの目はエステルだけでなくエステルの周りにも向かれた。

周囲を固めているのがユーリたちだけだと確認すると、いやらしげな冷笑が浮かんだ。

「世間知らずの姫さまが……どうせ行方不明ってことになつてるんだし、この場で消えてもらっていいかもね。理想ばっか語つてむなくそ悪いんだよ！」

ユーリが剣の柄に手をかけ、皮肉っぽく返した。

「騎士団長になろうなんて妄想してる奴が何言つてやがる」

キュモールは背後で成り行きを見ていたイエガーに視線を向けた。

「イエガー！ やっちゃいなよ！ ただしあの女は生かしておくんだよ。ボクの顔に傷をつけたんだ。ボクが自ら苦しめて殺してあげるよ」

キュモールはそう言つてシークを指差した。

「オーケー、マイロード」

イエガーはそう言いながら武器である鎌を取りだした。

イエガーが合図をすると海凶の爪の部下が現れ、ユーリたちに襲いかかる。

ユーリたちも武器を取りだし立ち向かう。

シークがイエガーと戦い、ユーリたちは海凶の爪の部下と戦う。
イエガーは戦っている最中にシークに話かけた。

「久しぶりデス、ストロングガール」

「まったくだ。紅の絆傭兵団を辞めてからは会わなくなったからな。
まさか、こんな所で会うとは・・・」

そんな二人の様子をユーリたちは戦いながら傍観していた。

「如月！」

「ブレードロール！」

リタとジユデイスがそれぞれ攻撃して敵を倒した。

「あの二人、知り合いみたいね」

「てか、あいつ知り合い多すぎ」

ユーリも敵に止めの一撃をさす。

「爪竜連牙斬！ とりあえずザコは倒した。あとはあいつだけだ」

そう言ってイエガーを見た。

ユーリたちもイエガーの所へ行こうとしたその時

。

「キュモール様！」

リフトから一人の騎士がキュモールの名を呼びあわてて駆け出して来た。

騎士はキュモールの前に立ち止まると呼吸を整えてキュモールに報告した。

「フレン隊です！フレン隊がこの街に！」

「フレンが……！！！」

騎士の報告が聞こえたエステルは目を見開いた。

「さっさと追い返しなさい！」

キュモールの命令に首を横に振る騎士。

「ダメです！ここを調べさせるの一点張りで……押しきられそうです！」

「くっ、下町育ちの恥知らずめ……！！！」

キュモールは地団駄を踏んだ。

それを見たイエガーはシークを相手に大きく鎌を振った。シークは攻撃を避けるため、反射的に後ろに下がった。

その隙を狙ってイエガーは指を鳴らし、

「ゴーシュ、ドロワット」

と人の名を呼んだ。

「はい、イエガー様！」
「やっと出番ですよ」

イエガーの呼び声に応えて、近くにあった小屋の屋根から二人の少女が飛び降りてきて、イエガーを庇うようにイエガーの前に立ちはだかった。

「ここはエスケープするのがベター、オーケー？」
「あいあいさ」

二人の少女がユーリたちの足元に何かを投げつけると地面にぶつかって何かが炸裂した。煙玉のようだ。

「さあ、こちらへ！」
「逃げるや逃げる！すたこら逃げる！」
「今度会ったらたたじゃおかないからね！」

ユーリたちの目を眩ませている間、キュモールたちは逃げてしまった。

「早く追わないと！」

煙が晴れるとエステルはそう言った。
しかし、そんなエステルをカロールが止める。

「待って！街の人たちを助けるのが先じゃないの？」
「で、でも……」

シークは数歩前に出た。

「お前たちが街の人間を助けるなら私とはここで別れることになる。あのキュモールとかいう騎士が気に食わないからあいつを追いかける」

「どうすんのよ。追うの？追わないの？」

リタがユーリにたずねる。

ユーリも一瞬考えこんだが、向こうの方から複数の足音が近づいてきた。

続いて凜とした声が響いた。

「おとなしくしろ！そこまでだ！」

「ちようどいいところに」

「ユーリ?!」

響いた声の主はフレンだった。

フレンはユーリを見るなり驚いていた。

「ここは任せた！」

「待て、ユーリ！エステリーゼ様は……！」

フレンが言い終わるまえにユーリはさっさと行ってしまった。

先に行ったユーリをラピードがすぐに追いかけて、シーク、カロール、リタ……とユーリのあとを追う。

エステルはフレンに一礼をしてから追いかけた。

しばらくキュモールを追いかけたが、まったくキュモールの姿が見当たらない。

それどころか海凶の爪の姿すらも見当たらない。

ユーリたちは道の真ん中で足を止めた。

「・・・逃がしたか」

シークがため息をついて呟いた。呟いたあとシークは続けてみんなに聞こえるように言った。

「これはキュモールを追うよりトリム港に行った方がいいな」

「ちよつと待つてくください！キュモールはどうするんです？」

シークの言葉を否定するエステル。

そんなエステルに対してジュデイスは言った。

「フェローに会うのがあなたの目的だと思ったけれど？」

「それはそうですね・・・」 「あなたのわがままに付き合つのが凜々の明星だったかしら？」

ジュデイスの厳しい言葉にエステルは下を向いてしまった。

「ちょっと待つて！フェローって何？凜々の明星？説明して」

「そうそう、説明して欲しいわ」

「レイヴン！？」

訳のわからないリタは説明するように言った時、この場にはいないはずの声が聞こえた。

その声の主は茂みから姿を現したレイヴンだった。

みんなはレイヴンの姿に驚いていたがシークは剣を手にするとその刃先をレイヴンに向けた。

レイヴンは反射的に防御の体勢になる。

「ちょっとシークちゃん！？」

「なぜ貴様がここに？ずっとつけていたのか？」

「少し落ち着けて」

ユーリがシークを落ち着かせ、シークはユーリに言われて剣を仕舞った。

レイヴンは安心して息を吹いた。

「とりあえず詳しい話はトリム港に行つてからだな」

ユーリの提案にみんなは頷いた。

そして、トリム港へ足を進めた。

第10夜：新たな目的（後書き）

投稿が遅れてすみません。

今回はずっと楽しみにしていたイベントを書いて嬉しかったです。シークはあまりそういうものは好きではない・・・というかむしろ嫌いです。

ですからどんな格好をさせようかかなり悩みました。

6月はジューンブライドなのでウェディングドレスにしようと思いついてウェディングドレスにしました。

あまり説明は上手くなく分かりにくいと思いますがそのあたりの想像は皆様にお任せします。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第10・5夜（前書き）

第10夜のオリジナルスキットです。

第10・5夜

【ギルドは嫌い？】

ユーリ

「ま、よろしくな、ボス首領」

ジユデイス

「仲良くやりましょ」

ラピード

「ワン」

カロル

「うん！よろしくー！」

シーク

「しかし、よくギルドをやる気になったな」

エステル

「シークはギルドは嫌いなんですか？」

シーク

「嫌な思い出しかないからな」

ユーリ

「初めてのギルドが紅の絆傭兵団じゃあな」

ジユデイス

「嫌にもなるわね」

シーク

「今でも早めに抜けて良かったと心底思う」

カロール

「シークが紅の絆傭兵団を抜けてなかったら僕たちと戦ってたかもしれないね」

ユーリ

「ゾツとしなくもない話だな」

ジユデイス

「私は強い人と戦えて嬉しいけど」

ユーリ

「そこに関しては俺も同感だな」

エステル

「私はシークと一緒に良かったです」

【ジュデイスは物知り？】

シーク

「・・・」

ジュデイス

「私の顔に何かついてるかしら？」

シーク

「いや。ジュデイスは物知りだと思ってな」

ジュデイス

「あら、そうでもないわよ」

シーク

「ダングレストで見た魔物の名は知っていたし、その魔物がどこにいるのかも知っている」

ジユデイス

「フェローのことは友達の受け売りよ。それにフェローを見た場所にフェローがいるかもしれないからよ」

シーク

「本当か？」

ジユデイス

「嘘についても私には何もいいことはないもの」

シーク

「・・・そうだな。疑ってすまない」

ジユデイス

「気にしてないわ」

【エステル、弟子入り志願】

エステル

「シーク！」

シーク

「何だ？」

ユーリ

「エステルどうした？そんなに真剣な顔して」

エステル

「シーク、私を弟子にしてください！」

カロル

「え？どういふこと？」

シーク

「戦いのことを言っているなら私よりユーリが適任だが」

エステル

「いえ、戦いではなくて・・・」

ジュデイス

「じゃあ、何かしら？」

エステル

「私、ラピードともっと仲良くなりたくて、シークとラピードは仲

が良いので・・・」

ユーリ

「ようはラピードと仲良くなれる秘訣を教えてくださいませんか」

カロル
「それで弟子入り志願？」

シーク

「別に秘訣はない。気をゆるしていれば警戒することはないはずだ」

エステル

「分かりました。気を許すんですね」

(ラピード登場)

ラピード

「ワフウ」

エステル

「ラピード」

ラピード

「・・・」

(エステル、ラピードに近付くがラピード、エステルから離れる)

エステル

「待ってください、ラピード・・・」

ラピード

「ワフツ」

(ラピードは逃げ、エステルはラピードを追いかける)

シーク

「警戒を解けばなつくわけでもないが」

カロール

「エステルが追いかけるとラピード、逃げるんじゃないかな？」

【コンボ！エステルとシーク】

エステル

「やりましたね！シーク！」

シーク

「・・・そうだな」

エステル

「あの、シーク怒ってますか？」

シーク

「別に・・・」

エステル

「・・・」

シーク

「・・・」

エステル

「あの、私になにかしたのなら謝ります。ですが、何が悪いのか言
つてください！」

シーク

「・・・無理に前線にでるな。我が身を大事にしろ」

エステル

「すみません・・・」

シーク

「だが、あの時の判断は間違っていなかった」

エステル

「シーク……はい！」

【これは賛成だけど、これは反対】

シーク

「今からでも間に合う。私に色仕掛けは無理だ」

ユーリ

「まだ言ってるのかよ。男なら一度決めたことはやりとおせ！」

カロル

「シーク、女だよ」

エステル

「シーク、人助けですよ」

シーク

「人助けには賛成だ。だが、私が色仕掛けをするのは反対だ」

エステル

「大丈夫ですよ。シークはきっと可愛くなります」

シーク

「いや、だから色仕掛け事態が・・・」

ユーリ

「話もまとまっただけだし、材料集め続けるぞ」

(みんな行ってしまい、シークだけが残る)

シーク

「待て！話はまだ終わってない！」

【リタとの再会】

エステル

「リタ！」

リタ

「ちょっと、エステル！？」

ユーリ

「抱きつくとはエステルも大胆だな」

エステル

「私、リタと一緒にいられることが嬉しくて！」
シーク

「リタは相変わらず魔導器バカだな」

リタ

「魔導器バカって何よ！」

ユーリ

「魔導器絡みで面倒事に関わってるんだ。魔導器バカで十分だろ」

リタ

「否定のしようがないわね・・・」

エステル

「二人共、リタをいじめるのはやめてください」

ユーリ

「別にいじめてたわけじゃないけどな」

シーク

「同じく」

ユーリ

「ま、リタと再会できたのには嬉しくないわけでもないけどな」

シーク

「・・・そうか」

リタ

「何？その皮肉れた言い方。嬉しいなら嬉しいって言いなさいよ」

エステル

「私はリタと再会できて本当に嬉しいです！」

【レイヴンとの再会】

レイヴン

「俺様がいない間、寂しくなかつたかい？でも、俺様がまた一緒にいてあげるから安心しなさい！」

シーク

「・・・・・・・・」

ジュデイス

「・・・・・・・・」

カロル

「……………」

リタ

「……………」

レイヴン

「ちょっと、その反応は何？もう少し俺様との再会を喜んだら？」

ユーリ

「喜ぶも何も、おっさんがいなくてもどうでも良かったけどな」

ジュデイス

「私もいてもいなくてもどうでもいいわ」

カロル

「いない方が静かだしね」

リタ

「っていつかない方がずーっとマシよー！」

レイヴン

「俺様すごく傷付いたんだけど……っというわけでシークちゃん、俺様を癒して！」

シーク

「寄るな獣！」

(レイヴンを殴って吹っ飛ばす)

レイヴン

「ギャーッ！！！！」

ジュデイス

「自業自得ね」

リタ

「まったくだわ」

カロル

「同情する気も失せるね」

ユーリ

「おっさんはほっといて行くうぜ」

シーク

「そうだな」

(みんな、レイヴンを残して先に行ってしまう)

レイヴン

「あいつらと一緒に本当にいいのかな？」

【他言無用っ！深く追求するなっ！】

リタ

「ちょっと、荷物の中にウェディングドレスがあったけど何なのこれ？」

シーク

「!?!」

レイヴン

「もしかしてジュディスちゃんが俺様との結婚の為に用意したドレスかも！」

ジュディス

「私ではないわ。例え私のだとしてもおじさまとの結婚なんとも考えてないから安心して」

レイヴン

「そうですね・・・」

カロール

「そのドレスはシー・・・いたっ！」

(シーク、カロールを叩く)

シーク

「このことは他言無用だ。それとこれに関してはこれ以上追求するな。言ったときにはどうなるか分かっているよな?」

リタ

「わ、分かったわ」

レイヴン

「りよ、了解・・・」

カロール

「シークが怖い・・・」

ジュデイス

「フフ」

第10・5夜（後書き）

永らくお待ちしてすみません。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第11夜：幽霊船アーセルム号（前書き）

トリム港へアーセルム号

第11夜：幽霊船アーセルム号

トリム港についた時はすでに周りは暗くなり始めていた。

ユーリたちは宿をとり、体を休ませ、リタとレイヴンに今までのことを話したのだった。そして、話は変わり、なぜレイヴンがここにいるのか、という話をしていた。

「なるほどな……。ドンの命令で帝国が動いているのを無視する訳にはいかない。そして、エステリーゼが次の皇帝候補のため、エステリーゼの監督か」

シークはレイヴンの話をまとめて皆に聞こえるように口にした。シークの言葉にベットの腰を掛けているレイヴンは頷く。

「ドンは私が次の皇帝候補だということを知っていますね」
「監督つてことは監視でしょ？あんまりいい気はしないよね」

カロルは嫌そうな顔をして言った。

「お互い、腹のさぐりあいをしてるところだからな」

「で、あんたらはフェローってのに会いにコゴール砂漠に行くつもりか」

今度はレイヴンが話をまとめてユーリたちの目的を簡潔に口にした。

「私は仕事上、ユーリたちとは目的地が同じだから一緒にいるだけだ。明日は取引先の所へ行く。おそらく明日にはお前たちとは別れ

るだろう」

シークはレイヴンが言ったあとすぐに横入りして自分の目的を言った。

「まあ、あんたのことだからそんなことだとは思ってたわ。砂漠が
どいう所か知ってる」

リタはエステルの方を見て質問をした。
その質問に答えたのはカロルだった。

「暑くて乾いてて砂ばっかある所でしょ」
「簡単に言うわね」

リタはカロルの答えにあきれていた。

「近い所まで皆さんと行って、それからフェローを捜そうかと・・・」

「とりあえずお城に帰る気はないのね」

「俺様としてはお城に帰った方が嬉しいんだけど」

「私もレイヴンに賛成だ。エステリーゼ、お前は例の仮面の奴に命
を狙われているのだろう？」

レイヴンやシークの言葉を他所にエステルは固い意志で二人の言葉を
を否定した。

「ごめんなさい。私、フェローに合って真意を知りたいんです」
「・・・意志は固い、か」

エステルの意志の固さにあきれたようでシークはため息をついた。

「ま、デズエール大陸に行くなら好都合だけどね」
「どういづことかしら？」

レイヴンの言葉にジユデイスが聞き返した。

「ドンからベリウスに手紙を渡すように頼まれてるのよ」

レイヴンはそう言いながらヒラヒラと手紙を振って手紙をみんなに見せびらかした。

「うわっ！大物だね」

カロルは素直に声をあげて驚いた。

シークも顔には出さなかったが驚いていた。

「確か、ノードポリカを統治する闘技場の首領ですよね」

「んで、手紙の内容は分かってんの？」

手紙の内容が気になったのか、リタはレイヴンに手紙の内容を聞いた。

「ダングレストを襲ったフェローに関係する内容みたいなのよ。フェローについてベリウスは何か知ってるみたいなのよね」

「俺たちもベリウスに会う必要があるな」

「そうですね」

ベリウスがフェローについて何か知っているのが分かるとユーリはエステルにそう言い、エステルはユーリの言葉に頷いた。
シークは話を聞いているなかであることに気付いた。

「・・・待て。レイヴンはユーリたちについていく気か？」

「そうだけど？」

シークの質問にレイヴンはあっさりと頷く。

「ついてくるのは勝手だけど、こっちの掟に従ってもらってからね」

「了解。あ、でもギルドに入る訳じゃないから」

「どういことですか？」

「2つのギルドには所属しちゃいけないんだ」

エステルの質問にカロルは答えた。

「とりあえず今日は各自自由行動でいいかしら」

「そうだな」

ジユデイスの提案に全員が賛成し、各自自由に行動し始めた。

シークは街の広場に立ち、空を見上げていた。すると口を開き、人の名を口にした。

「デューク様……」

「何してるんだ？」

突然の声にシークは驚き、声がした方を向くとそこにはユーリがいた。

「……ユーリ、か。星を見ていた」

すると、ユーリは何かを思い出したような顔をして、シークに話かけた。

「お前、ケープ・モックで見た男は“恩人”だって前にいつてたよな。どういうことだ？」

「そのままだ。あの方がいなければ今の私はここにはいない」

「ふーん。ま、言いたくないことなら無理に言わなくてもいいけどな」「……」

「……」

しばらく沈黙が続いた。

そしてシークがその沈黙を破った。

「用がないなら他の奴らと話してきたらどうだ？私といても話すこととは何もないぞ」

「そつだな」

ユーリが去ってしばらくしてからシークもその場を離れ、宿へ戻った。

翌日

シークとリタ以外の人物は各部屋から出て、集まっていた。

「リタとシークはどうしたのさ？」

「シークは朝、起きたら姿が何処にもいなかった」

「リタはどうするのでしょうか？」

エステルがリタのことを皆に聞くと、ジュデイスが答え、ユーリもジュデイスに続けて言う。

「あの子にはあの子のすることがある」「そういついことだ」「でも……!」

エステルが何か言い返そうとした時、部屋の扉が開き、中からリタが現れた。

リタの姿に一同は驚いていた。

リタはその顔に気付いていないのか平然としていた。

「で、港から船だっけ？」「お前もついてくんのか？」

「そうだけど？」

ユーリの問いにあっさりと言額くリタ。

今度はレイヴンがリタに尋ねた。

「何か仕事があったんでないの？」

「ケーブ・モックのエアルクレーネはすでに調査して報告済みよ。

他のエアルクレーネは旅して調査するつもりだったから」

「それは私たちを利用するってことかしら？」

「まあね。ケーブ・モックの時みたいになるかもしれないし、一人よりだつたらあんたたちといった方が安全だしね」

ジュデイスの言い方は悪いが意味的にはそうなるらしい。

そらはリタが頷いたことで判明した。

「私、リタとまた一緒に嬉しいです」

エステルがニッコリと笑ってリタに言った。

リタはあきらかに顔を赤らめ、エステルから視線を逸らした。

「そう・・・あたしは別に・・・」

一行は宿を出て港に向かった。

向かう途中、ヨードルと出会った。
ヨードルは友好協定のことで各地を歩き回っているらしい。
ヨードルと別れるとまっすぐに港へ向かう。

港に入るなり、数人の傭兵らしき人たちがバタバタと何かから逃げているのを見つけた。

「あんなにたくさん！命がいくらあっても足りねえよ！」
「待てー！金の分は働けー！働けないのなら金、返せー！」

傭兵らしき人を追う一人の女性がいた。

女性は追いかけるのをやめると、後ろにいる男に命令するように話かけた。

「ギルド、“青い獣”をブラックリストに追加よ」
「はい」

女性を見たユーリは思い出したような顔をした。
女性が行ってしまう。

「あいつ、確かカウフマンとか言ってたな」

カロルは驚いた顔をしてビクビクしながら二人を見て尋ねた。「知り合いなの！？」

「まあな。カロル、お前か？」

「知り合いもなにもあの人、五大ギルドの1つ幸福の市場の社長だよ！？」

「そうなのか？（幸福の市場？どっかで聞いたな・・・）」

「ユーリ、あの人に頼めば船を出して貰えるかもしれませんよ」

「そうだね。行ってみよう」

ユーリたちは先ほどの女性が向かった方へと足を進めた。女性、もといカウフマンは近付いて来たユーリたちに気付いた。

カウフマンはユーリの顔を見るなり笑顔になり、ユーリに話かけてきた。

「あら、あなた。久しぶりね。そうだね、あなたにピッタリの仕事があるの」

「ってことは荒仕事か」

「そうよ。聞いているかもしれないけどこの季節、魚人が現れて船の積み荷を襲うのよ」

その話を聞いてカロルは首を傾げ、疑問に思っていることを尋ねた。

「それっていつも別のギルドに頼んでいるんじゃない？」

「いつも雇っているギルドの首領が亡くなったとかで使えないのよ」

カウフマンは頭をかかえて答えた。

その様子からすごく困っているようだ。

「ちなみにそのギルドって？」

「紅の絆傭兵団よ」

おそろおそろ聞いたカロルが答えを聞くとやっぱりという顔をした。

「で、誰もいないから俺たちを雇うのか」

「一人は頼んでいるから大丈夫だけど・・・安全性を狙うからあなた達もお願いしたいのよ」「雇っている人って？」

カロルがまた質問するとカウフマンはため息をついた。

「実はまだその人、来てないのよ」
「ふーん」

その時、カウフマンの所に誰かが近付き、カウフマンに話かけた。ユーリたちはその人物を見て目を丸くした。

「来たわね。遅かったじゃない」
「すみません、カウフマンさん。旅支度をしていたら遅くなりました」

「まあ、いいわ。紹介するわ。この私が私の雇った・・・どうしたの？」

カウフマンはユーリたちの様子を見て首を傾げた。

シークはユーリたちを視界に入れたが特に驚くこともなくため息をついた。

「シーク、どうしてここに？」

「仕事だ。何もそこまで驚くこともないだろう。特にユーリは驚く必要さえないはずだ」

シークの言った言葉に最初ユーリは分からなかったが野宿をした時のシークとの会話を思い出した。

「そついやそうだったな」

「で、お前たちは明星の凜々として仕事をするのか？」

「明星の凜々つて？」

「僕たち、ギルドを始めたんです」

カウフマンが質問をするとカロルが答えた。

明星の凜々がギルドだと知るとカウフマンは笑顔になる。

「あら素敵。なら護衛を頼みたいんだけどいいかしら？うちと仲良くしておくといいわよ」

カウフマンがそう言って交渉にでたがそれでもユーリは乗り気ではなかった。

そんなユーリに対しシークは追い討ちをかけるようにユーリに言った。

「お前たちの目的はノードポリカ。船に乗せてもらうついでにそこで降ろしてもらえばいいだろう。この話はお前たちにとっても悪い話ではないはずだ」

「確かに・・・」

シークがそう言うとカロルは頷いた。

ユーリも少し考えてから

「そうだな・・・」

と呟いた。

更にカウフマンが追い討ちをかけた。

「この依頼を受けてくれたらこの船、『フィエルティア号』をあなたたちにあげてもいいわ」

「分かったよ。カロルはやる気みたいだしな」

「交渉成立ね」

話がまとまると全員はフィエルティア号に乗る。

船に乗っている間、ユーリたちはそれぞれ自由に行動していた。みんなからは離れた所で海を眺めているシークにユーリは近付き、話しかけた。

「何でこの仕事、俺たちにもやらせたんだ？」「この仕事、絶対に成功させたいから」

「何でだ？」

「・・・カウフマンさんには恩があるから」

「恩？」

シークは壁に寄りかかるように体勢を変え、空を見上げて言った。

「私が紅の絆傭兵団に入る前にお世話になった。身寄りのない私を助けてくれた。そして私が“赤銀の修羅”と呼ばれて周りから恐れられた時、カウフマンさんは普通に接してくれた。だからこの人の依頼は失敗したくない。確実に成功させるためにはお前たちも必要

だった」

シークが話し終わった時だった。
突然、船が激しく揺れたのだった。
そして、魚人がシークとユーリの目の前に現れた。

「来たか」

二人は剣を構えた。

シークから動いて行った。

「襲爪雷斬！！」

シークが魚人の一匹を斬るとユーリもすぐに魚人に襲いかかる。

「幻浪斬！！」

「ユーリ！シーク！」

その騒ぎに気付いたエステルたちもやって来た。

エステルたちもそれぞれ武器を取り出し、魚人に攻撃する。

しばらくして魚人を一掃した。
ユーリたちは安全だと確認すると武器を仕舞う。

「さあ、行くわよ」

カウフマンがそう船の操縦士に言うと船は再び動きだす。

しばらくすると辺りは霧に包まれ、視界も悪くなってきた。

突然、何かにぶつかり船は激しく揺れ、再び船の動きは止まった。

「どうしたの？」

「何かにぶつかったわ」

フィエルティア号の前には大きな船があり、それにぶつかったのだ
った。

「アーセルム号って読むのかしら？」

ジユデイスが大きな船に書かれてあった船の名前らしきものを声に
出して読んだ。

船はとても古く、誰も乗っていないと誰もが思った。

しかし、その船は船に乗り込むための板がフィエルティアに降りてきた。

「船の呪いだったりして」

「バカなこと言わないで！呪いなんてあるわけないじゃない！早く船を出して！」

リタはレイヴンの言ったことに怒りだし、船を出すように言ったが船はまったく動く気配がなかった。

「ダメです。魔導器が作動しません！」

「ウソ！」

リタが魔導器を確認しに行くが、魔導器はどこも異常がなく正常だった。

「やっぱり呪いなんじゃ」

「そんなわけないじゃない！たまたま調子が悪いだけよ！」

カロルの言葉をリタは完全に否定した。

「動くまでこの船の中の探索でもするか。もしかしたら本当に呪いかもしれないしな」

「ちょっと、今のあなたたちの仕事はこの船の護衛でしょ」

カウフマンがそう言ってユーリに注意した。

「なら、4人が探索に行つて残りの4人が船の護衛するのはどうだ？」

「仕方ないわね。魔導器が動き出したら教えるわ」

「俺とラピードも行くよな？」
「ワンツ！」

ユーリは皆を見渡した。
するとジユデイスがシークの腕を掴み、自ら立候補をした。

「私とシークが行くわ」
「ちよつと待て！なぜ私が！？」

シークはジユデイスの手を無理矢理ほどいた。

「シーク、怖いのか？」
「怖いわけないだろう」
「なら大丈夫ね。行きましよう」

決まったと同時にジユデイスは先にアーセルム号の中へ入って行った。

「ジユデイも行ったし俺たちも行くか」
「ちよつと待て。私はまだ行くと言ってないぞ」

ユーリが行こうとするがシークはまだ納得していなかった。
カロルはシークの肩を軽く叩いた。

「諦めなよ」

カロルがそう言った後、居残り組はシークに順々に言っていった。

「頑張ってください」

「決まったんだからさっさと行きなさいよ！」

「しかし……」

「シークちゃん、どうしても怖いなら俺様の胸に飛び込んで

「行ってくる」

レイヴンが最後まで言う前にシークはアーセルム号の中に入って行った。

ユーリとラピードも続けて入った。

捜索組が行った後、居残り組はレイヴンを見、カロルはレイヴンに言った。

「レイヴン、バカみたいだよ」

「そんなに俺様の胸に飛び込むの嫌なの？」

「嫌に決まってるでしょ」

「……」

レイヴンはリタの言った言葉に無言になった。

「中は結構雰囲気あるわね」

ユーリはジュディスが楽しそうにしているのに気づき、ジュディスに話かけた。

「ジュディ、楽しそうだな」

「ええ。こつというの大好きなの」

ユーリは今度、先ほどから一言も喋っていないシークに話かけた。

「一言も喋ってねえけどお前は苦手なのか？」

「苦手ではない。ただ喋りたくないだけだ」

しばらく進みある扉を開け中に入った瞬間、船が揺れ、部屋の格子が落ちてきて扉が開かない状態になってしまった。

「さて、どうするか・・・」

「本当に呪いかしら？」

「お前たちは冷静だな」

「あら、あなたも冷静に見えるけど？」

「慌てたところで状況が変わるわけじゃないからな」

「しばらくしても扉が開かなかつたら壊して進むしかねえな」

ユーリの言葉にその場にいる全員は頷く。

しばらくすると、聞き覚えのある声がユーリたちに聞こえてきた。扉が開き、現れたのは……。

「ユーリ！無事だったんですね！」

「エステル、それにみんなも」

フィエルティア号に残っていた仲間たちだ。

話によると、ユーリたちがあまりにも遅いため、心配になって見に来たというらしい。

「早く帰ろつよ」

カロールがそう言い、リタが閉まった扉を開けようとしたが扉は開かなかった。

「うそっ！？扉が開かない……！」

「もしかして本当に呪い？」

「馬鹿なこと言わないで！」

レイヴンが冗談で言ったことだが、今のリタには冗談に聞こえないらしい。

「どうやら先に進んでほしいらしいな」

ユーリはそう言って先に進む。

リタ以外は素直についていくが、リタだけは文句を言いながらもついて行った。

しばらくアーセルム号内を歩き、船長室と思われる場所にたどり着いた。そして、その部屋には人の白骨があった。

「ヒイツ！」

カロルは驚きと怖さで尻餅をついた。

リタは数歩後ろにさがった。

するとエステルが白骨の近くに本がありことに気付き白骨に近付き、本を読み上げた。

「アスール歴232年、ブルエールの月13……。帝国が出来る前の日記ですね」

「千年以上も前か……」

帝国が出来る前と考えるとそうなるらしい。

エステルは日記を読み続けた。

「船が漂流して40と5日……。食糧も水もとうとう尽きた。仲間たちも次々と餓えに倒れていく……。しかし、私は逝けない。ヨームゲンの街に澄明の核晶クリアシエルを届けなくては……。澄明の核晶があれば魔物を退けることができる。澄明の核晶を紅の小箱の中に入れた。ユイファンから貰った大切な箱だ。彼女にもう少しで会える。街の人たちが喜ぶ……」

日記を読み終えたエステルは本を閉じた。

「でも結局この人は助からなかったんですね……」

「でも千年前の話よ。本当かどうか……」

「……澄明の核晶を見つければ本当かどうかかわかるのではないか？」

シークはそう言って部屋中を探し始めた。それを見て他の皆も探し始めた。

「それにしても魔物を退ける、ねえ……」

「結果みたいなものか？」

するとユーリが白骨化した人間が大事そうに箱を持っているのに気付いた。

「これじゃないか？」

皆は探すのをやめ、ユーリの周りに集まった。

「おっさん、取りなさいよ」

「いやよ。何言つのかね、この娘は」

リタがレイヴンに命令するがレイヴン自身も嫌らしい。

「はい」

いつの間にかジユデイスが箱を取っていた。
ジユデイスはそれをレイヴンに差し出す。

「ジユデイスちゃん・・・大胆・・・」

「呪われちゃうかしら」

ジユデイスは口では恐ろしいことを言っているが、顔は笑っていた。

カロルは後ろが気になったのか背後を見た・・・・・・・・

「ウワアアアアアア！！！」

突然カロルは尻餅をちいた。

ユーリたちが背後を見るが、何もなかった。

カロルは鏡を指差した。

カロルが指差した鏡には魔物の姿があった。気付いたユーリたちは武器を取り出した。

「逆のようね」

「何が!？」

「魔物を引き寄せてるってこと」

リタとジュデイスが喋っている間にシークは鏡を見ながら魔物に突進していき、攻撃していた。

ユーリとラピードも魔物に近付き攻撃し、少し遅れてジュデイスも攻撃するため魔物に近付いた。

「時雨」

レイヴンは距離をとりながら後方で魔物に攻撃する。

「行きます・・・キャア!!」

エステルも魔物に攻撃しようと接近したが、鏡を見ながらの戦いはやりずらく、エステルはダメージを受けた。
するとすかさずカロルがエステルに近付いた。

「括心エイドスタンプ」

エステルを回復させた。

「ちょっとあんたたち、どきなさい！」

『スパイラルフレア』

リタの魔法で魔物にとどめの一撃を喰らわせた。

「ねえ、やっぱりそれ戻そうよ」

カロルは箱を持っていくのが嫌らしい。
するとエステルが口を開いた。

「私、澄明の核晶を届けてあげたいです。これもギルドの仕事に加えていただけじゃないでしょうか？」

「ダメだよエステル。僕たちみたいな小さいギルドは一度に沢山の仕事はできないんだ」

「ひとつひとつ仕事をこなした方がギルドの信用に繋がるからなあ」

カロルとレイヴンがそうエステルに言い聞かせたがエステルはそれでも届けたいらしい。

今度はジュディスが口を開いた。

「あら、またあの娘の宛もない話でギルドが右往左往されるの？」

「ちょっとあんた！言い方ってものがあるでしょ！」

ジュディスがエステルに厳しく言うとりたがジュディスに対し、怒りをあらわにした。

「待って、リタ。ごめんなさいジュディス。でもこの人の思い、届けてあげたいんです」

カロルは何かを思い付いたように前に出て口を挟んだ。

「じゃあさ、シークに頼めばいいんじゃないかな」

「な……！カロル！？」

思わずシークは声をあげた。

「シークならギルドは関係ないし、頼んでも問題ないんじゃないかな？」

エステルはシークと向かい合ってシークに言う。

「シーク、お願いできますか？」

「……………」

シークはエステルに対して無言だった。

すぐには答えられないようだ。

答えが出たのかシークはエステルを見た。

そして無言で箱を手にした。

「いいだろう。この箱は私が預かる。その代わり成功報酬は高くなる」

エステルは笑顔になり、シークの片手を取り、自分の感謝の気持ちを伝えた。

「ありがとうございます」

「……あ、ああ……」

「若人はいいねえ………ん？」

レイヴンは外で煙が上がったことに気付いた。
そのことをユーリたちに伝えた。

「合図かもしれないな。船に戻るぞ」

皆はユーリの言葉に頷き、フィエルティア号に戻った。

「皆さん、ご無事で……。魔導器も直りました」

「全く次々とトラブルに巻き込まれて……」

カウフマンは深く溜め息をついた。

「それで魔導器が壊れた原因は何だったのかしら？」

「それが突然、魔導器が動きだしまして・・・」

「やっぱり呪いじゃ ないの？」

「きつと私たちに澄明の核晶を託したかったんですよ」

「そんな訳ない！死んだ人間がそんなこと出来るわけない！」

エステルの言葉をリタは完全に否定した。

リタは少し震えているようだった。

「でも呪いっばいよな。魔導器が動かなくなったり・・・」

「違っつて言ってるでしょ！」

「イタイツ！何で僕・・・」

リタはカロールを叩いた。

ユーリが言ったのに何故カリタに叩かれたのはカロールだった。

「皆さん、無事でなによりです」

「うちの首領は無事じゃないけどな」

「それより早く行かないか？」

「そつよ！早くここから離れるわよ！」

リタはここがよほど嫌らしい。

「分かりました。ではフィエルティア号発信です」

フィエルティア号は再び動きだす。

ノード・ポリカに向かって・・・。

第11夜：幽霊船アーセルム号（後書き）

皆さん、大変長らくお待たせしてしまいすみません。

話事態もあまり進んでいませんが、次の話は砂漠までなんとか行くことと思っています。

今回の話でシークに澄明の核晶を持たせてしまいましたが、それはちゃんと理由があります。

シークは好きでユーリたちについて行っているのではないのでどうやって砂漠に行かせようか悩みました。

まさか自ら危険な砂漠に行こうとはしません。

ですから澄明の核晶を届けるために無理矢理砂漠へ行かせることにしました。

では、今回はここまでです。

次の投稿はもう少し早くやらうと思います。

では、ここまで読んでいただきありがとうございます。

第11・5夜（前書き）

第11夜のオリジナルスキットです。

第11・5夜

【シークのお仕事は？】

ジュデイス

「ねえ、前から気になってたけど、シークは何の仕事をしてるのかしら？」

エステル

「確かシークは“雇われ屋”をしていると言っていましたよ」

ジュデイス

「雇われ屋？」

ユーリ

「雇われればなんでもする・・・傭兵みたいなもんだな」

ジュデイス

「具体的にはどんなことをしてるのかしら？」

エステル

「それに関してはシークは何も話していないので・・・」

ユーリ

「カロルは何か知らねーか？」

カロル

「僕も詳しくは知らないけどよくギルドの護衛とかしてるらしいよ。並みのギルドよりは頼りになるらしいんだ」

リタ

「意外と普通ね。もっとヤバいことしてると思ってたわ」

エステル

「リタ！シークはそんなことはしません！」

レイヴン

「でも俺様が聞いた話だと暗殺とかもしてるらしいわよ」

リタ・エステル・カロル

「暗殺!?!」

ユーリ

「雇われるってことはそんな仕事もなくてはないよな」

レイヴン

「しかも、あんなことやこんなこともやってるって聞いたわよ」

エステル

「あ、あんなこと!？」

ジユデイス

「大変なお仕事してるのね」

ユーリ

「あんなことやこんなことはしてねーだろ」

【怖くはない】

シーク

「・・・」

ユーリ

「・・・シークってこついうのは結構平気だよな。怖くねーのか？」

シーク

「幽霊船のことか？別に怖くはない」

ユーリ

「シークに怖いもんなってあるのか？」

シーク

「・・・怖いものがないわけないだろう。私も人間だぞ」

ユーリ

「へー。あんのか？」

シーク

「・・・あるさ・・・。私の怖いものは・・・」

ユーリ

「何か言ったか？」

シーク

「いや、何も。ユーリには怖いものはないのか？」

ユーリ

「フレンの手料理」

シーク

「は？」

ユーリ

「何でもない」

シーク

「？」

【シークのお仕事は？2】

エステル

「シーク！」

シーク

「いきなり何だ、エステリーゼ」

エステル

「シークの“雇われ屋”としてのお仕事は何をしているんですか？」

シーク

「捜し物したり護衛したり、色々だな」

エステル

「では、あんなことやこんなこともしているんですね・・・」

シーク

「待て。何だそのあんなことやこんなことは」

エステル

「レイヴンが言っていました。シークはあんなことやこんなことも仕事としてしているって」

シーク

「そうではない。あんなことやこんなことは具体的にどういって
とだ？」

エステル

「あの・・・あまり聞かれないことなので・・・耳元で囁くく
らいでいいですか？」

シーク

「かまわない」

エステル

「えっと・・・
です」

シーク

「!!!!!!」

エステル

「まさかシークがこんなことを・・・」

シーク

「しない！レイヴン！！」

(シークはレイヴンの所へ走っていく)

レイヴン

「ちょ、いきなり何よ・・・！！」

シーク

「有無を言わず、やらせる！！」

レイヴン

「ギャーッ！！」

【怖い時は・・・】（女性編）

エステル

「シークとジュデイスはこういう雰囲気は平気なんですね」

リタ

「あ、あたしだって平気よ！」

シーク

「平気かは分からないが・・・」

ジュデイス

「私、こういう雰囲気って結構好きなの」

エステル

「私は少し怖いです」

ジユデイス

「怖い時は好きな彼に抱きつくのよ」

エステル

「ええ!？」

リタ

「い、いきなり何を言い出すのよ!」

ジユデイス

「だって誰かに抱きついていれば怖くなくなるかもしれないじゃない?」

シーク

「そうなる可能性はなくはないな」

エステル

「そうなんですか?私、試してみます!」

リタ

「エステル!？」

ジュデイス

「あの娘、意外と大胆なのね」

シーク

「大胆？」

エステル

「ラピード！怖いので抱きつかせてください」

ラピード

「ウウ……」

（ラピード、近づくエステルから逃げる）

エステル

「待ってください！」

（エステル、ラピードを追いかける）

ジュデイス

「あの娘らしいわね」

リタ

「でも何か違うわ」

シーク

「何が違うんだ？」

【怖い時は・・・（男性編）】

カロル

「僕、もうここやだなあ」

レイヴン

「少年、何を言う！」

ユーリ

「おっさん、いつにも増して元気だな」

レイヴン

「こつこつなのは女の子とお近づきになるチャンスなのよ。

女の子が怖がっているときに

『胸に飛び込んでおいでー！』

と言えば女の子は飛び込んでくる！」

カロル

「そつこつか弱い女の子だったら僕は苦労しないんだけどね……」

ユーリ

「カロル、何か言ったか？」

カロル

「な、何でもないよ」

ユーリ

「おっさん、妄想するのは自由だけど、そんなか弱い女いるか？」

カロール

「ジューデイスは結構こういう雰囲気、好きみたいだし、シークは平気そうだし、リタの場合、逆にぶたれるよ。エステルならなんとかなるんじゃない」

(逃げるラピードと追いかけるエステルが来る)

ラピード

「ワウツー!」

エステル

「待ってください!ラピード!」

ユーリ

「おっさん、諦めろ」

レイヴン

「そうね・・・」

第11・5夜（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第12夜：闘技場（前書き）

ノードポリカ

第12夜：闘技場

「あれがノードポリカか」

船旅を続けていたユーリたちの目に映るのは丸型の建物のある街だった。

そして、街から花火が上がる。

「あら、綺麗」

「毎日がお祭りってことか。こりゃいいわ」

「おっさんは遊びに来たんじゃねえだろ」

「そうだった。下っ端は辛いの〜」

おっさんはわざとらしく肩を落とす。

「助かったわ。依頼は無事成功よ。荷物をおろしたらこの船をあなたたちにあげるわ」

カウフマンが街に夢中になっているユーリたちに話した。

「私は別に報酬をいただくことになる」

シークだけが街から目をはなし、カウフマンの方を見て言った。

カウフマンは

「分かったわ」

と言って頷き、シークに金の入った袋を渡した。

シークは中身を確認し、納得がいくと袋をしまった。

フィエルティア号は無事にノードポリカの港についた。

船から降りると、一人の作業服の男が近づき、カウフマンに軽く頭をさげた。

「こ、これはカウフマンさん。い、いつもお世話になっております」

「また遺跡発掘？首領自ら遺跡発掘に赴くなんていつもながら感心するわね」

「い、遺跡発掘が私の生き甲斐ですので」

カウフマンと親しく話す男にリタは首を傾げた。

「あれ、誰？」

「遺跡の門の首領、ルインズゲートラーギイよ」

リタの質問に答えたのはレイヴンだった。

「遺跡の門……どこかで聞いたような……」

「そりゃそうよ。帝国魔導士の遺跡発掘を手伝ってるんだから」

「ああ、それで……」

聞き覚えがあるのか、と頷くリタ。

「で、では仲間を待たせてますのでこれで……」

ラーギイは軽く頭をさげた。

どうやら話は終わったらしい。

ラーギイはカウフマンに頭をさげたあと、行ってしまった。

「ねえ、前に兵装魔導器を売ってるギルドの話をしてたわよね」

海凶のつめのことだ。

「そこに魔導器の横流ししてるのあいつらじゃない？」

「遺跡の門は完全に白よ」

話を聞いていたカウフマンが振り返っていった。

「なんでそう、言い切れるんだ？」

「温厚で、真面目に、コツコツと……。それがギルドの売りだからなあ」

あの首領のラーギイの印象そのままがギルドの売りなのだとレイヴンが説明する。

「じゃあ、私はそろそろ行くわ。明星の凜々、頑張ってる」

カウフマンはそう言って去っていった。

カウフマンが去ったあと、ユーリたちはベリウスに会うため、闘技場のほうへと足をすすめた。

「ねえ、なんだか視線を感じるんだけど……」

リタはそう突然いった。

確かに、戦士たちの視線がユーリたちの方に向いているのが感じられる。

「なんか落ちつかないね」

「おそらく、その視線は私に向けている」

シークがそうみんなに言った。

すると、ユーリたちもシークに注目した。

「どうしてシークに？」

「過去に、ここの闘技場に参加したとき“赤銀の修羅”の名が売れてしまったな……」

「なるほどな」

みんなは頷いた。

シークの言った理由に納得したらしい。

「そんなことより早く、ベリウスのところへ行くぞ」

視線を向けられながらも、一同は闘技場へと足をすすめた。

「この先は我が主ベリウスの私室だ。立ち入りは控えてもらおう」
立ちふさがったのは、いかにも戦士という出で立ちの男だった。

「そのベリウスさんに会いに来たんです」

「お前達は誰だ？」

「ギルド、明星の凜々だよ」

カロルは胸を張って言うが、まだ出来たてのギルドなため、男は首を傾げた。

「聞かない名前だな。主との約束はあるか？」

「え？や、約束？」

「残念ながら我が主は約束のない者とは会わない」

「ドン・ホワイトホースの使いの者でも？」

レイヴンがそういいながら、ふらりと前に出た。

「ドン………。これは失礼した。我が名はナッツ、この街の統領代理を務めている。我が主への用向きならば私が預かるう」

レイヴンは懐から手紙を出してヒラヒラと振った。

「すまないねえ。一応ベリウスさんに直接渡せてドンから言われてんだ」

「そうか……しかしながらベリウス様は新月の晩にしか会わない。できれば新月の晩に来て貰いたいのだが……」

どうやた間が悪いときに訪ねてきてしまったらしい。

「なんで新月の晩だけ？」

「さあな。気分が乗らないのかもしれないな」

「知らないわよ。他人の考えなんて」

カロルの素直な質問に、シークとリタはてきとつに答えた。

「この間が新月だったから、次の新月はまだまだ先ね」

「出直しますか」

レイヴンはあるさりと簡単に引き下がる。

「会えないんなら仕方ないもんね」

「わざわざ悪かったな。ドンの使いの者が訪れたことは連絡しておこう」

「頼むわ」

ベリウスには会えず、ナッツに来たことだけを伝えることにして引き返した。

次の新月の晩まではまだまだ日がある。

「じゃあ、今のうちに砂漠の情報を集めるのはどう？」

「あたしはエアルクレーネの情報を探したいんだけど」

「おっさん、とりあえずドンに経過報告の手紙出しとくわ」

「私はあまり人の視線を受けたくない。できれば外には出たくないな」

みんなそれぞれ何か言っていた。

とりあえず、今日のところは自由行動、ということそれぞれ自由に行動した。

翌朝、情報収集をしようと街に出たユーリたちだった。

シークは街に出ようとしなかったが、情報収集は人数が多い方がいい、ということでもみんなに無理矢理連れてこられた。

「そっちが先に手を出したんだろ！」

「はあ！？何言ってるやがる！」

二人の男が道の真ん中で喧嘩をしていた。

しかも、武器まで手にした。

「や、やめてください。み、皆さんに迷惑です」

そう言っただけで喧嘩を止めようとした人物がいた。

それはラーギイだった。

二人の間にはラーギイが立っていて、二人の喧嘩を止めようとしていた。

しかし、二人はラーギイの言葉には聞く耳を持たず、しかも武器をラーギイに向けた。

「うるせえ！外野は引っ込んでる！」

そして、ラーギイに手にした武器を振りかざそうとしたその時、

カキイン

と、音がたった。

男が気付いた時には男の手には武器がなく、ユーリが剣を手にして男の前に立っていた。

どうやらユーリが男の武器を弾いたようだ。

「物騒な物、街中で振り回すなよ」

「なんだ！てめえ！」

もう一人の男がユーリに突っかかるうとしたとき、ジュディスが槍の矛先を男に向けて言った。

「私が悪いなら後で謝るわ。あなたたちが悪いと思うけど」

シークも一歩前に出て男二人に言う。

「暴れたいのならば私が相手をしてやるが？」

そう言つてシークは剣に手をかけた。シークの態度にイラつたのか、男の一人がシークに武器を向けた。

「この野郎！テメエから始末してやる！」

「ん？おい、こいつの目の色・・・“赤銀の修羅”じゃねえか？」

「マジかよー！」

一人がシークに気付いたようで、二人は後退る。

それと反対にシークはゆっくりと前に出る。

「クツ！覚えてやがれっ！」

男二人は“赤銀の修羅”に恐れたのか、逃げて行った。

「便利な肩書きね」

「効力ありすぎだ」

リタの言ったことにシークはため息をつき、手を剣から離して言った。

「大丈夫ですか？」

ラーギイを心配していたエステルはラーギイに近付き、言葉をかけた。

「こ、これは、こ、こ親切にどうも。・・・あなた方はカウフマンさんといった・・・」

「ギルド明星の凛々だよ！」

カロルは自分のギルドを堂々と言った。

「ちゃっかり宣伝してるし」

「フフ、いいじゃない」

ユーリは手にしていた剣を仕舞い、ラーギイを見て言った。

「あんだ、遺跡の門のラーギイだっけ？喧嘩止めたいんならまず腕つぶしをつけな」

「は、はい。すみません」

ラーギイはユーリに言われ、小さく縮こまると軽く頭を下げた。

それから彼は一行を素早く見回した。

「あ、あの、み、皆さんを見込んでお願いがあるのですが……」

「遺跡の門のお願いじゃ断る訳にもいかないね」

「内容によるけどな。で、頼みごとってのは何だ？」

「人に聞かれない話なのでここで話のはちよつと……。あとで闘技場の方に来てください」

ラーギイはそう言い残してそそくさと闘技場の方へ歩いて行った。

「人に聞かれない話ねえ。何かヤバそうじゃない？」

レイヴンが顎を手で触りながら言った。

それに対し凜々の明星の首領であるカロルは小さく呟いた。

「でも、遺跡の門とも通じればギルドとして名も上がるし……」

「ひとつひとつ仕事をこなしていかないと疎かになるわよ。私たちの今の仕事は……」

「フェロー探しとエステルの護衛だからな」

「そつだよ。うん、気を付けるよ」

ジユデイスとユーリの言葉にカロルははっきりとした返事をして頷いた。

「でも、話を聞いてから受けるかどうか決めてみては？」

依頼人であるエステル自身はラーギイが困っているのを放っておけないようだ。

エステルの言葉にシークは溜め息をつき、エステルに言う。

「これはギルド内の話だ。なぜエステリーゼが割り込む？」

第一、エステリーゼ、お前は早くフェローに会いたいのだろうか？」

その口調は冷たいものだった。
シークの言葉にエステルは下を向いてしまい、シークに何も言い返す様子はなかった。

すると、リタがシークに対して怒りをあらわにした。

「そんな言い方しなくてもいいじゃない！話を聞くぐらい問題ないでしょ！くだらない頼みだったら断ればいいだけじゃない！」

「私は本当のことを言ったまで。外部の人間があれこれ言う必要はない」

「確かにアンタの言っていることは正しいかもしれないけど言い方に問題があるって言うてんの！」

「そんなくらいにしとけて。とりあえず話くらいは聞きに行くぞ」

口喧嘩を続けるシークとリタの間にユーリが入り、仲裁をする。
しかし、リタとシークはまだ互いを許していないようで険悪な雰囲気のままラーギィのところへ向かった。

ラーギイは闘技場の受付付近にいて、ユーリたちを見つけるとユーリたちを闘技場の人通りが少ない場所へ案内した。

「よ、よく来てくれました。あ、ありがとうございます」

「まだ受けるか受けないから決めてないぜ。話を聞いてからだ」

ラーギイは頷くと内容を話した。

「じ、実は戦士の殿堂を乗っ取ろうとしている男を倒して欲しいのです」

「乗っ取り！戦士の殿堂を！？」

「いきなり物騒な話だな」

カロールが驚くのに対して、シークは冷静さを保っていた。

すると、リタが自分の疑問に思っていることを口に出した。

「でも、それって他のギルドのことだしほととけばいいじゃない」
「そ、その、実は、戦士の殿堂には闘技場遺跡の調査を依頼されて
いますて……」

「そっか。そういえばこの街、古いんだっけ」

大きな仕事が無くなる、からと、みんなを納得させる。
しかし、ラーギイの口はまだ止まらない。

「そ、それにもし別の人間が上に立ってこの街との縁が切れたら
始祖のエンテレケイア隸長

に申し訳なくて……」「始祖の隸長つてなに？」

「あ、すみません。……ご存知ありませんでしたか。この
街を造った古い一族でして、我がギルドとこの街を渡りにつけてく
れたと聞いております」

「古い一族……ね」

「それってクリティア族のこと？」

カロルはそう言ってクリティア族であるジュデイスを見たが、ジュ
デイスは分からないのか首を傾げただけで曖昧な態度を表した。

面倒になったのかレイヴンが会話に横入りし、話を進める。

「んで、誰なのよ？その物騒な奴って」

「と、闘技場のチャンピオンです」「はあ？なに、それ」

「や、奴は大会に参加し、正面から戦士の殿堂に挑んできたそうです。そ、そして、大会で勝ち続けベリウスに急接近しているのです。とても危険な奴なので、ベリウスの側から排除しなければ・・・」

「成る程。そりゃ、戦士の殿堂も追い出さなくても追い出せねえ訳だ」

チャンピオンで居続けることには何も問題がないため、追い出せないだろう。

「で、早い話が俺たちにその大会に参加してそいつに勝てばいいんだな」

「き、恐縮です」

「そいつの目的って本当に闘技場乗っ取りなわけ？」

「も、勿論です。奴の背後には海凶の爪がいるんです。海凶の爪は闘技場を資金源にし、ギルド制圧を……!」

海凶の爪の名前を聞き、ユーリは反応する。

「キュモールあたりが考えてそうだな。海凶の爪とキュモールは繋がっている」

「海凶の爪が関わっているのなら止めないと! 帝国とギルドの仲が悪化するだけです!」

エステルのその言葉を聞いてジュデイス溜め息について、エステルに言う。

「ファローはどうするの? この調子じゃいつ会えるか分からないわよ」

「それは……」

口ごもるエステルに対してジュデイスは容赦がない。

「あなた、本当にやりたいことってなんなの？」

「本当にやりたいこと……」

エステルはジュディスのその言葉を聞いてから何も言わない。
言うことができないのかもしれない。

「やるんでしょっつ？」

「え？」

突然のジュディスの言葉にエステルは戸惑う。

「聞いてしまった以上、やるんでしょっつ？」

「はい！」

「う、うん。ギルドとして放っておけない……気がするし」

カロルはおびえながら頷き、依頼を受ける。

「で、誰が出る？」

依頼を受けた以上、誰が闘技場に出るのか決めなくてはならない。

「エステルにリタ、レイヴンとシークにはお願いできないよ。これは遺跡の門から凜々の明星に依頼したから」

「となると・・・」

視線が必然的に明星の凜々のメンバーであるユーリ・カロール・ジユデイスに集まる。

「ジユデイとあたるのだけは勘弁だな」

「残念。私は良かったんだけど、今回は大人しくするわ」

ジユデイスは本当に残念そうだった。

「首領が出るまでもないし、俺でいいよな」

「う、うん・・・」

カロールはとりあえず頷いた。

話を聞いていたラーギイがおそるおそる話かける。

「あ、あの……。お引き受けくださるので？」

「チャンピオンを倒せばギルドとしての名も上がるしな。俺たちにも悪い話じゃない」

「あ、ありがとうございます。では、準備が出来ましたらあちらで受付をしてください」

ラーギイが示した方には係員の女性がいた。

どうやらあそこで受付しないと闘技場には参加できないらしい。

「お前たちは闘技場に行くんだな？」

受付しようとしたが、突然シークがそう言ったため、ユーリは足を止め、シークに注目した。

「そうだけど……。？」

「私は闘技場は嫌いだ。最近、まともに眠れていなかったから宿で眠っている」

「シークはギルドの人間じゃないから別にいいけど・・・」

「シークはユーリが心配ではないのですか？」

「闘技場といつても命に問題はないから死ぬこともない。問題ないだろう。それに今まで生きてこれたんだ。簡単には負けないだろう？」

シークはユーリを見て言うとユーリはニツと笑った。

「簡単にはやられるつもりはないぜ」

シークはエステルに向くと、澄明の核晶の入った箱を渡す。

「あの、これは・・・？」

「砂漠に行くなら少しでもゆっくり休みたい。それに注意を寄せながら眠ってもゆっくりできない。ユーリが試合をしてる間、預かって欲しい」

シークはそう言うと宿がある方へと歩いて行ってしまった。

「澄明の核晶を預けるほどぐっすり眠りたいのね、彼女」

ジユデイスはシークが行ってしまった方へと顔を向けてそう口に出した。

ユーリは闘技場参加の登録をし、仲間と別れると戦いの場へと足を進めた。

「お待たせしました！ただいまより闘技大会を開催いたします！」

司会者がアナウンスでその声が開場中に広がる。

静かだった空間に観客の歓声が響く。

試合はトーナメント方式で予選を勝ち抜けばチャンピオンと戦うことができる。

「チャンピオンに勝てば商品とチャンピオンの称号を手に行うことができます！では、一回戦開場！」

闘技大会が始まり、一回戦、二回戦とユーリは勝ち進んでいった。

ユーリが勝利するたびにジユデイスは

「私も出たかったわ」

と口にしていた。

試合は三回戦へと進む。

司会者がユーリの次の対戦相手を紹介する。

「素顔はナゾ！顔を隠して戦う戦士！

『ガーネット』！！」

アナウンスと共に現れたのはローブと仮面を被ったガーネットだった。

「次はお前か」

ユーリは顔では笑っていたが敵意はむき出しであった。

試合開始の合図が鳴ると同時に二人は互いに剣を交えた。

「今日の狙いは俺か？」

「……」

「お前の目的は何だ？」

「……」

ガーネットはユーリの質問に答えるつもりはなく、ただ双剣で攻撃していた。

するとガーネットは力強く片方の剣でユーリを攻撃してきた。しかし、ガーネットの攻撃はユーリに届くことはなかった。

ユーリはガーネットが力強く攻撃してきた剣を弾いた。

「ユーリ選手、剣を弾いた！！弾かれた剣はガーネット選手の手から離れ観客の方へ行つたあ！！」

弾かれた剣はエステルに向かって行った。

「エステル！！」

「え？」

エステルはユーリの声にようやく自分に弾かれた剣が向かって来ていることに気付いた。

気付くのが遅すぎてしまい、エステルは身動きがとれなかった。

カキイイン

「大丈夫？」

「はい。ありがとうございます」

しかし、剣はジュディスが槍で弾いたため、エステルは傷一つ負うことはなかった。

「どうやら誰も傷を負うことはなかったようです。試合を再開します。……あれ？ガーンネット選手がいません！」

エステルに気を取られていたユーリも司会者の言葉で初めてガーンネットが消えていたことに気付いた。

「ガーンネット選手は試合放棄とみなします！ユーリ選手の勝利です

！」

ユーリの勝利が決まったと共に観客からの歓声が開場中に広がった。

「（ガーネットの奴、わざとエステルに剣が弾かれるように攻撃してきやがったな）」

観客席にいるカロルはエステルに話かけた。

「エステルに剣が飛んでくるなんて運が悪かったね」

「偶然じゃないわ」

カロルの言った言葉をジユデイスは否定した。

ジユデイスの言ったことにカロルだけでなく、エステルとリタも驚いた。

「ガーネットって奴、わざと嬢ちゃんに剣が飛んでいくようにしたのよ。素人の目なら事故にできるからなあ」

レイヴンが驚いている三人に分かりやすく説明した。

突然、会場が今までで一番大きな歓声を上げた。

闘技場の中心部を見たエステルたちは目を丸くした。

「ええ!？」

「どつゆうこと?!」

「甘いマスクに鋭い眼光!フレ〜ン・シ〜ンフォ!

アナウンスの声が会場中に広がると更に観客の声が大きくなる。

ユーリの所まで歩いてきたフレンはユーリを見て目を見開いた。

「ユーリ!なぜここに・・・!」

「お前か。闘技場を乗っ取るうとしている悪党は」

「冗談はやめてくれ。一体何の話だ?」

「こりゃ、はめられたな」

「そつらしいな」

アナウンスで試合開始を宣言するとユーリとフレンは互いの剣を激

しく交える。

互いに一步も譲らない。

「隊長になつて張り切んのもいいがあんまり一人で無理すんなよ」

「張り切ってるのは君だ。そんなに楽しそうな顔を見るのは久しぶりだよ。それよりそろそろエステリーゼ様を返してくれないか？」

「そういうことは俺じゃなくて本人に言えよ」

「エステリーゼ様は僕の言うことに耳を貸してくださいさらない」

「あのお姫様は俺の言うことも聞かないぜ」

二人は会話をしながらも剣は激しくぶつかっていた。

二人の距離が広がったところで何者かが空から落ちてきて二人の間に立ちふさがった。

「おーっと！ここで乱入者か？！」

乱入してきた者はザキだった。

ザキはすぐユーリの方を見た。

「ユーリ！！俺に殺されるために生き延びた男よ！感謝するぜ！」

「生き延びたのはお前のためじゃねえぞ！」

「俺を初めて傷付けたお前を俺はこの手で絶対に殺す！」

「やる気出すなら別のことにしやがれ」

「見る！！！」

ザキは自分の腕についている装置をユーリに見せるように掲げた。

その装置を見てジュデイスは顔を強ばらせた。

「何、あれ！？」

「魔導器よ。あんな使い方して・・・！」

「あの魔導器は・・・！」

ジュデイスはそう言うと同時にユーリがいる所へと走って行った。

エステルたちもユーリの所へと走って行く。

「どうだこの腕は！お前のせいだ！お前の為だ！」

ザキはそい言いながらユーリの方に突っ込んでくる。

ユーリは剣で突っ込んでくるザキに攻撃する。

「奇妙な腕にしゃがって！」

「あんだ！魔導器をそんな使い方して許されると思ってたの！」

リタが魔術でザキに攻撃を仕掛ける。

ジユデイスもザキに向かって攻撃をする。

「逃がさないわよ」

「邪魔をする・・・ぐああ！」

突然ザキが魔導器を付けている腕を抑えだした。

ユーリたちの攻撃で痛みを感じている様子でもない。

明らかに様子が変わった。

「制御しきれしていない。あんな無茶な使い方するから！」

どつやら魔導器のせいなようだ。

「魔導器風情が俺に逆らうか！」

ザキが魔導器のついた腕を地面に叩きつけた。

魔導器から出た閃光とともに爆発音がした。

ザキが顔を上げた方には無数の魔物がいた。

「魔物！？」

「どつしてここに！？」

「見せ物のために捕まえてあつた魔物だ。多分、今の爆発で結界魔導器が壊れたんだろう」

いつの間にかフレンが観客席の所にまで移動して言った。

魔物に目を奪われていたため、ザキを全く忘れていた。

ザキの存在に改めて気付いたのはザキが魔物の群れを通り抜け闘技場から出ていったからだ。

「逃がさない・・・！」

ジユデイスがザキを追いかけようとしたが魔物が邪魔をしてザキを
追いかけることは出来なかった。

「魔物を倒すのが先みたいだな」

「でもこの数、倒しきれないって！」

レイヴンがそう文句を言いながらも弓で魔物を攻撃していた。

「人手不足な時にあいつは何してんのよ！」

「ユーリ！子供が！！」

エステルが指さした方にはおそらく混乱した中で親とはぐれてしま
った子供が魔物に襲われていた。

「くっ！」

ユーリが走って行ったが明らかに間に合わない。

そのとき、子供を襲った魔物が突然真つ二つに斬られた。

「大丈夫か？」

「うん！ありがとうおねえちゃん！」

子供を助けたのはシークだった。

シークは子供に逃げるように言うと子供は闘技場から逃げて行った。

シークは魔物を斬りながらユーリの方へと向かって行った。

「外が五月蠅いから目が覚めてしまった。タイミングが悪い時に来てしまったな」

「タイミングバツチりだぜ。おかげで一人の命を救えたからな」

「・・・それには同意する」

ユーリとシークは会話をしながらも魔物を倒していた。

「こりゃしんどいわ」

「口より手を動かす！」

リタが魔術を使おうとしたら炎のエアルが拡散してしまった。

初めてのことなため、リタは驚きを隠せない。

「ちょっと!どういうこと!?!」

「これのせい・・・?」

リタの近くにいたエステルは澄明の核晶の入った箱を手にして言った。

その時、ラーギイが素早く澄明の核晶の入った箱を奪い逃げて行った。

このことに全員が驚く。

「なっ!待て!」

シークはラーギイを追いかけようとしたが魔物が邪魔をして追いかけることは叶わなかった。

そのとき、フレンの声が会場中に響いた。

「ソディアの小隊は魔物の討伐にあたれ!」

「一般人の避難が先だろ」

「残りは私と共に一般市民の避難だ！」

「フレンなら分かってるか。ここはフレンに任せてラーギィを追うぞ」

「ジュデイスと犬っころが先に行っ たわよ」

闘技場にいる魔物はフレン率いる騎士団に任せ、一同はラーギィを追うことにした。

闘技場の入口でジュデイスと合流した。

「ラピードがまだ追っているわ」

「ラピードが追いついていればいいけどな」

街の入口でラピードとも合流できた。

ラピードの口にはラーギイの持ち物らしき布がくわえられていた。

「よし。これで匂いで追えるな」

一同はラーギイを追いかけるため、街を出ていった。

第12夜：闘技場（後書き）

投稿に大変時間がかかり申し訳ありません。

この話ではユーリとフレンが闘技場で戦うシーンがありますが、こ
こは個人的に好きなシーンですね。

初めて見たときは

「おお！」

って口に出しながら見てた気がします。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第12・5夜（前書き）

第12夜のオリジナルスキットです。

第12・5夜

【お金の使い道】

ユーリ「シーク、さっき報酬金結構多かつたよな」

カロル「さすが五大ギルド。報酬額が半端じゃないね」

エステル「そんな大金、何に使うんですか？」

シーク「・・・別に何でもいいだろう」

ユーリ「隠してるとこ見ると怪しいな」

シーク「別に隠してはいない」

ジュデイス「隠していないなら言ってもいいんじゃないかしら」

シーク「隠してはいないが、言う必要はない」

カロール「気になるよ〜！」

エステル「教えてください！」

ユーリ「こうなったらエステルは諦めねえぞ」

シーク「使いたいときにきとうに使っている。以上だ」

カロール「ええ〜」

エステル「教えてください」

エステル・カロール・シーク向こうへ行く

ジュデイス「照れ隠しかしら？」

ユーリ「照れ隠しだな」

【シークの剣】

カロール「あれ？この剣って誰の？」

ユーリ「シークのだな」

レイヴン「青年のより大きいわね」

カロール「そういえばシークってこの剣、いつも片手で振り回してたよね。ちよつと持ってみようかな？よいしょっ！あれ？ちよつと、も、てない・・・！ハアハア、重い・・・」

レイヴン「少年は鍛え方が足りないのよ。ま、まだまだこれからだし頑張ってちよーだい」

カロール「じゃあレイヴンがシークの剣、持ってみてよ」

レイヴン「俺様の力、見てなさいって。これくらい、むっ、はっ、あれ、ちよっ！ムリッ！」

カロール「なんだ。大口叩いたわりには持てないんじゃないん」

レイヴン「これ、重すぎるって！」

ユーリ「ほんじゃ、俺も持ってみますか。．．．ふっ、くっ、なんだ、も、てない．．．．だめだ。この剣、重すぎる」

カロール「これ、本当にシークの剣？重くて持つのがやっとだよ」

シーク「ここにあつたのか。ずっと探していた」

(剣を片手で持ち上げ、剣を持って去った)

レイヴン「ちょ、あの剣を片手で．．．」

カロール「そういえばシークって力持ちだったんだっ．．．」

【便利な肩書き】

カロル「シークのこと、“赤銀の修羅”って分かっただけでみんな逃げるからシークの肩書きって凄いよね」

シーク「たかが肩書きだろう。驚きすぎだ」

ユーリ「名乗るだけでみんな逃げるからからまれた時、追い返せて便利だよな」

シーク「便利って・・・」

ジユデイス「今度からまれたら名乗ってみたらどうかしら」

シーク「私は疫病神か」

【フレンの実力】

エステル「闘技場でフレンが出てきたときは驚きました」

ユーリ「俺もフレンが相手だから手加減は出来なかったな」

シーク「闘技場にあの騎士がいた理由はそれか」

カロール「そういえばシーク、いなかっただんだけ」

シーク「ところでその騎士は強いのか？」

ユーリ「俺はあいつ相手に手加減をしてる余裕はないな」

リタ「こいつと本気でやり合うくらいだから強いんじゃないの？」

シーク「なるほどな……。実力だけは認めてやるか……」

ユーリ「素直に認めてやれって」

シーク「騎士は嫌いだ。だから認める必要はない」

エステル「シーク……」

第12・5夜（後書き）

投稿がおそくなってすみません。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第13夜：砂漠へ・・・（前書き）

カドスの喉笛／コゴール砂漠

第13夜：砂漠へ・・・

ラーギイを追いかけ、洞窟にたどり着いた。

「どつちらこの中にラーギイは逃げたみたいだな」

シークはまだ新しい足跡を見てそう確信した。

「それじゃ、行こうぜ」

「待って！」

洞窟の中に入ろうとしたユーリたちをカロルは止めた。

みんなはカロルに注目する。

「どつしたんだ？」

「この洞窟って怖い魔物がいるって聞いたことがある」

「魔物？」

「うん。だからこの中を通るのは危ないよ」

カロールの話を聞いた筈のシークだがカロールの忠告を無視し、洞窟内に入ろうとした。

シークのその行動を見たカロールはシークを呼び止めた。

「危険だからといってラーギイを逃がす訳にはいかないだろう。お前たちが来なくとも私は一人で行く」

「そういうことだ。カロールは残るか？」

ユーリはシークに賛同し、ユーリに続いて一人一人、洞窟の中に入る。

そして、カロールだけが残った。

「えっ！？ちょっと、僕も行くよ！」

カロールは慌ててユーリたちを追いかけるように洞窟の中に入った。行った。

洞窟に入ってすぐのことだった。

ラーギイを見つけたのだ。

シークとラピードは素早くラーギイに近づいた。

ラーギイは逃げようとしたが、犬の足に勝てるわけがなく、すぐに追い付かれてしまった。

シークはラピードがラーギイを捕まえてから追い付き、ラーギイに剣を向けた。

「その箱、返して貰うぞ」

「ヒイツー!」

しかし、シークとラピードは何か気付いたのかラーギイから離れた。

その直後、ラーギイとの間からエアルが現れた。エアルの色は濃かった。

「エアール!？」

「ここもエアールクレーネが？」

その光景はケーブル・モックの様子に似ていた。

「……、こんなものに助けられるとは……」

「ラーギイに逃げられる訳にはいかない……」

シークはエアールの中に飛び込もうとした。

しかし、そんなシークの行動を止めたのはユーリだった。

ユーリはシークの行動をいち早く気づき、シークの手を掴み、止めた。

「落ち着け! エアールの中に飛び込むなよ。死ぬ気か？」

「……」

突然、地面が揺れだした。

揺れと同時に巨大な魔物が現れたのだ。

「あれがカロルの言ってた魔物か？」

「違う・・・！あんな魔物、見たことないよっ！」

次の魔物の行った行動にユーリたちは目を丸くした。

「うそ・・・エアルを食べてる・・・！？」

魔物は濃いエアルを吸っているのだ。

ユーリたちは魔物を目の前に身動きがとれない。

「こりゃ、やばいかな？」

しかし、魔物はユーリたちに気付かなかったのかエアルを食べただけで何もせずに姿を消した。

魔物が消え、エアルが薄くなったおかげでユーリたちは動けるようになった。

ラーギイは動けるようになると再び走って逃げる。

「俺たちも速く追いかけるぞ」

「でも、エアルが・・・」

先ほどよりエアルが薄くなったとはいえ、エアルは完全に消えたわけではないため、近づくわけにはいかなかった。

リタはエアルに近付き、エアルをよく見た。

エアルをよく見たあと、更にエアルに近づいた。

「危険ですっ！」

「大丈夫よ。これくらいの濃度なら身体に害はないわ」

リタはそう言ってエアルがある道を通った。

リタが通ったのを見て大丈夫だと確信し、次々エアルの道を通って行く。

洞窟の中を歩いてしばらくした頃、再びラーギイを見つけたのだ。

ラピードはラーギイに体当たりをした。

ラーギイは体制を崩し、箱を放した。

ラピードは素早く箱を取り戻し、ユーリたちの所へ戻った。

「よくやった、ラピード。鬼ごっこも終わりだな」

ユーリたちが一歩、前に出るとラーギイは一歩後退する。

「こ、ここは・・・」

ラーギイはそう言うと、ラーギイの周りに煙幕が出た。

煙が晴れ、次に姿を現したのはラーギイではなく、イエガーだった。ラーギイの正体にはみんなは驚いていた。

「どつしてラーギイに・・・？」

みんなは相手がイエガーと分かると更に警戒した。

「オー！コワイですネー！ミーはラゴウのようにはなりたくないデスネー！」

「ラゴウ？どついついことですか？」

「ラゴウの死体がダングレスト川下でファインドされたんですヨ。ミーもああはなりたくないってことですヨ」

その事実を知ったみんなは驚いたが、事実を知っていたユーリ、ラピド、シークは驚くかはなかった。

シークはイエガーに剣の矛先を向けた。

すると、イエガーの前にイエガーを守るように立ち塞がった女の子二人が現れた。

「イエガー様」

「お助けに来たピョーン」

「ドローシユ、ドロワット、後は任せましたよ」

イエガーが女の子をドロッシュとドロワットと呼び、命令をすると逃げて行った。

シークは追いかけてしようとしたがドロッシュとドロワットに邪魔され、追いかけることが出来なかった。

イエガーが逃げ切れたと確信したのか、二人は煙幕を出した。

煙が晴れたときには二人の姿もなかった。しかも、煙はただの煙ではなかった。

「うわっ！何だ、この臭い・・・」

「くうーん」

煙からは嫌な臭いがした。

嗅覚の鋭いラピードにはたまったものではないだろう。

「これでは臭いで追うことも不可能だな。しかも、さっきの騒ぎで招かれざる客も来た」

シークはそう言って武器を構えた。

シークが言ったことを不思議に思ったカロルはシークが見ている方を見ると、魔物がいた。

しかも、黒く大きい生き物だった。

「わああああ！！！」

「どうやらこいつがカロルの言っていた魔物だな」

魔物はユーリたちを襲ってきた。

ユーリたちはそれぞれ武器を構え、襲ってきた魔物に攻撃した。

シークが魔物を剣で斬ると、魔物は小さい生き物に分裂した。

「！？」

「これは一体・・・？」

「分裂、した？」

ユーリは小さくなった魔物を斬った。

斬られた魔物にはダメージがあるようだ。

「とりあえず攻撃しとけば倒せるだろ」

「そついつごと」

好戦的なユーリとジュデイスにとっては喜ばしいことだろう。
ユーリとジュデイスはどんどん分裂した魔物を攻撃する。

すると魔物は再び一つにまとまり大きな魔物となって襲ってくる。

「一つになってくれると楽で助かるな。

爪龍連牙斬!!」

魔物はユーリの攻撃に倒れてそれから動くことはなかった。

「た、助かった・・・」

「あつちに光があるわな」

レイヴンは奥に光が差しているのに気付いた。

「出口のようだな。さっきのような魔物が現れないとも限らない。速く洞窟をでるぞ」

シークはそう言ってさっさと出口に向かって歩いた。

ユーリたちもシークを追いかけるように出口に向かって行った。

外に出るとそこは・・・

「コゴール砂漠だな」

シークは砂だらけの周りを見渡して言った。

「ここにフェローが・・・」

ユーリは呟く。

「この先には街があるはずだからそこで一休みするぞ」

「賛成です。歩き詰めですし、少し休んだ方が良いかと思えます」

みんなは街で休むことに賛成した。

「なんか、静かな街ね・・・」

リタは砂漠の街を見て素直に感想を述べる。

街としては一応成立しているが、人々はあまり話をしたりなどはしていない。

「こんな所にまで騎士がいる」

カロルは街で騎士を警護をしている騎士を見つけた。

こんな所にまで警護をしに来るとは何を考えているのか検討もつかない。

こんな暑いなかをあんな鎧を着て、物凄く暑いだろうに・・・。

「あの、カロルこれを・・・」

エステルがカロルの名前を呼び、見るからに高級品のアクセサリーを差し出した。

売ればおそらく相当の値段である。

「エステル、これは？」

「報酬金です。売れば高く売れるはずなのでシークとお金を分けてください」

「え？どうして？」

「ここでお別れです。これ以上は皆さんに迷惑はかけられません」

一行はエステルのした行為に驚きを隠せない。

「待つてよ！一人で砂漠に行くなんて危険だよ！」

「だからです。フェローに会いたいのには私の我が儘です。これ以上みんなを危険にあわせる訳にはいきません」

「でも　　！！」

「エステリーゼ、私はなんと言われようとお前と行く」

みんなはエステルに何かを言おうとしたが、シークはみんなより先にエステルに話した。

「でも・・・！」

「私はまだお前からの依頼を済ませていない。一度仕事を引き受けたからには最後までやり遂げる。それに仕事中に依頼主に死なれては困るしな」

「シーク・・・」

シークはいつものような少し冷たい感じに言ったが、エステルには十分伝わったようだ。

「義を持って事を成せ、不義には罰を」

突然ユーリがみんなに聞こえるように言った。

「え？」

「エステルを一人で行かせるのはどう考えても不義だよな。俺、掟

を破るほど勇気ねえぞ。だろ、カロル」

「うん！エステルを一人で砂漠に行かせるのはギルドの掟に反するよ」

「・・・ありがとうございます」

エステルはみんなに深々と頭を下げて感謝をした。

「もうアンタ達みたいな奴、止められないわよ。勝手にして。あたしはついていくだけだから」

最初にあんなに砂漠行きを反対したリタだったが、今度は自分も砂漠に行くようなことを口にしました。

「お前、エアルクレーネの調査はどうするんだよ」

「エアルクレーネは逃げたりしないから大丈夫よ。あんたたちみたいなのほっといたらなにするか分からないからついていくのよ」

リタはそう言った後、ビシッと指先を指してハッキリと言った。

「その代わりに、準備はちゃんとするよー！」

するとカロルは何かに気付き、周りをキョロキョロ見回した。

「・・・あれ？ジユデイスは？」

「そついやいないな」

ジユデイスがいないことに気付き、みんながジユデイスを探すため、周りを見回すとジユデイスが姿を見せた。

「ジユデイス！どこ行ってたのさ？」

「話は済んだ？はい、これ」

ジユデイスは水や食料など旅に必要な物が沢山詰まった袋を手渡した。

「行くのに必要だと思って準備してきたわ」

「姿が見えないと思ったら準備をしていたのか・・・」

「それと、宿もおさえておいたわ」

ジュディスはにっこりとして言った。

「明日出発だな。それまで自由行動ってことでいいな」

ユーリがそう提案すると皆は頷き、各自自由に行動を始めた。

しかし、シークだけはユーリに近付き、話しかけた。

「話がある。日陰のある場所で話すからついてきてくれ」

シークはそう言うと、ユーリを連れて街の日が当たらない日陰に移動した。

「で、話って何だ？」

「その、だな・・・えと・・・」

言にくいことなのかシークはユーリに背を向けて口をモゴモゴさせた。

「話がないなら行っていいか？」

「待て！言う！言うから行くな！」

シークは去ろうとするユーリを呼び止めた。

ユーリは再びシークを見た。

シークは深呼吸をし、ユーリと向き合った。

「洞窟の時は、その、ありがとう」

「は？」

ユーリはいきなりだったため、シークがなぜ礼を言うのか理解ができなかった。

「どづいつことだ？」

「私がエアルの中に飛び込もうとしたとき、止めてくれただろ。お前が止めてなかったら確実に飛び込んだ」

シークの言葉にユーリはようやく理解した。

「ああ、あれか。お前って時々無茶するよな」

「箱を・・・澄明の核晶を取られると思ったから」

「そんな大事な物なのか？」

「別に澄明の核晶について私は知らない。ただ、仕事に失敗することだけは許されない・・・！」

「失敗したら失敗したでそんなときはそんなときだろ？」

「仕事の失敗は絶対に許されないっ！！」

ユーリの言葉を否定したシークの声は荒々しく、そして震えていた。

「・・・シーク、どうした？」

「・・・私は失敗する度に痛い目にあってきた。私に失敗は許されないんだ・・・」

シークはそれだけを言うと去っていった。

ユーリはシークの後を追おうとはせず、シークの姿が見えなくなっ
てからその場を動いた。

「シークの奴、どうしたんだ？」

次の日、宿でゆっくり休んだ一行は宿の主人に挨拶をしていた。

「世話になったな」

「やっぱりやめた方がいいんじゃないか」

宿の主人はユーリ達を心配して砂漠へ行くのをやめるように言った。

「サンキユ。でもみんなで決めたことだからな」

「そうですか。分かりました」

宿の主人はユーリたちの決意が固いということが分かると、止めることを諦めた。

「それより、街中の騎士は何なのよ？」

「あれは監視です」

「監視？」

「はい。私たちのように商売をする者以外街の人間が外部の者と会話をしないように監視しているんです」

「何でそんなことをするんですか？」

「よく分かりませんが、執政官の命令らしいです」

「執政官の？」

「はい」

会話を続けようとしたその時、騎士が宿に入ってきた。

「ご利用ありがとうございます」

宿の主人は会話をやめてしまい、何事もなかったかのように言った。

「え？ちよつと」

カロルが宿の主人に話しかけようとした時、シークが手でカロルを静止した。

そしてシークは小声でカロルに話した。

「ここで宿の主人に話しかけてみる。宿の主人は罰せられる」

「世話になったな」

ユーリもここで話しかければ宿の主人に迷惑がかかることを分かっていたようで宿の主人に一言そう言って宿を出ていった。

みんなもユーリに続いて宿を出ていく。

「そんじゃ、行くか」

ユーリの言葉に一同は頷き、街を出ようとしたとき、子供の声が聞こえてきた。

見ると騎士と子供が何か話しているようだ。

「外出禁止令を破ろうとする奴は執政官様に言って叱られる！」

「僕達はただお父さんとお母さんを捜しに行こうとしたただだよ！」

遠くからユーリは子供に近付き、そして横から子供の会話に割り込んだ。

「叱るんなら俺が叱ってやるぜ」

ユーリが街の子供に話しかけたのに気付いた騎士は兜の下からユーリを睨み付けた。

「余所者は口出しするな」

子供を庇ってにエステルが騎士に話しかける。

「許してあげてください」

「黙って　　貴女は・・・」

騎士はエステルに黙るように言おうとしたが、エステルの顔を見て言っのをやめてしまった。

するともう一人の騎士が近付いて来て騎士に耳打ちする。

「失礼しました！」

騎士達はエステルに一礼すると行ってしまった。
エステルも騎士が去ったあとでようやくその理由に気付く。

「まずかったですか？」

「結界オーライだな」

「ありがとうございます。おにーちゃん、おねーちゃん」

子供がユーリとエステルにお礼を言った。

エステルはしゃがんで子供と同じ目線から優しく話しかける。

「君たち、名前は？」

エステルの質問に男の子の方が答えた。

「僕はアルフ。こっちは妹のライラ」

エステルは更に子供に質問をする。

「お父さんとお母さんはどうしたの？」

「シツセイカン様の命令でフェローのチョーサでシツセイカン様の馬車に乗って砂漠に行ったんだ」

アルフはまだ小さいがしっかりと質問に答えていた。

「フェローとは、また妙な話だな」

「フェローの調査って何だろう？」

「しかも、街の人間を利用してでしょ？」

「酷い……」

話しを黙って聞いていたシークは子供達に近付き、ライラの頭を優しく撫でた。

「安心しろ。私がお前達のお父さんとお母さんを捜しに行く」

シークの言葉にユーリたちはシークに注目した。

「本当？」

「ああ」

「シークお前……」

「意外か？お前達がそう思うのも無理はない。何の利益にもならない仕事だからな」

するとジユデイスが二人に近寄り、話しかけた。

「私達も捜しに行くわ」

ジユデイスの雰囲気とは合わずに子供に優しく話した。

「本当？」

「いいでしょ？カロール」

「勿論だよ」

「義をもって事を成せ。不義には罰を」ですね」

一通りの様子を見ていたリタは

「儲からないギルド」

と小さく呟いた。

「ありがとう、おねーちゃんたち。そうだ、これあげる」

アルフはそう言ってエステルにガラス玉を差し出した。

エステルはアルフからガラス玉を黙って受け取った。

「先払いされちゃったし、しっかり仕事をこなさないとな」

「そっだね」

ユーリたちはアルフとライラと別れると、ユーリはシークの方を見てシークに話しかけた。

「何でこんな仕事を自分からしたんだ？」

ユーリの質問の答えに全員がシークに注目する。

「・・・あの子供達には私と同じ思いをして欲しくなかったからだ」

「え？どういふこと？」

「私には親がない。だからあの子供達には親がない気持ちを味わって欲しくなかった。ただ、それだけだ」

「シーク、ご両親がいないんですか？」

「事故か何かで亡くなったとか？」

「・・・お前達には関係ない」

シークは素っ気なく答えると砂漠へと足を進めた。

ユーリは少し暗い雰囲気だったが、シークのあとを追いかけるように砂漠へと足を進めた。

「あつい・・・」

砂漠に入って長い時間がたつてからリタはみんなに聞こえるくらいの声で言う。

「砂漠が暑いのは当たり前！」

みんなが元気がない代わりにレイヴンは空中で一回転して言った。

「何でおっさんは元気なんだ？」

「鍛え方が違うのよ」

「あ、そう」

どうやらあまりの暑さに口を開く気力もないらしい。

一人だけ元気なレイヴンは今度はシークに話しかけてきた。

「シークちゃん、辛いなら俺様がシークちゃんをおぶって」

「・・・必要ない。それより、目障りだから目の前ではしゃぐな」
「ひどっ!..!」

シークの正直な酷い言葉に精神的ダメージを受けてしまったレイヴンだった。

「はあ、はあ・・・」

「大丈夫か？エステル」

「はい・・・大、丈夫、です・・・」

ユーリはエステルが一番辛そうだと判断し、エステルを心配してエステルに声をかけたが、エステルは心配をかけたくないせいか、“大丈夫”だと答えた。

エステルは水を飲もうと水筒を手にし、蓋を開けて飲もうとしたが水はとつくに空になっていた。

それに気づいたシークはエステルに自分の水筒を差し出した。

「え？」

「飲め」

「でも、これはシークの・・・」

「依頼主に倒れられても困る。それに私はこういう状況には慣れている」

シークの水筒を受け取ることを躊躇うエステルにそれを見ていたユーリがエステルに言った。

「貰つとけよ。倒れても俺たち、お前を運ぶ気力なんてないぜ」

「・・・分かりました」

エステルはシークの水筒を手にして、すぐにシークの水があまり減つてないことに気づいた。

「シーク、あまり水を飲んでいないようですが・・・」

「私は平気だ。気にするな」

シークの言葉にエステルは首を横に振る。

「シーク、一緒に使いましょう」

「・・・お前がそれでいいなら・・・」

エステルは水筒に口をつけて水を飲むと、今度はシークに水筒を手渡した。

水筒を手渡されたシークはエステルに代わって水を飲んだ。

シークが水を飲んですぐのことだった。

カロールが砂だらけの先を指差して今出せる精一杯の声でみんなに言った。

「ねえ！あそこに誰か倒れてるよ！！」

カロールが指差したほうを見ると、本当に誰かが倒れていた。

最初は幻覚かなにかではないかと思った一同だったが、何回も目をこすってもそれは消えず、これは本物だと確信したら、まっすぐに人が倒れているほうへ走った。

倒れているのは男女二人だった。

「おい、大丈夫か？」

ユーリが倒れていた二人に声をかけると、男の方が先に反応し、続いて女のほうもユーリの声に反応した。

「……あなたたちは……」

「水です。飲めますか？」

エステルはシークに手渡された水を二人に差し出した。
二人は水を飲むと、なんとか立ち上がるくらいには回復した。

「ありがとうございます。このお礼に是非マンタイクまで来てください」

「マンタイク？お前たちもしかしてアルフとライラの親か？」

シークがアルフとライラの名前を出すと、二人は驚きの表情になった。

「アルフとライラを知っているのですか！？」

「私達、二人にあなたたちを捜すことを頼まれたんです」

突然シークは何かの気配に気付き、剣に手をかけた。

シークの様子に気付いた一同はシークが睨んでいる方を見ると表情を強ばらせた。

そこには黒い物体があり、やがてそれは形を造り、魚類のような形になった。

「な、何あれ!？」

「お前達は下がっている」

シークがアルフとライラの両親に言つと、二人は頷き邪魔にならない所へ移動した。

「来るぞっ!」

始めにレイヴンが動いた。

「時雨!」

レイヴンの攻撃は効いていた。どうやら武器や魔法で倒せる相手のようだ。

しかし、油断は出来なかった。

相手はなかなか強い。ユーリ達は全力でかかる。

「月閃光」

「雷撃ウェーブ！」

カロールとジュデイスが同時に攻撃する。

相手は怯みその隙を狙い、リタが魔法で攻撃をする。

「トラクタービーム！」

リタの魔法を喰らいながらも相手はリタに攻撃をしてきた。

リタは突然のことで避ける暇さえなかった。

「リタっ！ “バリアー”」

エステルがリタへのダメージを少し減らそうとして咄嗟に魔法を使い、リタを守った。

リタを攻撃している間にラピードが攻撃をした。

相手がまた怯み、その隙を逃さなかったユーリとシークが同時に攻撃を仕掛ける。

「紅蓮襲撃っ！」

「爪龍連牙斬っ！」

その攻撃を喰らい、ようやく謎の魔物は倒れた。

しかし、戦闘がかなりきつく、ユーリ達は限界だった。

「さ、すが、に・・・これ、はやばい、な」

エステルを始め、カロール、リタ、レイヴン、ラピード、ジユデイスと倒れていった。

シークも今回ばかりはヤバいらしく、剣を砂に突き刺し、なんとか倒れないようにしていた。

「わ、たしは・・・ここで、死ぬ、訳には・・・」

シークの意思とは裏腹にシークも倒れてしまい、ユーリだけが残っていた。

しかし、シークが倒れてすぐにユーリも倒れてしまった。

「（なんだ？あれ、は鳥か？いや、魔物……か……？くそっ！
こんな所で……）」

朦朧とする意識の中、ユーリが最後に目にした光景は鳥の姿をした魔物の姿だった。

ユーリの意識はそこで途切れた。

第13夜：砂漠へ・・・（後書き）

皆さん、お待たせしました。

今回は反省すべき点があります。

言い訳がましいですが、なるべく早く投稿しようと思いましたし、砂漠の所はあまり好きではないシーンが盛りだくさんだったため、文章がグダグダです。

何回か書き直した部分もありますが、限界です。

次回はもっとしっかり書くよう努力します。

大変、申し訳ありませんでした。

話は変わりますが、ヴェスペリアのオリジナル小説を今、書いてますが別のシリーズの小説も書きたいなあ、と思っています。

まだ書くとは決めていません。

ヴェスペリアはまだ第2部の中盤も終わってないので、今はまだヴェスペリアに力を入れます。

ですが、ヴェスペリアが終わりそうになったら入れ替わりで別のシリーズを書こうと思います。

今、書こうと考えているのはシンフォニア・アビス・グレイセスのどれかです。

とりあえずオリキャラも考えないといけませんし……。

オリキャラのおおまかな性格としてはシークは女性としてはかっこよく、あまり仲間と馴染む感じではないので次は仲間と馴染めて親しみが持てるキャラを考えています。

シークがネガティブとすれば新オリキャラはポジティブ（笑）

長々と失礼しました。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第13・5夜（前書き）

第13夜のオリジナルスキットです。

だんだん書くネタが大変になってきました。

第13・5夜

【運が良かった】

リタ「ラーギイの奴、今思い出しても腹立つわ」

シーク「同感だな」

リタ「次見つけたら魔術でぶっ飛ばしてやるわ」

シーク「その前に素手で殴る」

リタ「そうね。あたしもあいつは殴らないと気が済まないわ」

レイヴン「ちょっとちょっと。あっちで怖い話してるわよ」

カロール「なんかあの会話、レイヴンに酷いことされた時にした会話と似てるね」

ジュデイス「その時は誰の話をしていたのかしら？」

カロール「レイヴンだよ」

レイヴン「え！？俺様！」

カロール「『次に会ったら魔術でぶっ飛ばす』とか言ってたような……」

レイヴン「ちよっ！！俺様もしかして死んでたかもしれないってこと！」

カロール「うん、多分ね……。レイヴン、運が良かったね」

ジユデイス「私もその会話に混ざりたかったわ」

レイヴン「ジユデイスちゃん、やめて！」

ジユデイス「冗談よ」

レイヴン「心臓に悪い冗談だっばー！」

【怒られたユーリ】

エステル「まさかラーギイがイエガーだったなんて・・・」

ユーリ「まんまと騙されたな」

シーク「私たちは海凶の爪に、イエガーに踊らされていたという」とだな」

リタ「なんか、そう考えると騙された自分に腹立つわ」

シーク「だが、箱を取り戻すことができて良かった」

ユーリ「随分と仕事熱心だな」

カロール「何言ってるのさ！ギルドとしても依頼の失敗はギルドの信用を失うことになるんだよ！」

シーク「ユーリはもう少しギルドの人間としての自覚を持った方がいい」

ジュデイス「そうね。もう少し真剣になった方がいいと思うわ」

ユーリ「悪かったな」

ユーリ「・・・何で俺は怒られてるんだ？」

ジュデイス「さあ？」

カロール「なんでだろう?」

シーク「知らない」

ユーリ「怒った理由も分からず怒られたのか？」

【無視しないでほしい】

リタ「暑いわ・・・」

カロール「冷たいものが食べたい・・・」

シーク「作ったとしても、すぐに暑くなるぞ」

カロール「じゃあ諦めるしかないね・・・」

レイヴン「みんなだらしのないわね。俺様を見なさい！」

シーク「・・・」

リタ「・・・」

カロール「・・・」

レイヴン「ちょっとちょっと、何？俺様を無視？」

リタ「うっさいわねー」

レイヴン「イタイッ！」

シーク「静かにしてろ」

レイヴン「ウギャッ！」

カロール「無視されずに良かったね、レイヴン」

レイヴン「もう少し優しくかまって欲しかった……」

第13・5夜（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第14夜（前書き）

まず、最初に投稿に遅れて大変申し訳ございません！！！！
そして、今回はオリジナル満載でございます。

オリジナルはいやだなあ〜っという方は戻ってください。
それでも「いいですとも！」という方だけお進みください。

ヨームゲン〜マンタイク

第14夜

『家畜風情がつ！主人に逆らうんじゃないねえ！』

大人の影が小さい少女、シークにそう冷たく言った。
シークは辛そうにしている、今にも泣きそうだった。

今度は子供の影が現れ、シークに冷たく言う。

『家畜なんだから俺達の命令くらいはしっかり聞けよ。役立たずだな』

大人の影はシークを殴り始めた。

殴られてもシークは反撃もせず、逃げもせずにとだただ殴られていた。

『私は所詮、家畜なんだ。誰もが私を家畜扱いでする。』

私は・・・家畜じゃないっ！私は人間なんだっ！

』

シークは走り出した。
屋敷から飛び出し、街中へと走り出した。

逃げるシークの視界に映ったのは騎士の姿だった。
シークは騎士にすぎなかった。
そして、今出せる精一杯の声で騎士に言った。

『助けて！私を助けて！』

シークは必死に騎士に助けを求め。
しかし、そんなシークに対して騎士は嫌な顔をしてシークを突き飛ばした。

『汚い手で触るなよ』

『！！！』

『こんな所にいやがったか』

シークを連れ戻しに来た大人。
シークの髪をわしづかみにして、嫌がるシークを無理やり連れて行った。

『放してっ！助けてっ！』

騎士なんて嫌いだ！裕福に暮らし、貧相な生活をしている人間をゴミ扱いする貴族も嫌いだ！貴族も騎士もみんな殺してやる！

「！！！！」

シークは目覚めた。

表情から見て目覚めは最悪のようだった。

「昔の嫌な夢、か。最悪だな」

シークは周りを見回した。

「ここは・・・？私は確か砂漠にいて倒れた筈だが・・・」

砂漠に倒れた筈だったが自分がある所は砂漠ではなく、道端に倒れていた。

そして、自分の近くにはユーリたちが倒れていた。

シークはみんなに近付き、生死を確認する。

「どうやらただの気絶のようだな。そのうち目を覚ますな」

シークは倒れているエステルを見ると、エステルから目線を離すことができなくなった。

「今なら・・・」

シークはナイフを手にしようとした。

「ここはどこだ」

突然の声にナイフから手を遠ざけた。

声の持ち主はユーリだった。

「目が覚めたか・・・」

ユーリが目覚めると次々と他の者たちも目を覚まし始めた。

「私たち、砂漠にいたはずでは？」

「でもここ、砂漠じゃないよ」

「そんなの見れば分かるわよ」

「とりあえずここにいても仕方ねえし、動くか」

ユーリは立ち上がりながら、言った。

「そうね。町もあるみたいだし」

ジュデイスがそう言うと、全員がジュデイスの見ている方を見た。

そこには確かに町がある。

「人に聞いてみるのが一番手っ取り早いってね」

レイヴンがそう言うのとみんなは頷き、町へと向かったが、シークだけはみんなと一緒に足を動かさなかった。そして、口を開き言った。

「私はここで休んでいる」

「え？どうして？」

カロルは誰よりも早くシークに質問した。

「少し疲れた。だからそつちで勝手に行動してくれ。私はここにいるから出発するなら声をかけてくれ。あと、これも預かってくれ」

そう言ってシークが差し出したのは澄明の核晶の入った箱だった。

「分かった。行こうぜ」

ユーリは素直に箱を受け取り、シーク以外の人たちと街へ向かって行った。

一人になったシークは地面にゆっくりと座った。

「・・・嫌な夢を見た後は気分が悪いものだな。歩く気にもなれない」

シークは近くにあった木に寄りかかり、空を見上げた。

そして、やがてゆっくりと目を閉じていく。

暗い空間の中で老若男女とわず多くの人々が倒れている。人からは血が出ている。

『ヒイイ！た、助けてくれ！』

少し幼いシークに大人は命乞いをした。しかし、シークは聞く耳は持たなかった。

『お前はお前が今言ったことと同じことを言った相手がいたら助けるか？』

『た、助けるにきまつてるだろ！』

『嘘だな。私は助けてくれなかった』

シークは大人に向かって剣の先を近づけた。目の前にくるような状況になっている。

『いままで育ててくれて感謝する。そしてさよならだ』

シークは剣を降り下ろした。

血が飛び散り、シークは大量の血を浴びる。

それでもシークは表情一つ変えることはなかった。

『沢山の人間が死んだな……。復讐もかねて目的は果たしたし、帰る……。ことはできなさそうだ』

扉の向こうから足音が聞こえる。

それも一人二人ではない。
もっと多くの足音だ。

そして、扉が激しく開かれた。
姿を見せたのは騎士だった。

騎士は部屋の光景を見た時、驚きの表情を見せた。

『これは・・・なんとも残酷な・・・』

『残酷？確かに騎士団長様の言う通りいい光景ではないな』

シークは騎士たちには背を向けている状態だった。

『これをあの少女が・・・？』

『見て分かるだろ。私以外に誰がいる？』

『捕らえる！！』

シークは抵抗することもなく、大人しく騎士たちに捕まった。

『私を捕らえて、この死体たちは捕らえなかった、か・・・。騎士
というのは卑怯だな』

シークはゆっくりと目を開けた。

「私、眠っていたのか。今日は夢見が悪いな」

シークが体をほぐそうと立ち上がったとき、ユーリたちが街の方から姿を現した。

見れば預けたはずの澄明の核晶が見当たらない。

「澄明の核晶はどうした？」

「実は……」

エステルの話によるとこの街は“ヨームゲン”というようで、アーセルム号の日記を書いた男の彼女がこの街にいたらしい。だからこの街に澄明の核晶を届けたらしい。

「だが、変な話だな。千年も前の人間がまだいるとは・・・」

「考えても仕方ないからな。さっさと戻るぞ」

「またあの砂漠を歩くのかあ」

カロールだけではなく他の皆も嫌そうだった。

レイヴンを除いて。

慣れた砂漠の道を砂漠で助けた夫婦と共に歩き、マントイクへと戻った。

「やっと着いた〜」

カロルは疲れきった顔をしていた。
他のみんなも疲れている様子だ。

「なんだか賑やかね」

「外出禁止令が解けたんじゃない？」

「そんな感じではないな」

シークが見ている方には人がいたが、何か争っているようだ。

「さっさと乗りなよ。楽しい旅に出してあげるんだから」

「待ってください。私たちがいなくなったら子供が・・・」

「巨大な魔物を殺して死骸を持ってこれれば子供が一生楽しんで生活

していける金をあげるよ」

嫌がる夫婦を無理やり馬車に乗せようとしている人物、それは……。

「あれはキュモール」

キュモールは嫌がる夫婦を無理やり馬車に乗せようとしていた。

「お許してください!」

「うるさい愚民なあ! サッサと乗りなよ!」

苛ついたキュモールは夫婦を蹴りとばして馬車に乗せた。

「あいつ!」

キュモールの行いに苛立ったシークは剣を持ってキュモールの所へ行こうとした。

「待て!」

「ユーリ! 止めるな!」

シークの腕をユーリは掴み、シークを止めた。
シークはユーリの腕を振りほどこうとしたが、振りほどくことは出来なかった。

「あの二人には子供がいる！あの二人を助けなかったら残された子供はどうなる！残された子供の気持ちがユーリには分からないのか？」

「俺は助けるつもりだ。カロール、ちょっといいか？」

ユーリはカロールにだけ聞こえるように言った。

「できるか？」

「できるけど、危なくなったら助けてよ」

カロールはそう言ってこっそりとキュモールたちの方へ向かった。何をしてもりなのか、とシークは様子を黙って見ていた。カロールは馬車の下にもぐり、馬車に何かしている。

次の瞬間、馬車の車輪が取れ、馬車はその意味をなさなくなってしまった。

「馬車の準備をしたのはだれ！さっさと直せ！この責任は問うからね！」

キュモールは怒ってどこかに歩いていってしまった。

「ふう、ドキドキだったよ」

カロルが戻ってきた。

「これがガキンチョに授けた知恵ってわけね」

「だがこれはただの時間稼ぎにすぎない。明日になればまた誰かが砂漠へ行く」

当然、そんなことはみんな分かっていた。

「俺たち、気づかれる前に隠れたほうがいいんでないの？」

「それじゃあ、私たちは……」

「ガキに顔を見せてやんな。今回みたいにも助けが来ると思っ
なよ」

「はい！」

夫婦は改めてユーリたちにお礼をいうと、自分たちの子供の待つて
いる家へと歩いて行った。

「俺らも宿にでも隠れるか」

「あの、キュモールって奴、どうしようもない奴ね」

リタはベッドに座り、先ほどのキュモールの振る舞いを思い出して、呆れていた。

「貴族なんてものはほとんどがそういう奴らばかりだ。自分より下の生き物を人として見てないんだ。それよりも問題はなぜ、キュモールがフェローを探しているかだ」

「わかりませんが、私が皇族の者として話をしたら・・・」

「無理だろっな」

「ヘリオードのことを忘れたのかしら？」

「そっだよ。あいつ、お姫様でもおかまいなしなんだよ」

「……………」

エステルはそのまま押し黙ってしまった。

「とりあえず、自分のことが、人のことが、どっちかにしたら？」

「リタ……………」

「知りたいんでしょ？始祖の隸長の思惑を、だったら、キュモールのことは今は考えないようにしてはどう？」

「あんたと意見が合うとはね。あたしもベリウスに会つのを優先した方が良くと思う」

「キュモールを捕まえてもあたしには裁く権利もない。どうしようもないなら出来ることをするべきだわ」

「フレンなら……………」

エステルは何やら考えて出てきたのはフレンだった。

「その騎士はどっどこにいる？」

「それは……」

「ごめん、エステル……みんな、責めてるわけじゃない。あたしだってムカつくわ。今頃、詰め所のベッドであいつが大いびきかいてるの想像したら。でも……」

「リタ……わかってます」

「例え捕まっても、釈放されたらまた同じことを繰り返すわねああ
いう人は」

「だろうなあ。バカは死ななきゃ、治らないっていうしねえ」

「死ななきゃ治らない……か」

「……」

ユーリの独り言に気付いたシークはユーリを黙って見ていた。

みんなが寝静まったころ、ユーリは立ち上がった。

「俺は俺のやり方で、か・・・」

ユーリはみんなが起きないように静かに宿を出た。
しかし、ユーリが出たあとにシークは立ち上がり、宿を出た。

ユーリ達は詰め所の中に入り寝ているキュモールを見つけた。

「キュモール」

ユーリが声をかけたがキュモールはいつこつに目覚めようとしな

ドカツ！

ユーリはキュモールが寝ているベッドを足で蹴った。

「キ、キ、キミー！いや！貴様はユーリ！」

「な、なんで、こつこつ！」

キュモールはユーリが手に持っている剣を見てベッドから転がり落

ちた。

「誰か！誰かいないのかいっ！」

「いねえよ」

「こ、この貴族の僕とやるっつていつのかい？いいよ、受けて立とう」

しかし、キュモールが握っている剣は震えていても戦えそうには見えない。

そんなユーリは無言で近づき、キュモールが握っていた剣を振り飛ばした。

「なっ、バ、バカな！」

目の前で起きた事が信じられないのかキュモールは尻餅をつき動揺している。

「はしゃぎすぎたな。キュモール。そろそろ舞台から降りてくんねえかな」

「キ、キミごときが、ボクに剣を向けた罪は重いよ！」

ユーリが近づくとキュモールは詰め所の裏口に逃げて行った。

「ひ、ひーっ！」

外に逃げ出したキュモールはぽっかり空いた砂の穴まで追い詰めら

れていた。

「ま、待て！ボクは悪くないんだ！これは命令なんだよ！仕方なくなんだ！」

「だったら命令したやつを恨むんだな」

「ま、待てっ！こっしょう！」

キュモールはまた一步後ずさった。

「ボクの権力でキミが犯した罪を帳消しにしてあげるよ！騎士団に戻りたければ、そのように手はずもする！」

「金はたくさんある、金さえあれば、どんな望みでもかなえてあげられる。さあ！望みを言ってごらん！」

「オレがおまえに望むのはひとつだけだ」

「そ、それは何だい……？」

ユーリはキュモールを睨みながら少しづつ近づいて行った。

「や、やめる……来るな！近づくな、下民が！ボクは騎士団の隊長だよ！そして、いずれ騎士団長になるキュモール様だ！」

そしてユーリが一步前に出るのと同じにキュモールは一步下がった、
が……

「うわああああっ！」

砂の穴に落ちてゆき、絶え間無く落ちてくる砂に少しづつ埋もれていく。

「た、頼む！助けてくれ！」

キュモールが懇願しているもののユーリはそれをただ見ているだけだった。

「ゆ、許してくれ！このままでは！こ、このままではっ！」

「おまえはその言葉を、今まで何度聞いてきた？」

ユーリは冷たい目でキュモールを見下した。

「うわあああああっ！」

キュモールは悲鳴を上げながら砂に埋もれていった。シークはその一部始終を物陰から見ていた。ユーリとシークは背後から近づく気配に気づいた。

「街の中は僕の部下が抑えた。もう誰も苦しめない」

「そうか、これでまた出世の足掛かりになるな。オレ、あいつらのところに戻るから」

ユーリは一旦空を見上げそしてフレンの横を通り宿屋に戻って行った。

「ユーリ、後で話したい」

「・・・わかってる」

「湖のそばで・・・待ってる」

二人の姿がいなくなったあと、シークは物陰から姿を現した。

そして、キュモールが落ちていった穴に近付き、穴を見下ろした。

街はフレンの部下が制圧したおかげなのか街の人達はお祭り騒ぎをしている。

「本当はこんな賑やかな街だったんだね」

「ええ。解放されてよかったわ、本当に」

「まさかフレンが来てくれるなんて」

「ほんと、ウソみたい」

エステルとカロルは嬉しそうに喜んでいる。

「でも逃げたキュモールはまたどこかで悪事を働くかもしれません」

「すぐにフレンが捕まえてくれるよ。ね、ユーリ」

「……ん、まあ、そんだな」

「……ユーリ……?」

あまり嬉しそうに見えないユーリにカロルは近づいた。

入口のところで座って寝ていたレイヴンは爆睡していて遂に床に寝転がってしまった。そんなレイヴンを見てカロルはやれやれという風に近づいた。

「子どもと一緒にになって騒いで疲れたのね。いい歳して」

ガチャ

「おかえりなさい」

入って来たのはリタだった。

「もうバカ騒ぎ。まったくあきれるわ」

「リタも楽しんでたでしょ？」

リタは照れているのを隠したいのかそれともカロルにからかわれたのが気に食わなかったのかカロルにチョップをした。

「うっさい」

「って……あれ？おっさん寝たの……」

「もう、あつと言う間でした」

「俺、フレンのところ行ってくるわ」

ユーリはそうみんなに告げて、宿を出て行った。

ユーリが出て行ったあと、リタはあたりを見回してシークがないことに気付いた。

「そついえばシークはどこに行ったのよ？」

「『シークは静かなところに行く』って言ったきり帰ってきてないよ」

「ふうん。あいつのことだから大丈夫でしょ」

「立ってないで座ったらどうだ。話があんだろ」

「……なぜ、キュモールを殺した。人が人を裁くなど許されない。法によって裁かれるべきなあんだ！」

「法はキュモールを裁けたっていうのか！？
ラゴウを裁けなかった法が？冗談言つな」

「ユーリ、君は……」

「いつだって、法は権力を握るやつのみ方じゃねえか」

「だからといって、個人の感覚で善悪を決め人が人を裁いていいはずがない！法が間違っているなら、まずは法を正すことが大切だ。そのために、僕は、騎士団にいるんだぞ！」

フレンは湖の方に向かって立っているユーリの前に出て来た。

「あいつらが今死んで救われたやつがいるのも事実だ。おまえは助かった命に、いつか法を正すから、今は我慢して死ねって言うのか！」

「そつは言わない！」

「いるんだよ、世の中には。死ぬまで人を傷つける悪党が。そんな悪党に、弱い連中は一方的に虐げられるだけだ。下町の連中がそうだったろ」

「それでもユーリのやり方は間違っている。そうやって、君の価値観だけで、悪人すべてを裁くつもりか。それはもう罪人の行いだ」

「わかってるさ。わかった上で、選んだ。人殺しは罪だ」

「わかっていながら君は手を汚す道を選ぶのか」

「選ぶんじゃない。もう選んだんだよ」

しばらく、二人のなかに沈黙が続いた。

「それが、君のやり方か」

「腹を決めた、と言ったよな」

「ああ、でも、その意味を正しく理解できていなかったみたいだ・
・・・」

騎士として、君の罪を見過ごすことはできない」

「ふざけるなっ！！！」

突然の声にユーリとフレンは大きく反応した。

声のしたほうを振り向くとそこにはシークが立っていて、フレンを

にらんでいるようだった。

「お前、なんでここに!？」

ユーリの言葉にシークは聞く耳を持たず、怒りを表しながらフレンに近づいて行った。

「その法が頼りないから人の手で裁いたんだよ!!」

私は法なんて大嫌いだっ!!」

法は私を助けてくれない!!法はいつだって権力者の味方だ!!」

「私が貴族の奴隷だったとき、貴族の虐待を受けていたとき、法は私の見方をしてくれなかった」

シークのその言葉にユーリとフレンは驚きの表情を見せた。

「君が奴隷で貴族の虐待を受けていたのを知らなかつただけで・・・」

「私は騎士団に助けを求めた。でも、まったく相手にされなかった。私が貴族のところを逃げ出したあとにその貴族が裏で虐待をしていることがわかつたさ。」

でも、その貴族に罰はなかつた。

被害を受けたのは数人で、しかも「下町の人間よりも価値のない人間だったから」って、「どうせ、いつ死んでもおかしくない命だっ

だから』って、それだけで片付けさせられた。だから私が裁いたんだ」

ユーリとフレンは同時に理解できた。

この出来事があったから3年前の“30人殺し”の事件がおきたことに……。

「私の故郷は下町よりも下……“地下町”の人間だ。この星で一番価値のない人間の一人だ。

新鮮な水は飲めないから川の水を使っている。泥水だって飲む時がある。ご飯は食べられるときのほうが少ない。

法で裁かれるときは聞く耳さえも持ってもらえない。

私たちはすでに法に絶望してるんだよ。

法がいくら変わったって法は私たち、地下町の人間には味方をしてくれないのさ……」

シークは言いたいことをすべて言ったのか、それからは全く口を開く気配がなかった。

そして、黙ったままその場を立ち去って行った。

シークが去ったあとにフレンは口を動かした。

「彼女は地下町の人間だったのか……」

「地下町なんてあるのか？俺は知らなかったが……」

「下町でも知る人は少ないからユーリが知らないのも無理ないよ。」

地下町の人間は上の法では人として見られていない。
だから仕事はもらえないし、住むところだって与えてもらえない。
だからみんな仕方なく地下に住んでいるんだ」

「地上に出て、下町に住めばいいだろ。なんでそうしないんだ？」

「地下町の人間が地上に住んだら有無も言わずに殺されるからだ
よ」

「なんだよそれ・・・」

「しかも彼らの住んでいるところは結界の外。いつ魔物に襲われて
もおかしくない場所にいる。

魔物に襲われてもきつと上は知らん顔だろうね」

「それ、おかしいだろ！法はそんな奴らのことを無視してんのかよ
！」

「彼女が貴族や騎士を憎んでいる理由がようやくわかったよ」

再びその場に沈黙が続いたころ、向こうから誰かが近づいてくるの
が見えた。

「隊長、こちらでしたか」

すると急用だったのかソディアが走って来た。それを見てフレンは
ソディアの方に歩きだしユーリとソラはフレンと逆の方に歩いて行
った。

「どうした？」

「ノードポリカの封鎖、完了しました。それと魔狩りの剣がどうやら動いているようです。急ぎ、ノードポリカへ」

「……………」

「隊長？」

「わかった」

「はい」

ソディアとの話を終え、フレンは後ろを向いたがそこにはもうユーリの姿はなかった。

「ユーリ、君のことは誰よりも僕が知っている。あえて罪人の道を歩むというのなら……………」

「・・・ラピード、・・・??」

「あ、だめ、ラピード」

ユーリはフレンのところから離れた場所に来ていた。物影からラピードが出て来てもう一人エステルが出てきて、辛そうに歩いてきた。

「全部、聞いていたのか」

「ごめんなさい」

ユーリはエステルに近づきそれに驚いたのかエステルはビクリと肩が跳ねた。

「嫌なら、ここまでにすればいい。フレンと一緒に帰れ」

「・・・帰りません」

「おまえ」

「・・・ユーリのやったことは法を犯しています。でもわたし、わからないんです。ユーリのやったことで救われた人がいるのは確かなのだから・・・」

ユーリ達は楽しそうに笑いあっている人達を見た。

「いつか、おまえにも刃を向けるかもしれないぜ」

「ユーリは意味もなくそんなことをする人じゃない。もし、ユーリがわたしに刃を向けるなら、きつとわたしが悪いんです」

「フレンと帰るなら、今しかねえぞ。急いでるみたいだったし」

「私はユーリと旅を続けます。続けたいんです。ユーリ達と旅をしているとわたしも見つかる気がするんです。わたしの、選ぶ道が・・・だから・・・」

エステルはどうしても一緒に旅をしたいようだった。

エステルはユーリに近づき、手を差し出した。

「これからも、よろしくって意味です」

ユーリは一度自分の手を見た。そして・・・

「・・・ありがとな」

握手をした。

「そういえば……」

ユーリは何かを思いついたようにエステルを見て言った。

「俺たちの話が聞こえてたってことはシークの話も聞こえたんだよな？」

エステルはユーリのその質問にこたえるのをためらったが、すぐにうなづいた。

「……はい。地下町というところがあったこと、私、まったく知りませんでした」

「俺も知らなかったんだ。これからゆっくりと知っていけばいいさ」

「はい……。私、その地下町に行ってみたいです」

「そうだな……。でも、どこにあるかなんて俺、知らねえな」

「シークに聞けばいいんです。シークはその出身みたいですから・

・

「……そうだな」

「久しぶりによく寝たくふわああっ……」

「あなた、寝すぎ」

「もう街出んだから、ちゃんと目を覚ませよ」

「……あれ？騎士団が少なくなってる……？」

カロルは街の中を見渡した。

「ああ。フレンたちならノードポリカに戻っていったぞ」

「夜のうちに、移動してたみたいね」

「何か急ぎの用事でもあったのかな？」

「前に魔物が逃げたりして大変だったでしょ。あれの後処理じゃないの」

リタは興味なさそうにいった。

「たぶん、戦士の殿堂が騎士団に協力を仰いだんだよ、きっと」

「さあ、どうだろうな」

「………?」

ユーリの意味ありげな言葉にエステルは疑問を抱いた目で見た。

「いや、なんか、封鎖がどうとか言ってたし」

「封鎖？何のことかしら」

「まさか例の人魔戦争の件で、ベリウスを捕まえるため……?」

「そう簡単に戦士の殿堂が、騎士団に後れを取るとは思えないけどな」

「何であれ、ゴタゴタしそうな予感はある」

「今はノードポリカに近寄らない方がいいかもね」

「でも新月の夜も近づいてるし、今を逃したらいつベリウスに会えるかわからないかもだよ」

「でもな〜俺様、あんま騎士団と関わりあいたくないのよねえ」

レイヴンは顎を掻きながら嫌そうに言っている。

「そりゃオレでもできればな」

「じゃ慎重に進もうよ。慌てず急いで、ね」

カロルのその言葉にみんなは頷いた。

「カドスのエアルクレーネの事も忘れないでよね」

「ああ。わかってるさ。行くうぜ」

ユーリの言葉にレイヴンはやれやれという態度をとっていた。

第14夜（後書き）

もう一度言います。

投稿に遅くなりまして大変申し訳ございません！！！！

今回はぶっちゃけシークの過去を大暴露しようと思ひまして小説を書いていました。

そのため、どうように暴露すればいいのか悩みに悩みました。

結果、自分でも「なんじゃこりゃ！」みたいな結果になりましたw

正直反省する部分の多い話になりましたね。

次からは小説を作るときはパソコンを使うようにします。

そうすればスピードUPできると思いますが、ぶっちゃけ私のやる気次第ですよねww

できるだけ頑張ります。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第14・5夜（前書き）

第14夜のオリジナルスキットです。

第14夜にタイトルをつけるのを忘れました。すみません。
タイトルは

『罪と裁き』

です。

大変、申しわけありませんでした。

第14・5夜

【シークって…】

シーク

「なぜ、今になってあんな夢を…」

エステル

「どうしたんですか？顔色が悪いようですが…」

シーク

「いや、昔の夢をみてな…。あんまりいい過去ではなかったから…」

カロル

「シークってさ、いったいどんな人生だったの？」

シーク

「ギルドして、罪をおかして牢に入ってたくらいだ」

カロル

「ギルドしてた前は？」

シーク

「…旅をしてた…と言っておいっ」

カロル

「あいまいな答えだね」

シーク

「あんまりいい思い出がなかったから昔の話はしたくないんだ」

エステル

「シークの過去には触れないほうがいいみたいです」

シーク

「そうしてもらえると助かる」

【砂漠、再び】

リタ

「あいかわらず熱いわね……」

ジュデイス

「本当ね。水浴びがしたいわ」

カロール

「早く町に戻りたいよ……」

レイヴン

「最近の若い子は鍛え方が足りないわね。
少しはおっさんを見習いなさい！」

リタ

「熱くて人がイライラしてるときに…さらにむかつくわ…」

シーク

「……………」

レイヴン

「あいたっ！」

ちよっとちよっと、シークちゃん、何すんのよ！」

シーク

「…叩きたくなったから叩いた」

レイヴン

「何？その、そこに水があつたから飲んだみたいな言い方は」

リタ

「別にいいんじゃないの？」

あたしなんておっさんの姿を見ただけで魔術をぶっ放したくなるし」

レイヴン

「ちよっとっ！リタっちまで！！」

ジュデイス

「私も見てるだけで叩きたくなるわ」

レイヴン

「ジユデイスちゃん!!」

ジユデイス

「冗談よ」

レイヴン

「…目がまじだったように見えたけど…」

【許せない】

シーク

「さっきのキュモールという騎士は最悪だな」

リタ

「本当ね」

エステル

「キュモールにはそれ相応の罰を与えるべきですね」

シーク

「奴は貴族だろう。ならラゴウと同様に罪は軽くなるのではないか？」

ユーリ

「シークの言うことにも一理あるかもな」

エステル

「…私が掛け合ってみます」

レイヴン

「まあ、それが一番いい方法かもね」

シーク

「上が素直にエステリーゼの話に耳を傾ければいいがな……」

ジユデイス

「素直に聞いてはくれないでしょうけど、それはこの娘にしかできないことね」

シーク

「…それくらいわかっている」

リタ

「ああいうバカにはそれ相応の対処が必要でしょうから、多分大丈夫よ。」

エステルの話くらい聞いてくれるでしょ」

ユーリ

「それ相応の対処か…。
確かに必要だな」

シーク

「……………」

第14・5夜（後書き）

この前、他の方が書いたヴェスペリアの小説を見ていたのですが、自分のオリキャラに声優をつけたりしていた方がいました。

その時、シークにも声優をつけるのだとしたら『櫻井浩美』さんがなあって考えてました。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第15夜：ペリウス（前書き）

カドスの喉笛／ノードポリカ

第15夜：ペリウス

ノードポリカに戻る為にカドスの喉笛に向かおうとしていると途中で幸福の市場の人とすれ違い、今カドスの喉笛は帝国騎士団によって封鎖されているらしい。

封鎖されているとはいえ、このままではペリウスに会える新月が過ぎてしまうので私達はカドスの喉笛へ向かった。

カドスの喉笛に入り、隠れて中の様子をうかがった。

「フレン隊です……」

「封鎖って言うのはあれ？」

「やっぱりフレン隊がやってたんだね……でも……あの魔物は何？」

カロルの言う通り、騎士達の中央には一匹の魔物がいた。

ただ、その魔物を退治と言う訳ではないようだ。

魔物は襲うどころか、騎士達の指示を待っているかのようだった。

「騎士団で飼い慣らしたってところかね」

「何か、フレンに似合わねえ部隊になってんな」

「確かに……」

「あいつ何やってんだかな……」

「これだけ大掛かりな作戦ならやっぱ人魔戦争の黒幕って話と関係があるのかもねえ」

「この検問、どうしよつか……」

「私としては実力行使が一番だと思うが、お前たちは嫌だろう」

シークの意見に一同は同意し、うなづく。

「（シーク、あいかわらず考えることが怖い）」

カロールに関してはこんなことを思っていた。

「じじいっつのはびじいよっ」

そう言ってレイヴンは弓を構え、魔物の近くにその弓を放つと爆発を起こした。

「な、何事だ！」

「やめろ！ 暴れるな！」

魔物はその爆発に驚き暴れ出した

「今のうちだな」

「おいおい、おっさんを置いてくなよ！」

シークが合図をすると、全員は洞窟の奥へ進んだ。

「何だ、貴様等！ 待て！」

「ユーリ・ローウェル！」

「ほんじゃ、頑張って〜！」

レイヴンは騎士団にそう言い残し、ユーリ達の後を追いかけてきた。

「珍しく派手に動いたな、おっさん」

「いや何か最近、体動かしているとテンション上がって来てさ」

「しっしっ」

「にしても街からの逃げ道を全部封鎖するとはな……」

「やっぱり帝国の力は、まだまだ大きいんだね」

「そりゃね、ギルドとはもとの力が違うから。いくらユニオンでもこうはいかないわな」

「まさに帝国ならではの力押し of 作戦だよな。一体何が目的なんだか。街道の封鎖なんて、胸糞悪い手使いやがってよ」

「フレンがそんな事するとは思えないです……。フレンの姿も見えませんし」

「それもノードポリカに行けば解るんじゃない？ 今は追っ手に捕まらないように急ぎましょう」

ジュデイスの言葉にみんながうなづくと、再び歩き始める。

「ふ〜。追っかけて来ないみたい」

「しっかし、こんな危険なとこまで封鎖してノードポリカを孤立状態にしようってんだから連中、かなりマジ気みたいねえ。まったく、魔物まで出して来ちゃって」

「きつとロクでもない事しようとしてるのね」

「フレンがこんな事を指示するとは思えません……」

「偉くなると、色々と面倒なのだろう」

「下までは指示が行き届かない、上からは理不尽な指令が来る。隊がでかくなって、偉くなると色々手が回なくなるんじゃないかね」

「随分物識りだな。流石天を射る矢の一員ってか」

「組織なんてもなあ何処もそんなもんでしょ」

シークはレイヴンの言葉にうなづく。

「問題は……フレンのやつがどこまで本気かって事だ」

「なに、ノードポリカに行けば色々見えてくんでしょ」

「そうですね」

「警戒しておくにこしたことはないだろう。」

ノード・ポリカが武力制圧されているとは思えないが」

「戦士の殿堂が黙っちゃいないもんね」

「悪い、リタ。エアルクレーネ調べる時間もあんまり取れねえぜ」

「うー。でもしょうがないか。追っ手とか来ると面倒だし……」

そう言っただけでリタは少し離れた所にあるエアルクレーネへ歩いていき、調査を始めた。

「今は完全に治まってる……。一時はあんなに溢れてたのに。あれでエアルを制御したって事？ 何で魔物にそんな事が……」

「そのエアルクレーネはもう安全なんです？」

「前みたいにいきなりエアルが噴出したら危ないよね？」

「その心配はなさそう……」

「じゃあなんだってあん時はいきなりエアルが噴出したんだ？」

「問題はそこね」

「自然現象ではないんです？」

「その可能性は低いわね。もしそうなら定期的に同じ現象が起こるはずよ」

「エアルが定期的に出るのならば、周囲に何らかの影響が出るはず」

だ」

「見たところ、そういう異常はないわな」

「だとすると、何かがエアルクレーネに干渉してエアルを大量放出する……？ でも、一体何が……。エアルに干渉するなんて、術式か、魔導器くらいしか……」

「グルルルル……」

突然ラピードが唸りをあげた。

途端、カチャカチャと甲冑の音が聞こえだした。

「追っ手か隊長に似てくそ真面目な騎士共だぜ。リタ、行くぞ。調査は終わったんだろ？」

「もうちょっと考えさせて……」

「考えを纏めるなら他の場所でも出来るだろ」

「一旦切り上げて今は行こう」

「解ったわよ！」

リタは残念そうにエアルクレーネを見た後、私達と一緒にまた走り出した。

「隠れて」

もうすぐ出口、と言う所で先頭を歩いていたジユデイスが何かに気付き、岩陰に隠れ、この先の様子を伺う。

「まあ、当然此処も押さえてるわな」

「レイヴン、さっきみたいに上手く出来ない？」

「真面目な騎士にあまり無体な事はしたくないなあ……」

「あれ、真面目に見えないわよ」

そこにいたのは三人の騎士。

だが、よくよく見るとその騎士はお馴染みのシュヴァーン隊のあの三人だった

「私は悲しいのである」

「何故に、栄えあるシュヴァーン隊の我等がフレン隊の手伝いなのだ！」

「ええい、文句を言うな！ 悔しければ、結果を出すんだ！」

「いたぞ、捕らえろ！」

「見つかった……」

「む、何事である」

「お前達、そいつ等を逃がすな！」

三人の様子を伺っていると後ろから騎士の声が聞こえ、その言葉にユーリ達は岩陰から姿を見せる。

「む、お前はユーリ・ローウェル！」

「よう、久しぶりだな」

「そ、それにエステリーゼ様！」

エステルの姿を見た瞬間、ルブラン達は一斉にこちらに向かって走り出した。

その後ろからは騎士と魔物が私達に向かって来ていた。
完全に挟み撃ち状態だった。

「ど、どうすんの!」

シークが剣の柄に手をかけたときだった。

「しゃくない!」

「おい、おっさん!」

ユーリは突然前に出たレイヴンに声をかける

「全員気を付け!」

「」「!」「」

レイヴンのその言葉を聞くと何故か三人は立ち止まり気を付けをした。

「止まった?」

その隙を見てレイヴンはさっさとルブラン達の横を通り過ぎて行った。

「何か知らんが、今のうちだ！」

シークはレイヴンを鋭く睨んだ。

「何したの、レイヴン・・・？」

「いいから、いいから。さあ、ぐずぐずしてると追っ手に追いつかれるぜ」

「だな、一気にノードポリカに向かうぞ」

ユーリ達はその場から逃げだすことができた。

カドスの喉笛を抜け騎士団を撒き、無事にノードポリカへと辿り着く事が出来た。

「騎士の姿はちらほら見えるけど……」

「この前の大会の騒動考えれば、普通の警備って感じ」

「魔物が逃げ出して大変でしたからね」

「逆に気味が悪いぜ。あんな検問敷いてたつてのに。やっぱりおっさんの言う通り、騎士団め、何か企んでやがるな」

「だが今は目立つ行動さえとらなければ問題ないだろう」

「そうだね。見た感じ、まだ此処の騎士達にはボク達の事知らされてないみたいだし」

「街の警備っばいしな」

「ベリウスに会えるのは新月の夜……丁度今夜ね」

「じゃ、宿で一休みしてからベリウスに会いに行きますか。ようやくドンの手紙を渡せるわ」

夜になり、ベリウスの面会するために向かう。

「みんな覚悟は良いか？」

「……い、いいよお……」

「あんた震えてるわよ」

「ま、ギルドの大物にして、人魔戦争の黒幕って話しだしな」

「なに、相手は同じ人間だ。怖がる事はねえって」

「だ、だって……」

「少しはエステリーゼを見習ったらどうだ？堂々としている」

「……わたしも結構もう、いっぱいいっばいです……」

「無理しなくても良いと思うよ」

リタの言葉にエステルは首を横に振り決意の決まった目をした。

「もう後には退けません、退きたくありません。わたし、ちゃんと知りたいんです。自分の事を」

「良い覚悟ね」

「それじゃあ、ベリウスに会いに行くぞ」

「？」

一歩前に出た瞬間、何処からか人の気配をカロルは感じた。

「……………気のせいかな……………？」

背後を向いてもだれもいなかったので、カロルは気にしないことにした。

「ベリウスに会いに来た」

闘技場を抜け、ベリウスの私室の前に来るとユーリは私室の前を見張っていたナッツにそう告げた。

「あなた達は……………確か、ドン・ホワイトホースの使いだっただかな」

「そそ。そゆワケだから通してもらいたいんだけど」

「……………そちらは通っても良いが……………他の者は控えてもらいたい」

ナッツはレイヴン以外をみてそう言った。

「えー！ どうしてですか？」

「あたし等が信用出来ないっての？」

「申し訳ないがそう言う事になる」

「そんな……」

『よい。皆通せ』

扉の向こうから凜々しい女性の声が聞こえた。

「統領！ しかし……」

『よいと言っておる』

「話が分かる統領じゃねえか」

「……解りました。くれぐれも中で見た事は他言無用で願いたい」

ナッツはユーリ達と向き合い、真剣な表情でそう言った。

「他言無用？ どうして？」

「それが我がギルドの掟だからだ」

「解った。約束しよう」

ユーリが返事を返すとナッツは扉を開けて通してくれた。

扉の先には階段が続いていてその一番奥の部屋がベリウスの部屋だった。

扉を開け、中に入ると……

「え、ええっ！ こ、これ何？」

部屋は真っ暗で辺りが全然見えなかった

「みんないるよな？」

ユーリの言葉にそれぞれ返事をした。

その返事を確認すると同時に松明に紫の炎が灯され松明の間に大き

な魔物が見えた。

「なっ、魔物……！」

「まさか畏とはね」

「畏ではないわ、彼女が……」

「ベリウス？」

『いかにも。妾がノードポリカの統領、戦士の殿堂を束ねるベリウスじゃ』

「こりゃたまげた」

その姿に驚いているとエステルが一步前に出てベリウスに近付く。

「あなたも、人の言葉を話せるのですね」

『先刻そなた等はフェローに会っておろう。なれば、言の葉を操る妾とてさほど珍しくもあるまい』

「あなた、始祖の隸長だな？」

『左様じゃ』

「じゃ、じゃあ、この街を作った古い一族ってのは……」

『妾の事じゃ』

「……ドンのじいさん、知ってて隠してやがったな」

『そなたは？』

「ドン・ホワイトホースの部下のレイヴン。書状を持って来たぜ」

レイヴンはベリウスに手紙を渡し、ベリウスはその手紙を読み出す。

「今更あのじいさんが誰と知り合いでも驚かねえけど、一体どういう関係なんだ？」

『人魔戦争の折りに、色々世話になったのじゃ』

「人魔戦争……！ なら、黒幕って噂は本当なんですか？」

『ほほ、確かに妾は人魔戦争に参加した。しかしそれは始祖の隸長の務めに従ったまでの事。黒幕などと言われては心外よ』

「人魔戦争が始祖の隸長との戦い……」

『いずれにせよ、ドンとはその頃からの付き合い。あれは人間にしておくのは惜しい男よな』

「じいさんが人魔戦争に関わってたなんて話、初めて聞いたぜ」

『やつとて話したくない事ぐらいあるう。』

さて、ドンはフェローとの仲立ちを妾に求めている。あの剛毅な男

も、フェローに街を襲われては適わぬようじゃな。無碍には出来ぬ願ひよ。一応承知しておこうかの』

「ふ〜。いい人で助かったわ」

「街を襲つのもいれば、ギルドの長やつてんのもいる。始祖の隸長つてのは妙な連中だな」

『そなた等人も同じであろう。さて、用向きは書状だけではあるまい。のう、満月の子よ』

「エステルが満月の子って事解るの？」

『我等、始祖の隸長は満月の子を感じる事が出来るのじゃ』

エステルは先程よりも前に出てベリウスを見つめた。

「エステリーゼと言います。満月の子とは一体何なのですか？ わたし、フェローに忌まわしき毒と言われました。あれはどういう意味なんですか？」

『ふむ。それを知った所でそなたの運命が変わるかは解らぬが……』

「ベリウス、その事なのだけど……」

「ジュデイス……？」

『ふむ、何かあると言つのか？』

「フェローは……」

その途端、外から何か騒がしい音が聞こえた。

「なんの騒ぎだよ、一体」

「遂に見つけたぞ、始祖の隸長！ 魔物を率いる悪の根源め！」

途端、扉が勢い良く開き二人の男が入って来た。

「テイソン！ 首領！」

部屋に入って来たのは魔狩りの剣の首領クリントとテイソンだった。

「これはカロール君ご一行。化け物と仲良くお話するとは変わった趣味だな」

「闘技場で凶暴な魔物どもを飼い慣らす、人間の敵！ 覚悟せよ、我が刃の錆となれ！」

「ナ、ナンは……？」

「お？ 気になるか？ 今頃、闘技場で魔物狩りを指揮してる頃だろうよ。俺等魔狩りの剣の制裁を邪魔する奴あ、人間だって容赦しやしねえぜ」

「かかって来ないなら、俺から行く！ さあ相手になれ、化け物！」

ベリウスに近づこうとしたティソンの前にシークが立ちはだかった。

「こちらはベリウスにまだ用がある。

死なせるわけにはいかない」

「邪魔すんならてめえから死ねえ！！」

そう言った途端、ティソンはシークに襲いかかり、クリントはベリウスに襲いかかった。

シークはティソンの攻撃を紙一重でよけ、ベリウスはクリントの攻撃を受け止めた。

『こ奴等は妾が相手をせねば抑えられぬようじゃ。そなた等、すまぬがナッツの加勢に行ってもらえぬか』

「あんたは大丈夫なのかよ！？」

『たかが人などに遅れは取りはせぬ』

「解った、行くぞ！」

ユーリ達はティソンとクリントの相手をベリウスに任せ、その場を

あとにした。

「闘技場は現在、魔狩りの剣が制圧した！ 速やかに退去せよ！」
闘技場に入って直ぐに聞こえたのは、魔狩りの剣の女の子、ナンの声だった。

「ナン！ もうやめてよ！」

「カロール？ 何で此処に……」

ナンは振り返り、カロールを見ると怪訝そうな顔をした。

「ギルド同士の抗争はユニオンじゃ厳禁でしょ！」

「何言ってるの！ これはユニオンから直々に依頼された仕事なんだから！」

「何だと？」

すると、ナンの後ろから金髪の青年が出て来た

「お前・・・ハリー!？」

「あいつ・・・ダングレストで会ったユニオンの奴？」

「ああ、ドンの孫のハリーだ」

「ドンの孫・・・？」

「ちょっと、何がどうなってるのよ？」

「お前もドンに命令されたる？ 聖核を探せって」

「ああ、でも聖核とこの騒ぎ、何の関係があるってんだ？」

「ジュデイス! どうしたの・・・あ、あの人！」

「ナッツさん・・・!」

「行くぞ!」

ジュデイスが走って行く方を見ると、ナッツがいて魔狩りの剣に囲まれていた。

「ええい! こっちの話、終わってねえってのに・・・!」

「待て! 退去しろと言っているだろう!」

「レイヴンもいるんだ。あいつ等は味方だろ。ほっとけ」

「後一人じゃ物足んねえだろ？ オレ等が相手してやるよ」

ユーリはナッツの周りを囲んでいる魔狩りの剣にそう言うと一気にこちらを向いた。

「貴様等もベリウスの配下か！」

「ボ、ボク等は凜々の明星だ！」

「何か知らねえが、魔物に味方する奴は死ね！」

「遅い！！！」

魔狩りの剣が攻撃を仕掛けてくると、ユーリとジュディス、さらにシークは即座に魔狩りの剣より早く攻撃をした。

「ぐわああっ！！！」

魔狩りの剣達はそのまま倒れてしまい、気絶しているのを確認するとエステルは急いでナッツに駆け寄り、治癒術をかける。

「……うっ」

「何とか間に合ったようね」

「あんた治療術師だったんだな。お陰で命拾いしたよ」

次の瞬間、上からベリウス、クリント、ティソンが落ちてきた。

「うわっ！」

「ベリウス様！」

ベリウスを見ると、かなりの傷を負っていたが命に別状はないようだった。

『ナッツ、無事のようだの。まだやるか、人間共！』

「……この……悪の根源……め……」

「あいつが悪の根源？　んな訳ねえだろ。良く見てみやがれ！」

「魔物は悪と決まっている……！　ゆえに、狩る……！　魔狩りの剣が、我々が……！」

クリントはそう言ってそのまま倒れる。

「この石頭共！」

「この・・・魔物風情がぁ・・・！」

走り出そうとしているティソンをジュデイスが止める。

それを見ていると、突然ベリウスが苦しそうに息を吐きだした。

「ベリウス様！」

「直ぐに治します！」

「エステル、だめっ！」

ジュデイスが止めるのも聞かずにエステルは直ぐにベリウスに近づき、治療術をかけ始める。

『ならぬ、そなたの力は……』

次の瞬間、眩い金色の光がベリウスを包んだ。

『ぐぁぁぁああっっ！』

突然、ベリウスが暴れだし周りにある物や人を攻撃しだした。

「あのまま暴れられると闘技場が崩れっちまうぜ！」

「戦って止めるしかないのか!？」

「そ、そんなあ！」

「わたし……」

「このままじゃマズいよ……」

シークは唇を噛み締め、剣を強く握りしめるとその矛先をベリウスに向けた。

「シーク、何をするんですっ!？」

それを見たエステルがシークの腕を掴んで止めようとしたが、シークはエステルの手を乱暴にはらった。

そして、エステルを鋭く睨みつけて言った。

「誰のせいだと思っているっ!私だってこんなことはしたくない。だが、ベリウスを止めるにはこうするしかないんだ……」

ユーリも剣の矛先をベリウスに向けた。

「やっぱ戦って止めるしかねえ！」

「でも、こんなの相手に手加減なんて出来ないわよ！ こっちがやられちゃうわ！」

「そんなのって……！」

「ベリウス……」

「エステル、しっかり！」

「ええ……」

「来るぜ！」

ベリウスが最初に攻撃を仕掛けてきた。

みんなはそれぞれベリウスの攻撃をよけると、一番素早いラピードが最初に攻撃《雷神犬》をする。

次にユーリ、カロル、ジュディス、シークがベリウスに同時に攻撃した。

「峻円華斬」

「裂旋スマッシュ」

「月光」

「襲爪雷斬」

ベリウスがひるんだ隙を逃さなかったリタ、レイヴンがベリウスに魔術で攻撃する。

「デモンズランス」

「ハヴォックゲイル」

ベリウスはその攻撃をまともに喰らい、倒れた。

「お、おさまった……」

「ベリウス様!!」

するとベリウスの身体が光り出し、リタがベリウスを見て声を上げる。

「今度は何?」

「こんな結果になるなんて……」

「ごめんなさい……。わたし……わたし……」

エステルはその場に座り込み、辛い顔をして今にも泣きそうだった。

『気に……病むでない……。そなたは……妾を救おうとしてくれたのである……』

「……でも、ごめんなさい。わたし……」

『力は己を傲慢にする……。だが、そなたは違うじゃな。他者を慈しむ優しき心を……大切にするのじゃ……フェローに会うがよい……。己の運命を確かめたいのであれば……』

「フェローに？」

『ナッツ、世話になったのう。この者達を恨むでないぞ……』

「ベリウス様！……」

「ま、待って下さい！　だめ、お願いです！　行かないで！」
「ベリウス……さようなら……」

さらに眩い光が放たれ、光が消えた途端目の前に青く透き通った光を放つ大きめの結晶、聖核が現れた。

「妾の魂、蒼穹の水玉を我が友、ドン・ホワイトホースに」

キュアノシエル

聖核はエステルの前に降りてきて、エステルはそれを手に取った。

「エステルはそのまま顔を俯けて床に座りこんでしまった。

「ハリーが言っていたのはこつこつ訳か」

「……その石を渡せ」

「こいつがためえ等の狙いか。素直に渡すと思つか？」

「では素直に……させるまでの事」

「そこまでだ！ 全員、武器を置け！」

「ちっ、来ちまいやがった」

闘技場の入り口からソディアの声が聞こえその後ろから鎧の音が聞こえ出す。

「貴様……闘技場にいる者を、全て捕らえる！」

「さっさと逃げないと、俺等も捕まっちゃうよ？」

「あたし等、捕まるような事何もしてないわよ！」

「きつと何か捕まえる理由こじつけられちゃうに決まってるよ！」

「そうね。逃げた方が良さそう」

みんなは逃げ出し、レイヴンだけがハリーの方へ行った。

そして、シークだけはベリウスが消えた場所を見たまま、動こうとしなかった。

そのシークの様子に気付いたユーリはシークに声をかける。

「早く逃げるぞ」

「……なさい、ごめんなさい、ごめんなさい……。私は……を壊す
行いをしてしまった……」

「シーク？」

シークは泣いていて、ユーリの言葉は耳に入っていなかった。

「シーク！」

「っ！ユーリ……」

「今は逃げるぞ」

「……わかった」

シークはユーリと一緒に闘技場から逃げ出した。

闘技場の出口に行くと騎士達が出口を塞いでいた。

「こりゃ、完全に騎士に制圧されてんな」

「港から海に出るしかないわね」

「港も封鎖されてるんじゃない？」

「カドスの喉笛だって封鎖されてんのよ。だったら一か八か港の包囲網に突っ込むのよ！」

「そっか、海に逃げた方がまだマシだもんね」

「そう言うだった」

「あれ、おっさんは……?」

「ハリーの方に行ったよ」

「心配しなくてもレイヴンなら大丈夫よ」

「そうね。呼ばれなくても出てくる人だもの」

「ユーリ・ローウェル、そこまでだ!」

後ろからソディアの声が聞こえその隣にはウィチルもいた。

「エステリーゼ様もお戻り下さい。フレン隊長が心配しています」

「……わ、わたしは……」

「エステルは戻らないわよ!」

リタが魔術を使おうとした時、シークが前に出た。

「シーク?」

「ここは私が引き受ける。時間くらいなら稼げるはずだ」

「何、言ってるのよ！そんなことしたらあんたが捕まるでしょっ！」

「それにシークは人殺しの罪があるんだよ！次、捕まったら死刑にされちゃうよ！」

「私はまだ死なない。いや、死ねない。だから心配する必要はない」

「でも！」

「エステリーゼ、私は今はお前と向き合えない。お前の顔を見ることはできない。だから、しばらく別行動をとらせてほしいんだ……」

シークは一瞬だけ振り返りユーリを見ると、軽く微笑んだ。

すぐに前を向き、剣を手にすると騎士団に襲いかかった。

「シーク！」

エステルがシークの加勢に向かおうとしたが、ユーリに止められた。

「今のうちに行くぞ」

「でも……！」

「シークがつくってくれた時間を無駄にするな」

「……はい」

シークをその場に残し、一行は再び走り出した。

港近くまで逃げて来ると、フレンが待ち構えていた。

「フレン……」

「こっちの考えはお見通しって訳」

「エステリーゼ様と、手に入れた石を渡してくれ」

「何でフレンが聖核の事……?」

「騎士団の狙いも、この聖核って訳か」

「魔狩りの剣も欲しがってた……」

「渡してくれ」

フレンは静かに告げ、鞘に手を当てる。

「うそっ、本気？」

その行動に思わずとカロルは声を出してしまう。

「お前、何やってんだよ。街を武力制圧って、冗談が過ぎるぜ。任務だかなんだか知らねえけど、力で全部抑え付けやがって。それを変える為に、お前は騎士団にいんだろっが。こんな事、オレに言わせるな。お前なら解ってんだろ」

ユーリの言葉にフレンは少し顔を歪める。

「何とか言えよ。これじゃ、オレ等の嫌いな帝国そのものじゃねえか。ラゴウやキュモールにでもなるつもりか！」

「なら、僕も消すか？ ラゴウやキュモールのように君は僕を消すと言っのか？」

「フレンー!!」

「え……それって……？」

「お前が悪党になるならな」

「そいつとの喧嘩なら別のところでやってくんない？ 急いでるんでしょ！？」

「……ち」

「行くわよ！」

ユーリたちはフレンの横を通り、港へ向かう。

港へ走り、フィエルティア号に乗った

船に乗り込むとユーリ錨をあげ、後を追いかけてきたレイヴンがハリーを連れて船に乗り込むと、それを確認したトクナガが直ぐに船を出した。

船が出航して暫くすると突然船が大きく揺れた。

「何するんです！」

「や、やめてえ！！」

エステルとリタの悲鳴と共に何かが爆発する音が聞こえた。

その悲鳴と爆発音を聞きつけ、ユーリ達も駆動魔導器の元に集まった。

その場にはエステルとリタ、ジュデイスがいて駆動魔導器は破壊されていた。

「……ジュデイス」

「……どうして？」

「……私の道だから」

空から泣き声が聞こえると、竜がジュデイスの方に飛んでくる。

「ジュデイ！ 待て！」

「あなたたちといて楽しかったわ。……さようなら」

ユーリはすぐさまジュデイスの所へ向かうが、バウルの方が先に辿り着きジュデイスは竜に乗って飛び去って行った。

「ジュデイス……！？」

「なんで、どうしてよー！？」

リタは悔しそうに握り拳を作り俯いていて、エステルとカロルはどうして？ と言う顔をして、レイヴンとラピードは竜が飛び去って行った方をじっと見ていた。

第15夜：ペリウス（後書き）

今回は多分、オリキャラの出番が少なくなると思っています。
でない可能性もあります。

とりあえず、ユーリたちの会話の中では出るという形が多くなると
思います。

もしかしたら一部始終をカットするかもしれません。
大変ですが、頑張りたいと思います。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第15・5夜（前書き）

第15夜のオリジナルスキットです。

第15・5夜

【フレンの考えは？】

カロル

「カドスが騎士団に封鎖されてるなんて、どういことだろう？」

ユーリ

「しかも封鎖してるのがフレン隊だ」

ジュデイス

「ノードポリカは孤立状態ね」

シーク

「騎士という奴は何を考えているかわからないな」

エステル

「フレンは理由もなしにこのようなことをする人ではないので、何か理由があると思いますけど……」

シーク

「それはどうだろうな」

エステル

「どづいづことですか？」

シーク

「もしかしたらあの騎士の意思で動いているのかもしれないぞ」

エステル

「フレンは理由もなくそんな行動をする人ではありません！」

ユーリ

「エステル落ち着け。シークは“もしかしたら”の話をしただけだ」

エステル

「……………すみません……………」

ユーリ

「とはいえ、さっきのはどづかと思つぞ」

シーク

「……………そうだな。」

少々、軽率だったな」

ジュデイス

「とにかくノードポリカに行けば答えが分かるんじゃないかしら」

カロール

「そうだね。」

騎士団も追ってきてるし早く行こっ」

【料理へのこだわり】

カロール

「シークの作るシチュー、美味しいよね」

シーク

「別に皆とたいして変わらないだろう」

エステル

「私もカロールと同じ意見です。お城のシェフが作るよりも美味しいです」

リタ

「食事するだけであんたたち騒ぎすぎよ」

エステル

「リタはおいしくないんですか？」

リタ

「そ、そんなこと言ってないじゃない」

レイヴン

「じゃあ美味しいんじゃない。リタっち素直じゃないわね」

ジユデイス

「あなたの作るものはほとんど美味しいけど苦手料理はあるのかしら？」

シーク

「カレーが苦手だな」

ユーリ

「カレーとシチューなんて似たようなもんだろ」

カロル

「それにカレーもシチューに負けないくらい美味しいけど・・・」

シーク

「ユーリの言っているカレーは簡単なものだ。

私は本格的に作るからスパイスの微妙なさじ加減などにこだわっている。いつもスパイスの量を微妙に間違えるからうまくつくれたことがないんだ」

リタ

「だからシークの作るカレーだけは味が違うわけね」

エステル

「どつりでシークの作るカレーだけお城のシェフに似た味がしたんですね」

ユリ

「カレーを作る日だけ殺気立ってたのはそのせいか……」

【ベリウスの死】

ジュデイス

「ごめんなさい、ベリウス」

エステル

「私が……私のせいでベリウスが……」

シーク

「……」

リタ

「あー！もっっ！

今は逃げることに集中しなさいよねっ！

悩むことならあとでもできるでしょっ！

ジュデイス

「そっね」

エステル

「じめんなさい……」

シーク

「そうだな。今は逃げるのが先だな」

リタ

「分かったのなら早く行くわよ」

【シークとの別れ】

エステル

「シーク、一人で騎士団に立ち向かうなんて無茶です！
私がフレンに話して……………」

ユーリ

「落ち着け。今戻ったら城に連れ戻されるぞ。
それに騎士団はシークの罪を許すはずがねえ。エステルがいくら言
ったって聞いちゃくれねえよ」

エステル

「でも、シークが騎士団に捕まったら……………」

ユーリ

「シークが強いつてことはエステルだって知ってるだろ」

エステル

「でもっ！」

ユーリ

「それにシークは今まで騎士団から逃げれたんだ。うまく逃げるだ
ろ。」

今は俺たちが騎士団に捕まらないようにしないとシークが残った意味がないだろ」

エステル

「……………はい。分かりました……………」

第15・5夜（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

第16夜：覚悟（前書き）

ダングレストへテムザ山を抜けたあとまで

第16夜：覚悟

「駆動魔導器は魔導少女ががんばって見てくれてる。新しい方は魔核壊れて治しようないみたいだけどな」

ジユディスが駆動魔導器を壊していつてしまし、海の真ん中で漂流中のユーリたち。

リタが駆動魔導器を見ていることをユーリはレイヴンにそう報告した。

「カロルやエステルはどうしてる?」

「なんか黄昏れちゃってるわ。様子見にいつてやれば?」

「おっさんが見に行ってくれても良いんだぜ?」

「ガラじゃないって」

レイヴンはそういうと、他の場所へ行ってしまった。

レイヴンが去ったあと、ユーリも他の場所へ移った。

「なんとか魔導器の調整はすんだわよ」

ユーリがリタの様子を見に行くと、ちょうど魔導器は治ったようだった。

その場所にはエステル以外のみんながそろっていた。

「他の部分のチェックも済んでるわ。直ぐにでも出発できるわ」

「よかった……これで船が動かせるんだね」

「なら、とりあえず、ダングレスト行きたいんだけど。こいつをドンのとくに送り届けないと」

レイヴンは隣で座っているハリーを見て言った。

「僕も行くよ。ベリウスの聖核を渡すために」

「だったら、おっさんが持ってたげるよ。ほれ」

「レイヴンには頼めないよ」

レイヴンは手を出していたがカロールに断られ肩を落とした。

「おや、悲しいねえ、一緒に旅してきたのに、俺って全然信頼されてない？」

「正式な依頼じゃないけど、ベリウスの最後の願いだから……。これを果たさないのは、義にもとるでしょ」

「ベリウスがああなったのは俺達の責任でもあるんだ。俺達が届けるべきだな。」

それに、ドンならなぜ聖核が色々なヤツらから狙われるのか知ってるかもしれねえ」

「ドンも欲しがってたからね」

「聖核の事がもっとわかればフレンの気にいらねえ動きの理由も少しはわかるかもしれねえ」

「じゃ、ドンへの橋渡しはおっさんがしてあげるよ」

「ほんとに？」

「袖振り合うも他生の縁って言うからね。それくらいなら凛々の明星のために動くわ」

「あたしもドンのところに行く」

それまで黙って聞いていたリタが話に入ってきた。

「リタも……？」

「色々あったでしょ。それって全部、この聖核につながってる気がするのよ。だから……」

「ドンは俺達に聖核探せって言ってたしね。確かに何か知ってるかも」

「じゃ、リタもドンのところまで一緒ってことで」

「後はエステルだけど……」

エステルは個室に閉じこもっていてその場には居なかった。

「しばらくはそつとときましょ」

「だな」

「ジュデイスは……どうしたのかな……。それに、シークは無事なのかな？」

「なら、ドンに聖核を届けたと、ジュデイスに会いに行ったらどうなの？」

「ああ、そうだな。錠を破った人間を、見過ごすわけにもいかねえ

し

「う、うん。ちゃんと理由を知らない」と

「シークの方は情報がないからどうしようもねえな」

「ま、心配するだけ無駄だと思うけど」

「でも、まずはダングレストだ」

「トルビキア大陸の南岸に船がつけられる砂浜があるよ。そこから上陸した方が、ダングレストに近いかな」

「それじゃそこを目指すか」

【ダングレスト】

「それじゃ、俺はこいつを連れてドンのとこに顔出してくるわ。長くなりそうだから宿屋で待っててよ」

レイヴンはユーリたちになんかそう言つとハリーを連れてユニオンへ行こうとした。

「待って」

カロールがレイヴンに声をかけて呼び止めた。レイヴンは振り返り、カロールを見た。

「ボクも行ってもいい？」

「これはユニオンの問題だ。来ても話には混ざれないと思つぜ」

「それとは別の話をドンに聞きたくて…」

「^{アバティア}聖核を渡すときにでも聞けばいいだろ」

「みんなとは…聞けない」

カロールはそう口にするのと下を向いてしまった。

「ダメもとでいいならついて来なさいよ」

「ありがとうっ！」

カロルは嬉しそうに顔を上げるとレイヴンたちについて行った。

ユーリたちは宿屋で待つことになった。

宿屋で二人を待っているとレイヴンの知らせでドンは“背徳の館”
という所に行ってしまうたらしい。

背徳の館は海凶の爪レヴァイアサンがいるらしく、ドンを心配してユーリたちは背
徳の館へ向かうこととなった。

しかし、カロルだけはユニオンと戦士の殿堂の戦争を心配し、ダン
グレストに残ることにした。

【背徳の館】

背徳の館に着いてすぐにイエガーといつも一緒にいた二人の少女、
ゴーシュとドロワットがいた。

見たところ、仲間同士でもめているようだった。

その会話から得た情報で魔狩りの剣が竜使い《ジュデイス》を狙っているという情報を得たのだった。

ゴーシュとドロワットが中に入っていくのを見計らい、警備の目を盗み中に入って行った。

中に入ってすぐに二階でドンとイエガーが対峙しているのを見つけた。

ユーリたちはドンの手助けをしようと階段に近付いたが、海凶の爪を率いたゴーシュとドロワットが邪魔をした。

「通さない」

「おっさん、海凶の爪は手を出さないって言ってなかったか？」

「仕掛けたのはドンの方よん」

「なんだと？やっぱりじいさんは・・・」

レイヴンは何かに感づいたかのようにつぶやいた。

「何しにきやがった！バカ野郎が！若いのまでつれてきやがって！」

「エクセレントな演出、感謝感激サンキューよ」

「いったいどういふことよ！？」

「どきやがれっ！」

ユーリは剣を抜いて海凶の爪に攻撃を仕掛けた。

海凶の爪を倒したところにはドンもイエガーも姿を消していた。

ユーリたちはドンを捜すため、館中の部屋を捜した。

ドンは館の一番奥の部屋にいた。

ゴージュとドロワットが二人の邪魔はさせないとばかりに立っている。

「まさかユーがこんな強引なプランでくるとは……」

イエガーは残念そうな顔でドンを見ている。

「てめえに生きてられると世の中ややこしくてしょうがねえんでな」

「ユー自らがユニオンの掟に反して私闘なんてすると他の5大ギル

ドも黙ってナツスイン」

「覚悟のうえよ」

「だが、夜が明けちゃった」

外を見るともう朝になっていて日差しが入ってきている。

「とめえよ力量を計り損ねてたみたいだな。時間切れだ。もうダン
グレストに戻らねえとバカ共がケンカ始めちゃう」

「ふ、ふん。今更ユーが戻っても衝突はさけられないでしょう」

「タダじゃあな。払う代償は用意してある」

「代償……か……」

「こっちの落とし前がまだだぜイエガー」

イエガーはユーリ達を見ながら数歩後ろに下がった。

「さすがに旗色悪いです。グッバイです！」

そついい窓がある方に走り出し、窓を割って外へと出た。

ゴージュとドロワットもイエガーに続いて窓から外へ出て行った。

「あ、待て！」

「ちっホント逃げ足の速い」

「おまえらは何だ。雁首そろえてこんなところまで来ちまいやがって」

「じいさんの盟友の形見だ。あんたに届けてくれって頼まれた」

ユーリは手に蒼窮の水玉を持ちドンに渡した。

「そうか……。世話かけたようだな。
ちっ……こんな姿になりやがって……」

ドンは手に持ちまるでベリウスに語りかける様に言った。

「ねえ、その聖核って一体、何なの？」

「こいつはな」

ドンが話し出そうとしたらバンツ！！ドアをこじ開ける音が聞こえてきた。

「話してる暇はねえ、か……」

「すまねえがザコの相手は任せる」

それだけ言い残しドンは急いで窓から出て行った。

「ちよっ」

すると、ドアを破り海凶の爪が数人入って来た。

「こりゃオレたちも逃げようぜ」

「悪い。時間稼いでやってくれ」

するとレイヴンがいつにも増して真面目な顔で武器を構えている。

「頼むわ」

レイヴンは何かを悟っている顔でお願いをした。

「じゃあねーな」

そついいユーリは武器を構えると戦いになった。

「そろそろ潮時だぜ」

「だな」

ユーリ達はある程度倒し窓から外に出て行った。

ユーリ達がダングレストに入るとカロールが焦ったような顔で走って来た。

「ユーリ！大変だよ！」

「ユニオンと戦士の殿堂が武装魔導器もってにらみ合ってたっ！ドンも戻ってきたんだけどなんか様子がおかしいんだ！」

「ドンは間に合ったようね。けど、やっぱりか……」

レイヴンは言葉を切って濁した。

「やっぱりって、どういうことですか？」

「じいさん、最初から死ぬつもりだったのよ」

「なんでよ！ワケわかんないんだけど」

「ハリーが先走って、結果、ベリウスが死んだ。ノードポリカよ統領の命だ。偽情報掴まされて間違えましたで済まされるわきゃない。ベリウスに釣り合う代償が必要ってことだ」

「じゃあ背徳の館でドンが言っていた代償って……」

エステルもその意味がわかったのか最後まで言わなかった。

「じいさんの命か……」

「腹切る覚悟を決めてたから掟を破ることになってもイエガーを討ちに行つたつてのか」

「そんな！そんなのって！」

カロルはそれだけ言つて広場の方に向つて行つてしまった。

「きつと他にも方法があるはずです！」

「今はこれしか方法がない。でなければ、ユニオンと戦士の殿堂の全面戦争になる」

突然、第3者の声が聞こえた。

しかし、この声は彼らにとつてとても聞き覚えのある声だった。

エステルが声が出た方を振り向くと、エステルの表情が一変した。

「シーク！！無事だったんですね！」

「私はまだ騎士に捕まるわけにはいかないからな」

「ずい分とボロボロになって帰ってきたわね」

リタの言うとおり、シークは体中が傷だらけだった。

「騎士からいそいで逃げてきたからな。ドンの最期を見逃さないように……」

「“最期”って……。他にも方法が……」

「ない。他の方法があるかもしれない。だが、探している“時間”というものがない」

「……」

エステルは何か出来る事が残ってないのかと目をとじて閉まった。

「……オレもじいさんのところ行ってくる」

ユーリ達は重たい空気のなか広場に歩いて行った。

広場に行くと中央にドンが座っていた。

そこにカロルは走って行く。

「しっかりな、坊主。首領なんだろ？」

「でも、ボクなんて一人じゃ何も出来ない……」

「だったら助けてもらえばいい。そのために仲間がいんだろ？」

「ドン……！」

ドンは優しく語りかけるようにカロールに言い聞かせている。

「仲間を守ってみな。そうすりゃ応えてくれるぞ」

「……………」

「ドン！オレも一緒に…………！」

ハリーがそういった途端レイウ^ンが怒りながら殴った。

「バカ野郎が！」

「じいさん。あばよ」

「レイヴン、イエガーの始末頼んだぜ」

「ははっ、俺にや、荷が重過ぎるって」

「おめえにしか頼めねえんだ」

「……………ドン」

今度はシークがドンに近づいていく。

周りの者たちはシークの赤と銀の眼を見て、小さな声で話し始めた。

「あれって“赤銀の修羅”だろ？」

「なんであいつがここに……？」

シークにはその会話が聞こえていたが、無視しドンに話かける。

「ドン・ホワイトホース」

「おめえ、随分とボロボロになってるじゃねーか」

「この傷は……あいつらを逃がすためについた傷だから……」

「おめえ、前よりも丸くなったな。あいつらと旅をして変わったか」

ドンはそう言っつて、ユーリを見た。

「……そうかも、しれないな……。そろそろ時間だな。お前の最期、見届けさせてもらうぞ。

ドン・ホワイトホース」

シークはそうドンに言っつと、ドンから離れていく。

今度は戦士の殿堂の人がドンの前まで歩いてきた。

「おたくの可愛い孫にやずいぶん世話になった」

「すまねえことをした。あのバカ孫もれっきとしたユニオンの一員だ。部下が犯した失態の責任は頭が取る。それがギルドの掟だ。ベリウスの仇。俺の首で許してくれや」

「ドン……」

そんなやり取りをエステル達は遠くの方から見ていた。

「バカよ。ギルドなんて……どいつもこいつもバカばっか……」

「すまんが誰か介錯頼む」

ドンは手に刀を持ちそこに集まっている人達に言った。

瞬間みんながざわつき顔を見合わせた。

「……オレがやるっ」

そのなかで唯一名乗りをあげたのがユーリだった。

「おめえも損な役回りだな」

「お互い様だ」

「はっ、違いねえ。ユーリ。おめえの将来おきを見てみたかったがな。俺は先に地獄で休んでるとするぜ」

これから死のうとしているのにドンは笑った。

「あんたが行くのが地獄なら、オレあんたのところにやいけそうにないわ」

「ふん。おめえの減らず口、忘れねえぞ」

「オレもあんたの覚悟忘れないぜ。ドン・ホワイトホース」

途端、ユニオンの人達はドンの名前を呼んだ。

「てめえら、これからはてめえらの足で歩け！てめえらの時代を拓くんだ！いいな！」

最期、まるでその場にいる人達に言い聞かせる様に叫んだ。

ドンは刀を構え、そして……

「街のみんなも落ち着いてきたようです」

エステル達はユニオン本部の大首領の私室に入って居た。

「この世の終わりみたく沈み込んでるけど」

「カロールも……」

ドンが亡くなったことで随分落ち込んでいます……」

「おっさんは色々連れ回されてるみたい。一応天を射る矢の一員だし」

「そっか」

「オトシマエをつけるためなら自分の命をも差し出す、か……。ギルドにとって掟はそこまでのもんなのね」

「……ギルドの掟に生きることへの誇り……負うべき責任……。選んだ道への覚悟……。ドンは見せつけていきやがった」

ユーリはいつもドンが座っていた椅子を眺めながら言った。

「文字通り命をかけて、ね……」

「責任……選んだ道……」

「オレも……けじめをつけなきゃな。まずはオレたちのギルド凛々の明星か」

「そういえば、ジュデイスはどうした？」

シークはジュデイスがいないことを疑問に思い、尋ねる。

「そういえばシークはあの時いませんでしたね」

エステルはシークにジュデイスのことを説明し始めた。

「俺、ちょっと散歩してくるわ」

ユーリはそう言って、みんなと別れ、外に出て行った。

ユーリは酒場『天を射る重星』のところで座り込んでいるカロルに話をかけた。

「ユーリ、ボク……何も出来なかった……。ドンも……ユーリたちも自分たちで決めて出来る事を行ったのに」

「……………」

「街のみんなはきつとボクなんかの話聞いてくれない……。なら戦士の殿堂と話をしてみようと思ったんだ。でも、問答無用で襲ってくるかもしれない……。そう思ったら……。ボク一人じゃ怖くて……行けなかった……。」

ボクじゃ何も出来ないんだ……………」

「ジュディはどうする気だ？探しに行くんじゃないの？」

カロルはそれを聞いて足に顔を埋めた。

「……行けないよ。ユーリ達とは一緒に、行けない……。ギルドの首領なんてボクには無理だったんだ……」

そんな事を言うカロルにユーリは近付きカロルの肩を持ち立たせた。

「おまえにとってギルドは、凜々の明星はそんなもんなのか？」

「おまえの夢だったんだろうが」

「一流のギルドを作りたかった！そしてドンの役に立ちたかった！認められたかったよ！ドンはボクの憧れだったんだ……。でも、もうドンはいないんだ……」

カロルは泣きそうな声でそういい壁にもたれながらまた座り込んだ。

「だからやめんのか？ドンは何を守って死んでいった？それがわからないおまえじゃないだろ」

「なんでも出来るユーリにはボクの気持ちなんてわかりっこない！ボクはユーリみたいに強くないんだ！

ユーリやドンみたいにはなれないんだ！もう……」

「カロル！」

「ドンがおまえに伝えた事は何だった？ドンが見せた覚悟も忘れちゃったのか？」

「……………」

「オレはギルドとしてけじめをつけるためにジユディを探してテムザ山に行く」

「え……………」

「おまえがやめても凜々の明星はおわらねえ。もっおまえだけのギルドじゃねえんだ」

ユーリはそれだけ言うと広場に戻って行った。

「うつ、うつ……………」

「逃げたくない……………。逃げたくないのに……………」

カロルの声は静かに街に消えていった。

「カロルは？」

「よけいな心配するなって。それより二人ともかれからどうするつもりなんだ？」

「あたしはもちろを一緒に行くわよ。言ったでしょ？ エアルクレーネの調査はあんたたちとするって決めたの」

「そうだったな」

「わたしも、ユーリ達と行きたいです。ジュデイスが魔狩りの剣に狙われているかもしれないのに放っておけない……」

「あの女を助ける義理なんてないでしょうに」

「……ジュデイスと一緒に旅してきた仲間です……」

「でも、船の駆動魔導器を壊した」

リタはまだジユディスがやった事を根に持っているのか刺がある。

「でも……」

「オレが行くのは助けるためじゃないぜ。ケジメをつけるためって言っただろ？」

「ユーリ……」

「ジユデイが一体、何を知っていて、何を知らないのか……。全部話してもらおう。ギルドとしてケジメをつけるために」

「エステリーゼから聞いたが、ジユディスはテムザ山に向かったのだろうか？」

突然、シークが会話から横入りし、ユーリに尋ねた。

「海凶の爪がそう言っていたな」

「シークは一緒に行かないんです？」

「そうだな……。お前たちについていってもいいか？テムザ山までの道のりは分かるから道案内をさせてもらおう」

「行ったことあるのか？」

「ある。でなければ道案内など務まらないだろう」

シークもユーリ達についていくことにした。

「レイヴンはどうするんです?」

「さすがに来ないでしょ。ドンを失ったこの街をほっとけないだろうし」

「だろうな。おっさんにはおっさんのやることがある」

「……寂しくなりますね……」

「ま、あのおっさんの事だからまたとんでもないところで会ったりするかもな」

「で、テムザ山ってのはどこにあるの?」

リタは道を知っているシークを見て尋ねる。

シークはコゴール砂漠がある方を見て言う。

「テムザ山はコゴール砂漠の北にある」

「そんじゃ、行くぞ」

カロルの目はもう迷いなどないものになっていた。

「カロル先生が首領なんだ。一緒に行くのは当たり前だろ」

「ユーリ。ありがとう！でも……もう首領って言わないで」

「ん？」

「ボクは……まだ首領って言われるような事何もしてない……。ユーリにちゃんと首領って認めてもらえるまで、首領って呼ばれて恥ずかしくなくなるまで、

ボクは首領じゃなくて同じ凛々の明星の一員としてがんばる！」

「……わかった。カロル。がんばれよ」

「うん！」

ユーリはそれまでにない優しそうな顔でカロルを見た。

「ほんっとギルドって面倒。アツ過ぎ。バカっぽい」

「んむんむ。青春よのう」

「うわっ！お、おっさん……?!」

どこから湧いて出てきたのかレイヴンが居た。

「若いつて素晴らしいねえ」

「感動的な場面が貴様のせいで台無しだな」

シークはレイヴンに聞こえるようにため息混じりにそう言った。

「ちよっ！シークちゃん、傷つくこと言わないでちょうだい。

おっさんの心って結構、もろいのよ」

「おっさん、何してんだよ」

「えー、おっさんがここにいちゃだめなの？」

「だって、ドンが亡くなった後で大変って……」

「んー。色々と面倒だから逃げてきちゃった」

「ドンに世話になったんでしょ。悲しくないの？」

「ああ、悲しくて悲しくて、喉が渇くくらい泣いてもう一滴も涙は
出ない」

「全部、そんなふうに見えないけど」

リタは疑ったような顔をしてレイヴンを見ていた。

「さすがのおっさんもドンの最後の言葉は無視出来ないって事だろ」

「ん、んなわけないってーね。言っただろ、俺には重荷だって」

レイヴンはユーリに凶星を打たれ動揺してるようだった。

「あっちはあっちで、後に残った奴らがきっちりやってくれるって」

「ま、そういうことにしておいてやるよ」

「ったく。最近の若人は怖いわ」

「じゃ、デズエール大陸に出発ですね」

「え、なんでデズエールなの？」

「良いカンしてんじゃないの。」

察しの通りテムザ山はコゴール砂漠の北にある。あそこにや、確かクリティア族の街があったしな」

「シークから場所を聞きました」

「クリティア族の街があったのは初めて聞いたな。なぜ、そんなことを知っている？」

「少年少女の倍以上生きてると人生、色々あるのよ」

「なにそれ」

「ほれ、行くなら行こつや」

みんなはジュディスがいると思われるテムザ山へ移動をするため、ダングレストの街を後にしたのだった。

【テムザ山】

テムザ山についた一行。

ラピードは下にあった足跡を発見し、吼えた。

「ワン！」

「これ、人の足跡だよね？ずいぶんたくさんあるな」

「魔狩りの剣、でしょうか？」

「騎士団かもな」

「え？どうして騎士団が？」

「フレンも聖核を探してた。

魔狩りの剣が聖核を狙ってここに来てんなら、騎士団も聖核を狙って来てるかもしれない」

「何故みんな聖核を手に入れようとするんでしょう？」

「結局ドンには聞けなかったし……」

「ジユデイが全部話してくれたら何かわかるかもしれないな」

「ねえ！ちょっと来てよ！ここ、なんかすごいよ……」

カロルが一足先に坂道を登っていて、目の前にあるのをびっくりしていた。

ユーリ達はその声を聞きカロールがいるところまで来ると目の前には山が削られた無残な光景が広がっていた。

山には森林がなく、とてもさびしい。

風の音だけが異様に聞こえてくるのだった。

「なによこれ。山が削れてる……」

「ここで一体何が……」

「こんなんでもントに街なんてあるのかな……」

「十年前は確かにあったんだがなあ。今はどうかわかんないわ」

「十年前？そんな前の話なのか。その時はなんでこんなところに来たんだ？」

「そりゃ……」

ユーリが最もな事を聞くとレイウンは言いたくなさそうに口を綴んだ。

キュウウン……

「あの声……バカドラ!？」

「何かマズイことになってんじゃないの」

「急ぎまじゅう！」

そしてユーリ達は険しい山道を歩き始めた。

先程居た場所より下りたところに来たユーリ達はその山の削れ方にまた一段と驚きを隠せなかった。

「近くで見ると、より酷いな」

「どう見ても、自然現象じゃないわね」

「何かが爆発したあとみたい……」

「爆発って……。こんなことできる魔物なんているの？」

「ああ。その魔物なら、とっくに退治されたから」

レイウンは何か知ってるみたいに話した。

「退治されたって、どういうことですか？」

「ここが人魔戦争の、戦場だったということだ」

「え！そうなの？」

シークという言葉にカロルは驚きを見せた。

「ということとは……。ここで人と始祖の隷長が戦ったんですね……」

「『戦いは人の勝利で終わったが、戦地に赴いた者に生存者はほとんどおらず……。その戦争の真実は闇に包まれている……。』。公文書にも詳しいことは書かれていません」

エステルはお城で読んだ事があるのかその時の事を簡潔に説明した。

「じゃあ、この有様は始祖の隸長の仕業ってことか……すさまじいわね」

「でも、ここが戦場だったって話、聞いた事無いぜ」

「色々、情報操作されてんのよ。帝国にね。知られたくないことが一杯あつたんじゃない？」

「魔物が人間相手に戦争っておかしいと思ってたけど……」

「その魔物というのが始祖の隸長だということも知られたくない事実だった……」

「レイヴン、随分詳しいね」

「少年少女の倍の人生生きていれば、色々あんのよ、ほんとに」

「それに、シークもここが人戦場だって知ってたみたいだし……」

「私はデューク様から聞いたことがあるから知っていたただけだ。ここに来た時にデューク様がお話してくださった。

だが、詳しく聞いたわけではないからレイヴンのように詳しくはない」

「歴史の勉強はもういいだろ。オレたちはジュディを探しに来たんだ」

「先ほどの魔物の声……ジュディスたち、もう追い詰められているのかも」

「あのバカドラはあたしがぶん殴るんだから、先を越させないわ」

「ああ」

「急ぎましょー！」

ユーリたちは戦場の跡地から離れ、山を登っていく。

山の中腹部に差し掛かったときまたユーリが止まった。

「……」

「どうしたんです？ユーリ」

「いや、ジユデイが前に言った。『バウルが戦争から救ってくれた』ってな……」

それって人魔戦争の事だったのかなって」

「じゃあもしかしてあの女って人魔戦争の時にバカドラと一緒に帝
国と戦ったのかな？」

「どうなんだ？レイヴン？人魔戦争に参加してたんだろ」

「へ？なんで？」

レイヴンはいきなり話を振られたのか変な声をした。

「色々詳しいのは当事者だからだろ」

「そうなの？でも、生き残った人、ほとんどいないんでしょう？」

「ああ、さすがの俺様も、あんときは死ぬかと思ったね。あゝ、あんなとき、死んでりゃもうちつと楽だったのになあ」

「死んでりゃって、あんた……」

「それで、戦争中にジユデイスに会ったりしました？」

「いやいや。いくら俺様でも10歳にならない女の子は守備範囲外よ」

「アホか……」

リタはレイヴンを見て呆れていた。

「十年前といえば、ジユデイスはまだ幼いだろっ。
戦争に参加、しているとは思えないな」

「まー、あのバウルってのも見かけなかった気がするし、どっかに逃げてたんじゃない？」

「戦争の相手はやっぱり始祖の隸長だったのか？」

「そうなるんだろうなあ。当時はとんでもない魔物としか思ってたな
かったけども」

「でも、ホントにレイヴン、戦争に行ってたんだね。すごいね、そ
んなの騎士団だけかと思ってたよ」

「大人の事情ってヤツさ」

レイヴンは浮かない顔で穴ボコの山を見ていた。

そして中腹部から少し進んだところに昔、街があったのか瓦礫の山があった。

「ここがクリティア族の街……？」

「街というより、街の跡ね」

「ジュデイスはここに何しに来たんだろう……？」

「故郷を懐かしんで……ってワケじゃなさそうだな」

「グルルル」

突然、ラピードが瓦礫の向こうを警戒しだした。すると武器を持った男達が飛んで来た。

「魔狩りの剣！」

「ジュデイス！」

そして飛ばされた方から出てきたのは槍を持ったジユデイスだった。ジユデイスはユーリ達の姿を見て驚いている。

「あなたたち……」

「くそっ！」

「テイソンさんとナンに知らせろ！」

「おまえら！うちのモンに手え出すんじゃねえよ」

「掟に反しているならケジメはオレらでつける。引っ込んでな！」

「我々は奥に行つて魔物を狩りたいだけだ！」

「邪魔をするな！」

「もう、面倒くさいなあ。ぶっ飛ばしちやおうか」

するとリタの足元に譜陣が現れた。

「やるというのなら、相手になるか？」

シークは剣の柄に手をかけた。

「そつねえ。こいつらじゃ話にならないしねえ」

「消えとけ。ホントに一戦やらかすか？」

男たちは怖じけづいたのかその場から逃げ出した。

「ジユデイス……」

「追ってきたのね。私を」

「ああ。ギルドのケジメをつけるためにな」

「ジユデイス。全部話して欲しいんだよ」

「何故魔導器を壊したのか。聖核のこと。始祖の隸長のこと。フェローとの関係、知ってること全部ね」

「事と次第によっちゃジユデイでも許すわけにはいかない」

ユーリの言葉にジユデイス以外は驚いた顔をした。

「不義には罰を……だったかしらね」

「……そうね。それがいいことなのか正直分らないけど、あなたたちはもうここまで来てしまったのだから」

「来て」

そしてジュデイスは街の跡の更に奥に続く道を歩き出した。

「ユーリ……ジュデイスでも許さないって……」

「……ドンな覚悟を見てまだまだ甘かったことを思い知らされた。討たなきゃいけないヤツは討つ。例えそれが仲間でも、始祖の隸長でも、友でも」

「フレンやフェローでもってこと？」

「……ああ。それがオレの選んだ道だ」

そして、カロールを残しユーリもジュデイスの後を着いてった。

「ボクは……」

カロールはしばらく考えてたが何か決めたらしく、みんなの後を走っていった。

ジュデイスの後ろをついていき、ジュデイスは山の山頂付近になると、足を止めた。

「ここが……人魔戦争の戦争だったことはもう知ってる？」

「ああ。おっさんに聞いた」

「人魔戦争……。あの戦争の発端はある魔導器だったの」

「なんですって!」

リタは魔導器と聞いてみんなのなかで一番驚いた。

「その魔導器は発掘されたものじゃなく、テムザの街で開発された新しい技術で作られたもの。ヘルメス式魔導器」

「ヘルメス式……」

「初めて聞いたわ……。それに新しく作られたって……」

「ヘルメス式魔導器は従来のものよりもエアルを効率よく活動に変換して、魔導器技術の革新になる……はずだった」

「何か問題があつたんだな」

「ヘルメス式の術式を施された魔導器はエアルを大量に消費するの。消費されたエアルを補うために各地のエアルクレーネは活動を強め、異常にエアルを放出し始めた」

「そんなの人間どころか全ての生物が生きていけなくなるわ！」

「ケーブ・モックヤカドスの喉笛で見たアレか。そりゃやばいわな」

「人よりも先にヘルメス式魔導器の危険性に気付いた始祖の隸長はヘルメス式魔導器を破壊し始めた」

「それがやがて大きな戦いとなり人魔戦争へと発展した……」

「じゃあ、始祖の隸長は世界のために人と戦ったの?！」

「どうして始祖の隸長は人に伝えなかつたんです?!その魔導器は危険だつて!」

「互いに有無を言わずに滅ぼしやいいってなもんよ。元々相容れない者同士そこまでする義理は無かつた。そんなとこかねえ」

「テムザの街が戦争で滅んで、ヘルメス式魔導器の技術は失われたはずだつた……」

ジュデイスはそこで言葉を切つたが、みんなは何か分かつた様だつた。

「まさか!そのヘルメス式がまだ稼働してる?!」

「そう。ラゴウの館、ヘフミドの丘、ガスファロスト。そして……」

「フィエルティア号の駆動魔導器か……」

「それじゃあ、ジュデイスは始祖の隸長に替わつて魔導器を壊して……」

「なら!言えば良かったじゃない!どうして話さなかつたのよ!一人で世界を救つてるつもり?バカじゃないの?!」

それまで黙つて聞いていたリタがジュデイスに向かって思い切り叫んだ。

ジユデイスはそれを黙って聞いていたが山頂の奥に洞窟になっている所からまばゆい光が出てきた。

「な、何？」

「バウル！」

「……危ないっ……！」

突然、エステルに向かって何かが飛んできたことにシークは誰よりもいち早く気づき、エステルをかばった。

武器は持ち主のもとへ戻るかのように、飛んできた方へと戻っていた。

武器を受け取ったのはナンだった。

ナンの隣にはティソンの姿もあった。

「ナン！」

「どうやら獲物はそこにいるようだな」

「行かせないわ」

ジユデイスはバウルがいる方に背を向け、二人と対人した。

「人でありながら魔物を守るなんて理解できない！」

「手下どもに聞かなかったか？うちのモンに手え出すなっつたろ？」

「い、いくらナンたちでもギルドの仲間を傷つけるのは許さない！」

「まだ話の途中なのよ！邪魔すんな！」

「やるというのなら相手になるぞ」

「あなたたち……」

ジユデイスはそんな仲間達を驚いた顔で見た。

「魔狩りの剣がなぜ人に危害を加えるんですか！」

「魔物に与するものを、人とは呼ばんだろっ」

「カロル。魔狩りの剣の理念も忘れたの？邪魔しないで」

「魔物は悪……」。

魔狩りの剣はその悪を狩る者……。

でも！始祖の隸長は悪じゃない！世界のために……」

「雇われて見境無くなってるんだろ。狙いは聖核のクセにカッコつけてんじゃねえよ」

「ふん。話にならんなあ、どうしても邪魔だてするのなら……」

みんなは武器を取り、戦闘が始まった。

「ナン！お願いだよ！やめてっ！」

「それは無理よカロル！魔物は悪！そう決まっている！」

カロルは戦いながらも必死にナンを説得するが、ナンはまったく聞く耳をもたなかった。

説得に夢中になり、攻撃に隙ができたカロルをシークがカバーした。

「人間にもいろいろいるといる。ならば、魔物にも色々といえるのではないか？」

「“赤銀の修羅”も魔物に味方する気？」

「魔物に味方をするとは言っていない」

シークがナンの攻撃を防ぎ、その隙にレイヴンとカロルがナンに攻撃をしていた。

しかし、ナンもなかなかの手だれで、カロールやレイヴンの攻撃を防いでいた。

残り的人たちはティソンと戦っていた。

ティソンの動きは素早く、なかなか攻撃をあてることができない。

「貴様ら、なぜ我々の邪魔をする？」

「お前が明星の凜々《うち》のもん到手え、出してるからだろ」

「あたしらはジュデイスにまだ用があるのよ！邪魔すんなっ！」

「バウルには指一本、触れさせないわ！」

「これならどうです？『エンジェルリング』」

光の輪っかがティソンを攻撃する。

ティソンに攻撃は見事あたり、ティソンはひるんだ。

その隙を逃さなかったユーリとラピード、ジュデイスはティソンに攻撃をする。

「蒼破・追連！」

「ガウツ!!」

「月破墜迅脚!」

「ぐおっ!」

「これでとどめよ!『イラプション』」

「ぐわっ!!」

リタの魔術が見事に命中し、ティソンは倒れた。

「師匠っ!」

「よそ見をしている暇はないぞっ!
セツゲキレッシュヨウ刹鬨烈晶」

「キヤアツ!」

「今だ!土竜なり!」

「ごめん、ナン。崩襲サンダー!」

「きゃああああああっ!」

ナンもカロルたちの一斉攻撃で倒れてしまった。

「ナン、ごめん……」

カロルは倒れて気を失っているナンにそれだけを言ってバウルがいる方に走って行った。

「これは……」

みんながバウルの元に行くとバウルは横たわって苦しそうだった。

「バウルは成長しようとしているの……始祖の隸長としてね」

「苦しそう……」

「がんばって……バウル」

エステルは苦しそうにしているバウルを見て、バウルに近づこうとしました。

「だめっ!!」

「怪我を治してあげたくても、何もしてあげられない……。あなたにとってわたしの、わたしの力は毒なんですよね……」

「傷を癒やせるってのがエステルたちの力じゃないぜ」

「え？」

「ベリウスの言葉……覚えてない？」

“力は己を傲慢にする……。だが、そなたらは違うようじゃな。他者を慈しむ優しき心を……。大切にするのじゃ”

「慈しむ心……」

「バウルにも伝わっているわ。きっと……。あなたたちの気持ち」

「ま、今は見守るーじゃないの」

そしてパウルの体が一層光りに包まれ、気がつくともパウルは山より大きな体になっていた。

「おほー」

「すごい……」

「がんばったわね。バウル」

「どうやら相棒はもう大丈夫のようだな」

「ええ、ありがとう。バウルを守ってくれて……。私だけだときっ

と守りきれなかったわ」

「仲間だもん。当たり前だよ！」

皆は歓声を上げ喜んだ。

エステルがバウルに近づき撫でるとくすぐったいのかバウルは声をあげた。

「言ったでしょう？ちゃんと伝わってるって」

「ふふ」

「フェローにも伝わるかもしれない」

「会う？フェローに」

「決めるのはエステルだ」

「……会います。それがわたしの旅の目的だから」

「いいの？殺されちゃうかもしれないのよ」

「自ら、死に向かうようなものだな」

「はい。わたしも覚悟を決めなきゃ……」

「覚悟、か……」

エステルの言葉にシークは一瞬うつむいたが、すぐに顔をあげた。

「乗って。とりあえずフィエルティア号まで飛ぶわ。話の続きはそこで、ね」

そしてユーリ達はバウルの背中に捕まりフィエルティア号まで飛んで行ったのだった。

それからバウルにフィエルティア号を持ってもらって空を飛んでいたら、

今までの疲れが出たのかジュディスはその場に倒れてしまった。

「ジュディ?!」

ユーリ達はジユデイスをフィエルティア号の客船室で休ませた。

「疲れてたんでしょう。眠ってます」

「いきなり倒れちゃうんだもん」

「成長のために動けなかったバウルを寝ずに守ってたんだろう、魔狩りの剣がいつ襲ってくるか分からなかったろうしな」

「割と平然としてたけど今でも無理してたのかもねえ」

「バカなのよ。あいつも。不器用なんだから」

「ジユデイの話の続きは明日だな。今は寝かせておいてやるうぜ。
オレたちもちよっと休もう」

そして船の中だがみんなバラバラに散り、好きなように行動した。

シークは外に出て、下の方を見下ろしていた。

「覚悟、か……。私もいつまでも悩んではいられないな」

「なにがだ？」

シークの後ろにはいつの間にかユーリが立っていた。

シークはユーリの気配に気づいていたのかさほど驚きはしなかった。

「何の覚悟だ？」

「お前には関係のないことだ」

「そりゃそつだ」

ユーリはシークの隣に移動し、シークと同様、下の世界を見下ろした。

「なんか下に面白いもんでもあんのか？」

「別にない」

「じゃあ、さっきから何見てるんだ？」

「下の世界。下にはこんな景色を拝むことはできなかった。上から見る景色が珍しいから見ていただけだ」

「確かにそうだな。」

まさか空での旅を満喫することになるなんて思わなかったな」

「そうだな……」

シークは景色を見ていたが、視線をユーリに向け、ユーリに話しかけた。

「ユーリ……」

「なんだ？」

「もし、私が……いや、なんでもない。忘れてくれ」

「変な奴だな。俺、他の奴の様子見てくるわ」

「ああ……」

「ユーリ。おはよう」

「ああ」

「綺麗な朝……でも、今こうしている間にもエアルは乱れ、世界は蝕まれているかもしれないんですね」

「……」

「そうよ」

するともう大丈夫なのかジユデイスが客船室から出てきた。

「ジユデイス！」

「もう大丈夫なのね。ジユデイスちゃん」

「本来、エアルが多少乱れたところで世界には影響はないわ。

エアルのバランスを取るために常にエアルの流れを感じているものがあるから、

それがフェローやバウルたち始祖の隸長」

「始祖の隸長がエアルの調整役……」

「長い間、始祖の隸長はエアルを調整し続けてきた。

だけど近頃エアルの増加が彼らのエアル調整の力を上回ってきている」

「そのヘルメス式魔導器か」

「だからジユデイスはヘルメス式魔導器を壊して回ってたんだな」

ユーリの言った事にジユデイスは頷いた。

「ええ。」

それが私の役目。私を救ってくれたバウルと進む道」

「ジュデイスの道……」

「最近は何核を求めて始祖の隸長に挑む人さえいる、始祖の隸長はその役目を果たすことがより難しくなっているわ」

「どいつもこいつも何核を狙う理由は何なんだ？」

「私にはわからないわ。」

聖核とは、始祖の隸長が体内に取り込んだエアルを長い年月をかけて凝縮し、

始祖の隸長が命を落としたときに結晶となって生まれるもの。

私を知っているのはこれぐらい。フェローならもっと詳しいと思うけれど」

「……聖核は高密度エアルの結晶……それが本当なら、

もし聖核のエネルギーをうまく引き出すことができれば、

凄まじいパワーを得ることが出来るわよ、きつと」

「そんな方法があるんです？」

「少なくともあたしは知らない」

「そんなことができるのなら、欲しがる奴は多勢いるな」

「誰かが悪巧みしてるのは間違いなさそうねえ」

リタはそれを聞きまた考え出した。

「でも……どうして最初に話してくれなかったの？」

「まったくだ。話してくればこんなややこしいことにはならなかった。ちがうか？」

「……知っても……あなたたちには無理なことがあるから」

「どういう事？」

「……あの時私たちがヘリオードへ向かったのは、バウルがエアルの乱れを感じたから、
エアルの乱れがあるところにヘルメス式魔導器はある……。でもそこにいたのは魔導器ではなく人間だった。そんなこと今までなかったのに」

ジュデイスは目の前にいるエステルを見た。

「ヘリオードにはハナからエステルを狙ってきたワケじゃなかったんだな」

「何故、バウルがエステルとをエアルの乱れと感じたか、私は知る必要があったの。」

私の道を歩むために。
そんな時、フェローが現れた。彼はエステル達は何者なのか知っているようだった」

「私の役目はヘルメス式魔導器を破壊すること、だけどエステル達

は魔導器じゃない。

だから見極めさせて欲しい……

私は彼にある約束を持ちかけた。彼は私に時間をくれた」

「その約束って……」

「もし消さなければならぬ存在なら私が……殺す」

「あんた！」

ジュデイスの最後の言葉を聞いたリタはジュデイスに殴りかかろうとした。

「待て、リタ」

「落ち着けて。ジュデイスちゃん、結局手を下してないっしょ」

「話はわかった」

「ベリウスは言ってたわね。あなたたちには心があると、

フェローにもあなたたちの心が伝われば、これからどうするべきかわかるかもしれない」

「ね、ねえ、もうフェローに会う必要なんて無いんじゃない？

だって、ほら、問題なのはヘルメス式魔導器ってわかったんだし、聖核も悪いこと企んでいるヤツに渡さないようにすれば」

「……わたし、フェローに会いたいです。そして話を聞きたい」

「でも……」

「行かせてください。わたしも自分の事を知ってそれに責任を持てるようになりたいから」

「わかったわ……」

リタは諦めたように引き下がった。

「ごめん……ユーリ。ジュディスをどうするべきか、すぐには決められないよ……」

「あなたたちの言うケジメをつけないまま去ることはもうしないわ。私も責任もたないからね」

「フェローに会いに行こう。オレたちの旅の最初の目的、それをこなしちまおう。」

後のことはそれからだ」

「コゴール砂漠中央部にそびえる岩山、そこにフェローはいる。バウルなら行けるわ」

「よし。行こうぜ。フェローに会いに」

話が終了し、一行はフェローのいる岩場へと向かうことになった。

第16夜：覚悟（後書き）

やっと、かけたー!!!

シーク抜きでどう話をすませるか悩みに悩みました。

前回のあとがきでシークの「出番が少なめ」と書きましたが、けっこう出番あるけったなっちゃいましたね。

実家に帰り、PS3のヴェスペリアを初めてやりました。パーティとフレンが入るだけで全然面白かったですねー。パーティの技がギャンブルで楽しいです。

休みの最期の日、弟と十六夜の庭のダンジョンのボスを倒そうとしたのですが、ボスが強すぎて倒せませんでした。

だいたい、倒した個所が復活するし、あれは無理でしょ!!

倒したというかた、ぜひ、攻略方を教えてください。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第16・5夜（前書き）

第16夜のオリジナルスキットです。

第16・5夜

【シークと幸福の市場】

エステル

「シーク、無事でよかったです」

ユーリ

「よく無事だったな」

レイヴン

「フレン隊からどうやって逃げてきたわけ？

それに、ダングレストまでどうやって来たのよ？」

カロル

「確かに……。ノードポリカからダングレストって海を渡らないといけないし……」

シーク

「フレン隊全員を相手にしていらなかったから、

ノードポリカにいた幸福の市場の人間にかくまってもらったんだ」

ユーリ

「ここに来る手段も幸福の市場のおかげか？」

シーク

「そうだ。幸福の市場の人間のほとんどは私を知っていたから……」

カロール

「シークって幸福の市場の人と仲いいよね」

シーク

「カウフマンさんの仕事を受けているときに、他の幸福の市場の人と交流があったからな」

【戦争の跡】

エステル

「ここは淋しいですね……」

シーク

「戦争の後なんてそんなものだ。
勝手に争っただけ争って、後は何も残らない」

レイヴン

「確かにね〜。」

戦争の跡って静かよね〜」

カロル

「本当にこんなところに街なんてあったの？」

シーク

「おそらく戦争に巻き込まれて消えてしまったのだろう」

エステル

「巻き込まれた街の人たちはどうなったんでしょう？」

シーク

「戦争に巻き込まれて死んでしまった者と生き延びた者がいるだろう……。」

戦争をするのは勝手だが、周りの者たちのことを考えてほしいものだ」

【バウルの成長】

カロール

「ジュデイスー！本当に心配したんだよ！」

ジュデイス

「心配かけてごめんなさい」

シーク

「まさかこの竜……名はなんと言った？」

ジュデイス

「バウルよ」

シーク

「バウルが始祖の隸長だったとはな……」。

前に見たときはそんな感じはしなかったのだが……」

ジユデイス

「その時のバウルはまだ始祖の隸長にはなれなかったもの」

シーク

「始祖の隸長になる素質はあったが、まだその力には目覚めていなかったということか……」

ジユデイス

「ええ。そんなところかしら」

第16・5夜（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

第17夜：フェローと真実（前書き）

フェローの岩場／エゴゾーの森

第17夜：フェローと真実

「ここにフェローがいるんだな」

「おそろくね。砂漠では会えなかったけれどここでは会えると思っ」

「大丈夫かなあ……いきなり襲ってきたりしない？」

「フェローは満月の子を始末しようとしているからな。あり得るかもしれないな」

「保証はできないわ。私たち次第じゃないかしら」

「ま、そうならないように頑張ろうってことね」

カロルは物凄く不安なのかしたを向いてしまった。

「カロル、大丈夫か？」

「大丈夫くないけど……いかなきゃ……」

「それにしてもずいぶん殺風景なところにすんでいるのねえ。フェローは」

「かつてはここにも一面、緑が生い茂っていたというわ」

「どうしてそれがこんな岩ばかりの砂漠になったんですか？」

「さあそこまでは知らないわ」

「エステル、ホントに行くの？
殺されちゃうかもしれないのに」

リタはここまで来てまだエステルの身を案じている。

「はい。もう……覚悟は決めていますから」

エステルの意志は固いようで、リタはそれを分かるとそれ以上は何も言わなかった。

リタとユーリ以外は歩きだした。

「リタ。ジュデイの話聞いてからなんかおまえ変だぞ？フェローに会うのになんか問題があるのか？」

「多分、あの子にとってつらい話だから。もう、今更しようがないわ、ここまで来ちゃったんだから」

そついいリタ達も後に続き歩き始めた。

フェローの岩場までの短くとも長くともない道があるき大きな一枚岩があるところまで来ても、フェローの姿は見えなかった。

「フェローいないね。お、お休みなんじゃない……なんて」

「フェロー。いるんでしょう？」

ジューディスがそう呼び掛けると羽の羽ばたく音が聞こえ、フェローが姿を現した。

「わああああ!!」

カロルが叫んだ先には先程まで居なかった一枚岩の上にフェローがみんなを見下ろしていた。

『忌まわしき毒よ、遂に我が下に来たか!』

「……お出ましか。現れるなり毒呼ばわりとはご挨拶だな、フェロー!!」

『何故我に会いに来た？我にとっておまえたちを消すことなぞ、造作もないこと、わかっておろう』

「ちっ、あんたもこれで語るタイプか？やるってんならしようがねえな」

ユーリは剣を持ちフェローを睨んだ。

「待つて、ユーリ！」

「エステル！」

「お願いです、フェロー、話をさせてください！」

『死を恐れぬのか、小さき者よ。そなたの死なる我を？』

「ベリウスはあなたに会って運命を確かめると言いました。私は自分の運命が知りたいんです。

私が始祖の隸長にとって危険な存在なのは分かります。でもあなたは私を世界の毒と……

私の力は何？満月の子とはなんなんですか？

本当に私が生きていることが許されないのなら……死んだっていいでも！せめてどうして死ななければならぬのか……

教えてください！お願いします！」

フェローはエステルの話しを黙って聞き、聞き終わると口を開いた。

『かつてはここもエアルクレーネの恵を受けた豊かな土地であった』

「ここにエアルクレーネがあつたのね」

「でも、それが何故こんなことに？」

『エアルの暴走とその後の枯渴がもたらした結果だ。』

何故エアルが暴走したか……それこそが満月の子が世界の毒たる所
似よ』

「満月の子の力はどの魔導器にも増してエアルクレーネを刺激する」

「どういつ事だ？」

ユーリが意味が分からなさそうにフェローに聞いたが代わりにリタ
が答えた。

「……魔導器は術式によってエアルを活動力に変えるもの。」

なら、その魔導器を使わずに治療術や魔術が使えるエステルはエア
ルを力に変える術式をその身に持つてゐる事……。

ジュデイスが狙つてゐるのは特殊な術式の魔導器……

つまり……エステルはその身にもつ特殊な術式で大量のエアルを消
費する……。

そしてエアルクレーネは活動を強め、エアルが大量に放出される……

……。

あたしの仮説……間違つてて欲しかった……」

「私は……」

『その者の言うとおりだ。』

満月の子は力を使うたびに魔導器などとは比べものにならぬ程、エアルを消費し、世界のエアルを乱す。世界にとって毒いがいの何者でもない』

フェローはそう言い切った。

「だから消すってか？そりゃ随分と気が短いな。え？フェローよ」

『これは世界全体の問題なのだ。そしてその者はその原因。座視するわけには行かぬ』

「オレたちの不始末ならオレたちがやる」

「そうね。勝手に押し付けられては嫌だわ」

『おまえたちはことの重大さが理解できないのだ』

「私はフェローの言っていることは正しいのだと思う」

シークがフェローの言葉に同意した。

みんなはシークに注目した。

「何言ってるのよ！フェローの言っていることがどういふことかわかっているの！？」

「理解している。エステルの力はエアルを大量に消費する。その結果、エアルクレーネが活発化するのだろう。ならばその原因を取り除くべきだ」

「それがどういう意味かわかってんだろ」

ユーリはシークを睨みつけた。

「エステリーゼを消すことだ。

エステリーゼが消えれば問題が一つ消される。

そうすることで世界を護ることができれば私はそうするまでだ」

『その者の言うとおりだ。満月の子が消えれば少なくとも問題をひとつ取り除くことができる』

「フェロー、ヘリオードで私は手を止め、ダングレストではあなたを止めたわ。

最初は魔導器のはずが人間だったから。

次は私自信が分からなくなったから、

この子があなたの言うような危険な存在とは思えなかったからよ」

『そうだ。ゆえに我はそなたに免じて見極めのための時間を与えた。

その結果、我は同胞ベリウスを失うこととなった。もう十分だ。その力は滅びを招く』

「ふーん、よくわかんないけど力を使うのがまずいなら、使わなきゃいいだけじゃないの？」

「その娘が力を使わないという保証はない」

「……そうね。このちは目の前のことを見過ごせない子、きっとまた誰かのために使うでしょうね。だけど、その心があるかぎり害あるものとは言い切れないはず。彼女は魔導器とは違う。あなたにもそれがわかると思っけれど？」

『……心で世界は救えぬ』

「おい、フェロー。おまえが世界とやらのためにあれこれ考えているのはよく分かった。

けどな、なんでエステルがその世界に含まれてない？」

『より大きなものを守るためには、切り捨てることも必要なのだ』

「クソ喰らえだな。その何かを切り捨てるかを決められるほど、おまえは偉いのかよ？」

『我らはおまえたちの想像も及ばぬほどの長きに渡り、忍耐と心労を重ねてきたのだ。

わずかな時間でしか世界を捉えることのできぬ身で何を言うか！！』

「フェロー、聞いて。要するにエアルの暴走を抑える方法があればいいのじゃろう？」

まだそれを探すための時間くらいあるはずよ」

「ジユデイス……」

「それにもし……エステルたちの力の影響が本当の限界にきたら……約束通り私が殺すわ。」

「それなら文句ないでしょう?」

「ちよちよっと、ジユデイス、本気で言っているの!??」

さすがのカロルでもジユデイスの言葉には口を突っ込みたくなかったようだ。

「あら、そうならないように凜々の明星がなんとかするでしょ?」

「え!?!あ、そうか……うん、そうだ、そうだね!」

「一本取られたな。そういう訳だ。エステルたちのことも、世界のヤバさもそれがオレたち人間のせいだってならオレたち自信がケジメつける。」

それで駄目なら、丸焼きでもなんでも好きにしたらいい」

『……そなた変わったな。かつてのそなたなら……』

「さあどうなのかしら?でもそう言われて悪い気はしないわね」

『……よかるう。だが忘れるな、時は尽きつつあるということ』

フェローは話しが済むと、再び翼をはばたかせ、宙に浮いた。

「待つて！術式がエアル暴走の原因っていうのなら昔にも同じように暴走したことがあるはずでしょ。」

魔導器は古代文明で生み出された技術なんだから」

「罪を受け継ぐ者たちがいる。そやつらを探すがいい。」

彼の者なら過去に 何が起こったのか伝えているであろう」

それだけ言い残しフェローは飛び去った。

「行っちゃった……」

「えっと、あの……ありがとうございます。ユーリ。それにジユデイスも」

「それはいいんだけどな」

ユーリはそれをいいエステルの前まで歩いて来た。

ユーリの表情を見るからに怒っているようだった。

「え？」「

「死んだっていい？ふざけてんのか？」

「……ごめんなさい」

「二度と言つなよ。それと、シーク」

ユーリはシークを睨みつけた。

「何だ？」

「お前、エステルを消せばいいなんて本当に思ってるのか？」

「……そうすることで、世界を護ることができる。」

私からすればフェローの言っていることは正しいと思う」

リタは術式を発動させながらシークに言った。

「エステルを消そうとするなら、私はあんたをここで吹っ倒すわ」

リタに続いて、エステル以外の者たちもそれぞれ武器を武器を構える。

「フェローが時を与えたんだ。今は消すつもりはない」

シークはそう言うとフィエルティア号に乗り込んだ。

他のみんなもフィエルティア号に乗った。

「はあ……どうなるかと思ったよ」

「あーんなデカブツ相手によくまあ話だけで済んだねえ。おっさん心臓がどうにかなりそうだわ」

「おじ様はもつと度胸あると思ったのに残念ね」

「本当、姉ちゃんはいつも肝が据わってるのね」

「本当にエステルを殺すつもりなら問答無用でくればよかったはずだが……」

「そこがどうも解せないな」

「どうやらユーリは以外にも話だけで終わっていったのが腑に落ちなかったらしい。」

「多分、フェローも迷ってたのよ。だから私たちがどう振舞うか見定めるために砂漠では姿を隠した」

「ふうん、思ったより悪いやつじゃなかったのかな？」

「どうだかな。いざとなりゃ、なんだってやるタイプだと思うがな、

オレは」

「それはあんたも一緒でしょ」

リタがさも当たり前言うからユーリは「かもな」と良い肯定をした。

「でもどうすんのユーリ？あんなこと言っちゃって」

「エアルが悪さすんのをどうにかする。それだくたる？」

「つつても手がかりがゼロじゃ話にならないんじゃない？」

「エアルの消費に関しては間違いなく術式が関わってくるはずなのよ。

昔の魔導器についてやその時に暴走が起きたかどうか、その辺の情報があれば手がかりになるんだけど……」

「過去の出来事については罪を受け継ぐ者たちに聞け……
フェローはそうやってました」

「魔導器を発明したのはクリティア族。つまり今も伝承を受け継ぐクリティア族に聞けという意味ね」

「確かに、クリティア族が魔導器を生み出したとは言われてるけど……」

「けどクリティアの街テムザはもう滅んじまってるぜ」

リタは会えて言葉を濁したがその後のユーリはきっぱりと言い切った。

「他にも話があればいいのだけど、ね……」

「隠された街ミヨルゾ。テムザよりずっと古い、クリティアの故郷。そして魔導器発祥の地」

「ほへへそんな街があるのね。」

もしかしてジユデイスちゃんそのミヨルゾってのどこにあるか知ってる？」

「さあ？」

「その名前に覚えがある……。アスピオに来てたクリティア族の人がなんかその名前を言ったような」

「その人、まだアスピオにいるでしょうか？」

「ま、当たってみるしかないな」

「ジユデイス……一緒に来てくれる？」

「……そうね。まだギルドのケジメが残ってるものね」

「じゃアスピオに行くとするか」

そしてユーリ達はバウルでアスピオに目指した。

アスピオにつくと、街中に入る前にシークが話しかけてきた。

「私はここで別行動をとらせてもらう」

「え！？どうして？」

「理由としては、お前たちとの意見の対立だな」

シークはフェローの岩場のことを言っているようだった。

「意見の違うものといっても仕方がないだろう」

「シーク……」

「次に会う時は俺たちと同じ意見だったらいいな」

「……そうだな……」

シークはユーリの言ったことに軽く笑みをこぼしながら答えるとアスピオから離れていった。

ユーリたちは街の中へとはいつて行く。

「さすがに疲れたわね。とりあえず人探しは明日にしましょ」

アスピオの街の中へ入っていったときには、もうへろへろな状態だった。

「賛成。久しぶりにまともなベッドで寝られるわ」

「じゃあ、あたしの家に……」

「待つて。先に話しておきたいことがあるんだ……」

カロルはそついいジユデイスをじつと見た。

「……私の事ね」

「カロル……」

「ギルドの話し合いよ。横やりは無しにしようや」

「ボク、ずっと考えてた。ギルドとしてどうすべきなんだろうって、で、思ったんだ。」

やっぱりギルドとしてやっていくためにも決めなきゃいけないって」

「どうするか決めたんだな？」

ユーリの言葉にカロルが頷いた。そして真剣な顔になり続けた。

「言ったよね。ギルドは掟を守ることが一番大事。掟を破ると厳しい処罰を受ける。例えばそれが友達でも、兄弟でも、それがギルドの誇りなんだって」

「ええ」

「だから……」

「みんなで罰を受けよう」

「え？」

「ボク、ジユデイスが一人で世界のためにがんばってるの知らなかった。」

「知らなかったからって仲間を手伝ってあげなかったのは事実でしょ。だからボクも罰を受けなきゃ」

「ユーリ」

今までジユデイスの事を話していたが今度はユーリの方をみた。

「オレ？」

「ユーリも自分の道だからって秘密にしていることがあった。それって仲間のためにならないでしょ」

「ま、まあな……」

「ものすごいこじつけ」

「……掟は大事だよ。でも正しい事してるのに掟に反してるからって罰を与えるべきなのか……」
「ホント言うとまだわかんない……」
「なら、みんなで罰を受けて全部やり直そうって思ったんだ。これじゃ、ダメ？」

最後の方は皆に伺うような口調になった。

「オレ、また秘密で何かするかもしれないぜ?」

「信頼してもらえなくてそうなっちゃうんならしょうがないよ。それはボクが悪いんだ」

「またギルドの必要としてる魔導器を破壊するかもしれないわよ? ギルドのために、という掟に反するわ」

「でもそれは世界のためだもん。それに掟を守るためにギルドがあるワケじゃないもん。」

「許容範囲じゃないかな」

「それって掟の意味あるの?」

「はっはっは。そんなギルド聞いたことないわ。おもしろいじゃないの」

「そうね。形にとらわれなく自由がいいわね」

「ふふふ」

今までの真剣な雰囲気はどこに行ったのやらみんな和やかになっている。

「カロール、おまえすごいな。」

オレは自分がどうするかってのは考えていたが、

仲間としてどうしていかって考えれてなかったかもしれない。

オレには思いもつかないけじめのつけ方だ」

「ボ、ボクはただみんなと旅が続けたいだけなんだ。
みんなの道と凛々の明星の道を同じにしたいだけなんだよ」

「そっか。そうだな。ジュディ、そういうことらしいぜ」

「おかしな人たちね、あなたたちホントに……。でも……。そういうの、嫌いじゃないわ」

ユーリの言葉にジュディは微笑んだ。

「じゃあ改めて凛々の明星、出発だね！」

「なーんかご都合。ギルドってそんなもん？」

「ま、ドンのギルドとはひと味違うねえ」

「でもなんか素敵です」

「で、罰はどうするのよ？」

「あ！そっか。えっと……」

カロルは罰の事を考えてなかったのかすぐには答えが出なかった。

「休まずに人探してとこかな。あたしたちはウチで待ってる」

「ちょっと！勝手に決めないで……」

「何よ。文句ある？」

リタは笑いながらそんな事を言うのでカロルは怯えた。

「はっはっは。ねえよ」

「ええ」

「了解……」

そしてリタ達と別れてクリティア族の人を探しに行った。

エステルたちがリタの家で待っていると、ユーリたちが帰ってきた。

「おかえりなさい。何かわかりました？」

「エゴソ一の森って所に手がかりがあるみたいだぜ」

「エゴソ一の森ってクリティア族の聖地の？」

「ええ」

「その森にミヨルゾってのがあるの？」

「扉があるのよ」

「はあ？ 扉？ 何それ？」

「ミヨルゾに通じる扉だとさ。とりあえず行ってみた方が早い」

「その前に……休ませて……」

「一休みしてから出発かしら？」

「だってさ」

「しょうがないなあ」

一通り説明すると、カロルはぐったりとしてその場に座り込んだ。

「ここがエゴソーの森、クリティア族の聖地よ」

「へえ、思ったたよりのどこかで気持ちのいいところじゃない」

「わ、意外。暗くてじめじめした研究室が好きなんだとばかり……」

そんな事をいうカロルにリタはギロリと睨め返した。

「……何も無い時に来てみたかったです」

「……あれだな、謎の集団が持ち込んだ魔導器ってのは」

ユーリが見つめる先には山の頂上辺りにとても大きな魔導器があった。

「武醒魔導器じゃない……」

「その謎の集団って何なんです？」

「それは詳しく聞けなかったけど……」

とにかく、ミヨルゾへの行き方教える代わりにそいつら何とかしろって」

「何とかするってのはあれぶっ壊しゃいいってこと？」

「どつなのかしら。それでいいならそつするけど」

「魔導器は私がなんとかするわ」

「そつ？期待してるわ」

そして魔導器を目指して歩き出した。

しばらく進んでいると、何故ここにいるか分からないが騎士団に止められた。

「止まれ！

ここは現在、帝国騎士団が作戦行動中である」

「親衛隊……」

ありゃ騎士団長直属のエリート部隊だよ」

「その騎士団長様の部隊がこんな森に武装魔導器持ち込んで、一体なにしようってんだ？」

「答える必要はない。」

それに法令により民間人の行動は制限されている」

「ふーん、それはいいとしてもその刃、どうしてオレたちに向いてるんだ？」

「かかれ！」

そう言い騎士団は襲ってきた。

「やれやれ、ついに騎士団とまともにやり合っちゃった。腹くくったそばから幸先いいこった」

「謎の集団って騎士団のことだったんですね……」

「でも、なんでボクたちを襲ってきたのかな？」

「知られたら困るようなことをここでやっているからでしょ」

「それがあの魔導器ってこと？」

「だろうな」

「あぶない!!」

山の頂上にある魔導器が攻撃してきたのにエステルが気付くと、エステルはみんなの前に立って魔導器の攻撃を防いだ。

「うっ……!!」

「エステルっ!!」

「……今、何、したの？」

「ヘリオードでやったのと同じ……!!」

「エアルを制御して分解したのよ……」

「使つてはいけないと分かっていましたけど……みんなが危ないと思つたら……」

「力が無意識に感情と反応するようになり始めてるんだわ……」

「さっきの攻撃、あれの仕業よね。あたしたちを狙い撃ちしてきた」

「ということは撃たれるたびにどちらかが力を使ってしまうってこ

とね」

「そんな……」

「おいおい、エステルはオレたちを助けてくれたんだぜ？」

「そつだよ、まともに食らったらイチコロ間違いなかったもん。悪いのは撃ってきた奴らだよ」

「エステルのことも、世界のヤバさもオレたちでケジメつけるって決めただろ。

今やってることは全部、そのためだ。細かいことは気にすんな」
「ユーリたちは再び魔導器に向かって歩き始める。」

「……はい……」

「でも、こんなの何度もやってたらフェロー怒るんじゃないの？
魔導器だろうとフェローだろうと丸焼きにされんのは勘弁よ」

「なに、簡単な話だろ。要するにあの魔導器をなんとかすりゃいい
つてこつた」

「そついつことね」

「あの魔導器使ってる奴ら、ボコってやる」

「よし行こつ。なるべく目立たないようにな」

ようやく魔導器のあるところまで辿りつき、魔導器を護る騎士たち

を倒した。

「さてと、これで撃たれる心配はなくなったな」

「まだよ。騎士団だけじゃなく、この子も止めないと意味がないでしよ」

「この子……ヘルメス式じゃないけと術式が暗号化されてる……」

「どーいじことよ？」

「早い話、暗号鍵がないと動力落とすこともできないのよ」

「その暗号とやらを解くのは……」

「……そう簡単じゃないわ。解くとしても時間が必要ね。他の方法は……」

「それほど、時間かける必要はなさそうよ」

ジュデイスは武器を構えた。

「ちょっと……なんで……!？」

ジュデイスは魔導器を攻撃したと思ったら違うものが魔導器から降ってきた。

「ひいつ……!!」

「あんた……!？」

「この魔導器の技師じゃないかしらね」

「ち、違う、違うんだ、いや技師なのはそうなんだけど、ほ、僕は命令されただけで、

だ、だからこんなことに協力するのはイヤだったんだ……」

「早く暗号をといて、この子を止めなさい!」

「は、はひ、ただいま……!!」

「まったく、居るのわかってたなら教えなさいよね」

「でも、これで一件落着、晴れてミヨルゾに行けるんだね」

「そうでもないわね……」

「ちいつ!」

「何です……?」

敏感に察知したのかユーリが違う方からの魔導器に気がついて攻撃を防いだ。

「油断したぜ。もう一台あったとはな」

「まさか……わたしに力を使わせないために……!?!」

「どうしてそんな無茶するのかねえ」

「本当……あなた死ぬ気？」

ジュディスとレイウンは二人の行動に呆れていた。

「これくらいの傷、日常茶飯事だったの」

「ユーリ……ごめんなさい……」

「お互いかばいあったんだ、おあいこだろ？」

「ありがとうございます」

「それより……っと、あっちの魔導器もなんとかしようぜ」

「あんだ、向こうの……」

つて……!?!」

リタが振り返ると技師の男はものすごい早さで逃げて行った。

「逃げ足はええ……早く捕まえましょ」

「……いいわ、ここはあたしがなんとかするから」

「え……でも簡単じゃないって……」

「騎士団さえいなくなりゃ、そんなに慌てる必要もないでしょ。それに、あたしを誰だと思ってるの？」

天才魔導士リタ・モルディオ様よ？魔導器相手なら死ぬ気でやるわよ」

突然、リタはさっきまで技師が触っていた魔導器をいじり始めた。

「何してるんです？」

「このままじゃまた使えちゃうから、ちょっと細工を、ね。」

……「ごめんね」

そして魔導器は力を無くしたように動かなくなった。

「命を賭けるものがある若人は輝いてるわね」

「一度死にかけた身としては、死ぬ気でってのはシャレにならねえか」

「ん？死にかけたって？」

「人魔戦争の時、死にかけたって言ってたろ？」

「ああ、その話したっけか。……まあ……死ぬ気でがんばるのは、生きてるやつの特権だわな。死人にや信念も覚悟も……」

「おっさん？」

最後の方は聞き取れなかったのかユーリが聞き返した。

「あーいやいや、おっさん、ちょっと昔を思い出しておセンチになっっちゃった。

ささ、いこいこ」

レイヴンは慌てて取り消し、次の魔導器を目指して歩き出した。

そしてもう一方の吊橋を渡り小さなトンネルをくぐると、魔導器が攻撃してきた。

「皆さん、伏せてくださいっ！」

みんなはエステル言葉に岩影に隠れて身を守った。

「全員、大丈夫か……？」

「なんとか……」

「今度はおっさんがつらそうよ」

レイヴンを見ると地面に膝をつけていた。

「おっさん、ここでリタイヤするか？後はオレたちで行くから」

「ここで置いてかれたら、俺様行くところ、なくなっちゃう」

「ユーリだって本気置いてくわけないよ。

それに行くところないって、天を射る矢があるじゃん」

「んー？まああれはねえ、なんというか、ちょっとそついつのと違
うのよ」

レイヴンは何故か言いにくそうにいった。

「そうなの？」

「おっさん大丈夫なら次、充填して攻撃しかけてくる前にあの魔導器までいっちょお」

「あいあい。了解」

そして、もう一台の魔導器が近くに見える所に来ると魔導器からおかしい音が聞こえてきた。

「あの魔導器、なんか変な音してるよ」

「エアルを充填してんのよ。後もう少しは大丈夫。撃ってこられないわ」

「さつさと足元にもぐりめば敵さんも手の出しようはないみたいね」

「そも言ってられないんじゃない？」

ジユデイスが魔導器の方を見ながらみんなに言った。

すると親衛隊が武器を持って坂道を下りて来るのが見えた。

「親衛隊だ！」

そして、来た道からも親衛隊が武器を持って走って来た。

「向こうからも……」

「挟み撃ち!？」

「こりゃ、踏ん張っていかねえとな!」

そしてユーリ達は騎士団と戦った。

「全員片付けたか？」

ユーリ達は魔導器がある場所まで急いだ。

「騎士団の任務を邪魔すると、罪に問われるぞ!」

魔導器がある頂上まで上ると騎士団が武器を構えていた。

「そりゃありがたいね！」

ユーリもそう言い戦闘に構えた。

そしてその場にいる騎士団を片付けてリタは魔導器をいじりだした。

「……どうだ、リタ」

「案の定、こっちにも術式暗号がかかってるわ」

「解けそうか？」

「死ぬ気でやるって言ったでしょ。」

こうなったらミヨルゾ行くための条件とかもう関係ないわ。

騎士団のやつらの手にこの子そのまま残すなんて絶対できないんだから」

機会音がなるなかリタは暗号を解き始めた。

「じゃ、そっちは任せたよ！」

カロルはそういうと坂道の方へ走って行った。

「あら、どこ行くの？カロール」

「さっきみたいにまた親衛隊が来るといけないから、下で見張ってる！」

「じゃあ、私もお手伝いさせてもらおうわ」

ジュデイスがそう言いカロールに続いた。

「……にしても、なんかみんな妙にやる気でコワいわ」

「……ユーリの影響ですよ」

エステルとレイヴンはリタの方にいるユーリを見た。

「とりあえずオレたちはこっちで待機だな」

「……当の本人はいたってクールなんだが」

「……ですね」

数十分、数時間たつても魔導器の暗号は解けない。

「そう簡単には解けませんってか……？」

「親衛隊つったか？結局、連中、この魔導器でなにをするつもり……」

ユーリが言い切る前に剣と剣がぶつかる音が聞こえてきた。

「騎士団戻ってきた……！」

「ここは死守するぞ」

みんなが戦っているとリタが魔導器に向かって魔術を使おうとしていた。

「リタ！何を！」

「もうこいつ壊して……！そいつぶっ倒す！」

「リタ、だめ……！」

「もう時間かけていられないでしょ！だってこのままじゃあんたらが……」

「リタ……」

「私たちが倒される、そう言いたいのか？」

今までの話を聞いていたのかジユディスが騎士団を倒しながら話した。

「あなたは私を、私たちを信用できないの？
死ぬ気でやるんでしょう？」

「わたしたち、負けませんから。リタ、その魔導器を助けてあげてください」

「あんたたち……」

そしてリタは詠唱をやめた。

「……わかったわよ！死ぬ気でやってやるわよ。その代わりに、あんたらも死ぬ気でやんなさいよ！」

リタはそれだけを言いました。また魔導器を調べました。

「はあ……やれやれ、んじやま……死ぬ気でやりますか」

「輝いてる若人の仲間入りか？」

「みたいね」

「おじ様、期待しているわ」

「……止まったわっ！」

今まで魔導器をいじっていたリタが歓声の声をあげた。

「リタ！」

「さすが、リタ！」

「あらら……やったじゃない」

「騎士団が帰っていく……。一体なんだったんでしょう？」

「魔導器が止まったから？本当になんだったのかしら、彼らの目的は」

「まあいいさ、とにかくこれでトートとの約束は果たした。ジユデイ、頼む」

「ええ」

そしてジユデイスが山の頂上辺りで鐘を鳴らすと空に大きなクラゲみたいなのが姿を現した。

「あ、あ、あ……」

「なんだ、ありゃ……！！」

そんな姿にみんなは目を見開いて驚いていた。

「扉が開いた……あれがミヨルゾ。クリティア族の故郷よ」

「こりゃあ……えらいもんだ」

「あまり長いこと扉を開けておいてはもらえないみたい。急ぎまし
」よ

「悪いが、そこに行く前に私の用事を済ませさせてもらおう」

この中にいる誰でもない声が聞こえた。

「お前……っ！」

声が聞こえた方を見ると、そこには仮面を被り、ロープをはおった人間……ガーネットが立っていた。

「な、なんでここに？」

「それに用事って何？」

リタがガーネットに問うと、ガーネットは手にしていた双剣の1本をエステルに向けて言った。

「そこにいる満月の子を始末させてもらおう」

ガーネットのその言葉にその場にいる全員が驚きを隠せなかった。

「あんた、エステルが満月の子だって知って……!!」

「知っている……。満月の子が世界の毒だということ、始祖の隸長のことも、エアルクレーネも知っている」

「どうやら、私たちが知っていること全部知っているみたいね」

「悪いが、エステルは渡さねーぜ」

ユーリはそうガーネットに言い、剣を抜いた。

「その女は世界の毒だ。毒は浄化せねばなるまい」

「エステルは毒じゃないよ！」

「お前たちがどう言おうと、その女の力は世界を狂わせる」

「エステルを助ける方法は必ずあるわ！」

「そんな方法があるはずない。あるのならば、私が試している」

「これから見つけるんだよ」

「……どうあっても邪魔をするというのだな……。ならば……」

ガーネットは双剣をかまえた。

ユーリたちもそれぞれ武器を取り出し、ガーネットの向き合う。

ガーネットがユーリに向かって攻撃を仕掛けると、ユーリもガーネットに攻撃する。

ユーリの攻撃をガーネットが受け止めている間に、魔術を使える人たちは魔術で攻撃する。

「『インヴェルノ』」

「『ホーリーランス』」

「『スプラッシュ』」

「くっ!!」

ガーネットはかろうじて魔術をよけたが、その時にできた隙を逃さず、他の人たちでガーネットに一斉攻撃をした。

「天雷槍月」

「雷撃ウェーブ」

「ガウツ」

「三散華」

「くっ!!」

ガーネットに一気にダメージを喰らわせた。

「これで最期だっ!!」

ユーリはガーネットに休む暇さえもあたえず、攻撃を繰り返した。

「なめるなあっ……！」

ガーネットはかるうじて剣で攻撃を防いだが、仮面に攻撃が当たったのか、仮面にヒビがはいった。

仮面が割れたことに気付くと、ガーネットは逃げ出そうとした。

「逃がさないわよ」

ガーネットを逃がさないようにいつの間にか通路にはジュディスが立っていた。

そうこうしているうちに仮面は完全に壊れてしまい、ガーネットの素顔があらわになってしまった。

「……！」

ガーネットの素顔を見て、ユーリたち全員は驚きの表情を隠すことができなかった。

「ど、どうして……！？シークが……？」

シークは顔を見られると、今まで来ていたロープも脱ぎ捨てた。

ロープで今まで見えなかったが、シークの背中にはいつもシークが使っていた大剣があった。

「お前、今までエステルを殺すつもりだったのか……」

「その通りだ。エステリーゼが満月の子だと分かったその時からエステリーゼを殺すために今までお前たちに同行していた」

「シークが……私を……」

「あんたっ！エステルを殺すって本気!？」

シヨックを受けているエステルを見て、怒ったリタはシークに問う。

「フェローと話したときに言っただろう。私はフェローに賛同していた。」

エステリーゼを殺すことで問題が一つ消える」

「そんな……！シーク、お願いだよ！考えなおしてっ……!」

「……私は、この世界を護らねばならない」

「そんな……。ボク、シークのこと仲間だと思ってたのに……」

「お前たちがどう思っているように私は思っていなかった」

「どつやら答えを変えるつもりはないみたいね」

レイヴンはそう言いつつ、武器をかまえる。

「あなたがあの娘を傷つけるなら私はあなたと戦うわ。
たとえ、あなたが仲間だったとしてもね」

ジユデイスも槍をかまえた。

「私を倒さねばミョルゾへはいけないぞ」

シークは双剣を投げ捨て、大剣を手にした。

そんなシークを見て、ユーリも剣を再び強く握りし、かまえた。

「俺達の邪魔をするなら……」

「やめてくださいっ！相手はシークなんですよ！」

エステルが剣を持っている方のユーリの手をつかんだ。

「エステルごめん。いくらあんたの頼みでもエステルを傷つけようとするならあたしは倒すわ」

リタもそう言い、シークを睨みつけて戦闘態勢にはいる。

「カロル、明星の凛々のボスならエステルを護れ」

いつまでも迷っているカロルを見て、ユーリが鋭く喝をいれた。

そんなユーリの言葉を聞いてカロルは迷いが消えたかのように顔をキリリとさせ、
武器を手に取った。

「ボクはギルドの掟を護らないと……。
エステルは仲間だから、ここでエステルを見捨てたら義に反する……。
……。
だからボクも戦う！」

シークはいつまでも迷っているエステルを見て、冷たく言い放った。

「エステリーゼ、お前が戦つか戦わないかは自由だ。

だが、お前にはすることがあるのだろっ。だったら、それを貫き通せ」

「シーク……」

エステルはシークにそう言われ、下を向いて考えた。

そしてすぐに顔を上げ、シークを見て武器を手にした。

「私も戦います。こんなところで立ち止まっていられません」

「迷いが消えたか……。いくぞっ!」

シークのその声を合図に一斉に動き出した。

「襲爪雷斬!」

「いったっ!」

シークの攻撃が詠唱中のリタに当たった。

「リタ、今助けます!ハートレス」

「させるかあっ!刹那!」

「きゃあっ!」

シークは素早く動き、エステルは詠唱の邪魔をする。

シークが続けてエステルを攻撃しようとしたが、横からレイヴンの矢が飛んできてしまい、

シークはエステルから距離をとった。

「俺様たちを忘れないでちょーだい」

「忘れてなどいないさ。お前たちにはこれを喰らわせてやるっ」

シークは詠唱を唱え始めた。

「うわあっ！これまずいよ！！」

「あわてる必要ないだろ。詠唱が終わる前に止めるっ！！」

カロールがあわてている間にラピードとジュディスがシークに近づき、詠唱を止めに行っていた。

「月牙・鷹」

「ガウツ！！」

攻撃を受けていてもシークは攻撃を耐え、ひるむことなく詠唱を続けていた。

「やばいつ！みんな逃げろっ！」

「遅いつ！！『プリズムソード』」

光をまとった剣が出現し、ユーリたちを襲った。

「エステル、危ないっ！！」

「リタっ！！みんなっ！！」

リタがとっさにエステルを押し、魔術の当たらないところに避難させた。

魔術が消えるころにはエステル以外は倒れて、すぐに立ち上げられる様子ではなかった。

「安心しろ。殺すのはエステリーゼお前だけで他まで命を取るつもりはない」

シークがエステルにゆっくりと近づいた。

「エスト……テル……逃げ、て……」

「でも……っ!!」

シークは何か気付いたようで、足を止め、エステルとは別のほうに視線をうつした。

シークの視線の先には、ユーリが立ち上がっていた。

「……あれを受けて無事だったのか……」

「ああ。カロールが攻撃が当たる直前に回復させてくれたおかげで他の奴よりは体力が余ってたよ」

「……どうやら、お前を倒さねばエステリーゼは殺せぬようだ……」

「エステル、みんなの回復頼む」

「はいっ!!」

ユーリに言われ、エステルは倒れている人たちの回復にまわった。

そして、ユーリとシークは同時に動き出した。

「峻円華斬！」

「空破絶風撃！」

二人の攻撃が同時に繰り出され、互いの技に相殺しあった。

「シーク！！もうやめろよっ！！」

「やめるわけにはいかないっ！！」

「どうしてそこまでエステルを殺そうとするっ！！」

「世界を守るためだっ！！」

「エステルを殺してまでどうして世界を守ろうとする！？」

「お前には関係ないっ！！」

「時間はまだあるはずだっ！！」

「私には我慢できないんだっ！！」

まだ時間があるとはいえ、こうしている間にもエステリーゼが世界を汚していることがっ！！」

「エステルが世界を汚してる？エステルはそんなことをしようとしてねーだろ！！」

そんなことはお前も分かってるだろーが！

だから、今までエステルを殺そうとしなかつたんだろっ！！」

「黙れ!!」

ユーリのその言葉に同様したのが、シークに大きな隙ができた。

その隙をユーリは見逃すことなく、シークに攻撃をした。

「しまっ
」

攻撃は見事、シークに強く当たりシークは倒れた。

「はあはあ……」。

悪いな……。俺達はエステルも世界も救う方法を選んだんだ。
こんなところで立ち止まれねえんだ」

「まだだっ!!」

ユーリが油断した隙についてシークは起き上がり、エステルに向かって行った。

シークの手には隠していたナイフがあった。

「エステルっ!!」

「危ないっ!!」

リタとカロルの叫び声が響く。

エステルは突然のことですぐに反応できなかった。

あっという間にシークはエステルの目の前に立ち、腕を振り上げた。

しかし、シークはすぐに腕を振り下ろさなかった。

その場にいる誰もが、不思議に思った。

そうこうしている間にラピードがシークに体当たりし、その時の反動で崖から落ちてしまった。

「シークっ!!」

エステルはすぐにシークが落ちた崖の下を見た。

シークが落ちたところは深く、下には川がある。

シークの姿は見当たらなくどうやら川に落ちてしまい、そのまま川に流されてしまったのだった。

「そんな……」

「悲しむのは自由だけど、急いだ方がいいと思つわ」

「そうだな。早いところミョルゾに行くぞ。いつまでも扉を開いてくれるわけじゃないみたいだしな」

「わかり、ました……」

「バウル、お願い」

ジユデイスがそうバウルに告げると、バウルはあっという間にユーリたちのもとに現れる。

エステル、リタ、カロールと次々にバウルに乗っていき、最期にユーリがバウルに乗り込もうとした時、地面の方が一瞬光ったのにユーリが気付いた。

何かと思い、ユーリが光ったものに手を伸ばした。

「これ、シークが大事にしてた石、だよな？」

「ユーリ！早く行こうよ！」

「分かった」

ユーリはその石を持ってバウルに乗り込む。

ユーリたちを乗せてミョルゾに向かった。

第17夜：フェローと真実（後書き）

今回は長くなってしまうたうえに最期のほうはなにがなんやらわからなくなってきました。

小説を執筆している間も、なんだかくだくだになってきたなーみたいな感じでした。

シークとは戦わせようと連載する前から考えていました。

エステルがいてかつ、シュバーン隊長と戦う前で結構中盤すぎあたりには戦わせようと考えたらエゴゾーの森になりました。

エゴゾーの森ならボス戦もないし、ちょうどいいんじゃない？みたいなww

うーん、次はどうやってシークと和解させようか……。

次もなるべく早く更新したいと考えています。

その前にスキットがありますね。

ここまで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。では、また。

第17・5夜（前書き）

第17夜のオリジナルスキットです。

第17夜の最期を編集しました。

第17・5夜

【フェローと出会って】

カロール

「話を通してよかった」

シーク

「カロールはフェローが怖かったのか？」

カロール

「だって、前は問答無用に攻撃してきたんだもん」

シーク

「確かにそうだな」

カロール

「それよりさ、エステルは怖くなかったの？」

エステル

「正直、怖かったです。
でも、フェローは私の話しを聞いてくれました。
それが何よりもうれしかったです」

ジュデイス

「フェローがくれたチャンスが無駄にしないようにしましょう」

エステル

「はい」

シーク

「……」

【様子のおかしいシーク】

エステル

「シーク」

シーク

「……」

エステル

「シーク」

シーク

「……」

ユリ

「おい。エステルが呼んでるぜ」

シーク

「!?!? な、なんだ?」

エステル

「シーク、どうしたんです?」

具合でも悪いんですか？」

シーク

「いや、そういうわけではない……」

ユーリ

「なら考えことか？」

シーク

「考えごとというより悩みごとだな……」

ユーリ

「お前でも悩むことがあるんだな」

エステル

「ユーリ、失礼ですよ。」

シーク、悩みごとがあるなら相談に乗りますよ」

シーク

「いや、これは私自身で決めなければならぬことだから……」

エステル

「そうですか……」。

私、いつでも相談に乗りますから」

ユーリ

「エステルの言うとおりだ。」

一人で抱え込む必要はないからな」

シーク

「ああ……」

（エステルとユーリが先に行く）

シーク

「エステリーゼ、すまない……」

【シークと別れて……】

レイヴン

「シークちゃん、行っちゃったわね」

ユーリ

「おっさん、残念そうだな。」

そんなに、シークと別れるのがいやだったのか？」

ジユデイス

「彼女のこと、好きだったの？」

レイヴン

「だって、女の子が一人減ったのに落ち込まない方がおかしいって」

ユーリ

「そういうことが…」

リタ

「落ち込むならもっと別の理由で落ち込みなさいよ」

ジユデイス

「じゃあ、あなたならどんな理由で落ち込むのかしら？」

リタ

「あたし？あたしなら、1人減って戦闘が面倒になったとかね」

ユーリ

「リタにとってシークは戦うときの便利道具なのか？」

ユーリ

「リタ、シークをそんな風に思っていたのか…」

レイヴン

「リタっちってばひどいわね…」

リタ

「た、たとえばの話でしょ…！」

ユーリ

「確かに、シークがいなくなって戦闘が厳しくなるのは確かだな」

ジュデイス

「でも、私たちだけでも問題ないはずよ」

ユーリ

「その分、戦いが楽しくなるからな」

リタ
「この戦闘狂ども…」

【最悪の再会】

エステル

「まさかシークが私の命を狙っていたなんて……」

リタ

「あたしたちについて来たのもエステルを殺すのが目的だったのね」

カロル

「シーク、今まで僕たちのことだましてたんだ……」

リタ

「あたし、あいつのこと許せないわ！

エステルをこんなに苦しめて……！」

カロル

「シーク、何度も僕たちのこと助けてくれたのに……」

リタ

「助けてくれたのはあたしたちを信用させるためだったのかもしいないわよ」

カロル

「そんな……！」

エステル

「私、シークとお話したいです……」。

どうして私の命を狙うのか……」。

私たちは分かりあえないのでしょうか？」

カロル

「エステル……」

リタ

「話しあっただけ無駄よ。」

あいつと戦う前に話したけど、あたしたちの話し、全然聞かなかったでしょ」

エステル

「でも………！」

カロル

「それに、シークはもう………」

エステル
「……」

リタ

「それに、あたしたちにはシークのことを気にしてる余裕はないわ
よ」

カロル

「そつだよー早くミョルゾに行っちゃうよ」

エステル

「そつですね……」

【シークの剣と交えて】

ユーリ

「……」

レイヴン

「青年、シークちゃんと戦ってどうだったのよ？」

ユーリ

「シークの奴、本気じゃなかったな……」

カロル

「どういうこと？」

レイヴン

「シークちゃんと剣を交えたのは青年だからね。実際に剣を交えた者同士にしか分からないってね」

ユーリ

「くそっ！あいつが何考えてんのかわけわかんねえ！」

レイヴン

「シークちゃんは崖の下。

生きてるかどうか確かめている時間はないしね〜」

ユーリ

「ああ、分かってる。

俺達にはシークにかまっている時間はねえ。

やることあるからな」

ラピード

「ワンッ！〜！」

第17・5夜（後書き）

投稿するのが遅れてしまい、申しわけありません。

17・5夜と18夜をまとめて投稿しました。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第18夜：バクティオン神殿で……（前書き）

ミヨルゾくバクティオン神殿

第17夜の最後のページを一度編集しました。
一度、そちらを見た方がいいかもしれません。

第18夜：バクティオン神殿で……

「まさか飛んでる街とはねえ」

ファイエルティア号に乗り込み、バウルで空を飛んだユーリ達の目の前の巨大なモノに目を向ける。

「それ以前に、あのばかでかいの何！？ 生物みたいだけど……」

「あれも始祖の隸長だそうよ。話をした事はないけど」

「始祖の隸長！？ それがなんで街を丸ごと飲み込んでんだ？」

「さあ、そこまでは知らないわ」

「こんな街があるなんて、まったく知りませんでした」

「気が遠くなるほど長い間、外界との接触を断ってきた街だからね、ミヨルゾは」

「このまま近付いても襲って来たりしないよね」

「大丈夫。バウルがいれば中に入れてくれるはずよ」

ミヨルゾに到着すると辺りを見渡す。

長い道の向こうに大きな扉が見え、その向こうに街が見える。

「何か、不思議な景色だね」

「ちょっと、あれ……！」

リタが言う方を見ると長い道からクリティア族がこちらへと近づいてくる。

クリティア族の人達はぞろぞろと来ると

近くにいたリタとカロルの周りを囲むようにして止まった。

「か、歓迎されてない？」

「こりや驚いた。本当に外から人がやってきたぞ！」

「あら、まあまあ、ミヨルゾを呼んだのはあなた達？」

「おやおや？ これはまた妙な感じだ。変わった飾りを着けてるね」

「ちょっとあんた等、いい加減にきなさいよ」

次々にやって来ては自分達を見て口々に言うクリティア族にリタは少し戸惑いながら言うが、
クリティア族の人達は気にした様子なく言葉を続ける。

「貴方みたいな小さな子がどうやって此処に来たの？」

「この魔物ってひょっとして始祖の隸長かい？」

「バウルよ。忘れてしまったの？」

「あら、あなた、何年か前に地上に降りた……」

「確か名前は、ジュデイス、そうジュデイスよ。何かする事があったのよね、それで……」

「もう良いかしら？ 長老様に会いたいのだけけれど」

「そりゃ勿論、好きにすると良い」

「また散歩してるかもしれないけどね」

そう言うときクリティア族の人達は来た道に戻って行った。

「何か、おかしな連中だな」

「ああ言うのを失礼って言うのよ」

「リタが言うんだ」

リタはそのままカロルの頭を叩き、ジュデイスは少し呆れたような口調で言う。

「基本的にクリティア族ってああいう人達なの」

「ああいう人？」

「明るくて物怖じしない。楽天的で楽観的。良くも悪くも、ね」

「で、長老つてのもそんな感じなのか？」

「なんて言うか……まさにおかしな人の長老つて感じかしら？」

「何か凄い人っぽいね……色んな意味で……」

「会ってみてのお楽しみだな」

「なんか、クリティア族の人達つてボクが想像してたのと違ってた気がする……」

「あゝ、それ、俺様も同意見」

「どの辺がどう違っていたのかしら？」

その事を不思議に思つてジュデイスがカロルに振るとうーんと呻つて答えた。

「なんかもつところ……。ジュデイスっぽい感じを想像してたから」

「そう、それ！ 想像以上に、露出が少なくてがっかりよ」

「あんだ等、そんな事期待してたわけ」

「あんだ等つて、ボクまで含めないでよ！ ボクが言いたかったのは、性格の話しだからね！」

「まったく、緊張感のねえ連中だな」

そんなことを話しながら一行は長い坂道を登り、扉の前まで辿りつく。

ジユデイスが扉を開け、中に入りユーリ達もその後が続く。

街の周囲を見ているとリタは近くにあった魔導器に目が止まりじつとそれを見つめる。

「あたしの知らない魔導器が沢山ある……」

「魔導器を作った民……どうやら本当って事が」

「……そうね、こんな魔導器を見せられればその話も信じられるわ」

「お嬢ちゃんの力を何とかする方法、此処で案外さうと見つかったりして」

「そう……だったら、良いんですが……」

「……動いてないね」

「魔刻がない。筐体コソデナだけだわ」

「この街は魔導器を捨てたの。此処にあるのはみんな大昔のガラクタよ」

「どづいづ事？」

「それがワシ等の選んだ生き方だからじゃよ」

魔導器をじっと見ていると老人の声が耳に入り、振り向くと声の主と思われる老人が近づいてきた。

「お久しぶりね。長老様」

「外が騒がしいと思えば、おぬしだったのか。戻ったんじゃの」

「この子達は私と一緒に旅をしている人達」

「ふむ……。おや？」

長老がユーリ達を見ていると、ユーリの腕にある武醒魔導器に目が止まった。

「これは……。魔導器ですな。もしか使ってたさる？」

「ああ、武醒魔導器を使ってる」

「ふーむ。ワシ等と同様、地上の者ももう魔導器を使うのをやめたのかと思っていたが……」

「此処の魔導器も特別な術式だから使っていないんです？」

「魔導器に特別も何も無いじゃろ。」

「そもそも魔導器とは聖核を砕きその欠片に術式を施して魔刻とし、
エアルを取り込む事により……」

「ちよつ！ 魔刻が聖核を砕いたものつて?!」

「左様、そう言われておる。聖核の力はそのままでは強すぎたそう
な。」

「それでもいかなる宝石よりも貴重な石じゃ。」

「だから砕き術式を刻む事で力を抑え、同時に数を増やしたんじゃな。
魔刻とはそうして作られたものと伝えられておる」

「……皮肉な話だな」

「うん……魔導器を嫌う始祖の隸長の生み出す聖核が、魔導器を作
り出すのに必要だなんて……」

「フェローが聖核の話をしなかったのは触れなくなかったから……
かもねえ」

ユーリの手から一瞬何か光ったのを長老は見えた。

「おや？その手に持っているのは？」

「ああ、これか？」

ユーリの手にはシークの大事にしていた石があった。

「それはシークの……」

「エゴゾーの森で拾ったんだが、多分シークが落としたんだな」

「ほお……聖核とは随分と貴重な物をもっておるのう」

長老のその言葉に全員が驚く。

「この石、聖核なの!？」

「随分と小さいがおそらく聖核が砕けたものじゃろ」

「なるほどな。これが聖核ならシークの奴が大事にしてたのもわかるな」

「でも、どうしてシークが聖核を……?」

シークがなぜ聖核を持っていたのかユーリ達は疑問に思ったが、シークがいない今、それは分からないことだった。

「長老様。もっと色々聞かせてもらいたいの」

「オレ達は魔導器が大昔にどんな役割を演じたか調べているんだ。もしそれが災いを呼んだのなら、どうやってそれを収めたのかも……。
ミヨルゾには伝承が残ってるんだろ？ それを教えてくれないか」
「ふむ。いいじゃろ。此処よりワシの家につつつけのものがある。勝手に入って待ってなされ」

長老はそう告げるとそのまま何処かへと歩いて行きだした。

「ちょっと、何処行くのよ」

「日課の散歩の途中なのでな。もう少ししたら戻るわい」

そして長老はそのまま街の方へと歩いて行った。

「……」

「ホントにマイペースだね」

「聖核、魔導器、エアルの乱れ、始祖の隸長……色々繋がって来やがった」

「だな。その伝承つてのを聞いたらもつと色々繋がるかもな」

「うん。ジュデイス、長老の家つて何処にあるの？」

「長老様の家は屋根の色が違うあの大きな建物よ。行きましょ」

そう言つとジユデイスを先頭に長老の家を目指し歩き出した。

長老の家に着くと中に入り椅子に座ったり壁に寄りかかって長老の帰りを待つ。

「本当に勝手に入って良いんでしょうか？」

「本人が入って待ってるって言っただから良いでしょ」

「やっぱりクリティアの人ってなんか変わってるよね」

「のほほんとしてると言うかマイペースと言うか」

「おかしな人達でしょう？」

「ジユデイスも何となく似てるけどね」

「おかしいわね。随分と違うと思うのだけれど」

「ただいま」

「あ、お帰りなさい」

「待たせたのう。それじゃ、その奥に行くと良い」

長老に言われ、ユーリ達は部屋の奥に向かう。

そこには横長い壁があった。

「……………」

「これこそがミョルゾに伝わる伝承を表すものなのじゃよ」

「でも、ただの壁だぜ？」

「ジユデイスよ、ナギーグで壁に触れながら、こう唱えるのじゃ。

“…………霧のまにまに浮かぶ夢の都、それが現実の続き”

「…………霧のまにまに浮かぶ夢の都、それが現実の続き”……………」

「これは……………」

ジユデイスがそう唱えると目の前の壁に絵が映し出された。

「我等クリティアには物に込められた情報を読み取るナギーグという古き力がある。

この力と口伝の秘文とにより、この壁画は真の姿を現すのじゃ」

「な、なんか不気味な絵だね……………」

目の前の壁に映し出された絵は、何かドス黒いものが絵の中に書か
れている世界を覆っていた

まるで、この世界を食べようとしているかのように……。

「クリティアこそ知恵の民なり。

大いなるゲライオスの礎、古の世の賢人なり。

されど賢明ならざる知恵は禍なるかな。

我等が手になる魔導器、天地に恵みをもたらすも星の血なりしエア
ルを穢したり」

「やっぱりリタの言った通り、エアルの乱れは過去にも起きていた
んですね」

「……」

「こいつがエアルの乱れを表してるのか」

「世界を食べようとしてるみたい……」

「んむ。大量のエアルが世界全体を飲み込むかのようにだったという」

「エアルの穢れ、嵩じて大いなる災いを招き。

我等怖れもてこれを星喰^{ほしほ}みと名付けたり……」

「星喰み……」

「此処に世のことごとく一丸となりて星喰みに挑み、忌まわしき力を消さんとす」

「ねえひよつとしてこれ、始祖の隷長を表してるのかな？」

「魔物みたいなのが人と一緒に化け物に挑んでるように見えるねえ」

「結果、古代ゲライオス文明は滅んでしまったが、星喰みは鎮められたようじゃの。」

その点はワシ等がこうして生きている事からも明らかじゃな」

「よつするにこの絵はその星喰みを鎮めてる図って事？」

「最後、なんて書いてあるの？」

「……！」

「ジュディ？」

カロルの問いにジュディは少し黙ってしまい、ユーリがジュディスを見ると、

少し顔を歪めて続きを読んだ。

「……世の祈りを受け満月の子等は命燃え果つ。星喰み虚空へと消え去れり」

「なんだと？」

「世の祈りを受け……満月の子等は命燃え果つ……」

「！」

「かくて世は永らえたり。されど我等は罪を忘れず、此処に世々語り継がん……アスール、240」

最後まで読み終わると、私達は表情を変え、リタは勢い良く長老を見た。

「どういう事！」

「個々の言葉の全部が全部、何を意味しているのかまでは伝わっておらんのだじゃ」

「……」

「とにかく魔導器を生み出し、ひとつの文明の滅びを導く事となつた我等の祖先は魔導器を捨て、外界と関わりを断つ道を選んだとされておる」

「エステル！」

その言葉を聞いた途端、エステルは血相を変え、走って外に飛び出して行ってしまった。

「今は一人で考えさせてやれ」

「ミヨルゾに伝わる伝承はこれで全てじゃ」

「ありがとな、じいさん。参考になった」

「ふむ。もっと参考になるとんな料理も美味しくなる幻のキュウリの話があるのじゃが……」

「結構よ。それより何処か休める所を借りても良いかしら？
仲間が落ち着くまで暫くお世話になりたいのだけれど」

「ならば隣の家を使うと良い。今は誰も使っておらんでの」

「助かるわ。行きましょ」

そう言い、ジユデイス達は歩いて行きだし、長老の家を出て隣の家へ向かった。

誰も使っていない家で休んでいるとカロルがポツリと口に出した。

「長老の話、全部本当の事なんだよね？」

「壁画の解釈に間違いがあるかもしれないけれど言葉と壁画を照らし合わせると、説得力はあったわ」

「フェローに話を聞いた時点で、問題が世界規模だって事は解つてんだ。

あいつは、これを見たオレ達がどう反応するか、それを解つた上で時間をくれたんだろうな」

「所詮、人間ごときに対処出来る事態じゃない、とでも思わせたかったのかね」

「そして、あの子の事を諦めさせる?」

「……これじゃ、フェローの思惑通りじゃない。あたし、そんなの絶対に認めない。」

「認めてたまるか……諦めてたまるか」

「世界の災い、星喰みかあ」

「あの伝承からだと前に星喰みが起きたのは、満月の子の力が原因
とは言い切れないもんだった」

「けどよ、世の祈りを受け満月の子等は命燃え果つってのは……」

「星喰みの原因の満月の子の命を絶った事で危機を回避したとも取
れるわ」

「……」

「で、でもさ、ボク達が確実に原因になってるヘルメス式魔導器を
止めれば良いんだよね……?」

「ヘルメス式だけじゃないかもな。」

あの伝承からだとな全ての魔導器がエアルを乱してるって感じだった。
違うか、リタ」

「長老、魔導器に普通も特殊もないって言ってた。」

つまり違うのは術式によって扱うエアルの量の大小のみって事だと
思う」

「オレ達が使ってるこいつもか?」

ユーリは自分の武醒魔導器を見せるとリタは小さく頷いた。

「武醒魔導器は特殊だけど、術式によってエアルを用いる以上、どの魔導器も同じよ……」。

それに術技はどのみちエアルを必要とするもの。

多分、ヘルメス式も満月の子も本質的には危険の一部でしかない。

魔導器の数が増え続ければ遅かれ早かれ星喰みが起こる。始祖の隸長はそれを怖れてるんだわ」

「やっぱりそうか」

「シークはこのことを知ってて、エステルを殺そうとしたのかなあ？」

カロルの呟きにユーリは手に持っているシークが持っていた聖核の欠片を見て答えた。

「多分な」

「エアルを乱す一番の原因である満月の子を始末した後はヘルメス式を壊すつもりだったのかもね」

「認めたくなかった……！」

突然リタはそう言って悔しそうな顔をしてその言葉を口にした。

「悪いのは魔導器じゃない、悪い事に使ってるヤツが悪いんだって。そう信じてた……でも……違った」

「じゃあ全部の魔導器を止めなきゃダメなの？ このミョルゾの人達みたいに？」

「そりゃ無理な話だ。魔導器はもう俺達の生活には無くてはならないものだけ。」

結界魔導器や水道魔導器とか……もちろん武醒魔導器も、な。

実際、こいつがないとすげえ化け物とかの相手は無理かもしれない」

ユーリは自分の武醒魔導器に目を落として言うと、皆自然と自分達の武醒魔導器を見ていた。

確かにこれが無くなればユーリ達は今みたいに戦う事は難しくなる。

「魔導器を使ってもエアルが消費しなければ良いのだけど……夢物語なのかしらね」

「リゾマータの公式……」

すると、リタが何か思いついたような顔をしてそう呟いた

「なんだそれ？」

「あらゆるものはエアルの昇華、還元、構築、分解により成り立っているんだけど、

そのエアルの仕組み自体に自由に干渉する事が可能になるはずの未知の理論が予想されてるの。

それを確率する為に世界中の魔導士が追い求めている現代魔導学の最終到達点よ」

「それがリゾマータの公式？」

リタは小さく頷くと、先程よりも難しい顔をして話しを続ける。

「確率されれば、エアルの制御は今よりずっと容易になるはず。

もちろんエアルから変換された力をまたエアルとして再構成するよ
うな未知の術式が必要だけど……」

でも現にエステルの力はエアルに直接干渉してる。

リゾマータの公式に一番近い存在なのはエステルなのよ。

公式でエステルの力に干渉して相殺すればあるいは……」

「なんだか良く分かんねえが、

その公式つてのに辿り着けばエステルは安心して生きてけるって事
だな？」

「増えすぎたエアルも制御出来れば星喰みを招く事も無くなる理屈
ね」

「すごいよー!」

「で、その世界中の学者共が見つけれない公式ってのを探すっての? それこそ夢物語でしょ」

「絶対辿り着いてみせるわ。エステルのためにも、あたしのためにも!」

「そうかい……」

そう言うとレイヴンは外に向かって歩き出した。

「あれ? 何処行くの? レイヴン?」

「散歩よ。」

世界を救うとか、魔導学の最終到達点とか話が壮大すぎて、おっさん、ちっとついてけないわ」

レイヴンが出て行ってからしばらく話しをしていると突然大きな揺れが起きた。

急いで揺れの原因を調べるため、外に出ると入り口にあった動いていなかったはずの魔導器が動いていた。

リタが言うにはどうやら誰かが魔刻を持ってきて、転送魔導器を動かしたらしい。

すると、リタがあることに気付いた。

「エステル……エステルは何処？」

「レイヴンもないよ」

「まさか……エステルたちが……？」

「とにかく探すぞ」

「ええ。長老様、私達の仲間が街にいないか、みんなで探してもらえないかしら？」

「ふむ、良いじゃろ」

ユーリ達はしばらく探したが、エステルとレイヴンの姿はどこにもなかった。

「どうしよう、ユーリ。エステルもレイヴンも何処にもいないよ」

「エステル、何処行っちゃったの……」

「……」

ユーリはふと、テムザ山でレイヴンが言った事、そして城の牢屋でレイヴンと会った時の事を思い出した。

あの時、レイヴンはアレクセイに連れて行かれたことを思い出した……。

その途端、ユーリは何か嫌な予感を感じた。

「……っ！ 何で今になって思い出す……」

「……ユーリ？」

カロルがユーリの顔を見て、首を傾げた。

「ミヨルゾの主に聞いてみるわ。始祖の隸長だったらエアルの乱れを探れるわ」

「ジユデイ、頼む」

「分かったわ。……ヨームゲンの方に行っただみたいね」

ユーリたちは急いでパウルに乗り、ヨームゲンへ向かった。

ヨームゲンの街に入ると、一同は絶句した。

なぜなら、ヨームゲンが廃墟になっていたからだ。

「どうなってんの？ 完全に廃墟だよ……？」

「昨日今日ってものじゃないわ……もう何百年も経ってる傷み方よ」

「静かに、誰かいるわ」

「デューク……！」

そしてデュークの傍らにいたのはカドスの喉笛で見た魔物だったが、すぐに何処かへ行ってしまった。

「逃がしたか……」

途端、後ろから声が聞こえ振り返るとそこにはアレクセイと護衛の親衛隊の男が一人いた。

「アレクセイ、何でこんなところに……？」

「ほう、姫を追ってきたか。良く此処が分かったな」

「エステルが何処にいるか知ってるの?!」

リタがアレクセイに近づいた途端、隣にいた騎士が槍を構えてリタを止めた。

「な、何するんだよ!」

それを見てリタは後ずさり、
カロルはその態度に声を上げるとアレクセイは鼻で笑ってユーリたちを見た。

「何の冗談だ？ 騎士団長さんよ」

「君達には感謝の言葉もない。君達のくだらない正義感のお陰で私は静かに事を運べた。

ラゴウもバルボスもそれなりに役に立ったが、諸君はそれを上回る素晴らしい働きだった。

まったく見事な道化振りだったよ」

「え？ え？」

カロルは一人だけ状況が掴めていない様子だった。

ユーリはアレクセイを見て、ユーリは少し目を細めてアレクセイを見る。

「だがもう道化の出番は終わりだ。そろそろ舞台から降りてもらいたい」

「そう言う事かよ……。」

何もかもてめえが黒幕……？ 笑えねえぜ！ アレクセイ！！」

ユーリがそのまま剣を抜き構える。

「騎士団長！」

途端、アレクセイの後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「ふん。もう一人の道化も来たか……」

「フレン……」

「騎士団長！ 何故です！ 帝国騎士団の誇りと言われた貴方が、何故謀反など……」

「謀反ではない。真の支配者たるものの歩むべき霸道だ」

「ヨーデル様の信頼を裏切るのですか！」

必死に訴えるフレンに対しアレクセイは嘲笑うようにフレンを見る。

「ヨーデル殿下……ああ、殿下にもご退場願わないとな」

「ばかな……」

「マイロード、準備が整ったようです」

フレンが悔しそくに顔を歪めていると少し高くなっている砂山の所にイエガーがいた。

「ご苦労。では私は予定通りバクティオンへ行く。
此処はお前に任せる……ヨードルの始末もな」

「イエス、マイロード」

イエガーの返事を聞くとアレクセイはそのまま踵を返してその場を去った。

「待て！ アレクセイ！」

「逃がすかよ！」

フレンは急いでアレクセイの後を追おうとし、
ユーリも急いで後を追おうとするとイエガーが連れているあの双子
が前に出て来た。

「通さない」

「邪魔するのなら……」

「どきなさいよっ……」

後ろからジュディとリタの怒鳴る声が聞こえる。

「ユー達のプリンセスもバクティオン神殿です」

「なんだと!?!」

「早く行かないと手遅れちゃうわよん」

イエガーと双子はそれだけ言うと、いつものように煙を出現させて姿を消した。

「アレクセイとイエガーを追え!」

「はい!」

フレンの言葉を聞き、ウィチルはそのまま走った。

「ユーリ、ボク等も! ……ユーリ……?」

ユーリはそのままじっとフレンを見ているとその視線に気付いたのかフレンもカロール達もユーリを見る。

「ユーリ・ローウェル、大人しく……」

ソディアはフレンに静止され、言葉を切った。

「……フレン、ちょっと顔貸せ」

「分かった」

ユーリは静かに口を開いた。

「お前、何してやがった？ 騎士団で上に行って国を正すんじゃないのか！

アレクセイにまんまと利用されやがって」

ユーリはフレンに向き合い、言葉を続ける。

「ドンもベリウスもあの野郎の為に死んだってのか！ 傍にいてまったく気付かなかったのかよ！？」

「すまない……」

「何故だ。ヨーデルがアレクセイを信用してたからか？」

「殿下は悪くない。全てアレクセイを信じた僕の責任だ」

「ノードポリカで聖核を欲しがったのもアレクセイの命令だからだ
る」

「ああ……」

「話せよ、何があった。もう元騎士団長殿に気を遣う意味ねえだろ」

フレンは一息つき話し出した。

「ヘリオードの軍事拠点化に、マントイクでの住民迫害、キュモールの行動、

更に帝国で禁止されている魔導器の新開発……全て騎士団長……いや、アレクセイの命令だった」

「立派な騎士様になったもんだな。国への忠節、たいしたモンだ」

「騎士団長は……アレクセイは昔はああじゃなかった！ 君だって知ってるはずだ。

正しい者が正しく生きて行ける。それがアレクセイの理想だった。だからこそ僕は……」

「それで自分のやるべき事を見失うようじゃ世話無いぜ」

「……」

ユーリのその言葉にフレンは悔しそうに顔を歪め、ユーリは小さく息を吐いた。

「エステルが攫われちゃったオレも偉そうな事言えた義理じゃねえ

けどな」

「いや、それも元はといえば僕がアレクセイの本性を見抜けなかったせいだ。

疑問を感じながらも騎士として命令を遂行する事に固執してしまっ

た。
僕の思慮の浅さが今回の事態を招いたんだ……！」

「それで、お前はこれからどうしようってんだ？」

「僕は責任を取らないといけない。エステリーゼ様は必ず救い出す。だからウィチル、ソディア、それまでユーリ達と共にヨーデル殿下をお守りしてくれ」

「なに！？」

「親衛隊がエステリーゼ様を連れ去るのを僕は阻止出来なかった。僕には彼女を助け出す義務がある」

「隊長！ ヨーデル様はどうするんですか！ 今、殿下の身に何かあったら、帝国は……！」

「その通りだ。だからこそ我が隊の総力を上げてヨーデル様をお守りするんだ」

「ですが隊長は……！」

「まったく……オレはお前にそういうけじめをつけさせたくて怒鳴ったワケじゃないっての」

「エステルを助けるのはオレ達凜々の明星だ。

お前にはお前のやる事があるだろ……天然殿下のお守りとかな」

「ユーリ……！」

「隊長、一刻を争います。ヨーデル殿下の元に参りましょう」

「……解った」

フレンは少し歩いて小声でユーリにだけ聞こえる声で言った。

「ありがとう、ユーリ」

「お互いな。ちっと安心したぜ。久々にらしい所見れて、な」

フレンはその場から姿を消した。

「アレクセイ……彼が……ヘルメス式の技術を持ち出していたのね」

「ああ、良くも悪くも一つに繋がったって訳だ。良し！

バクティオン神殿に行くぞ。エステルとレイヴンを助けてアレクセイのヤツをぶっ飛ばす！」

「ええ！」「うん！」「了解」「ワン！」

「見て！ あそこ！」

「ヘラクレス……！ アレクセイが呼び寄せたのか」

ピオニア大陸にあるバクティオン神殿と思われる遺跡の近くに来ると

ヘラクレスがユーリ達の目に入った。

そしてヘラクレスから無数の光が放たれ空を飛び回っている馬のような魔物を狙い撃ちする。

「……あれはアスタル！」

「アスタル？」

「始祖の隸長、アスタルの事よ」

アスタルに目を戻すと、遺跡の奥にある山の峰辺りに空いている穴の中に逃げ込んだ。

「アレクセイはまだ聖核を狙っているのね」

「逃がされたように見えたけど」

「ああ。あの遺跡に追い込まれたみたいだった」

「どうやらあの遺跡がバクティオンで間違いなさそうね」

「アレクセイ、今度は何を企んでるんだろう」

「アレクセイが何を企んでるのかなんて関係ないわ」

「ああ、オレ達はエステルを助けるだけだ」

「うん。このまま接近するのは危険だから近くに降りて行った方が
良いよ」

「アレクセイ！」

神殿に着くとアレクセイと親衛隊の姿が見え、

そして結界の中に閉じ込められたエステルの姿があった。

ユールは直ぐに剣を抜き、構えた。

「イエガーめ。雑魚の始末も出来ぬ程腑抜けたか」

「エステルを返せ！」

「エステル、目を覚まして！ エステル！」

「よかるう」

そう言うとアレクセイはこちらにエステルを向かせ、手に持っていた聖核でエステルに衝撃みたいなものを与えた。

「うあ！ あ・・・ああ！！」

エステルは苦しそうに体の向きを変えようとしていると、突然エステルから光が放たれ、それはもろにユーリ達に当たり、その場に倒れた。

「うっ！」「うわあ！」「きゃ！」「くっ！」「ギャウ！」

「ユーリ！ みんな！ う……あ……っ！」

「この通り、何の補助もなしに力を使えば姫の生命力が削られる。諸君も姫の事を想うならこれ以上邪魔をしない事だ。くくく……」

「く……そ……」

ユリはそのまま意識を失ってしまった。

「此処にいる親衛隊を捕らえる！」

ユーリがその声に気を取り戻すと、ソディアとウィチルの姿を目にした。

「あんだ、フレンの……何で此処に？」

「フレン隊長の命令です。ヘラクレスの動きを知って僕達を向かわせたんです。」

隊長のご厚意に感謝して欲しいですね」

「まったく、フレンの奴……余計なお世話だっつとけ」

「隊長はあれから寸刻を惜しんで奔走している。それなのに貴様のザマは何だ。」

散々大口叩いたくせに」

「お前の隊長と違ってこっちはデキが悪いんだよ」

「……何故、お前なんだ」

「？」

急にソディアが先程までと違う声音を発し、ユーリ達はソディアを見た。

「何故お前みたいな奴がフレン隊長の友人なんだ！」

隊長は私達騎士団の憧れだ。あれこそ帝国騎士の鑑だ。なのに！」

ソディアはそこで少し悲しそうな顔をして言葉を続ける。

「お前と一緒にだと隊長は隊長でなくなってしまう。今回の事だって

……」

「くだらねえ。そんな話ならそのリング頭とでもすりゃ良いだろ。オレたちやあなたの愚痴に付き合ってる暇は無いだよ」

「り、リング頭あー！」

「貴様！ー！」

「そこまでよ」

険悪なムードになりそうだったのをジユデイスが割って入った。

「今はお互いにやらなくちゃいけない事があるのでしょ？」

「……………これだけは言っておく。ユーリ・ローウェル、お前は……………お前の存在は隊長の為にならない！」

ソディアはキツとユーリを睨み付けてそう言つとそのまま出口へと向かつて行つた。

「激しい人ね」

ジユデイスが立ち去つて行くソディアを見ていると咳払いが聞こえ、前を見るとウィチルはユーリ達を見て口を開いた。

「ええと、最後にフレン隊長から伝言です」

「頼んだ」

ウィチルはそう静かに告げ、少し焦った感じで言葉を続ける。

「こゝ、これで僕等の任務は果たしましたからね。後は勝手にして下さい」

「小隊、撤収するぞ！ 急いで本隊に戻る」

その言葉を聞きウィチルは走ってソディアの元に向かった。

「……やっと静かになった感じだね」

「早いとこアレクセイを追うぞ」

「ええ。あの調子で力を使わされたら、あの子もエアルの乱れも手遅れになってしまうわ」

「あいつ……エステルを道具みたいに……！ 許せない！」

「行こう！」

ユーリたちは神殿の中へと足を進めた。

神殿の中に入ったユーリ達だったが、
上の階から降りて来た部屋はずっと同じような作りになっている部
屋ばかりだった。

「さつきから同じ作りの部屋ばかりが目に入るんだけど」

「念の為、地図は書きながら来てるけど……」

その時だった。

突然、ユーリたちの目の前に鳥が姿を見せた。

魔物かと思い、武器を構えるユーリたちだったが、カロールがその鳥
を見て驚いた。

「ちょっと待って！あの鳥、どっかで見たとあるよ」

「あれって、シークの飼ってた鳥じゃない」

「確か、ロアだったかしら？」

ロアはユーリに近づき、ユーリの服を引っ張った。

「ついてこいってか？」

どっちらそっちらしい。

「どっにするの？」

「このまま歩いててもどっちにエステルがいるか分からない以上問題ないだろ」

「もしかしたらあの子、エステルの居場所を知ってるかもしれないし」

「確かにそうね」

一同は意見が一致し、ロアについて行った。

しばらくロアはユーリたちを誘導した。

ロアは飛ぶのをやめ、足を地面につけた。

部屋は行き止まりだったが、何かあるのかと思い部屋中を見回すと誰かがいるのに気付いた。

ユーリたちはその人物を見て、予想していたのか特に驚きはしなかった。

「……シーク」

シークはその声が聞こえたのか座っている状態で顔を伏せたまま、目だけをユーリたちに向けた。

「ユーリ……。私を始末しに来たのか……？」

「ぼくたち、エステルを助けにきたんだ！」

「エステリーゼを助ける？」

興味を示したのかシークは伏せていた顔を上げた。

「エステルはアレクセイにさらわれたの」

「アレクセイの奴、エステルを無理やり使って何かたくらんでるんだ」

「シーク！僕たち、エステルを助けたいんだ！シークも力を貸してよ！」

「……私には関係ない……」

「……」

そう答えたシークにユーリは無言でシークに近づき、無理やりシークを立たせた。

「何を!？」

「お前、本当にそう思ってんのか？」

「あ、あたり前だ……」

「なら、なんでそんなつらそうな顔してんだ？」

「!？」

ユーリの言つとおり、シークはさっき言ったこととは違ってつらそうな顔をしていた。

関係ないのなら、こんな顔をする必要はないはずだった。

「本当のこと言えよ」

ユーリの言葉はどこか敵しさを感じた。

「……んだ……」

「？」

「今更どんな顔をしてエステリーゼに会えばいいんだ！」

ユーリたちは黙ってその言葉を聞いていた。

「私はエステリーゼを傷つけた。そんなあいつに私はどんな顔をして会えばいいというんだ！」

シークは背を向け、話を続けた。

「ならばもう会わない方が……あいつのためになる」

「エステルはそう思ってなかったぜ」

「なに？」

シークは予想外の言葉に驚き、ユーリを見た。

「エステルは崖から落ちたお前を心配していたぞ」

「……自分の命を狙った相手を心配とはな……」

「エステルらしいだろ」

「まったくだ……。エステリーゼが会いたがっていた、か……」

「で、一緒に行くのか？」

「お前はそれでいいのか？もしかしたらまたエステリーゼを狙うかもしれないぞ」

「そんなときはそんなときだ。俺達が全力でエステルを護る。今はエステルをアレクセイの奴から助けださねーと」

「確か、エステリーゼの力を無理やり使っているって言うっていたな。そんなことをすれば世界もエステリーゼも危険だな。それは一番望ましくない結果だ」

シークのその言葉を聞いたカロルは先ほどまでの暗い表情から一変して明るい表情に早変わりした。

「じゃあ！」

「エステリーゼ救出に協力する。それにエステリーゼに謝らねばな
……」

「またよろしくな」

ユーリはシークに聖核の欠片を渡した。

「これは……私の……」

「大事にしてるもんならもうなくすなよ」

「拾ってくれたのか……。ありがとう……」

シークはユーリから聖核の欠片を受け取ると、それをいつものように首にかけた。

シークの聖核の欠片を見た時、リタがシークに疑問に思っていたことを問いただした。

「あんだ、その聖核どこで手に入れたの？」

「これは大事な方の形見だ」

「その大事な人って、まさか……」

「始祖の隸長だ」

「あんだ、始祖の隸長の知り合いだったわけ？」

「私の命の恩人だからな。私のことよりエステリーゼを気にした方がいいのではないか？」

「そうね。今はあの娘の心配をした方がいいわね」

「でもここ、複雑でどう進めばいいのか分からないよ」

「エステリーゼが連れていかれたとすれば一番奥だな……。そこまでの道なら分からないでもないぞ」

シークのその言葉に全員が驚き、シークを見た。

シークはどうやら遺跡の内部をそれなりに知っているようだ。

シークを先頭に一行は遺跡の内部を進む。

しばらく進むと次の部屋へと進む入り口に結界が張ってあった。

リタがその結界を見て調べている。

「……これって」

調べてそれが何なのかどうやら分かったようだ。

「暗号化した術式を鍵として使った封印結界……？」

「リタ、分かるか？」

「あたしも本で見た事あるだけ……まもとに解析しようと思ったら、どれだけ時間がかかるか見当も付かない……」

「……あれ、じゃあアレクセイはどうやって通ったんだろう？」

「おそらくはエステリーゼの、満月の子の力……」

「そして、無理矢理鍵を組み替えたんだわ」

「つまりまた力を使わせた、ってことか」

アレクセイがまたエステルを使ったと分かると全員は顔を強張らせた。

「ボクたちはどうやって行こうか」

全員がどうやって通ろうと考えていると、シークがポツリと呟いた。

「デューク様なら……」

「え？」

「私が前にここに来た時、デューク様のおかげでここを通ることができた」

「デュークか……。でも、デュークがどこにいるかなんてわかんねし、今は捜してる暇ないだろ」

「誰っ！」

その時、ユーリ達が入って来た入り口の方から人の気配がした。

そこに現れたのは不思議な剣を持ったデュークだった。

「デューク様……」

「デューク……何で此処に」

シークはデュークを見るなり、表情を苦くした。

「シーク……。それにお前達か……。あの娘、満月の子はどうした？」

「アレクセイがこの奥に連れ去っちゃったんだ」

「……成る程。そう言う事が」

「デューク様、なぜここに……？」

「エアルの乱れを追い、それを収めに来た」

「……収めにつて、あんた具体的に何するつもりよ」

リタがそう言うのとデュークは静かに答えた。

「エアルクレーネを鎮め、その原因を取り除く」

「はっきり言ったらどう？ エステルを殺すって」

「どいつもこいつも。よってたかつて小娘一人に背負い込ませやがって」

「暴走した満月の子を放置してはおけん」

「あんたもフェローと同じ石頭かよ。同じ人間同士も少し話しが通じるかと思っただけだな」

「人間同士である事に意味などない。一人の命は世界に優越しない」

「その世界つてのもバラしや全部一人一人の命だろうが。」

「良いか、あの馬鹿で世間知らずのお嬢様はオレ達の仲間なんだよ。部外者はすっこんでろ！」

「あの娘がどれほど危険な存在か、知った上で言っているのか？」

「知ろうが知るまいが“義を持って事を成せ”ってのがウチのモットーなんぞな」

「デューク様、私も彼らに賛成です」

今まで黙っていたシークがユーリとデュークの会話の間に入りこみ、デュークに話しかけた。

シークの言ったことにデュークは一瞬驚きの表情を見せ、シークのいる方を向く。

「私も少し前まで満月の子であるエステリーゼの命を狙っていました。」

そうすることで世界を救えるのならばそれが一番いいと……。

ですが、エステリーゼと旅をして疑いました。

本当にあいつが世界にとつて毒なのか、と……。

そんな疑問を抱いていたら、私の剣に迷いが出てしまいました。

私はエステリーゼを助けられるのならば助けたいです。」

「……シーク、変わったな。少し前ならば迷うことなく自分の責務を果たすはずだが……。」

デュークは手にしていた剣をユーリの足の下に投げた。

「……良いだろう。ならばフェローが認めたその覚悟の程見せてもらおう。」

「デューク様、それは……！」

シークはその剣を見るとデュークを見て驚いていた。

「宙の戒典だ。エアルを鎮める事が出来るのはその剣だけだ。掲げて念じる。そうすれば後は剣がやる」

ユーリが足下に転がっている宙の戒典を拾ってじっと見ているとデュークはそのまま立ち去ろうとしていて、ユーリはデュークを呼び止めた。

「待てよ、デューク！ 宙の戒典といや行方知れずの皇帝の証の名前だ。

なんであなたがそれを持つてる？なんでそれがエアルを制御出来る？あなた一体何者だ？」

ユーリが一通り思っている事をデュークに告げると、結界の奥から地響きが鳴った。

「その問いの答えを得る事が今のお前達の願いではあるまい。手遅れになる前に始祖の隸長が背負う重荷、それがどれほどのものか身をもって知るが良い」

「……」

デュークはその場を去る時、一瞬だけシークを見て、シークもそんなデュークの視線に気づいた。

デュークが去ったあと、ユーリは結界と向かい合い、宙の戒典を掲げて念じると、円陣が出現した。

「……その術式、エステルと同じ。やっぱりその剣……」

ユーリが剣を宙に翳すと、入り口を塞いでいた封印結界が解かれた

「……開いた」

「行こう」

「ええ。それにしても……宙の戒典、満月の子、それにフェローが認めた覚悟ですって？」

あのデュークって男、ほんとに一体何者なの？」

「シークならデュークのこと何か知ってるんじゃないの？」

シークとデュークは昔から知り合いだったみたいだったようなので、全員がシークに注目した。

「私の口からは勝手にデューク様について話すわけにはいかない……」

それより今はエステリーゼを助け出すのに専念した方がいい」

「そうだな」

一行は話しを終えると神殿の奥へと進んでいく。

「あそこが最深部だ。おそらくあそこにエステリーゼがいるだろう」
「急ぐぞ！」

ユーリの合図に全員が頷き、最深部の部屋へと入って行った。

「エステル、無事か！」

「エステル！」

「また君達か。どこまでも分をわきまえない連中だな。
しかも、一人増えているようだが……」

「ユーリ！みんな！それに、シークも……！」

エステルは今までなかったシークの姿を見て驚いていた。

アレクセイはシークを見て、シークをバカにするようにあざ笑った。

「ほう……、30人殺しの犯罪者か。やはりあの時、捕えるのではなく殺しておくべきだったな」

「アレクセイ、3年前は世話になったな。あの時の判断を間違えたな」

二人の会話を聞いているとどうやら二人は知り合いのようだった。

「え？どういうこと？シーク、アレクセイと知り合いなの？」

「3年前、30人の人間を殺したときに私を捕えたのはアレクセイだからな。」

疲労しきっている私が騎士団長に勝てるはずがないからな」

「うつ……」

その時、エステルが小さな悲鳴をあげた。

それを聞き逃さなかったリタはエステルを見て言った。

「エステル、今助けてあげる！」

「ふん。お前達に姫は救えぬ。救えるのはこの私だけ」

「ぶざけるー！」

「道具は使われてこそ、その本懐を遂げるのだよ。」

世界の毒も正しく使えば、それは得難い福音となる。それが出来るのは私だけだ」

そう言うとアレクセイはエステルの方を向いてまた言葉を続ける。

「姫、私と来なさい。私がいなければ、貴方の力は……」

「きゃあああ！」

アレクセイはそう言って聖核をエステルの方に向けるとエステルの力に反応して、

その衝撃がエステルに当り、エステルは苦しそうに悲鳴を上げた。

「やめなさい、アレクセイ！ あっ！」

ジユデイスがエステルの元に向かおとしていると、赤い光が発せられユーリ達の動きを止めた。

「アスタル！！！」

更にその光はアレクセイの近くで横たわっている始祖の隸長であるアスタルに当り悲鳴を上げる。

「ははは、何が始祖の隸長か。何が世界の支配者か」

「やめろ！！ エステルを放せ！」

そうこうしているうちにアスタルは動かなくなってしまった。

そして、アスタルが死んだことによりアスタルが光だし、聖核が現れた。

「死んだか。あっけなかった」

「っ!!」

「そんな……」

アレクセイはユーリの言葉を聞き流し、アスタルへと近づいていく。ジユデイスは顔を歪めアスタルを見て、エステルもショックを受けていた。

「思ったより小ぶりだな。まあ使い道はいくらでもある」

アレクセイはそう言って聖核になったアスタルの聖核を拾い、懐に入れる。

「貴様……!!」

シークはアレクセイの行動に限界がきたのか、剣を抜きアレクセイ

に向かって行った。

しかし、アレクセイは自分の前にエステルを移動させる。

そのせいでシークは剣を振ることができなかった。

「!?!」

「どうした？その剣で斬ればよからう」

「……」

「3年前に比べ、犯罪者は甘くなったな。3年前はもっと鋭い目をしていたはずだが……」

「私も甘くなったからな……」

「そうだ、せつかく来たのだ。諸君も洗礼を受けるが良い。姫が手
ずから刺激したエアルのな」

そう言うとアレクセイは再び聖核を高く掲げるとまた赤い光が放た
れ、

ユーリ達はその場から動けなくなった。

「うわあああ!」

「!?!」

「っ!」

「いや! もうやめて!」

エステルが一番近くにいたシークは立っているのがつらくなり、その場に膝をつけた。

カロールとリタが苦しそうに悲鳴を上げ、それを見たエステルが叫ぶ。

「く……っだらあ!」

ユーリは力を振り絞って宙の戒典を取り出し、それを宙に掲げる。

途端、エアルの乱れは消え、正常な空気に戻った。

「なんだと? 何故貴様がその剣を持っている? デュークはどうした?」

アレクセイは目を細め、ユーリが持っている宙の戒典に目をやる。

「あいつならこの剣寄越してどっかいつちまったぜ。てめえなんぞに用はないそつだ」

「……皮肉なものだな。長年追い求めた物が不要になった途端、転

がり込んでくるとは「

「不要？」

「そう、満月の子と聖核、そして我が知識があればもはや宙の戒典など不要」

「聖核、だと……？貴様のくだらない目的のためにアスタルは……始祖の隸長は……」

「エステルを返しなさいよ！」

リタはアレクセイにエステルを返すように言う。

「ふん。姫がそれを望まれるかな？」

「エステル！？」

「……」

「エステル！ どうしたのよ、エステル！」

「……分からない」

「何言ってるんだよ！」

「一緒にいたらわたし、みんなを傷つけてしまう。でも……一緒にいたい！」

わたし、どうしたら良いのか解らない！」

「エステリーゼ、私はお前に話したいことがある。
だから勝手にいなくなるな」

「来い！ エステル！ わかんねえ事はみんなで考えりゃ良いんだ
！」

「シーク……ユーリ……！」

ユーリはそこで言葉を切り、走り出しカロール達も走り出したが、
直ぐにさき程の光で弾き飛ばされてしまう。

「ぐあー！」「ううー！」「きゃー！」「うー！」「くっー！」

「もう……イヤ……！」

「いかな、ローウェル君。

ご婦人のエスコートとしてはいささか強引過ぎやしないかね。紳士
的ではないな」

「生憎、紳士と無縁の下町育ちでな。行儀と諦めの悪さは勘弁して
くれ」

「今となつてはその剣は邪魔以外の何物でもない。此処で消えても
らう」

アレクセイはそう言うとエステルを連れて、出口へと向かいだした。後を追おうとしていると、入れ違いで何人も騎士がユーリ達の前に現れた。

「あなた達、そこをどきなさい！」

リタがそう叫んでいると、騎士達は入り口の方を向き、敬礼をした。すると、一人の騎士が入って来た。

その騎士は隊長服を着ている。

騎士は騎士達の前に止まり、何か命じると騎士達は出口の方へ走っていき、

騎士はユーリ達の前で止まった。

「あいつは!?!」

「確か隊長のシュヴァーン、だったな。

いつも部下に任せきりで顔見せなかったクセに、どついつ風の吹き回しだ?」

「ワンワンワン!」

「どつした、ラピード」

「……やはり犬の鼻は誤魔化せんか」

「！？」

「……この声……まさか……レイヴン？」

ユーリ達はその声を聞いて一瞬耳を疑った。

だがシュヴァーンが顔を上げ、顔を見た時、今度はその目を疑った。

「冗談……って訳じゃなさそうね」

「ギルドユニオンの幹部が騎士団の隊長！？」

「成る程な、そう言う事かよ」

「そんな！ だってドンは……ねえレイヴン！」

「俺の任務はお前達とお喋りする事ではない」

「レイヴン……！」

「こちらは急いでいる。そこをどけ」

シークがシュバーンに対して冷たく言い放つ。

しかし、シュバーンは静かに剣を抜いた。

どうやらその言葉を聞き入れるつもりは全くないようだ。

「障害となるならば、私はその障害を切り捨てるまでだ」

シークはそう言いながら、剣を強く握った。

ユーリたちもシークに続いてそれぞれ武器をとる。

「バツカやろうが!」

「帝国騎士団隊長主席、シュヴァーン・オルトレイン、………参る」

シュヴァーンはそのままユーリ達に斬りかかって来る。

「悪いけど、おっさんだからって容赦はしないぜ」

「レイヴン、何で………何でなの?」

「何度でも言おう。私はレイヴンなどという人間ではない」

「あんななんか………大っ嫌いよっ!」

「ふん。嫌われたものだな」

反撃しながら、リタはいつも以上に大きな声でそう叫ぶ。

リタの顔はつらそうである。

「貴方と戦わなきゃいけないなんて、悲しい宿命ね」

「私も悲しいよ。貴方のような美しい方と戦わなければならないとは」

「いつもの調子でやってくれよ」

「いつもとはどのいつもの事かな？」

「ボク……レイヴンの事好きだったんだよ……」

「残念だな。此処にその本人はいない」

「……迷いのない剣だな」

「貴方も迷いのない剣になっている」

「迷いのある剣ではエステリーゼを助けることはできないからな」

「絶対許さないんだから……許してたまるか」

「敵対する者に許されるものはない」

「貴方……まさか此処で死ぬつもりなのかしら？」

「戦場じゃいつだって死ぬ覚悟だ。故に手は抜かぬ！」

シュバーンはそう言いきると剣でユーリを攻撃する。

ユーリはシュバーンの剣を受け止める。

その隙にリタ、カロール、ジユデイス、ラピードが攻撃をする。

「クリムゾンフレア」

「撃槌フロウアッパー！」

「月閃光！」

「ガウツ！」

全員の攻撃は見事にすべてあたり、シュバーンにダメージを与える。

だが、帝国騎士団隊長主席なだけあってかそう簡単には倒れてくれない。

しかし、シークはシュバーンに休む暇を与えず、攻撃する。

「牙連崩襲顎」

「くっ！」

「これで最後だ！峻円華斬」

シュバーンはユーリの一撃を受け、動きを止めた。

「ふ……今の一撃でもまだ死なないとは……因果な体だ……」

「な、何よ、これ、魔導器……胸に埋め込んであるの！？」

シュヴァーンの心臓には魔導器が埋め込まれていた。

「どつやらあの魔導器は心臓の変わりをしているらしいな。自分の心臓はどうした？」

「……自前のは10年前になくした」

「10年前って……人魔戦争？」

「あの戦争で俺は死んだはずだった。だが、アレクセイがこれで生き返らせた」

「……なら、それもヘルメス式と言う事？ 何故バウルは気付かなかったの……？」

シュヴァーンは少し顔を逸らして口を開く。

「多分、こいつがエアルの代わりに俺の生命力で動いてるからだろう」

「……生命力で動く魔導器、そんな……」

その時、大きな揺れがした。

「何？」

揺れが収まると、出口が今の揺れで落ちてきた天井の破片で埋まった。

「閉じ込められたわ」

「……アレクセイだな。生き埋めにするつもりだ」

「おいおい、あんたがいるのにかよ」

「今や不要になったその剣でさえ始末出来れば良い。そう言う事だろっ」

「それでエステル使ってデュークを誘き寄せたって訳か。つくづく

えげつない野郎だぜ」

「アレクセイはデューク様を始末するつもりだったのか……。許せない……。」

シュバーンは黙ってその場に座った。

「ちょっと、おっさん！ 何でそんなに落ち着いてんのよ！」

その様子を見たりタがシュバーンを見て叫んだ。

「俺にとってはようやく訪れた終わりだ」

「初めから……此処を生きて出るつもりがなかったのね」

シュバーンはジュディの問いに答えず、俯いたままだった。

「一人で勝手に終わった気になってんじゃねえ！」

ユーリはその態度に腹を立て、シュバーンの所に行き、シュバーンの肩を揺らしながら怒鳴った。

「オレ達との旅が全部芝居だったとしてもだ、ドンが死んだ時の怒り、あれも演技だったのか？」

最後までケツ持つのがギルド流……ドンの遺志じゃねえのか！
最後までちゃんと生きやがれ！」

「……ホント、容赦ねえあんちゃんだねえ」

レイヴンはオレの言葉を聞くと小さく笑い立ち上がり、カロールがユーリとレイヴンの側に駆けつけた。

レイヴンは出口の方に弓を構え、弓を放つと大きな爆発が起き、岩が粉々に砕けた。

出口が開き、一歩踏み出すとまた振動がし、天井が落ちてきそうになっっていた。

「く！ 間に合わねえ」

同時に天井はユーリ達の上に落ちてきた。

だが、いつまで経っても衝撃が来ないと思い振り返ると、レイヴンが頭から血を流しながらその岩を支えていた。

「レイヴン！？」

「ちょっと！ 生命力の落ちてるあんたが今魔導器でそんな事したら！」

「長くは保たない……早く脱出しろ」

「おっさん！」「レイヴン！」

「アレクセイは帝都に向かった。そこで計画を最終段階に進めるつもりだ」

「！！」

「後は……お前達次第だ」

「レイヴン！ レイヴン！！」

「……行くぞ、カロル」

「でも！」

「行くんだ！」

「……」

とまどうカロルを怒鳴ることで、無理やり走らせる。

リタ、ジュデイス、ラピードも走り出した。

ユーリたちが去ったあと、シークは最期にもう一度だけレイヴンを

見て走り出した。

「ふっ。ガラにもなかったか、な……」

ユーリ達がいなくなったのを確認すると、レイヴンはそう小さく咳く。

その直後に瓦礫が崩れ落ちる音が神殿内に響いた。

最深部からだいが離れたところで一旦足を止める。

カロルは地面に両手と膝を着いて泣き出し、リタも今にも泣きそうな顔をしている。

「うう……レイヴン……」

「バカよ……やっぱり仲間だったんじゃない……バカ……バカ!!」

リタは悔しそうにそう叫ぶと、後ろを向いていたジユデイスが振り返ってリタとカロルを見ていた。

「ぐずぐずすんな！ エステル助けるんだろうが！とっとと走れ！」

ユーリの厳しい言葉にリタとカロルはまた走り出した。

「損な役回りね、ユーリ」

「……別に。実際ぐずぐずしてられねえだろ」

「そうだな。レイヴンがせっかく助けてくれた命だ。無駄にはできないな」

ユーリ、ジュディス、シーク、ラピードも少し遅れて走りだした。

神殿の外に出ると、そこにはヘラクレスはなかった。

「ヘラクレスがいない!?!」

「レイヴンが言った通り、ザーフィアスに向かったのだろうか」

「ユ、ユーリ・ローウェル!?! 何故、此処にいる!?!?!」

ユーリたちが話していると、聞き覚えのある声が聞こえ、一斉に声がした方に顔を向けた。

「ルブラン!? それに、デコとボコモか」

「デコと言つなであゝる!」「ボコじゃないのだ!」

「ばかも〜ん! そんな事言っている場合か!」

いつも通りのセリフを言うと、ルブランが踵を返してユーリたちの方を向いた。

「我等がシュヴァーン隊長を見なかったか?」

シュヴァーン、という名前にカロールとリタは顔を伏せてしまう。

「単身、騎士団長閣下と共に行動されたきり、まるで連絡がつかないので。」

どうも最近の団長閣下は何をお考えなのか……親衛隊は何も教えてくれんし。

あちこちあたってみて、やっとヘラクレスの事を聞いて此処まで来たんだが……」

「アレクセイは帝都に向かった。ヘラクレスでな」

「なんと、入れ違いか！？ それでシュヴァーン隊長は……」

「レ……シュヴァーンはボク達を助けてくれたんだ」

カロルは小さな声で答える。

「おお、そうか！ で、今はヘラクレスか？」

「……神殿の中よ。一番奥」

ジユデイが静かに答えるとまた神殿の中から大きな振動が響いてきた。

その揺れにカロルとリタも顔を上げ、神殿に目を向けた。

「……」

揺れが収まると、カロルとリタは再び顔を伏せてしまった。

「え……？」

「ちょ……お……」

「……まさか、おい、そうなのか、そんな!」

ルブラン達は信じられないと言う顔をして固まるが、ルブランだけは口を開いた。

「どういう事なんだ。答えろ、答えんか、ユーリ・ローウェル!」

「アレクセイの所為であたし達死にそうになったのよ! それを助けてくれたのがあんた等のシュヴァーンよ!」

リタはそう言ってまた顔を伏せる。

「アレクセイは帝国にも内緒でなんかヤバイ事をしようとしているらしい。

オレ達はそれを止めに行く。あんた等も騎士の端くれなら頼むから邪魔しないでくれ」

オレはそう告げながら、ルブラン達の横を通り過ぎた

シークはルブラン達の隣に立つと、足を止め、口を開いた。

「今まで騎士をバカにしていたが、お前たちは違うようだ……。お前たちシュヴァーン隊はとても素晴らしいと私は思う」

それだけを言うと、シークは再び足を動かしユーリたちの後を追った。

「……………そんな……………何がどうして……………」

ルブランはそのまま膝を着いてそう呟いた。

第18夜：バクティオン神殿で……（後書き）

投稿に時間がかかってしまい申し訳ありませんでした。

オリジナルを入れるとどうも悩みます。

つてか今回、シークの出番が後半やんか!!

前半はほぼ原作通りになってしまいましたね。

まあ、オリキャラがないとこんなもんです。

この小説ももう少して終わりですね……。

原作が一通り終わったあとはサブストーリーとしてシークのオリジナル小説（短編）を書く予定です。

ヴェスペリアの原作が終わったあとはまた別シリーズを書く予定ですが、何か希望のシリーズがあれば感想の方に書いてください。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

では、次回までゆっくりして行ってね（一度言ってみたかった）

第18・5夜（前書き）

第18夜のオリジナルスキットです。

第18・5夜

【研究したい】

ユーリ

「シークがいつも大事にしていた石が聖核の欠片だったのか」

エステル

「シーク自身はこれが聖核だと知っていたんでしょうか？」

リタ

「……」

ユーリ

「さあな？これが聖核でなかったとしてもシークが大事にすることに変わりはないしな」

エステル

「そうですね」

リタ

「……」

エステル

「リタ、どうしたんですか？さっきから聖核の欠片を見てるようですが？」

リタ

「ユーリ！その聖核の欠片、もっとよく見せて！」

ユーリ

「お、おいつ！」

リタ

「これが魔導器の……。これ、もっとよく調べたいわ」

エステル

「だ、だめですよ！それはシークのです！」

リタ

「別にちよつとくらいいいじゃない」

エステル

「ダメです！シークが死んでいたらお墓に置くんですから！」

リタ

「そんなの勿体なさすぎよ！私が貰ったほづがいいわよ！」

エステル

「ダメです！」

ユーリ

「リタ、それは後にしとけ」

リタ

「今調べたいけど……わかったわよ。

でも、後で絶対に調べるからね。分かった？」

エステル

「ダメですよ！これはシークの形見なんですから！」

カロル

「……」。

まだシークが死んだって決まってるだけ……」

【またよろしく】

ユーリ

「またあんと一緒に行動するなんてな」

シーク

「嫌なのは分かる。一度は刃を向けたのだからな……」

ユーリ

「別に嫌とは言ってねーだろ」

シーク

「口にしなくとも分かる。嫌だと思っている筈だ。今は時間がないから襲うつもりはない。勿論、不意打ちもしない」

ユーリ

「嫌じゃねえって。」

それに、お前が不意打ちするとも思ってたねえよ。お前は約束を破るような奴じゃなさそうだしな」

シーク

「……一応は信用されているらしいな／＼」

ジュデイス

「いいものを見たわ。あなたの照れている顔」

シーク

「!？」

いつからいた？」

ジュデイス

「『またあんと一緒に行動するなんてな』の辺りかしら？」

シーク

「……それは最初からいたということか……。盗み聞きとは失礼に値するぞ」

ジユデイス

「だって聞こえてしまったんですもの」

(シークとジユデイスは先に行ってしまった、ユーリだけが残る)

ユーリ

「シーク、またよろしく頼むぜ」

【照れるシーク】

カロール

「シークってさ、本当に謎だよね」

ユーリ

「どの辺が謎なんだ？」

カロル

「だってさ、貴族を殺したり、デュークと知り合いだったり、始祖の隸長が恩人だっていうしさ」

ユーリ

「まあ、確かに謎なところが多いな」リタ
「全く、何考えてんのか分かんないわね。敵になったり味方になったり」

ユーリ

「後ろからグサツてやられたりしてな」

カロル

「ちょっと、怖いこと言わないでよ！」

リタ

「そんなことされたら倍返ししてやるわ」

シーク

「目的が一致している以上、そんなことはしない」

カロル

「ぎゃっ！」

リタ

「あ、あなた、いつからそこにいたのよ！」

シーク

「さっきだ」

リタ

「いるならいるって言いなさいよ！」

ユーリ

「それよりも、お前は俺たちを後ろから襲うことはしないよな？」

シーク

「少なくとも、今は裏切らない」

リタ

「その言葉、信じて言い訳？」

シーク

「信じる信じないはお前たちの自由だ」

ユーリ

「なら、信じるぜ」

カロール

「僕も」

リタ

「仕方ないわね」シーク

「あ、ありがとう……。感謝する」

ユーリ・カロール・リタ

「……」

シーク

「どうした？」

ユーリ

「いや、あんたから礼を言われるなんてなかったから……」

カロル

「なんか、新鮮だよな」

シーク

「……じ、時間を無駄にしたな。先を急ぐぞ」

(シークが先に行く)

ユーリ

「照れたな」

リタ

「照れてたわね」

カロル

「照れてたね」

第19夜：ヘラクレス探索（前書き）

投稿が遅くなりました。

ヘラクレス内の探索がメインです。

第19夜：ヘラクレス探索

「追いついたぜ！」

バウルに乗ってヘラクレスを追いかけたユーリたち。

ヘラクレスの下には多くの船が群がっていて、激戦を繰り広げていた。

「あの船は騎士団のものか。指揮官はフレンとかいう騎士だろうな」

「あのままだとやられるわよ」

「フレンのことだから正面から行くってことはないと思うが……」

ジュデイスはヘラクレスの上を見て口を動かした。

「行くなら上ね」

「えっ！？もうちょっと考えた方が……」

「しっかり掴まって」

カロルの言葉もむなしく、ジュデイスはバウルに話しかけるとバウ

ルに急に加速し、上からヘラクレスへ急接近した。
フィエルティア号は激しく揺れたが、それはバウルのせいだけでは
なかった。

「砲撃されてるよ！」

「このまま突っ込むのは危険だ！どこか砲撃の少ない場所を狙った
方がいい！」

「あそこ！左後方！砲撃が少ない！」

リタが何かに掴まりながらも左後方を指差して言った。

「行けるか？」

ユーリが尋ねると、ジュディスはバウルに話しかけた。

「『当たり前だ』ってちょっとご機嫌ななめよ」

「そりゃ悪かった」

バウルは砲撃されていない左後方へ向かって行った。

ヘラクレスに降りてみると、左後方から砲撃していた親衛隊が倒れていた。

「だからここだけ弾幕が薄かったのね」「一体何が……誰だ!」

何者かの気配を感じ取ったシークは剣の柄に手をかけ、睨みつけた。

「まったく無計画は連中だな。強行突破しか策がないのか?」

「その通りなのである!」

「ここで会ったが100年目なのだ!」

気配の正体はシュバーン隊のいつもの3人、ルブランとデコボコだった。

「あんなことがあったってのに、アレクセイに見方すんのか?」

「我らは騎士の誇りに従って行動すりのみ!」

「ボクらの邪魔しないでよ!」

「あんたらの顔を見てると思い出したくもない顔を思い出すのよー！」

「そいつは随分とひどい顔なんだろうねえ」

リタの言葉に答えるように聞こえたその声はその場にいる誰でもない声だった。

その声はユーリたちにとっては忘れたくても忘れられない人物の物であった。

デコボコの背後から現れた人物にユーリたちは目を疑った。その人物は誰もが死んだと思いついていたレイヴンだった。

「おっさん……」

「レイヴン様、参上！」

レイヴンは親指を立ててニツと笑う。

そんなレイヴンを見てユーリたちは呆然としていた。

「なになに？感動の再開に胸いっぱい、心がドキドキ？」

「おっさん、何しに来た？」

ユーリはレイヴンを睨みながら言った。

レイヴンは弓を取り出し、矢をリタの背後に向けて放った。矢は起き上がった親衛隊に当たり、矢が当たった親衛隊は再び倒れた。

そして、レイヴンはルブランたちの方を向いた。

「お前ら、ここは任せませ！」

「了解であります！」

ルブランとデコボコは敬礼をしながら返事をする、走っていった。

「という事だからよろしく！」

「何がよろしくよ！信じられるわけないでしょ！」

「自分が何したか忘れたわけじゃねーよな」

「なら、サクッとやっちゃってくれや」

レイヴンは生きること諦めたようで、無防備になった。

「命が惜しかったわけでもないのに、何でかこういうことになった

まった。ここでお前らに殺されるんならそれはそれだ」「アレクセイに刃向かった今、いつ魔導器を止められてもおかしくない。だから、ここで死んでも同じこと、か……」

「とつくに死んだ身なんよ」

「そのとつくに死んだ奴がここに来たのは何だ？ケジメをつけるためだろ」

レイヴンは目を閉じた。

「それじゃ、明星の凜々の掟に従ってケジメをつけさせて貰うぜ」

ユーリは剣を振り上げると、刃を上にしたまま振り下ろし、剣の柄でレイヴンの頬を殴った。

殴られ、レイヴンはよろめき、頬は赤くなった。

「って〜」

「あんたの命、明星の凜々が預かった。生きるも死ぬも俺たち次第だ」

ユーリはそう言うとカロールの方を向いた。

「こんな感じでどうだ？カロール先生」

「バツチリだよ！」

ユーリは剣を鞘に収めると、先に行った。

今度はカロルがレイヴンに近付くと、レイヴンの頭を叩いた。

レイヴンは膝をつく。

「フゲッ」

「とりあえずこれが罰ね」

カロルがユーリと同じ道を先に行くと、今度はジュデイスがレイヴンに寄り、手を差し出した。

「ありがとう、ジュデイスちゃー
へブッ」

と、思いきやレイヴンを殴って行ってしまった。

今度はリタがレイヴンに近づき、腹を殴った。

「グエッ」

「ついでだから、あたしも殴っとくわ」

リタはそう言って、同じ道を歩いて行った。

今度はシークがレイヴンに近づき、手を差し出して膝をついているレイヴンを立たせた。

「私はお前と似たようなことをしたし、それで殴る理由はない」

「シークちゃん……」

だが、と付け足してレイヴンの頬を殴った。

「グハッ」

「私に心配をかせさせた罰だ」

「……一番痛いんだけど」

「手加減はしたつもりだ。」

それより、奴らがいる場所は分かるか？」

「（本当に手加減、したの？）
多分、作戦司令室だと思う」

「そうか……」

早く行くぞ。皆が待っている」

シークはそう言うと、ユーリたちの跡を追った。

レイヴンはシークに殴られた頬をさすりながら、追いかけた。

内部に入ってしまったところに、親衛隊が固く守っている扉を見つけた。

「いかにも重要そうな所だな」

「ここは動力室だな」

「どっすなのさ？」

「どっするって強行突破だろう」

いつも通りのシークの言葉に一同はため息をついた。

「なんでいつもそうなるんだ」

「さすがにあの数が相手じゃ無理でしょ。こんなところでつまんないミスなんてしてらんないわよ」

「……分かった。時間は無駄にしたくない」

強行突破をどうしてもやりたかったのかシークは本当に残念そうだった。

「とにかくこいつの足を一旦止めれたらフレンたちも乗り込めるだろ」

このままでは圧倒的に数で不利だ。フレンたちの協力も必要になるだろう。

「ならば制御室に向かうべきだな。レイヴン、制御室の場所は分かるか？」

「それは分かんないわ」

レイヴンが首を横に振ると、カロルは「探すしかないね」と言った。するとシークは艦内の見回りを一人でしている親衛隊を見つけ、いいことを思いついたようだ。

「いい手がある。少し待っている」

「？」

ユーリたちに待つように言うと、気配を殺して親衛隊に近付いた。そして後ろから親衛隊を抑えたのだ。その行為に遠くから見えていたユーリたちは驚いていた。

シークは抑えた親衛隊にナイフを突きつけて言い始めた。

「制御室の場所を教える」

「だ、誰が言うか……！」

「そうか……。ならば、死ぬより苦しい目にあうがいいのだな」

「……！」

「私は帝国、特に騎士や貴族といった類たぐいが嫌いだからな。1人や2人殺すことには躊躇いはないぞ」

「わ、わかった！言う！言うから命だけは助けてくれ！」

シークは親衛隊から制御室の場所を聞き出すとそのまま親衛隊を気絶させ、ユーリたちの所へと戻った。

ユーリたちはポカーンとしていたが、ジュディスだけは「すごいわ

ね」と言っていた。

「制御室の場所は分かった。早く行くぞ」

シークは先頭を歩いた。

先頭を歩くシークの背中を見ながらカロルは「コワイ……」と小さく
呟いていた。

奥へ奥へと進み、制御室の扉の前へと辿り着いた。

「ここが制御室だな」

「早く行くわよ」

「待ってよ！中に入ったら敵がいっぱいいることがあるかもしれない
よ」

確かにカロルの言うとおり、制御室の中に親衛隊がいてもおかしく

ないだろう。むしろ、いない可能性の方が有り得ないだろう。

「だとしたら、中にいる奴らを倒すまでだ」

シークはそう言って制御室の扉を開けた。

制御室には親衛隊は確かにいた。
しかし、その親衛隊は……。

「どうなってんだ？」

「全員、やられてる……」

「待ってたぜえ。ユーリ！」

突然の第三者の声。

もう何度目の登場になるだろうか。
ザキがそこに立っていた。

「あなたが親衛隊を倒したのね」

「戦いの邪魔だったからなあ」

「お前に用はねえ！ エステルとアレクセイはどこにいる！」

「知らねえなあ。最初からそんな奴はいなかったぜえ」

「なんですって!?!」

「困か…。やられた…」

シークは舌を鳴らした。

「ヘラクレスに俺たちや騎士団を引きつけて自分はトンスラか…」

「くっ!アレクセイの奴!」

「どこまでもムカつく奴ね!」

「おいおいおいおい。そうじゃねえだろ。喋ってる暇なんかねえだろ」

「お前にかまつてる暇なんかねえって言っただろ!邪魔するんなら容赦しねえ!」

「そうだ、もっと怒れ!憎め!それこそが最高のスパイス!ハーツハツハツハツハ!」

ザキの高笑いが響く。

「こいつ、怒らせるためだけに來てるの?」

「だとしたら救いようのない人ね」

みんなはそれぞれの武器を手にした。

「さあ！逝こうぜえ！」

「一人で逝きやがれ！蒼破追連！」

ユーリの先制攻撃は見事にザキに命中したが、ザキはひるむことなく、ユーリに向かっていった。

「ユーリイ！まだだ！まだぬるいぜえ！」

「ユーリ、危ない！崩襲サンダー！」

「時雨の音！」

カロールとレイヴンの同時攻撃にザキは怯んだ。

ザキが怯んだ隙を逃さず、一斉に攻撃を仕掛けた。

まず最初に素早いラピードが紅蓮犬をザキに喰らわせた。

「月光！」

「刹那！」

「クリムゾンフレア！」

「爪龍連牙斬！」

ザキは一気に攻撃を喰らい、倒れた。

しかし、瀕死の状態の筈なのにザキはまた立ち上がった。

「ユーリ！お前は最高だ！」

「いい加減、しつこいんだよ！」

ユーリは向かってきたザキを強い攻撃を喰らわせた。

その攻撃の反動でザキは吹っ飛び、展望窓のガラスを割ってヘラクレスから落ちていった。

これで邪魔な奴は片付けた。

「リタ！」

「分かってる！」

リタは素早く操作板に移動し、機械をいじり始めた。

「これでおしまい！」

リタがボタンを押し終わると、ヘラクレスの動きは止まった。

これでフレンたちはヘラクレスに乗り込むことが出来るだろう。

「さすが天才魔導少女」

「これでヘラクレスはフレンたちが抑えてくれるだろ」

「エステル……どこにつれて行かれちゃったんだろう」

操作板の所に立っていたリタが背中ごしに呟き、今度はユーリたちの方を向いて言った。

「アレクセイはエステルを道具としか思ってない！このままエステルの力を使い続けたら……星喰みが引き起こされるかもしれない！」

「させないぞ」

その言葉に一同はユーリに注目した。

「その為に俺たちがいるんだろ」

ユーリの自信に満ち溢れた言葉にカロルとリタは頷いた。

「その自信はどこからくるんだ？」

「シークは自信ないのか？」

「ないとは言っていないだろう」

シークは微かに笑って言い返した。

「アレクセイがエステリゼの力を引き起こしているなら、バウルで追えるのではないか？」

シークはそう言ってジュデイスを見ると、ジュデイスは頷いた。

「エステルを使い続けているならバウルでエアルの乱れを追えるはずよ」

ヘラクレスはフレン率いる騎士団に任せ、アレクセイを追うことにし、制御室に背を向けたときだった。

展望窓から強い光が一行を襲ったのだ。

カロール、リタ、ラピードは吹っ飛び、壁に激突。

ユーリ、ジュデイス、レイヴン、シークもダメージを受けて膝をついた。

「ひゃっはあ！ユウウウリイイ！まだ終わっちゃいねえぜえ！」

展望窓から落ちたと思われたザキがそこに立っていた。
先ほどの攻撃はどうやらザキの仕業らしい。

「制御板が！」

攻撃が当たったのはユーリたちだけではなく、制御板にも当たっていた。

制御板からは煙が出ている。

ヘラクレスは大きく揺れ、動き出した。

「ユーリ！のぼりつめようぜええ！」

「やべえ！体が……！」

「やっといい声で鳴いたなあ……いつちまいな！」

「くっ……！」

シークはなんとか立ち上がろうとするが、身体が重く、言うことをきかなかった。

ザキはユーリに襲いかかった。

ザキの攻撃をなんとか剣で防いだユーリだが、今はそれで精一杯だった。

ユーリが足を一步下げた時だった。
ユーリの左右からゴーシュとドロワットが現れ、ザキに攻撃した。
攻撃を喰らったザキは展望窓から再び落ちていった。

「ビュリホウなシャウトですね」

イエガーまでもが姿を現した。

ゴーシュとドロワットはユーリたちを回復する。

立ち上がったユーリはイエガーを睨みつける。

「どっついつつもりだ？」

「ミーのビジネスで帝国ばかりがパワフルになるのは都合がバットバットなのデース」

「アレクセイはザーフィアスにいる」

「帝都ザーフィアスの御剣の階梯に秘密があるのだわん」

ゴーシュとドロワットが交互に言う。

「宙の戒典がキーとしてニードだった筈なのに、ユーたちのプリン

セスで代用しようとしています」

「なんですって!?!」

イエガーの言葉を聞いて、リタは唇を噛み締めた。

そう話している間もヘラクレスは速度を上げている。
しかも行き先はザーフィアスだ。

「話し込んでいる暇はないみたいだな」

「こりやまずいな。このままだと、下町はペシャンコだ」

制御板は見た限り、完全に壊れていて操作するのはリタでも無理そうだった。

実際にリタ自身、お手上げ状態だった。

「となると、動力を潰すしかないな」

ヘラクレスを止める方法はそれしかなかった。

「それじゃ頑張ってください。シーユ」

イエガーはゴーシュとドロワットを連れて、踵を翻した。

「あ、待て！」

カロルが声をあげたが、すでにイエガーたちの姿はなかった。

「イエガーム、奴の狙いはなんなんだ？」

敵かと思われたが、今回は助けたり……イエガーの行動には意味不明な点が多かった。だが、今はイエガーにかまっている暇はない。

「イエガーのことより、今は動力室に急ぐべきだ」

シークは誰よりも早く制御室を出て、動力室へ向かった。その跡をラピード、リタ、ジュデイス、ユーリの順で追う。

「イエガー、次は逃がさない……」

カロルはそう唸るように呟いてから跡を追った。

残ったレイヴンはカロルが立っていた場所を眺めながら、

「いくら凛々の明星の首領でもイェガーだけは譲るわけにはいかないのよ」

と言ってから跡を追う。

動力室のすぐ近くに来た一行。

しかし、動力室の前はなにやら騒がしい。

親衛隊の他にごく僅かだがフレン隊もいた。

フレン隊を率いているのはソディアだった。

「あなた方は騙されている！アレクセイは私利私欲の為に騎士団を動かす……」

「何を言うか！」

「騎士団長は騎士の誇り！騎士団長に背くフレンこそ裏切り者だ！」

ソディアの説得も虚しく、親衛隊はアレクセイを信じて疑わなかった。

説得が無駄に終わった瞬間、シークとユーリが飛び出し、親衛隊を一掃する。「貴様は……！」
助けを呼んだ覚えはない！」

「たく、素直に礼も言えねーのか？帝国騎士様は」

ソディアは剣の柄に手をかけると、ユーリを睨みつける。

「貴様に！貴様などに死んでも礼などしない！このまま貴様を逃がすと思うか？」

「たくっ！何度も言わせんなよ。お前にかまってる暇はねえ！」

「親衛隊といい、お前といい、騎士とは愚か者が多いみたいだな。今すべきことは罪人を捕らえることなのか？」

シークは呆れたように言った。

「僕たちにはすることがあるんだから！」

「すべきことはエステリーゼ様の救出か？」

「そつだよ！だから邪魔しないでよ！」

カロルが言ってもソディアは剣の柄に手をかけたままだった。

「無益な戦いは止めにしようや」

間延びした声でレイヴンが言った。

その声でソディアはレイヴンの存在に気付いたようで、レイヴンを見るなり驚いていた。

「シュバーン隊長……！」

「俺様はレイヴン。覚えておいてね」

レイヴンに言われたからか、ソディアは渋々と剣の柄から手を引いた。

「ユーリ・ローウエル。私は貴様を認めない。貴様のような罪人に隊長の隣は似合わない」

「だからどうするってんだ？」

「すべきことを終えたら必ず貴様を処罰する」

ソディアはユーリにそう言うと、フレン隊騎士が1人ソディアに近づき、何かを伝えにきた。

ソディアは伝言を聞き終わると、フレン隊を率いて行ってしまった。

「ようやく邪魔者が消えたか…。無駄な時間を過ごしたな」

シークはまたも誰よりも早く行動し、動力室へと入って行った。

「これは……！」

「魔導器の暴走!?!」

動力室に入っただけで目に入ったのは暴走している魔導器だった。制御板が壊れたせいで魔導器が暴走したのだろう。

「とんでもないことになってるみたいだな」

「どっすんのよ、これ!」

ジュデイスは槍を手にした。

「待って！」

「待てる状況じゃないと思うけど」

「わかってる。あれを見て」

リタが指差した先には、動力が各施設に送るエネルギーの中でも特に量が多いエネルギーがあった。

「エアルがもの凄い勢いで送られてる。こんなデカ物のとんでもないパワーがいく先は……」

「主砲か！」

「こんな状態で壊せば暴発……。もしくは主砲をぶっ放しちゅって、ザーフィアスは吹っ飛んじゃうわ！」

「ど、どうしよう……」

「何にせよ、エアルの暴走を止めないと……」

シークはユーリが持っている宙の戒典を見た。

「ユーリ、宙の戒典を使え。デューク様がそれで各地のエアルの暴走を鎮めていたようにこの暴走も鎮めるんだ」

ユーリは頷いた。

赤くなっているエアルの中心には聖核がある。

「あの聖核を壊せ」

「でも聖核って始祖の隸長の魂みたいなものなんでしょ？」

シークが言うこととは逆にカロルは聖核を壊すことに抵抗があった。

「じゃあないわな。このままいけば帝都はぺしゃんこ。暴発するかもしれないし」

「それに、始祖の隸長はこんなことは望んでいない」

シークは寂しそうに聖核を見て呟いた。

「迷ってらんねえ!」

ユーリは宙の戒典を掲げ、念じた。

宙の戒典はエアルを散らし、切っ先は聖核を貫いた。

『ありがとう……』

聖核が砕けた瞬間、ありがとう、という声が聞こえた。

「え……？」

「収まった？」

赤いエアルは消え、エアルは鎮まり、暴走は止まった。
しかし、まだ油断はできなかつた。

「主砲はどうなった？」

「ダメ！このままじゃ発射される！」

「他に方法は……！何だ！？」

シークが「他に方法はないのか？」と言おうとしたとき、突然ヘラクレスが大きく揺れた。

「なんだ！？」

窓から外を見ると、ヘラクレスの横から騎士団の船が何度もヘラクレスに体当たりしていた。

その指示は間違いなくフレンだろう。

「どうやら無理矢理、主砲する方向を変えようとしているみたいだな」

船に何度も体当たりされ、ヘラクレスは僅かに傾いた。

そしてついに主砲は発射された。

主砲は大きな光の柱を出現させ、帝都の左を突き抜けた。

発射された先には街がなく、人が死ぬようなことにはならなかった。

「凄いのね、あなたの友達」

「ハハ……まっただ。無茶ばかりしやがる」

これでとりあえず安心できた。

ユーリは安堵の息を吐いた。

「ねえ、聖核を切ったとき、声が聞こえたよね？」

「ああ。聖核に宿っていた始祖の隸長の声だったかもねえ」

「聖核に宿っていた始祖の隸長の意志がエアルの暴走を止めたようだったわ」

ひとまずは始祖の隸長に感謝だが、ここに来てから目的は何一つ解決していなかった。

「ここに用はねえ。ザーフィアスにエステルを助けに行くぞ」

「囿に引つかかって随分と時間を使っちゃったからねえ」

「今、バウルを呼ぶわ」

みんなはエステルを助ける為、急いで動力室を出た。

しかし、ただ1人リタだけは他より遅れて動力室に残っていた。

「意志がエアルの暴走を止める……リゾマータの公式とエステル…

…」

何か呟いていたが、頭を左右に振り、急いでみんなの跡を追った。

ヘラクレスはフレン率いる騎士団に任せ、ユーリたちはバウルに乗ってザーフィアスに向かっていった。

「見えた！帝都だ！……あれ？」

すぐに帝都の異変に気付いた。

「結界がない……」

結界がなければ魔物の侵入を許してしまう。
どこから魔物が侵入するかというと当然、下からなので下町が一番危険である。

1020

「アレクセイの仕業か……。一体、何が目的なんだ？」

「このまま行くわよ」

「ああ、頼む」

「エルテル……どこにいるの？」

「こんな大きい街、どうやって捜そう？」

「エアルの乱れを追うわ」

アレクセイがエステルと聖核を使っているなら、エアルは激しく乱れているはずである。
ジユデイスがバウルにエアルの乱れを追うように伝えるとバウルは応えるように声をあげた。

「見つけた！」

アレクセイは帝都の一番高いバルコニーのような場所にいた。
アレクセイと隣にはぐったりとしているエステルもいる。バクティオンで見たとときと同様、エステルは球に捕らわれていて、周りには術式と聖核が浮かび上がっていた。

「近付けてくれ」

アレクセイの手にしていた聖核が光だすと今までぐったりとしていたエステルが跳ねた。
力を無理やり使わされ、苦しそうにエステルの悲鳴が響いた。

「エステル！」

ユーリはフィエルティア号の先に立ち、叫んだ。

アレクセイは楽しそうに一行が向かってくるのを眺めていた。
エステルの力のせいなのか、空が赤く濁っている。

「いや！力が抑えられない……怖い……！」

「弱気になるな！今助けてやる！」

ユーリは思い切って船から飛び出し、エステルに手を差し伸べる。エステルも球の中からユーリに手を差し伸べた。

瞬間、エステルの力が強く発動し、ユーリは吹き飛ばされ、互いの手は届くことはなかった。

吹き飛ばされたユーリの手をシークは掴み、なんとかユーリは落ちることはなかった。

せつかくの助けの手を自らの力で吹き飛ばしてしまい、エステルは絶望し、大粒の涙を流した。

「誰かを傷つける前に……お願い……」

“ 殺して…… ”

エステルの口から静かにその言葉は語られた。

「いやああああ！」

エステルの意志を無視し、力は強く発動する。
その力はバウルすらも吹き飛ばしてしまった。

「エステルー！」

第19夜：ヘラクレス探索（後書き）

投稿が遅くなつてすみません。

どんなに投稿が遅くても疾走だけは多分しません。

テイルズは大好きなので疾走はしたくないです。

最近、グレイセスにまたはまりました。

私はグレイセスfを持っていないので、早くfがやりたいですね。

あと、アビスが3DSに出ますね。

シンフォニアもリメイクして出ないかなあ…。

今回は語ることが思いつかないので、私の好きなキャラを教えますね。

男性キャラではジェイドとロイドとアスベルが好きです。

ロイドやアスベルみたいな真っ直ぐなキャラは大好きですね。

ジェイドは最初はそうでもなかったんですけど、物語の途中でルークを叱るシーンを見て好きになりました。あと、ディストいびりをしているジェイドも好きですね。

女性キャラではコレットとソフィが大好きです。

二人とも可愛いですよ。

コレットは一生懸命なところも大好きですし、ソフィはみんなを一生懸命に守ろうとしていたシーンを見てすごく好きになりました。

皆さんは誰が好きですか？

それでは、ここまで読んでいただきありがとうございます！

第20夜：仲間と信じる心（前書き）

カロル

「あれ？今回はスキットないの？」

シーク

「作者からのメッセージがある」

ユーリ

「メッセージ？」

シーク

「『次の話を考える時間がほしいから今回はなしの方向で！スキットはまとめてやります！』だそうだ」

ユーリ

「作者の勝手な都合だな」

カロル

「棒読みでその文章を読まれるとなんか、面白いね……。しかもそれを読んでるのがシークってのがさらに面白い……」

シーク

「そうか？」

今回は本当に勝手なことをして申し訳ありませんorz……

ゾフェル氷刃海くクオイの森

第20夜：仲間と信じる心

「ん……生きてる……」

ユーリは目を覚まし、体を起こした。

ユーリは見回し、みんなの安否を確認した。

まずリタとカロルが倒れたまま動かない。

比較的無事なのは、座り込んでいるジユディスとレイヴン、そしてラピードだろう……あくまで比較的だが。

「シークはどこだ？」

シークの姿だけはなかった。

吹き飛ばされたときに、はぐれたのだろうか？

「っ！ってえ……」

ユーリは立ち上がったが、それだけで体のあちこちが痛んだ。

船ごと吹き飛ばされ叩き付けられたのだから、打撲を中心に何かあってもおかしくはない。

「無理に動かないほうがいいぞ」

「シーク！動いて大丈夫なのか？」

道を歩いて、ユーリたちのところにやってきたシーク。
シークも相当にダメージを負っているように見えたが、とりあえず
生きているようだ。

「動いて大丈夫とは言い難いが……。お前たちは大丈夫なのか？死
んではないだろうか？」

「私はなんとか……」

ジユデイスはあっさり立ち上がった。
細い声を上げたラピードも立てる。

「生きてるっちゃ生きてるけど、無事かと言われると微妙よ」

骨が何本かいつちゃった、と言うレイヴンが俯いたまま言う。

「ユーリ……痛いよ……」

俯せに倒れたままのカロルが声を出す。
リタの方は体を起こそうとするが、体が痛んでうまくいかなかった。

「エステルのあれ…宙の戒典と似てた…多分、幾つも聖核集めて
同じ事やること…」

「無理にしゃべるな」

リタの言葉を遮ったユーリが再び仲間達を見回す。

「すぐ医者見付けてやっからな。ちょっとだけ辛抱してくれ」
ジユデイスが横たわっているパウルを見上げた。

「有り難とう。よく頑張ってくれたわね」

「パウルの怪我…しばらくは運んで貰うのは無理だな」

フィエルティア号が無事なのが奇跡に近い。

「ええ、傷が癒えるまで、どこかで休んで貰うわ」

「無理させちまったな。ゆっくり休んでくれ」

パウルは短く鳴いて重そうな体を起こし、ゆっくりと飛んだ。
あまり遠くには行けないだろうが、人目につかない所で休んで貰う
べきだ。

「エステルは……」

「そうよ……！急がないと」

カロールとリタが声を出す、ユーリはあっさりと

「エステルの心配より、自分の心配しろ」

「エステリーゼを助けるにも、この重傷ではどうしようもない。場所を確認してきたが、近くにカプワ・ノールがる。そこで、体を休めた方がいい」

「ああ」

ともかく街で体勢を立て直さなければどうにもならない。

「いやな空だね。エアルが雲みたく渦巻いてやがる」

レイヴンがため息を吐いた。

「……………災厄、か……」

リタは上半身だけ起こして俯き、ジュディスが手を貸した。カロールにはユーリが手を貸した。

珍しく雨が降っていない港町は人が多かった。

「大変な騒ぎね。無理もないけれど」

「帝都の方も大騒ぎだろうな」

恐らくはこの街もそうだろう。

「あんたらどうつから来たんだ？何か聞いたりしてないか？」

街の外から来た一行に、男性がそう問い掛けて来る。

「いや、俺達は…」

「あなたたち、どうしてここに」

以前にこの街で会ってから何かと縁があるティグルが走り寄って来た。

「酷い有り様じゃないか！何があっただ？」

「あんたか。ちょっと色々あってな。いい医者を知らないか？」

「ああ、知らない事はないが……」

どうしたんだろうとは思うものの、恩人一行の頼みだ。

「んじゃ悪いけども、宿屋まで連れて来てくれない？」

「分かった、待っていてくれ」

ティグルはすぐに来た道を走って行った。

ユーリたちは重たい体を再び動かして、宿屋に向かう。

宿で部屋をとり、体を休めているとティグルが医者を連れてきた。
全員命に別条はないようだ。

「助かったよ。ヘリオードから戻って来てたんだな」
ティグルと一緒に奥さんのケラスと息子のポリーも来ている。

「はい、あの時はお世話になりました」

ケラスが頭を下げる。

「ノールも執政官が代わったお陰で前よりは随分と暮らしやすくな
ったと思っていたのに。今度はあの空だ」

「それでね、ちょっと前にね。どーんってすごい音がしてぐらぐら
ーってなっただよ」

ポリーが子供なりに説明してくれる…ある意味分かり易いかもしれ
ない。

「今、役人の人達が様子を見に行っているところなんです」

「ねえねえ、あの時のお姉ちゃんは？いないの？」

“いないお姉ちゃん”……それは当然、エステルのことだろう。

「……ある馬鹿野郎がさあ、悪い奴に渡しちまってね。それで今、追い掛けてんのよ」

視線を逸らしたレイヴンが言う。

「……………」

「そうか…悪い事聞いたみたいだな」

ティグルはそう言って、それ以上は追求しなかった。

「ごめんなさいね。今日はちょっとお休みなの」

ジュデイスがポリーに優しく微笑みかける。

「そうなんだ……………」

ベッドで横向きに寝ていたリタが上半身を起こす。

「大丈夫よ、今度また来る時はちゃんと一緒にいるから」

「本当！？よかった！」

「リタ、体を無理に動かすな。

命に別条がないとはいえ、お前とカロルが一番の重傷だ。休んでいろ」

ベッドはリタとカロルで使っているため、シークは床に座って体を休めていた。

ベッドではカロルがとくに眠っており、リタも眠たそうにしている。

ティグル一家が帰ると、リタも眠ってしまったらしい。

「様子見て来る」

ユーリはそう言って、部屋を出て行った。

「私も少し眠る」

「分かったわ」

シークはジュディスにそう告げると、目を閉じて眠った。

「……」

しばらくしてシークはゆっくりと静かに目を覚ました。

「もう少し眠っていたら？」

ジュディスがそう言うと、シークは立ち上がり体を軽く動かした。

「いや、もう大丈夫だ。状況が状況だからな安眠はできない」

シークが目覚めたときには、すでにユーリは外から帰ってきていた。リタとカロールも目覚めている。

「体を動かせるなら帝都に向かうか？」

「いや、帝都には行けない」

「行けない？」

ユーリが言うにはヘラクレスの主砲が直撃して通れなくなっているのだ。

「ヘラクレスの主砲で……。復興はいつになるか分からないな」

「また大変な所に当たったもんだわね」

「街ではなかったのが救いね」

「他に道はないのか？」

どんな状況であるにせよ、手を拱いている訳にはいかない…一行は何としても帝都に向かわなければならぬ。
丘が通れないのならば、他の道を行くしかない。

「流水の上を歩くんだと」

ユーリが聞いて来た方法とは、エフミドの丘を回り道する遠回りになる道でゾフェル氷刃海を通る道だった。
なんと流れ着いた氷が橋になっているかもしれないというまた怖い話だった。

運が悪ければ道が通じていない事すらある。

「流水の上…って聞くだけで寒いわ…」

あまり進んで使いたい道ではないのだが、道を選ぶ時間はない。

「行くならば準備をしなければならぬな」

エステルを助ける前に氷漬けになるわけにはいかない。

一行はしっかりと準備をしてからゾフェル氷刃海に行くことにした。

「おっさん、ウザイ」

はっきりと境目が分かる訳ではないが、そろそろ氷の上に入ろうという場所だ。

ブーツの裏から刺すような寒さが身に染みる。

「年寄りには体温高くないのよ。あー砂漠の暑さが懐かしいわ」

「……」

「シークはここに来てから静かだけど、どうしたの？」

ゾフェル氷刃海に来てから一言も喋っていないシークを不思議に思ったカロールが話しかけた。

シークはゆっくりとカロールの方を振り向くと、口を動かし答えた。

「腕と足が少し寒い……」

「シークの服、足と腕出てるもんね……」

「それでも少しなのね」

「ジュデイスはなぜあんな格好で元気なんだ？」

ラピードがいきなり唸った。

「なにどうしたのよ…って、はやあー！」

その理由はすぐに分かった。

「おわー！」

巨大な魚…のようなものが分厚い氷の下を泳いで行ったのだ。

「なに今の！？」

「大きい…まさか始祖の隸長！？」

ジユデイスは目を閉じ、神経を研ぎ済ませた。

「………違うわね。知性が感じられないもの」

「ってことは魔物でしょ！？襲ってこられたら大変だよ」

まさかあんなに大きい魚はそうは…というよりは魔物ではなければ
進んで人間に近付いては来ないだろう。

「ほっときや襲って来ないだろ。相手にすんなって」

ユーリが気軽にそう言う。

「いつまでもここにいるのは危険だな。早く行くぞ」

ここにいつまでもいれば体の体温もどんどん奪われて危険だし、先ほども魔物もいつ襲ってくるかわからない。

シークは分厚い氷の上を歩き始めた。

シークに続いて他のみんなも足を進めた。

氷の上をしばらく進んでいくと、今までのような剣ではなく大きな水晶が目立つように氷の上に突き刺さっていた。

先頭を歩いていたシークはそれには全く興味がないように、素通りしたが他のメンバーは興味があるようで水晶の前で足を止めた。みんなが足を止めたことに気付いたシークはみんなから離れた場所で足を止め、水晶に目を向けた。

「おろ、なんだこりゃ」

「エアルクレーネじゃない！」

リタが声を上げる。

「こんなところにもあったんだな」

「でもエアルが出てないわね。涸れた跡なのかしら」

「その割にこの辺は荒廃していないみたいだけど」

思わぬ発見物に足を止め観察してしまう。
そう長い間ではなかったのだが、気配はすぐにやって来た。

「うわ、ま、また出た！」

巨大な影が足元近くを泳いで素早くやって来た。

「大丈夫っしょ。ここ岩の上よ」

足場を調べたレイヴンが気楽にそう言うが、魔物は大きなヒレで海面を叩いて飛び上がった。

そうして全身を眺めると想像していたよりずっと大きな魔物で…魚のような形だが翼のような体より大きなヒレが伸びた洗練された体つきをしており、水空両用らしい。

薄いヒレをたゆたわせて泳ぐように飛んでいる。

濃い緑色が足元から湧き上がり、その場にいる誰しもの意識そのものが揺れる…それ程のエアルだ。

一瞬にして膝を着いた…あるいは倒れ込む前に、ユーリが向かって左に…たまたま近くにいたカロールを思い切り突き飛ばした。

「うわっ、ユーリ!？」

ユーリに突き飛ばされたカロールを、水晶から距離がある場所に立っていたおかげで被害に会わなかったシークがカロールを受け止めた。それを目で確認する事なく、ユーリは両膝と両手をついてしまう。

「くっ…！」

リタは抗う体力も乏しく肩を氷の上に押し付けていた。

「…まさか、エアルクレーネを狩りに使う魔物がいるなんて」

レイヴンとジユディスも動けず、ラピードは腹を氷に押し付け平たくなっている。

エアルは吹き出し続け、そこに捕らわれている限りは全く動けない。

魔物はカロルを見ると、カロルに尻尾で攻撃してきた。

「危ない！」

シークは咄嗟にカロルの前に立ち、カロルに代わり魔物の攻撃を受け、氷の壁に激突してしまった。

意識はなんとか保てたものの、壁に強く激突した衝撃ですぐに立ち上がることはできなかった。

「カロル、シーク、逃げろ！」

「カロル、逃げろ！」

ユーリが怒鳴るが、カロルはそれをしない。

「そ、そんな！みんな食べられちゃうよ！」

魔物はヒレを揺らし、獲物となった一行を見ている。

「一人で勝てる相手じゃねえだろうが！」

「でも……………ヒッ！」

魔物はいつまでも逃げないカロルを追い払うように近付いた。

「カロル！！！」

カロルは長いヒレの先を頭を抱えるようにして避けるが、その場からは殆ど動かない。

尾鰭を見送ったカロルが愛用の武器を振り上げた。

「今やらなくていつやるんだあ！！！」

叫んだカロルが巨大な魔物に向かって氷の上を走る。

だが、1対1では結果は見えている。

「やああ!!」

カロルが武器を振り上げるが、魔物はカロルを尻尾で軽くあしらう。カロルは魔物の攻撃に当たってしまったが、かろうじて攻撃を避け大きなダメージにはならなかった。

そのおかげもあって、自分の持っていた武器は手放してしまったが受け身を取り、氷の上にうまく着地した。

そして、自分の近くに突き刺さっていた剣を氷から抜くとその剣を再び構えた。

「逃げるもんか…!みんなを守るんだ…!!」

そう気合いを入れるカロルの足元から尖った氷が伸び、幼い肌を傷付けた。

このままではなぶり殺しもいい所だ。

「カロル!もう無茶は止めなさい!」

「見てられねえ、頼むから逃げろ!」

ジュディスとユーリが耐えきれず口を出すが、やはりカロルは逃げ

ない。

その足は見て分かる程に震えていた。

「だ、大丈夫だから…」

「大丈夫な訳ないじゃない！」

リタが涙声で怒鳴る。

カロルは上空を旋回する魔物を見上げていた。

「くそっ！こついう時に私は役に立てないのか！？」

自分の持っている剣で立とうとするシークだが、立ち上がるのはまだ困難だった。

「大丈夫なんだよ。だって、みんながいるもん」

「カロル…お前…」

「ボクの後ろにはみんながいるからボクがどんだけやられても、ボクに負けはないんだ」

そうカロルは言うが、実際にはカロルはここままでは殺されてしまうし、そうなればエアルクレーネに引つ掛かった一行は魔物の腹の

中だ。

「動けよ、くそ！このままじゃガキンちよが…」

膝を着いたままのレイヴンが唇を噛むが、それで動けるようになりはしない。

「わあああああつ！」

カロルの強力な1撃が魔物に直撃した。
その1撃が直撃したおかげでエアルが治まり、ユーリたちは動けるようになった。

魔物はカロルに反撃するように、攻撃をし返した。
しかし、その攻撃はユーリによって阻まれてしまった。

「ユーリ！」

「待たせたな、カロル」

リタは魔術で魔物を攻撃し、隙ができた魔物にラピード、レイヴン、ジュデイスが攻撃する。

「『ファーストエイド』」

一人で戦っていたときのカロルのダメージをいつの間にか立ちあがったシークが回復させた。

「シーク！」

「もう大丈夫なのか？」

ユーリがシークの方を向いて尋ねると、シークは苦笑いをして口を動かした。

「カロルがあんなに頑張っているのに、いつまでも寝ているわけにはいかないだろう」

「一気にたたみかけるぞ！」

ユーリのその一言で、みんなは一斉に魔物に攻撃を始めた。

はじめにリタが魔術で強力な一撃を喰らわせる。

「『クリムゾンフレア』」

リタの強力な一撃でひるんだ魔物に他のみんなが一斉攻撃をする。

「尚、散るように」

「月破紫電脚」

「円閃襲落」

「紅蓮襲撃」

そして、とどめの一撃をカロルが喰らわせる。

「撃槌フロウアッパー」

カロルのとどめの一撃で魔物は冷たい水の中に落ちて行った。

「ひとりであんな無茶してバカ……」

リタがさっそく小言を言おうとするが、遮られてしまう。

理由は、いきなりカロルが倒れたからだ。

「カロル!？」

仰向けに大の字になったカロルを、ユーリが抱き起こす。

「カロール！おい、カロール！」

「しっかりしろガキンちょ！」

シークが近づき、カロールの様子を確認する。

「気絶してるだから問題ないだ。安心して一気に気が緩んだんだろうな」

「まったく…エステル助けに行くのにあんたが先にやられちゃったらどうすんのよ」

少し顔が赤いリタがぶつぶつと言う。

レイヴンが軽く笑う。

「ま、そう言いなさんな。男にゃ勝負時つてのがあるのよ。お陰で助かったわ」

「ああ、カロールがいなかったら俺達今頃あいつの胃の中だ」

「ワン！」

「まったく無茶をするものだ」

「そういうお前もカロルをかばってケガしただろ。本当に大丈夫なのか？」

魔物の攻撃からカロルをかばったことで、シークにもダメージはある。

もちろん無事とは言い難いだろう。

「大丈夫だ。ダメージがまったくないとは言い難いが歩けないほどではない」

「さ、早くここを抜けましょ。弱ってるカロルには辛い筈よ」

元気ではないが、無事ではないとも断言できない程度ではないカロルはどことなく満足そうにしている。

「ええ」

「ありがとな、首領」

「格好良かったわ」

今までのヘタレ弱虫少年のへっぴり腰ではできないだろう活躍だった。

カロルの満足そうな顔は、仲間を守り切れた事からくるものだろう。格好良かった、一言で言えばそうだ。

気絶したカロルはレイヴンがおぶり、一行は再び氷の上を歩き始めた。

「ふひっ、出口っばいかあ？」

そつわざとらしくレイヴンが言うと、リタが呆れた顔をした。

「なによ、もう疲れたの？」

「背中に子供がいて暖かいんじゃないんですか？」

「年寄りには体力がないのよ…。ジユデイスちゃん、代わって〜」

レイヴンの甘ったれた超えに、背中のカロールが僅かに反応した。

「あら、あなたの仕事を奪うつもりはないわ」

ジユデイスがあっさりそう断ると、カロールがまた反応した。ちよつとがっかり、したように見える。

「カロール……起きてるな」

「お、起きてない!」

そう返事をしてしまう少年はなんとも可愛らしいのだが、レイヴンがカロールの足を支える両腕をパツと広げた。

「あいた!」

雪の上に落とされたカロールが短い悲鳴を上げる。

「この寒い中おっさんに労働させるとは。カロール君、君もなかなかやるではないか」

「仲間を守ってみろ、そうすれば応えてくれる。………だったか」

「うん、あれってこういう事だったのかなって」

カロルは無事に一緒にいる仲間達を見回して呟くように言う。

「それがお前の見つけた答えって事か。ならきつと正解だよ」

「そうだといいな」

リタは振り返って来た道……つまりは氷の海を見ていた。

「この氷ってエアルから生まれたのかもしれないって……」

「氷が？」

「あらゆるものがエアルからできているなら、当然ね」

それまで黙って話を聞いていたジユデイスが微笑んで言う。

恐らく話を全く聞いていなかったのだろうリタは、ずっと考え込んでいたらしい。

「このエアルクレーネはある意味凄く安定してた。魔物が操れる程にね。……もしかしたら大量に物質化できたらエアルは安定する

のかも」

「それって、エアルの乱れを解消できるかもしれないって事か？」

「分からない。その為にはもっと効率が必要だろうし量だって…」

リタのぶつぶつは半ば独り言だ。

「このエアルクレーネ調査したいのか？」

「ううん、今はそんなことしてる時間はないわ」

今はエステルを助ける事が第一だと、リタはきっぱりと断って顔を上げた。

「ああ、時間食っちゃったしな」

氷の上は無事に抜けられそうだが、エアルクレーネとそれを利用した魔物のせいで時間はかかった。

「エステル…無事でいて…」

祈るように言うリタはエアルクレーネに何の未練もなく進行方向に

足を向けた。

もうすぐ足元は氷ではなく地面になるだろう。

とにかく着々と、陸に向かう。

氷の上では安心して休む事もできない。

散る雪も減ってきた。

「一度、ハルルで休んだ方がいいな。寒さで体温も奪われたし、魔物とのダメージもまだ残っている」

シークの提案に一同は賛成し、一行はハルルへと足を進めた。

ハルルに着くころには完全に日は落ちていたが、無事にハルルにつくことができた。

街の様子は以前とは大きく変わっていた。

「……えらくごった返してんな」

そう大きな街ではなく、賑やかではあったが人が多いという街ではなかった。

それが文字通り人がごった返している。

「帝都から逃げてきた連中よ。綺麗な身なりしてんでしょ？」

「……！」

レイヴンが放った言葉を聞いてシークは突然、顔を青ざめた。

しかし、シークはみんなにはその顔を見せまいといつもどりの表情に戻す。

「今のところ、こここの結界は異常なさそう」

リタが結界を見上げて呟く。

そういう意味では安心できる。

「…………はあ…………」

街に入った順のまま、一行最後尾にいたカロルがその場に膝を着く。顔が赤く、呼吸が荒々しい。

「カロル、大丈夫？」

「大丈夫じゃないみたいね」

レイヴンがカロルを抱き起こしてやり、ジュディスがその顔を覗き込んだ。

「すごい熱。無理してたのね」

おそらく疲労が蓄積して熱が出たのだろう。

「あんな無茶するからよ。ったく……」

「早く宿に行つた方がよさそうだな」

カロルを早く休ませてやるべき、という事で、一行は以前にも利用

した事がある宿へ向かった。
既に少々遅い時間ではあったが、宿の主人らしい男性は快く出迎えてくれた。

「いらつしやい！お代は結構でさ」

「はえ？なんで？」

「いやそれがね。今、長の家に国のお偉いさんが来てんだけど、そのお達しでさ。金は国が払うから、誰でもタダで泊めてやれって」

宿の主人はにこにことして言う。

「避難してきた人たちの為って事かしら」

「状況が状況だけに少々気が退けるけども。お陰でウチは大繁盛さね」

「帝国にしちや粹な計らいだな」

「それじゃ部屋なんて開いてないんじゃないの？」

「ちょうどひと部屋ある。運がいいよ、あんた達」

主人が帳簿を捲って言うと、開け放しだった扉の向こうから身なりのいい中年夫婦が入って来た。

「ならばその部屋、私が借りてやるっ」

「ちよつと旦那あ横入りは勘弁して下さいよ」

カロルを背負ったレイヴンがそう口を挟んではみるもの…どうやら貴族なのだろうと分かる夫婦はお構いなしだった。

「無論ただとは言わん。本来の十倍の額を払ってやるぞ。お前達にも同じ金額をやるっ。それなら文句なかるっ？」

その貴族の発言にシークは不機嫌な顔をした。

「おいこら…」

ユーリが夫婦の前に歩み出ようとして、宿の主人が大きな声を上げた。

「いやー申し訳ない！帳簿よく見たら空き部屋は勘違いでしたわ。すみませんね。どーも」

「なんだと！？…ええい、これだから田舎は…」

「あなた。さつさとノール港からヘリオードに参りましょ」

「まったくだ、こんな小汚い宿、泊まってやるだけでありがたく思えと言つに…」

貴族夫婦がぶつくさ言いながら出て行つてから、レイヴンが扉に向かつて

「ノール港には行けないと思つぞ ……つと」

と呟いた。

「さてお待ちせしたね、お客さん。部屋は上がつて正面だ」

貴族夫婦が離れた事を確認してから、宿の主人が帳簿を畳んで一行に言った。

「空いてないつて…」

「いいのかよ、商売だろ？」

譲られたのだ、とはすぐに分かる。

「ああ、いいんだいいんだ。ああいう手合いは鼻持ちならん」

主人は豪快に笑い言う。

「それに、あんた達ハルルの樹を救ってくれた」

宿の主人に一礼をすると、一行は空いている部屋へと移動する。こうして宿にひと部屋取れたはいいものの、状況は決して明るくはない。

「帝都は大変な状況のようね」

あれだけの人が逃げ出しているのだからそういう事だ。中には着の身着のまま逃げてきた人もいた。

「アレクセイの大将、一体なにをしでかすつもりなんだか」

「アレクセイなんてどうでもいい……エステルよ。あたしはエステルを助けない」

リタが拳を握りしめて言う。

「そうね。でもその為にはアレクセイを何とかしないと。それに、このままじゃ無策過ぎるわ。またノール港まで飛ばされる訳にはい

かないもの」

今のままではどうやってもアレクセイには勝てない。

バクティオンから数えて何回かぶつかってはみているが、どれも玉砕だ。

エステルを助ける所か返り討ちにされてしまう可能性の方が高い……が、具体策があるかというとまた別の話になってしまう。

「どの道カロールが回復するまでは動けないんだし、今の内に情報集めてくるといいんでない？」

まずは状況が正しく分からない事にはどうにもならない。

ジュデイスが曖昧に頷いた。

「……そうね、ちょうどいい話も聞いた事だしね」

ユーリ、リタ、ラピード、ジュデイスは立ち上がったがシークとレイヴンは立ち上がるうとはしなかった。

「お前らは来ないのか？」

「カロールを一人にしとくわけにはいかないでしょ」

「私はまだ傷が癒えてないからな」

ユーリは「分かった」というと、3人を残して部屋を出て行った。

二人つきりになると、シークが窓の外の景色を眺めたままレイヴンに話しかけてきた。

「こんな計らいをするお偉いさんがいるのか？」

「おそらくヨーデル殿下だろうねえ」

レイヴンがシークの質問に答えると、自分から質問したはずのシークは興味なさそうに「ふーん」とだけ答えた。

「ところでシークちゃん」

「なんだ？」

レイヴンの方からシークに話しかけてきた。シークは目線だけレイヴンに向けている。

「ハルルについたとき、どうして顔を青ざめたの？」

「！！」

レイヴンの質問にシークはバツと体ごとレイヴンの方に向けた。その表情は驚いている。

「気づいていたのか……」

シークは一呼吸し、窓の景色を見つめると口を開いた。

「地下町のみんなは無事なのか心配だな」

「地下町？」

「下町の者よりも貧相な生活を送っている市民としても見られない者たちが作った町のことだ。まあ、町というよりは集落に近いが……。私は貴族の屋敷から逃げたあとからデューク様に出会うまでそこで生活していた。その場所を知るのは地下町の住人だけだからな、知らないのも無理はない」

レイヴンはその話を聞いて少し驚いていたようだったが、どこか嬉しそうだった。

そんなレイヴンを見てシークは首をかしげた。

「なぜ、嬉しそうなんだ？」

「シークちゃんのことを少し知れたからに決まってるでしょ」

「私のことを……？」

シークはますます不思議に思い、首をかしげる。

情報収集に向かったみんなはすぐに帰って来た。

レイヴンの言った通り、国のお偉いさんはヨーデルのことだった。

ヨーデルから聞いた話によると、帝都はエアルの暴走が起こり人が住めない状況だという事だった。

「帝都は丸ごとエアルに飲み込まれたらしい。中心にいるのは恐らく……」

エステルとアレクセイ、という事だ。

「無茶苦茶よ！つまりそれ全部エステルの負担って事なのよ？無理矢理、力使わされる度にどんだけの消耗を強いられるか……ただでさえ制御が危つくなってるのに、そんな使ってたらどうなるか……」

リタが声を震わせる。

状況は知れば知るだけ絶望的だ。

「もし…もし手遅れになったりしたら…アレクセイを倒したって…」

「その…力を抑える方法ってのはないもんなのかね」

何とか希望はないものかとレイヴンが言葉を濁す。
だがリタの表情は全く晴れない。

「ある。きつとある。でもまだ…」

「あ……と、そうそう、騎士団はどうしてんの？」

「フレンが頑張ってるらしいが、どうにもならんだろ。連中には宙の戒典もねえ」

レイヴンの気遣いもなんとなくうまくいかない。

ジユデイスがいつもと変わらない間延びした声を出した。

「フェローに聞いてみるわ。まだどのくらい時間が残されているかって」

「ユーリ……」

静かな中に弱々しく聞こえたのは、少年の声で…カロルは体を起こす事なく大きな瞳を開いた。

「悪い、起こしちまったか。調子はどうだ？」

「ごめん。また足引つ張っちゃって………帝都に行くんでしょ？」

カロルは首だけでユーリを見上げた。

まだぐったりとしている小さな体はまだ火照っている。

「気にすんなって。俺たち助けてそうだったんだから」

「無理をされて倒れられたら本当に足を引つ張るぞ。今はまだ休んでいろ」

「一見冷たく言っているようにシークは言ってるが、本人にとってはこれが精一杯の優しさだと思っている。」

「うん。でも、置いてっちゃだよ。エステル、ギルドのみんなで助けるんだから……」

「ああ、分かってる。さ、もう少し寝とけ。な？」

「うん……」

ユーリがたしなめると、安心したのだろうカロルはうとうとしていた意識をそのまま眠りに落としてしまった。
幼い寝顔は穏やかだ。

「繋がらないわ。エアルが乱れているせいかも」

窓枠に寄っていたジュデイスが振り返って言う。

「いいさ。どっちみちアレクセイの野郎をぶっ倒すだけの話だ」

「……………それだけ？」

あまりにあっさりしたユーリの答えに、ジュデイスは眉を潜める。
だが彼はジュデイスの言葉には応えずに仲間たちに背を向けた。

「……………ちょっと外の空気吸ってくる」

宿を出るユーリの後を追うようにラピードも続く。仲間たちから離れ、一人になった彼はぼつり、と呟いた。
損な役回り、か…………と。

宙の戒典を手に街を出ようとしたユーリは、背後に気配を感じて立ち止まる。

「……ひとりで行くつもりですか」

「殿下にや関係ねえよ。下町の様子が気になるから、ちょいと見てくるだけさ」

声を掛けたのは金色の髪的青年　ヨーデルだった。

静かな声音の彼にユーリはわざと明るく言ってみせる。こんな役目、他の誰にもさせられない。

「評議会はアレクセイを正式に大罪人として告発する決定を下しました。今、デイドン砦で騎士団が帝都攻略の準備を進めています」

「エアルが充満してんだろ？　どうにもならんと思うぜ」

デイドン砦には恐らく、フレンもいるのだろう。だがいくら騎士団が準備をしても、宙の戒典がなければ充満したエアルをどうにかすることは出来ないし、彼らにアレクセイを倒せるとも思えない。

「……エステリーゼはアレクセイのもとにいるんですね」

「知って……まあ気付くか。さっきわざと話題にしなかったろ」

エステルがユーリたちと共にいないことは、出会った時点でヨーデ

ルも気付いていただろう。
先程は知っていてそれを口に出さなかったのだ。

「彼女をどうするつもりですか？」

「どついう意味だ？」

ユーリは前を向いたまま問う。

ヨードルは一体、自分に何を言わせたいのか。

「……皇帝家の血筋の者は、みなある力を持っています。多くは微妙たるものですが、彼女のは飛び抜けていたと聞きます。評議会が彼女を担ぎ出そうとしたのも、それが理由でしょう」

どうやらエステルのような満月の子の力を、皇帝家は代々受け継いで来たらしい。

それはつまり、彼女は祖を同じくしているのではないだろうか。

「なんで今そんな話するんだ」

皇帝家の血筋がエステルと同じ力を持つことは分かった。だがヨードルは何故、今になってそんな話をするのだろう。

ヨードルの意図が分からずいるユーリに、彼は決定的な言葉を口にした。

「彼女の力がこの災いをもたらしているのではないですか？」

「だったらどうする？」

「騎士団は……アレクセイを討つだけでは済まなくなるでしょう」

ヨードルが何を言いたいのか、分からぬユーリではない。

いや、ユーリでなくてもここまで言われれば分かるはずだ。

帝都を混乱に貶めたのはアレクセイだが、彼女の力が原因ならば騎士団は放つてはおかないだろう。
だがそんなこと、言われずとも分かっている。

「そんなことにはならねえよ」

「……あなたがやるから、ですか？ フレンが言っていました。あなたはいつもひとりで重荷を受けようとすると」

「余計なお世話だつて言つといてくれ」

ここにはいない幼なじみの余計な気遣いにユーリは苦笑する。彼だ
けではない。このお人好し殿下もだ。やはりあのフレンにしてヨードルである。

「……どうしてです？」

「言つたる、あんたにや関係ない」

ユーリが何をしようとヨードルには関係ない。彼は知らなくていいことだ。素っ気ない答えに彼はユーリが持つ宙の戒典を見た。

「その剣……あなたのような人こそが持つべきなのかもしれません」

「それ以上なんか言つとぶん殴るぞ」

遠慮のない一言にヨードルはすみません、と謝った。

そんな彼を一度も振り返ることなく、ユーリはラピードと共に街を出る。

ぼんやりした月明かりだけが街道を照らしている。目指すは勿論、帝都だ。

ラピードと二人だけというのは久しぶり過ぎて調子が狂う。

街道を抜けたユーリは再び、クオイの森に足を踏み入れる。

魔物も眠りについているのか、殆ど姿を現さなかった。戦うことになってもラピードの力を借りるまでもない。

ユーリ一人で十分過ぎる。だがこの虚しさは何だろう。

無言で森を進むユーリは、壊れた魔導器を見て足を止める。初めてこの森に来た時のことが脳裏に甦った。

「……エステルは呪いの森だって騒ぐし、あん時は大変だったな」

腰を下ろしたユーリは、あの時のことを思い出して苦笑する。そして同意を求めるように隣のラピードに話し掛けた。

「考えてみりゃ、おまえとだけつてのもひさしぶりだよな。戦つても、妙に調子狂うし……なんだか疲れた。……ちよつとだけ見張り頼むぜ、ラピード」

肉体的に疲れた訳ではない。どちらかというところこれは精神的な疲れだ。

ハルルを出て休んでいなかったことも原因だろう。

ワン、とラピードの声を聞いたのを最後にユーリは眠りの世界へと誘われた。

それからどれほど眠っていたのか。自分の名を呼ぶ声にユーリの意識は浮上する。

「……ユーリのバカー……ッ！」

横になっているユーリの頭上に武器が振りおろされた。

頭の上を感じた風圧に、ユーリはおわ、と声を上げて飛び起きる。

「なっ？ え、あ？ カロル!？」

武器を振り下ろした人物を見てユーリは仰天した。

何故なら、そこにいたのはハルルに残してきたカロルだったからだ。

目を白黒させるユーリなどお構い無しにカロルはバカ、アホと叫んで武器を振り回す。

ユーリのちょ、まで、おい、との声は届いてすらいなかった。

「トーヘンボク！ スットコドッコイ!!」

「スットコって……待って!!」

少なくともユーリには、唐変木やスットコドッコイなど言われるいわれはない……はずだ。

まずは話を聞かなければカロールが何に対して怒っているのかも分からない。
だが、

「言い訳はあとで聞いたげる。一回、死んどけ!」

「へ!?! ごわ!」

次に聞こえたのは、怒りを帯びた少女の声。それが誰であるかを考え前に、ユーリは彼女が放った炎の魔術で派手に吹き飛ばされた。

ユーリが立ち上がると今度はシークが指の骨を鳴らしている。殴る気満々だ。

「待て。お前が殴つたら本当に意識がとぶって!」

「安心しろ。意識がとばない程度には手加減するからな」

「手加減する」と言ったシークだが、思いつきりユーリを殴った。幸い意識はとんでいないが、かなり痛い。

「はあい。生きてる?」

地面に座り込んだレイヴンが若干、哀れむような、だが楽しそうな視線を向けた。

「……多分」

「目も覚めたみたいね。よかったわ」

服についた埃を払いながら起き上がると、満面の笑みを浮かべるジユデイスと目があつた。顔は笑っているが、目が笑っていない。おまけに何故か拳を握っている。

「まったくラピード、てめえ見張りはどうしたんだよ」

非難めいた視線を向けても、ラピードは全く意にかいさない。それどころか胸を張ってユーリを見つめている。自分は間違つたことはしていない。彼の水色の瞳はそう言っているようだった。

「この子が私たちを案内してくれたのよ。賢い子ね」

「そこ行くと、どっかの馬鹿とは大違い」

リタの言うどっかの馬鹿、とは間違いなくユーリのことだ。

笑顔ながら少し怒ったようなジユデイスと、明らかに憤慨した様子のリタを見返し、ユーリは目を細める。

「おまえら分かってんのか？　これから、何しようとしてっか、本当に分かってんのかよ？」

自分が誰に告げることなく、黙って出て来た時点で考えつくはずだ。ユーリは助けるために行くのではない。彼女たちを……殺すためだ。それを分かっていて、ついて来たのかと言っているのだ。

「分かってないのはユーリだよ！」

「カロール……」

半ば叫ぶような形になったカロールに、ユーリは押し黙る。ユーリを見る少年の褐色の瞳には強い光が宿っていた。

「ユーリだけで……ユーリだけなんて駄目だよ！」

「あんたひとりでなにすってのよ。あたしら差し置いてなにができるっていのよ……」

「エステリーゼを助けたいのはお前一人だけではない、アレクセイに腹を立てているのはお前だけではないということを忘れるな」

「ま、ようするに、だ。ひとりで格好つけんなってことよ」

「もう少し信じてみてもいいんじゃないかしら？」

駄目だよ、と必死で訴えかけるカオルに、怒ってはいるがリタもユーリを案じてくれている。どこかおどけたようなレイヴン。ジユデイスの声音も柔らかいものに戻っている。いつも通りに接しているようなシークだが、表情はどこかホツとしているように見える。

ユーリは胸があつくなるのを感じた。

「ぼくたち、仲間ですよ」

もう、苦笑しか浮かばなかった。どうやら皆、ほっとけない病らしい。

だがそれが嬉しくもあり、頼もしくもある。自分は一人ではないと言ってくれているのだ。

ユーリは仲間たちを見回し、根負けしたように笑った。

「……………参ったね。……………分かったよ、みんなで行こう。最後までな」

第20夜：仲間と信じる心（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第19・5夜・20・5夜(前書き)

第19夜と20夜のスキットです。

第19・5夜・20・5夜

【改めてよろしく】

レイヴン

「というわけでよろしく！」

リタ

「なにが“よろしく”よ！」

カロル

「まったくだよ！僕らがどれだけ心配したか分かってる？」

レイヴン

「こんなおっさんを心配してくれてたのね。愛されてるねえ」

リタ

「あ、あたしは別に心配なんか…」

レイヴン

「リタっちてば、素直になったらどうなのよ？」

リタ

「おっさん、まだ殴られ足りないみたいね」

レイヴン

「ちよっ！ストロップ！」

シーク

「……うっ……」

カロール

「あれ？もしかしてシーク、泣いてるの？」

レイヴン

「シークちゃんってば、泣くほどおっさんのことが好きなのねえ」

カロール

「レイヴン、そんなこと言ったら殴られ……」

シーク

「多分、そうだと思う……」

カロール・リタ・レイヴン

「!?!」

シーク

「レイヴンが、生きてたってことが分かったらなんだか涙が止まらなくて……」

相手が好きじゃないと涙は流せないんだろう？きっと私はレイヴンのことを仲間として好きだったんだな……」

カロール

「そっちの好きね……」

リタ

「当たり前でしょ。相手はおっさんなのにあっちの好きなわけないでしょ」

シーク

「レイヴン、改めてよろしくな。迷惑かけた分、頑張ってもらおうかな」

レイヴン

「迷惑かけた分は頑張るつもりよ」

【しつこい奴】

シーク

「それにしても、ザキはしつこいな。あいつと会うのは何回目だ？」

ユーリ

「さあな。数えんのもやめたよ」

ジュデイス

「あなた、よっぽど気に入られてるのね」

ユーリ

「あいつに気に入られても嬉しくないな」

シーク

「そうか…。ああいう奴がストーカーという奴なんだな」

ユーリ

「なんか否定できないな」

ジュデイス

「彼がストーカーなら、そこら辺にいるかもしれないわね」

ユーリ

「本当にいそつで怖えよ…。いや、むしろ本当にいる気がする…」

【シークはフレンをどう思う?】

シーク

「本当に騎士とは愚か者ばかりだな…」

カロル

「そういえばさ、シークってさどうして騎士が嫌いなのわけ？」

シーク

「嫌いにもなるだろう？先ほどの女騎士、ソディアとか言ったか？あいつのように何をすべきなのか分かっていない奴もいるし、キュモールのような奴もいる。アレクセイのように人を道具としか思っていない奴もいる。私が見てきた騎士はそんなのばかりだ」

カロル

「僕たち、あんまりいい騎士見てきてないもんね。」

「じゃあさ、レイヴンもそんな風に嫌いなの？」

シーク

「シユバーン隊は…嫌いではないな。市民を大事にしているし…。あの隊は隊長はアレなのに、しっかりしている気がする」

レイヴン

「シークちゃんはおっさんの心を傷つけたいの？」

シーク

「お前はシュバーンではなくレイヴンだろう？」

レイヴン

「そうだけど…なんだかおっさんを遠回しのようで直接傷つけてる気がするんだけど…」

ユーリ

「そついやお前、フレンも嫌いだよな？」

カロル

「そついえば、シークってフレンも嫌いなの？」

シーク

「フレンは…分からない」

カロル

「分からない？」

シーク

「最初はいいつも嫌いだった…。でも、あいつを何度か見ているうちにそうじゃなく感じてきた。あいつは嫌いにはなれないんだ…。だから分からない」

ユーリ

「今度、フレンに会ったら言ってみようか？」

シーク

「喜ぶ、か…。まあ、考えておくよ」

ユーリ

「考えるだけじゃねーだろーな？」

シーク

「可能性は否定できないな」

カロル

「本当に考えるだけになるかも」

【エステルを助けたら…】

リタ

「あと少しでエステルを助けられたのに…」

シーク

「過ぎたことを考えても仕方がない。今は自分の体を心配しろ」

ジュデイス

「そうね。私たちがこんな状態ではあの子を助けることもできないものね」

シーク

「早く傷を癒し、エステリーゼを助けるぞ。私はエステリーゼを助けたら謝りたいんだ」

カロール

「謝るってどうしてさ？」

シーク

「私はエステリーゼに酷いことをしたまま謝っていないからな。まあ、許してもらえとも思っていないが……。だが、ちゃんと謝りたいんだ」

リタ

「謝るくらいなら、最初から傷つけるようなことしなければいいことでしょ」

シーク

「その通りだが、してしまったことは仕方ない」

ジュデイス

「なら、早くいえるように傷を治すことに専念しましょう」

シーク

「あゝ
「あゝ

【寒い時は…】

レイヴン「寒い寒い寒い寒い寒い」

リタ

「うっさいわよ、おっさん！」

カロル

「だって寒いんだもん！リタっちは寒くないの？」

リタ

「寒いにきまつてんでしょ！そんなに寒いんなら、燃やしてあげるわよ？」

レイヴン

「それはヤメテ！」

カロル

「でも、本当に寒いよね。ジュデイスは寒くないの？」

ジュデイス

「暑いよりは全然平気よ」

シーク

「……」

カロル

「ちよっ！シーク！？なんで僕を抱きしめるのさ！？」

シーク

「寒いときは肌で温め合えばいい。本に書いてあった」

カロル

「iiiiiiiiiiよ！もういいから放してよ！」

シーク

「そうか。だが、私も温かったぞ」

レイヴン

「シークちゃん！おっさんも抱きしめて！」

シーク

「私は十分温まったからリタかジユデイスにしてもらってくれ」

リタ

「おっさん、そんなに温まりたいならファイアーボール使っ
てあげるけど？」

ジユデイス

「私は平気よ」

レイヴン

「…おっさん、心も寒くなってきた…」

【仲間だから…】

シーク

「カロール、ありがとう」

カロール

「いきなりどうしたのさ？」

シーク

「カロールがいなかったら、私たちはあの魔物に食べられていた」

カロール

「だったら僕もシークに言わないとだね。ありがとう」

シーク

「なんで、私に礼を言うんだ？」

カロール

「だってシーク、魔物の攻撃から僕の庇ったじゃん」

シーク

「別に礼を言われることはしてない。仲間だろう」

カロール

「なら、僕も言われる必要ないね。だって仲間だから助けるの当たり前だよ」

シーク

「そうか……。そうだな」

カロル

「うん！」

【仲間だから……2】

シーク

「……」

ユーリ
「お前、まだ怒ってんのか？お前らを置いていったのは悪かったよ」

シーク
「別に怒っていない」

ユーリ
「なら、どづしたんだよ？」

シーク
「私たちはお前にとって仲間ではないのかと思って……」

ユーリ
「……」

シーク
「私たちはユーリにとって頼りない仲間なのか？」

ユーリ
「バカ。そんなわけねーだろ。お前らは大切な仲間だから置いて行つたんだ。結果的には俺の方がバカだったけどな」

シーク
「まったくだ。お前は思っていたよりバカだったってことが分かったよ」

ユーリ
「へいへい」

シーク

「今度からはなんでもかんでも一人で背負いこもつとするなよ。私も一人で背負いこむようなことはできるだけしないから」

ユーリ

「……」

シーク

「私たちにも背負いこませてくれよ。私たちは仲間なのだから」

ユーリ

「そうだな。俺達は仲間だからな」

第19・5夜・20・5夜（後書き）

4か月投稿してなくてごめんなさい。最近、就職活動やら学祭の準備やらでリアルの方が忙しいです。

投稿していない間にエクシリアが発売しましたね。

姉は買ってやったみたいですが、私はまだやっていません。早くやりたいですね。

皆さんはやりましたか？

ストーリーの方はなかなか長いみたいですね。

テイルズといえば、私はいつも60時間ぐらいでクリアする方ですが、もしかしてクリアに100時間超えることもありえるかもですね。

第21夜もなるべく早く投稿したいと思います。

今、途中まで作成中です。

第21話・生きる(前書き)

帝都ザーフィアス

第21話：生きる

仲間と合流したユーリは、帝都に向かう前にデイドン砦を訪れていた。

ヨーデルが騎士団はデイドン砦に集結していると言っていたからだ。だがフレンドころか騎士の姿すらない。

入れ違いになったのだろうか。既に帝都に出発した後なのかもしれない。

ユーリが踵を返そうとした直前、ふと見上げた先　砦の屋上に人影を見つける。

銀系のようなシルバーブロンドの髪に、血のように赤い長衣を纏った男。遠くからでも見間違えるはずがない。

「……ちよつと行ってくる。おまえらは外で待っていてくれ！」

「え、ちよつと、ユーリ！！　あ、待ってよ！」

突然、弾かれたように走り出すユーリに仲間たちはきょんとしている。

唯一、カロールとシークが後を追って来たが、それならそれで仕方がない。別に一人でなければならぬ理由などないのだから。

一言も発することなく、ひたすら砦を駆け上がる。ユーリが先程見

た通り、屋上に“彼”はいた。
彼の姿を見て、シークは目を丸くする。
彼の真紅の瞳は、赤く染まる帝都に向けられている。

「あんた……」

「デューク様……」

「彼女を止められなかったようだな……」

ユーリの呟きに彼は振り返る。長い銀髪に真紅の瞳　デュークは
抑揚のない声音で言った。
向けられる瞳に感情の色は見えない。

「何言つてんだよ、まだまだこれからだ。あんたはそこで指くわえ
て見てろ」

「ユーリ……剣貸してくれたのに失礼だよ……！」

笑みすら浮かべて答えるユーリに、追いついて来たカロルが非難め
いた視線を向ける。

ユーリは首を竦めそれを、そうだな、と受け流した。

「どうしてだ……？」

「……何がだ？」

デュークが何故か驚いたような眼差しで自分を見ている。だがユーリは、彼が何を言っているのか理解出来ない。怪訝そうな顔を見ると、デュークは再び問うた。

「どうして、こんな時に笑っていられる？」

それは純粹な疑問のようであり、尋ねたデュークも困惑しているようでもある。改めて聞かれると中々上手い言葉が見つからないが、

「根が呑気だから、だろ？」

自分一人なら、こつも笑えなかつただらう。気を張って、余裕などなくて、一杯一杯だったはずだ。仲間たちが居てくれるから。だが根が呑気なのは間違つてはいない。彼らがいるだけで、二人を助けられるような気がするのだから。

「愚かな……」

「しょうがねえ、それが生まれつき持った性だしな。……行くぞ」

冷やかな瞳で自分を見るデュークに、ユーリは首を竦めて見せる。そして、彼に背を向けて歩き出した。

だがカロールとシークは立ち止まったまま、デュークを真っ直ぐに見

据える。

「……わかってるから。ユーリが怒ったり、焦ったり泣いたりしなくてもボクたちはわかっちゃってるんだ。心の中では血が滲むくらい強く唇を噛みたいくらいに悔しいってこと。ユーリはそれを押し隠すみたいに平然としてる。だから今にも絶望しそうなボクもここに立っていられるんだ」

揺るぎない少年の言葉にデュークは何も言わない。カロルは、カロルたちは知っている。

ユーリが顔に出さなくても、彼は誰よりも無力さを噛み締めていることを知っているから。

だからカロルも希望を信じられる。

「カロル、シーク、何やってんだ!？」

「今行くよ!」

ユーリが自分を呼ぶ声に、カロルは振り向いて答える。デュークはどこか理解出来ないといった表情でカロルを見つめていた。

「……それを私に言ってどうするつもりだ」

「……そうだね。いつか、ユーリに言う。いつかね……」

デュークの言葉にはにかむように笑うと、カロルはユーリを追って駆け出した。
しかし、シークは足を動かさそうとはせずにデュークから目を離せな
いでいた。

「デューク様……」

「お前にも“友”ができたか……」

「あいつらを“友”には認めたくないですね。友にするならもっと人を選びます」

シークはそう言うと、ユーリとカロルが去った方を向いた。

「あいつらは“仲間”……に近い感じです」

「……お前は変わったな」

「変わりましたか？」

シークはデュークの言葉に少し驚いている。

「昔ならば、人をそう信じてはいなかった」

「……そうですね。あいつらは信じられますから。そろそろ行きますね。この世界は絶対に護ってみせます。あの方のためにも」

シークはそう言うと、ユーリたちの後を急いで追った。

走り去る少女の背中を見つめながら、デュークはぼつりと呟いた。

「仲間か……。しかし、希望はいつか絶望に変わる時が……。来る……」

帝都に辿りつくと、一同は目を疑った。

様変わりした帝都を見て、ユーリたちは驚愕に目を見開いた。赤く染まる空から落ちる緑の光、異常に成長した植物が家々に巻き付いている。

人は誰一人として見当たらない。

「なんてこった、これがあの帝都なのか」

整備されていた石畳は巨大な蔓と赤い花に覆われており、人の営みが全く感じられなかった。

これには流石のユーリも驚きを隠せない。

「植物が巨大化してる……エアルの暴走のせいだね」

「すごい濃度……まともに食らったら一巻の終わりよ」

「私たちもその剣がなかったら危なかったわね」

リタの呟きにジュディスも険しい面持ちで頷く。

宙の戒典が無ければ帝都に入ることはとても出来なかっただろう。

「ああ、みんな離れるなよ。特におっさんは」

心臓魔導器を持つレイヴンは他の誰よりエアルの影響を受けやすい。下手をすれば魔導器が誤作動を起こすかもしれないのだ。

「ええええ、もうさつきからドキドキしっぱなし。……手をつないでいい？」

「勘弁してくれ」

少し疲れたような表情をするレイヴンがとんでもないことを口走る。そんな彼を見てユーリは、辟易するように息を吐いた。

「魔物が入り込んでる!!」

「なんで!?! 結界は復活しているのに……」

カロールが指差した先には、魔物が徘徊している。リタが言うように結界が復活しているにも関わらず、だ。本来なら魔物は結界の中に入れないというのに。おまけにケーブ・モックのように凶暴化しているではないか。

「ユーリ、どうしたの？」

カロルたちが話している間もユーリはずっと植物に覆われた坂を見つめている。どうしたの、とカロルが尋ねれば、彼は直ぐになんでもないと振り返った。

「行こうぜ。エステルが待ってる」

一人歩き出すユーリに、リタとカロルは首を傾げている。彼は一体、何を見つめていたのだろう。

二人の疑問に後ろにいたレイヴンが口を開いた。

「あの坂の先は下町があった。やっこさんの住んでた、ね」

「……植物で覆いつくされちゃってる……ね」

エステルのことも勿論だが、ヨードルに彼らのことを聞いたくらいだ。ユーリもずっと下町のことを気にしていたのだろう。

ユーリが見ていた坂を一瞥すると、仲間たちも彼を追って歩き出した。

他のみんなが歩きだすなか、シークも下町がある坂の下を見つめていた。

あまりはなれるわけにはいかず、シークはすぐにあとを追った。

一行は魔物を倒しながら、アレクセイたちがいるであろう、城を目指して進んでいた。

下町のことか気になるのか、ユーリは先程から一言も喋らない。見兼ねたリタがため息と共に口を開く。

「このぴりぴりした空気、ちょっとどうにかしてほしいんだけど。下町の連中の知り合いが心配なもの、アレクセイがむかつくのもわかるんだけどさ」

「あら、たまにはいいじゃない」

意外にもそう言ったのはジュディスである。リタは眉を潜め、どこがいいのよ、と彼女を見つめた。するとジュディスは笑みを深めてその理由を語る。

「周りが不愉快になるとわかってるのに、苛立ちを撒き散らすのは、甘えてる証拠でしょ？ 以前のユーリだったら、私たちの前では、絶対に今みたいな態度は取らなかったわよ」

確かに以前のユーリなら、仲間たちの前であつても、苛立ちを表に出すことはなかっただろう。何でも一人で抱え、解決しようとする。それがユーリだった。

ジュディスの言うように、それが甘えであるかは本人にも自覚はないだろうが。

「……目の前で、そう冷静に分析されると、さすがに気持ちも冷めるな」

目の前で交わされる自分に対してのやり取りに、ユーリはやや疲れたように呟いた。

それからしばらくして、ユーリたちは城へと辿り着く。

しかし、城門は固く閉じられている。一縷の望みをかけてユーリが鉄格子に手を掛けるが、

「ダメだ。閉まってやがる」

「あそこ見て。ボクなら通れるんじゃないかな」

カロルが指をさしたのは、城門にある隙間。狭いがカロルなら抜けられるかもしれない。

こちらからは開かなくても、向こう側からなら開けられるはず。

カロルはレイヴンに肩車をしてもらい、狭い隙間を抜けて着地する。それを見ていたリタがねえ、と声を上げた。

「時間がないのよ。ぶっ飛ばした方が早くない」

リタに同意するようにシークは頷いた。

「外に人がいないからって、中もそうとは限らんでしょ。聞きつけられたら面倒よ」

物騒な彼女の提案に答えたのはレイヴンだった。確かに時間はない。一刻を争う。しかし城の中にいるかもしれない親衛隊らを考えれば、下手なことは出来ないのだ。

「街中エアルだらけなのよ？ 城の中だって同じでしょ」

「あのアレクセイが、なんの備えもしてないとは思えない」

あのアレクセイのことだ。すんなりと通してくれるとは思わない。ジュデイスの言い分にリタが言い返そうとした瞬間、鈍い音を立てて城門が開いた。

「やった！ みんな、早く！」

カロルが階段の上から手を振っている。彼の活躍により、一行はザーフィアス城内に足を踏み入れた。

鏡のように磨かれた床の上に敷かれているのは、金糸の刺繍が施された真紅の絨毯。

精緻な彫刻の支柱が立ち並び、正面の硝子には帝国を示す紋章が掲げられている。レイヴンやジュデイスの懸念とは裏腹に、城門はし

んと静まり返っていた。

「あれ？ エアルがないよ？」

「エステルを使って、こんなことまでやってのけたんだわ」

カロルがきよろきよろと辺りを見回すが、城の中には視覚化されたエアルは見当たらない。

苦い口調で言うリタによればこれもエステルの力らしい。

「外の結界はエアルを閉じ込めるためだったのかもしれないわね」

一つの仮説を口にしたのはジュディスである。あの結界は魔物を退けるためではなく、大量のエアルを封じ込めるためだったのか。

「おっさんの心配が当たった可能性大だな。きっとお出迎えがあるぞ」

「悪い予感ばかり当たるのはなんでかねえ」

彼女の力を使い、城だけをエアルの影響から守ったということはきつと何かある。

ふう、と一息ついて自分を見るユーリに、レイヴンは困ったように眉を寄せた。

「今、んなこと言ってもしょうがないでしょ。気引き締めて進めばいいのよ」

「ああ、悪いことに加担してるまがいもんの騎士なんて、オレたちの敵じゃねえだろ?」

リタの言葉に同意したユーリは不敵に笑う。どれだけ数がいようと、親衛隊はアレクセイに従う偽者の騎士でしかない。本当の騎士というものは、フレンのような人物を指すのだ。

リタの言うように、気を引き締めた一行は慎重にだが、急いで城内を進む。途中、何度か親衛隊の妨害にあったが、ユーリたちの敵ではない。

それは丁度、食堂近くに差し掛かった時だ。歩いていたジユデイスが扉の前で止まる。

「まって。誰かいるわ」

クリティア族である彼女の感覚は鋭い。ユーリたちは武器に手をかけ、三人ずつ扉の両脇に控える。次の瞬間、食堂へと繋がる扉が勢いよく開け放たれた。

「だああああ!!!」

「むっ!？」

食堂から飛び出して来た人物を見て、ユーリが声を上げる。その人物たちは勢い余って壁に激突した。

あだだだだ! と悲鳴を上げて倒れる彼らは最早間抜けとしか言い様がない。

「なんだあ……?」

流石のユーリも呆れを通り越して、意味が分からない。壁に激突して伸びているのは、アデコール、ボツコス、ルブランのシユヴァーン隊の面々である。

「ユーリ!? ユーリか!」

「ハルクスじいさん!？」

自分を呼ぶ声に振り向けば、そこには白髪の老人　ハルクスがいた。

ユーリが散々心配していた下町の住民の一人である。

ユーリたちが食堂に入ると、そこは下町の人々で溢れていた。その中には親しくしていた少年、デッドの姿もある。

「じいさん、みんな! 無事だったのか!」

皆の無事な姿を目にして、ユーリもほっと一息ついた。本当に無事で良かった。巨大化した植物で覆われた坂を見た時、ユーリも最悪の事態を覚悟していたのだ。

「そりゃこっちのセリフじゃ」

「なんで城の中になんて居んだよ!？」

彼らが無事だったのはユーリも嬉しい。だがハンクスたちが城の中にいる理由が分からなかった。

一体、何がどうなってこんなことになっているのか。

「ほんと、それにおまえらまで」

レイヴンの視線の先には、言うまでもなくあの三人の姿がある。

ヘラクレスで別れてから、フレンの指揮下に入っていた彼らがどうして、下町の人々と共にいるのか。

「はっ、それがその、フレン殿の命令で市民の避難を誘導していたのでありますが、その……ふと下町の住民の姿が見えないことに気が付きまして、命令にはなかったんでありますが、つまりその……」

レイヴンから視線を反らすルブランはどうも齒切れが悪い。要約するに、フレンの命令で避難の誘導していた彼らはそこに下町の人々がいないことに気付いた。そこで命令にはなかったが、放って置けなかったということだろう。

「出口は崩れるわ、おかしな霧は迫るは、危ないとこじゃった。なんとか騎士殿の助けで霧のないここに逃げ込めた。命の恩人じゃよ」

「め、命令違反の罰は受けます！」

感謝の眼差しを向けるハンクスだが、ルブランの表情は晴れない。下町の人々を助けることは命令にはなかった。

騎士団の中での勝手な行動は処罰対象。ルブランたちがしたことは人としては素晴らしい。

しかし規律を重んじる騎士として褒められたことではないのだ。市民を守る前に、命令を守れなければ騎士とは言えない、少なくともルブランはそう思っているのだろう。

強張った声で命令違反の罰は受けるというルブランに、アデコールとポッコスも我々も同罪なのである、とレイヴンを見つめる。だが当の本人は三人に背を向け、へらりと笑った。

「罰もなにも、俺ただのおっさんだからねえ。それに市民を護るのは騎士の本分っしょ？ …… よくやったな」

罰を与えようにも、ここにいるのは騎士隊長首席シュヴァーンではなく、ただのレイヴンだ。

だがレイヴン個人としての意見なら、彼らはよくやった。憧れの隊長から掛けられた労いの言葉にルブランは肩を震わせる。

「……こっ光荣であります！ シュヴァ……レイヴン隊長殿！」

「隊長ゆーな。俺様はただのレイヴンよ」

シュヴァーンと言い掛けて止めたまではよかったが、レイヴン隊長では意味がない。

呆れたようにレイヴンが肩を竦めて見せると、

「はっ！ 失礼しました。ただのレイヴン殿オ！」

訂正した意味が全くないではないか。あまりのルブランのポケつぶりに、レイヴンは呆れ返って額に手を当てた。救いようがないというのはきつと、こんなことだ。

「尊敬されてるのね」

「ほんと、想像つかないわ」

笑みを浮かべるジュディスに、若干呆れたようなりた。

「よかったね、ユーリ」

「フツ、しぶとい奴らだったの忘れてた。心配するだけ無駄だったわ」

よかったね、と言うカロルにユーリも柔らかく笑った。自分が思うよりずっと下町の人々はたくましい。つまりはいらぬ心配だったということだ。

下町の住人は助かっていたというのに、シークだけはまだつかばれない顔をしている。

「シーク姉ちゃんだ!!」

「!?!」

シークを“姉”と親しげに呼ぶ子供たちが走ってきた。そして、その子供たちの中で一番小さい女の子がシークに抱きついてきた。

「お前ら……」

シークは子供たちの姿を見て驚きの表情を隠さないでいる。

「その騎士3人」

シークはルブランたちに声をかける。

ルブランたちはシークに呼ばれて体ごとそちらに向けた。

「この子供たちはどうした？」

「実は下町の住民を助けていると、子供の泣き声が聞こえたので見てみると、子供たちが地下の方で泣いているのを発見したので、それで救出をしたのだ」

「……」

シークはルブランたちに近づくと、頭を深く下げた。

その姿は驚くものだった。

シークは大の騎士嫌い。

騎士に頭を下げるなんてことはするわけがない。

しかし、それを今シークはやっているのだ。

「ありがとう……。地下町の子供たちを救ってくれて、ありがとう」

シークは顔を上げると、笑顔だった。

シークの笑顔を見て、ルブランたちだけでなくユーリたちも呆けていた。

ルブランがハツとすると、姿勢を正しくしそのルブランに続いてア
デコールとボツコスもルブラン同様に姿勢を正しくする。

「これも騎士の務めだ！」

「騎士というものを少し間違えていたみたいだ。今まですまなかつ
た」

「わかってもらえてうれしいのでアール」

「そうなのだ！」

リタは地下町の住人と思われる人たちを見て驚いていた。
そんなリタを見てユーリが「どうした？」と話しかけてきた。

「地下町にいた人たちって全員子供なんだけど…」

リタの言うとおり、子供しかいなかった。
そのことが気になったユーリはルブランたちと会話をしているシー
クに話しかける。

「地下町の住人には子供しかいないように見えるが、大人はどうし
たんだ？」

「子供しかいないぞ。大人なんてものはいない」

「どういうことだ？」

「地下町にいる住人は貴族の奴隷から逃げてきた子供だけで作られた町……というより集落だからな。子供しかいないのは当たり前だ」

「元奴隷の町！？じゃあ、シークも元奴隷ってこと？」

シークは頷く。それはつまり、自分が元奴隷だと認めることだ。

「私たちの話はもういいだろ。それより、私たちにはやる必要があるはずだ」

「そうだ。おまえら、元団長閣下を見なかったか？」

レイヴンがルブランに尋ねる。

「はっ、いえ我々は見えておりません。ただ外で親衛隊の話し声で、なにやら御剣の階段のことを」

レイヴンの問いにルブランは見えていないと首を振った。

「御剣の階梯？」

「うちらが吹っ飛ばされた、あの高い高いアレよ」

「まだそこにいるって事ね」

「問題は、御剣の階梯ってえらい人しか入れないのよね。仕掛けがあんの」

「仕掛けならボクが外す、魔導器ならリタがいる。大丈夫だよ！」

カロールが拳を振り上げ、ユーリが頷いた。

「だな。じいさん、あんたらはこのままここで隠れててくれ」

「お前たちもここにいなさい」

シークは子供たちに優しく言い聞かせた。

「シーク姉ちゃんは？」

「私にはすることがあるから…。だからお前たちはここで待っていなさい」

「うん。わかった」

シークが行ったことを子供たちは理解してくれたようだ。

食堂を出た後、御剣の階段を目指して進む仲間たち。

カロルは歩きながら、満面の笑みでユーリを見る。

「よかったね、ユーリ！ 下町の人たちがみんな無事で」

「ああ、これであとはアレクセイの野郎をぶっ飛ばして、二人を助けるだけだ」

下町のことばかりだったユーリだったが、それはルブランたちのお陰で無事だった。

これで心おきなくエステルを助けることに専念できる。

「おっさんの部下が、初めて仕事らしい仕事したわね」

「だから、もう俺様の部下じゃないっての」

感心したように、だからかうように笑うリタ。レイヴンは若干辟易した様子である。

「あんなに尊敬されているのに、出てくるなんて酷い人ね」

「なぐんか、今度はおっさんが釈然としない気持ちになったんだけ

ど」

レイヴンはがっくりと肩を落とし、ぼやくようにひとりごちた。

「シークもよかったね！」

カロルはシークに向かって笑顔で話しかけてきた。

「あいつらが無事でよかったとは思っている。だが、喜ぶのはまだ早い。私たちはまだエステリーゼを助けていない」

御剣の階段を目指す一行は城内を進み、遂に謁見の間に辿り着いた。金や象牙など、様々な宝飾品で飾りつけられた玉座、真紅の絨毯。天井は見上げるほどに高い。正に皇帝のために贅の限りを尽くされた間だった。

その瞬間、背後から聞こえた女性の声にユーリたちは振り向く。

「ようやく来ましたね」

「クリティア族！？ いえ、あなたは確か……」

女性の姿を見たジュディスが、驚きに瞳を見開いた。そこに佇んでいたのはクリティア族の女性だった。

深い青の髪を頭の上で纏め、肌を多く見せる紫の装束を纏った彼女。そんな彼女を見ていたレイヴンが普段より低い声音で言った。

「帝国騎士団特別諮門官クローム、……要するにアレクセイの秘書殿よ」

「アレクセイの……ってことは!？」

「敵!？」

思わず身構えたり夕に、女性　クロームは首を振ってこう言った。いいえ違います。少なくとも今は、と。

その含みを持った言い方にユーリが眉を寄せる。

「引つかかる言い方だな。悪いが、こっちは急いでんだ。戦つか、でなきゃ後にしてくんねえかな」

こんなところで時間を食っている暇などない。戦うならさっさと

でなければ後にして貰いたい。
苛立ったような口調のユーリに対し、クロームは淡々とした声音で問うた。

「誰がためにあなたたちは戦うのですか？ あの哀れな娘のためですか」

「哀れだとかあんたに言われる筋合いなんかない！」

「回りくどいねえ。何が言いたいのよ？」

きつと眦を吊り上げるリタと、レイヴンは目を細め、理解出来ないと言ったようにクロームを見る。結局、彼女は何をしたいのだろう。しかしクロームはリタやレイヴンの言葉には答えず、彼らに背を向けた。

「あの人があなたたちに何を見たのか分かりませんが……。あなたたちがあの人を止めてくれるのを願っています」

クロームは文字通り言い捨てると、答えすら聞かずに謁見の間から去って行った。

ユーリたちは啞然として去り行く彼女に声を掛けることすら出来ない。

クロームの姿が完全に見えなくなった頃、呆れたようにリタが呟く。

「意味不明。ワケわかんないんだけど……」

「アレクセイを止めて欲しいってこと？」

「それは、本人に聞かないとわからないな」

クロームの言うあの人の、というのはアレクセイなのだろうか。彼しか考えられない気もするが、何分彼女の言いたいことが分からない。何をして欲しいのかも。

「さあな。ま、考えても仕方ねえ」

「そうね。もう、この先にエステルは居るのだから」

首を竦めるユーリに、ジユディスも同意する。クロームの真意や意図はこの際どうでもいい。それよりも考えねばならないことはエステルのこと。

「あとはぶつつけてとこかねえ？」

「そう言うこつた。行くぜ！」

おどけたように笑うレイヴンに、ユーリも不敵な笑みを作って彼を見返した。

後はただアレクセイをぶっ飛ばし、エステルを助けるだけだ。

仕掛けを解いたユーリたちは、今まであけることのできなかった御剣の階梯への大きな扉を開ける。

御剣の階梯への道は長い登り坂があった。

上の方からは赤く光っている。ユーリたちは急いでその道を走る。上に行くにつれ、赤い光は濃度を増していた。降り注ぐ淡い光はまるで淡雪のよう。沸き上がる焦燥を隠し、ユーリたちはひたすら足を動かし、遂にアレクセイのもとへと辿り着いた。

気配に気付いたアレクセイがゆっくりとこちらを向く。

その顔に刻まれているのは、嘲りと呆れ。

「……呆れたものだ。あの衝撃でも死なないとは」

「あやうくご期待に沿えるところだったけどな。エステル返してぶっ倒されんのと、ぶっ倒されてエステル返すのと、どっちか選びな」

ユーリを始め、仲間たちは既に臨戦態勢に入っている。アレクセイが何を選択するとしても、ぶっ倒すのは変わらない。しかしユーリたちを目の前にしても、アレクセイの余裕は崩れなかった。

「月並みで悪いが、どちらか断ると言ったら？」

「じゃあオレが決めてやるよ」

不敵に笑ってユーリは宙の戒典を抜き放つ。

「姫の力は本当に素晴らしかった。いにしえの満月の子らと比べても遜色あるまい。人にはそれぞれ相応しい役回りというものがある。姫はそれを立派に果たしてくれた」

「用が済んだってんなら、なおのことエステル返してもらっせ」

人の役回りが何か知らないが、アレクセイの目的などユーリたちにはどうでもいい。自分たちは彼女を返して欲しいだけだ。厳しい表情で自分を見つめるユーリに、アレクセイは不気味な微笑を浮かべる。

「いいとも」

アレクセイが聖核を掲げた瞬間、エステルを覆っていた球体が消滅する。

「エステル！」

球体から出たエステルは剣を構えた。

そして、その剣をユーリに向けて振りかざした。

咄嗟にユーリは自分の剣でエステルの刃を受け止めた。

ユーリに剣を打ち付けるエステルの瞳に光はない。表情豊かな彼女の顔には何の感情も浮かんでいなかった。

エステルとつばぜり合いを続けていたユーリの頬を光が掠める。

「エステル！どうしたんだよ！」

「待って。操られているようよ」

唇を噛みしめて叫ぶカロルに、ジュデイスが冷静に答える。エステルの顔からは一切の表情が抜け落ち、瞳も虚ろだ。

「アレクセイ、貴様……！」

シークは鋭くアレクセイを睨みつける。

「取り戻してどうする？ 姫の力はもう本人の意思ではどうにもならん。彼女にも猶予は残っていない。我がシステムによってようやく制御している状態なのだ。暴走した魔導器を止めるには破壊するしかない。諸君ならよく知っているはずだな」

「エステルを物呼ばわりしないで！」

「ああ、まさしくかけがえのない道具だったよ、姫は。おまえもだ、シュヴァーン。生き延びたのならまた使ってやる。さっさと道具らしく戻ってくるがいい」

叫ぶリタに、アレクセイがユーリたちの方を振り向いた。その端正な横顔には笑みが浮かんでいる。シュヴァーン、と呼び掛けられたレイヴンは、嘆くように仰々しく肩を竦めた。

「シュヴァーンなら可哀相に、あんたが生き埋めにしたでしょうが。俺はしがないレイヴン。そこんとこよろしく」

「役回りがあるってのは同感だけどな、その中身は自分で決めるもんだろ」

「それで無駄な人生を送る者もいるというのにかね。異な事を」

アレクセイとはそもそも根本的に考え方が違うのだ。どこまで行っても交わらぬ平行線。

「自分で選んだなら受け入れるよ。自分で決めるってのはそういうことだ！」

「無駄かどうかは、お前が決めることではない！」

カロルがアレクセイを睨み付ける。アレクセイは無駄な人生というかもしれない。だがそれが自分で選んだ道ならば、受け入れる。いや、アレクセイに無駄だと決める権利などないのだ。

「残念だな。どこまでも平行線か」

アレクセイが腰から剣を抜いた。普通の金属の剣ではない。透けるような刀身に、青く輝く石が埋まっている。淡い光を放つそれは聖核だろう。その瞬間、青い石が強烈な光を放った。

「やめろ！！エステル！」

エステルと戦うなど、どんな悪夢なのだろう。それはユーリたちの動きを鈍くする。彼女は操られているだけなのだ。現にカロルは武器を手にしたまま、一步も動けずにいた。

「エステル、もう……やめてっ！」

それでも彼女の動きは止まらない。

「気をつけて。あの子、それなりに強いのよ」

槍を構えたまま、ジユディスが仲間たちに注意を促す。

「傷つけるなんて……できないっ!!」

リタは印を組もうとして、出来なかった。エステルを傷つけることなど出来るはずがない。

「（…まったく、今まで平気で殺しをしてきた私が、この女だけはためらってしまう…。本当に調子の狂う……）」

シークは声には出しはなかったが、そう思った。

ユーリたちはエステルに刃を向けるが、その刃は直接エステルを傷つけることはなかった。

中々ユーリたちを退けられない二人を見て、アレクセイが首をかしげる。

「ふむ、パワーが足りなかったか？」

アレクセイが聖核を掲げた瞬間、エリシアとエステルが苦痛に顔を歪めて悲鳴を上げる。
思わず駆け寄ろうとしたユーリだったが、

「エステ……うぐっ！！」

エステルから放たれた衝撃波がユーリたちを襲った。
宙の戒典を持つユーリは無事だったが、ジュディスやレイヴンを始めとした仲間たちは膝を突き、動くことが出来ない。

「諸君らのおかげでこうして宙の戒典にかわる新しい『鍵』も完成した。礼とってはなんだが、我が計画の仕上げを見届けていただこう」

アレクセイが笑った瞬間、上空に青白い光の紋章が浮かび上がる。
何かのシンボルだろうか。
紋章から放たれた光は海上で再び強烈な光を生む。次に見えた光景に一行は言葉を失った。

青々とした海面からせり上がる建造物。一見したところ、巨大な指輪のようだ。先端には煌めく緑の石。

「くくく……ははは……成功だ！ やったぞ、ついにやった！！あれこそ、古代文明が生み出した究極の遺産！ ザウデ不落宮！かつて世界を見舞った災厄をも打ち砕いたという究極の魔導器！」

「魔導器！？ あれが……！」

アレクセイは巨大な建造物を見つめながら、声を上げて笑う。あの建造物が究極の魔導器。ザウデ不落宮。魔導器、という単語にリタが目を見開いて建造物を凝視した。

「誰もいないとこでやってくれ。聞いてて恥ずかしいぜ」

嘲るように笑いながら、ユーリは宙の戒典を強く握り締める。何が究極の遺産、魔導器だ。そんなことのためにエステルはこんな苦しい思いをさせられたのか。

「……ショーは終わりだ。幕引きをしましょう。姫、ひとりずつお仲間の首を落として差し上げるがいい」

「……！ てめえ……！」

「エステリーゼに私たちを手に掛けるようなまねをさせるな……！」

シークはアレクセイに怒りをぶつけるように叫んだ。

「姫も君たちがわざわざここに来たりしなければ、こんなことをせ
ずにはすんだものを。我に返ったときの彼女のことを思うと心が痛
むよ。では、ごきげんよう」

エステルに哀れむような視線を向け、アレクセイは身を翻す。途端、
激しい風が巻き起こり、彼の姿を隠した。

「待っててんだ、アレクセイ！ てめえ、戻ってこい！ アレクセ
イ……！」

ユーリの声も虚しく、アレクセイの姿は風が収まると同時に消えた。
残されたのはユーリたちとエステル。

「くっ……あいつ……！！」

「！ エステル……やめて……！！」

叫びに近いリタの声。

エステルは迷うことなく、ユーリに斬りかかる。

「っ……だあっー!!」

ユーリはその一撃をすんでのところで避け、もう一度振るわれた剣を宙の戒典で受け止める。

握った剣に渾身の力を込めながらも、エステルは懇願するように呟く。

「これ以上……誰かを傷つける前に……お願い……殺して」

それはいつかエステルが言った言葉。他の仲間は知らないが、ユーリには聞こえていた。彼女は確かに殺して、と言ったのだ。

正面からエステルの剣を受け止めたまま、ユーリは静かな声で言う。

「今……、楽にしてやる」

「ユーリ……」

ジュデイスがりタがカロルが、ユーリの名を呼ぶ。

「一体お前、なにやってんだよ!」

エステルはそれを受け止めながら激しく首を振った。

「わ、わたし……！ イヤ……！ もう、もう……！」

「こんなところで本当に死ぬつもりかよ！？ 死んでもいいのかわ……！」

金属と金属が触れ合う甲高い音が何度も響く。エステルの剣を受け止める度に腕が悲鳴を上げた。

ユーリは悲鳴を上げるエステルを正面から見据え、声高に叫ぶ。

「……オレの目を見ろっ！ エステルッ！ 帰ってこい。おまえはそのまま、道具として死ぬつもりか！？」

その言葉にエステルの瞳に光が宿る。彼女の手から剣が滑り落ち、からんからん、と音を立てた。緑の瞳から涙が溢れ、頬を伝う。

「わたし……わたしは……まだ人として生きていたい……！」

刹那、エステルの体から放たれた光が赤い空を割る。

空は青々とした色を取り戻し、ずっと感じていた息苦しさも消えていた。

「エステル！元に戻ったんだね！」

嬉しそうに声を上げたカロルがエステルに駆け寄ろうとした。
だが……

「待って、システムが!？」

エステルの体が僅かに宙に浮き、血のように赤い球体に包まれる。
アレクセイに捕らわれていた時と同じ紋様、だが色が違う。

「アレクセイの剣が要だったんだわ。このままでは……!」

唇を噛みしめ、ジュディスが険しい表情でエステルを見つめる。アレクセイが言っていたではないか。システムによってようやく制御している状態だと。

「エステル！」

「うっ……ああ!」

「駄目……もう止まらない……みんな逃げて……!」

エステルは仲間たちに必死に呼びかける。

「大丈夫だ、仲間を信じる！」

「あいつのシステムが使えるかも……」

リタは即座にアレクセイが作り出した術式を展開する。眼前に出現した青い光盤に指を走らせ、彼のシステムをチェックしていった。

「……すごい……。エステルとの同調も完璧。干渉術式不活性化調整データ、余剰エアル隔離術式もそろってる。でも肝心の聖核の代わりをどうしたら……」

パネルを叩いていたリタの指が止まる。アレクセイのシステムは全て聖核によってなりたっていた。しかし聖核は全て彼の手の中心にある。

聖核がなければこのシステムは使えない。

「リタ、聖核の変わりなら宙の戒典でできないか？」

思いついたシークはユーリの持つ宙の戒典を見てリタに言った。

「そうだ。こいつはアレクセイが使ってた奴の本物だったな」

アレクセイの剣は宙の戒典の代わりとして作られたものだった。
ということは本物であるこの剣を使えないだろうか。

「……やってみる！」

「手伝うわ。流れを読み取るから」

「ボクも！」

「くう。融通の利かない体だぜ……」

「私も…役に立てるならば……」

リタの声にジユディスがカロールがレイヴンがシークが応える。
絶対にエステルを助ける。その思いだけが仲間たちを突き動かして
いた。

「ユーリ、剣を！」

「っしやあー！」

ユーリたちの足元に浮かび上がる光。
ユーリが宙の戒典を掲げた瞬間、視界は眩い光で満たされた。次の
瞬間、エステルを包んでいた球体が甲高い音を立てて壊れる。

「やったあ!!」

支えを失ったエステルをユーリが受け止める。

「……おかえり」

「……ただいま」

エステルが仲間たちの元へ帰ってきてから数時間がたった。

太陽は沈み、城は柔らかな月明かりに照らされている。仲間たちと別れたユーリは、フレンの部屋にいた。

「ザウデ不落宮……」

「そう言った。知っているか？」

ユーリが彼の部屋を訪れたのは、アレクセイの話をするためだ。『ザウデ不落宮』について聞くために。だがユーリの言葉にフレンは初めて聞いたという。

「全世界の支配……本当にできると思っかい？」

「できると思っただろ、ヤツは」

「騎士団はずっと後手に回りっぱなしだ。ユーリたちがいなかったら帝都の解放は不可能だった。魔導器が世界を危機に晒しているといつとすら……」

「ヘラクレスから帝都を守ったのは騎士団じゃねえか。オレたちが帝都に入れたのだってそうだったろ」

気落ちするフレンを見て、ユーリはつとめて明るく言った。彼はそう言うが、自分たちの行動は全て、騎士団のバックアップがあったからこそである。

ヘラクレスの砲台が帝都に向けて放たれた時も、船団が体当たりをしたお陰で軌道を逸らすことが出来た。

ユーリたちが帝都に入れたのも、フレンたちが機械を抑えてくれたからだ。

自分たちだけの力ではない。

「エステリーゼ様のことだって……」

「あれはエステルが自分で帰ってきたんだ」

「それでも感謝している。ありがとう」

「よせよ、むずがゆいぜ。アレクセイには色々と貸しができすぎた。世界にとっても、オレたち自身にとってもだ。だからケリをつける。明日、ザウデ不落宮に乗り込む」

アレクセイには貸しがある。

踊らされたことと、エステルについて、落とし前をつけさせて貰う。そのためにユーリたちは明日、ザウデ不落宮へと向かうことに

なっていた。

「君の仲間も行くんだね」

「ああ。今は明日のためにそれぞれ好きに休んでるから、今夜はおとがめ無しで頼むわ」

「わかった。……ユーリ」

「ん？どうした？」

「シークのことだけど……」

「シークがどうした？」

「先ほど、彼女が来て僕に頼みごとをしてきた」

「シークがお前に……!？」

ユーリは驚いた。

シークは大の騎士嫌い。ゆえに今まで騎士であるフレンには冷たい態度をとっていたため、頼みごとをするなんて信じられなかった。

「彼女は、地下町の子供たちに人並みの生活をさせてほしいって、頭を下げられてしまったよ」

「あいつがお前に頭を下げたって……信じらんねえな」

「彼女は随分と変わった。君のおかげだね」

「俺は何もしてねえよ。変わったのはあいつ自身だしな」

話がひと段落すんだときソディアが部下の騎士を連れて入室した。視界にユーリの姿を捉えた彼女は、あからさまに眉を潜める。

「隊長、こちらでしたか。！……またお前か」

ユーリは彼女の言葉には応えず、手を振るとその場を去ろうとする。

「ユニオンとの交渉は難航しています。先方の意見が纏まらないようです。それと、もうひとつ。評議会が現在の混乱收拾のため、全権をヨードル殿下に委ねる旨、布告がなされました。そして殿下はフレン隊長を帝都解放の功により、団長代行に任命なさいました！おめでとつございます！」

部屋を出ようとしていたユーリは振り返り、フレンに向けて微笑んだ。

「これで問題がひとつ片付いた訳だ。おめでとさん」

「貴様、いい加減その気安い口を……」

「ユーリ、本当にやったのは、君……」

「まあいいじゃねえか、細かいことはさ。さてと、それじゃオレは仲間の様子でも見てくるわ。またな」

一方的に告げると、フレンが何か言う前にユーリは身を翻して部屋を出た。

シークは御剣の階段の扉の前にロアを肩に乗せて座っていた。肩に乗っているロアをなでていると、ユーリが近づいてシークに話かける。

「シーク」

「ユーリ……」

ユーリが話しかけたので、シークは立ち上がってユーリを見た。

「私と話すより他の奴と話した方がいいだろ。エステルとか」

「他の奴ともちゃんと話をする……、 “エステル”？」

「どうした？」

今まで“エステリーゼ”と呼んでいたはずのシークが“エステル”呼んだことにユーリは驚いた。

「お前、今まで“エステリーゼ”って言ってたはずだろ」

「実は先ほどエステルに謝りに言ったんだ。そしたらエステルはなんて言ったと思う？」

「なんていったんだ？」

「『今度から名前を呼ぶ時は“エステリーゼ”ではなく“エステル”で呼んで。そしたら許す』」

「なるほど、だから“エステル”か」

ユーリは苦笑した。

すると、ユーリはフレンと話した時のことを思い出し、その時の話題をシークに持ち出した。

「そついやお前、フレンに頼みごとしたらしいな」

「！？どこでそれを！」

シークは驚き、照れたのか顔を赤くした。

「フレンから聞いたんだよ……っつてもフレンが一方的に話したんだけどな」

「……あの騎士……！一発ぶん殴ってやろうか……」

「お前が殴るとフレンが気絶するからやめろ」

シークは小言のように言ったが、それはユーリには聞こえたようで

殴ろうと考えているシークを止めた。

「お前がフレンに頼みごとするなんてどういう心境の変化だ？」

「別に……今の騎士団ならあの子たちを任せてもいいと思ったまでだ。それで、たまたま隊長クラスの騎士が知り合いがあいつしかいなかったから、あいつに頼んだだけだ」

「そういうことにしてやるよ。にしても、お前変わったよな」

ユーリは出会ったばかりのことを思い出し、そう口にした。

「……自分もそう思う。昔はもっと赤の他人、特に騎士や貴族に対しては冷酷無比のように感じていたが……。ユーリと関わってから変わった気がする」

「質問してもいいか？」

「答えられることなら……」

「俺達に手を貸すのはエステルを助けるまでだったよな？これからお前どうすんだ？」

バクティオン神殿でシークは『エステルの救出に協力する』と言った。

エステルを救出した今、シークがユーリ達に協力する必要はなくな

ったのだ。

「アレクセイには私も頭にきているからな。仕返ししてやらないと気がすまないし、協力する」

「まだ、俺達と一緒にいるってことか」

「そういうことだ」

「まだ何か質問は？」

「前に始祖の隸長とデュークは“命の恩人”って言ってたよな。どういうことだ？」

「……私が元奴隷ってことは知っているな。人魔戦争が起こる前、奴隷だったとき貴族の元から逃げ出したんだ。結界の外に出て、何も口にしないで何日か逃げた。奴隷だったときからほとんどまともな口にしてなかったし、私は倒れた。その時、助けてくださったのがデューク様と一緒にいた始祖の隸長だ」

シークはその時のことを思い出しながら語る。
それをユーリは黙って聞いていた。

「その時の私はこれで死ぬんだって思った。でも、デューク様と始祖の隸長は暖かかった。私はその方たちに助けられたんだ。

デューク様たちからは文字の書き方とか、知識とか色々教わった。私にとっては信じられるのはその方たちだけだったから……。だから

ら、彼らの言葉は信じられる、彼らの言葉は正しいと思っていた。だから、デューク様の言うとおり、世界を汚す存在であるエステルを殺そうとしていた」

「今もエステルを殺そうと考えてんのか？」

ユーリの眼が鋭くなった。

「今はお前たちがなんとかするんだろ？ だったら、私はお前たちを信じるよ」

シークは優しく微笑む。

「聞きたいことはもうないのか？」

「ああ、夜遅くに悪かったな」

「別にいいよ。別に答えられないということでもないし。それに、いい暇つぶしになったから」

夜は更けていき、再び陽が昇った。

ユーリは街へと続く城の階段を降りていた。後ろからはラピードが
続く。

とその時、聞きなれた声がユーリの背に投げ掛けられる。

「もう、行くのかい？」

立ち止まり、振り返った先にはフレンの姿があった。

「こつちはもう少しかかりそうだ。ギルドの船を調達するつもりだったんだけど」

「なんかこじれてそうだったな」

ギルドの船。その一言で思い出したのは、昨夜のソディアの言葉だった。

意見が纏まらず、ユニオンとの交渉は難航していると言っていたはず。

「ドン亡き後、なかなか意見が纏まらないらしい。また追いかけることになりそうだよ」

「どっちが先にアレクセイのところに着いても恨みっこなしだぜ」

ユーリたちもザウデ不落宮にはフィエルティア号で向かうことになっていた。あのトクナガが所属するギルド、ウミネコの詩が突貫で船を直してくれたのだ。一方、フレンたちの方はなかなか難しいらしい。

やはりドンは偉大なる人物であつたということか。

「そっぴゃおまえ、もうエステルは取り返そうとはしないのかよ？
今だつてあいつお姫様にや違いないだろ。あとあれだ、皇帝の後継ぎつてやつ」

再び階段を降りながらユーリは尋ねる。するとフレンは淀みなくこう答えた。

「評議会はヨーデル殿下を指導者に選んだ。事実上、殿下を次期皇帝に推挙したも同然だよ」

「だからもう、エステルを追う必要もないってか？」

そう言えばヨーデルについてもソディアがそんなことを言っていたような気がする。

フレンも今や騎士団団長代行だ。生返事をするユーリに対し、フレンは首を振った。

「それは違う。僕の中で彼女の選択を尊重する踏ん切りがついただけさ」

「ずいぶん融通利くようになったな」

「からかわないでくれ。僕なりに悩んで出した答えなんだ」

「まああいつが聞いたら喜ぶと思っせ」

「魔導器とエアルのことは、ヨーデル殿下にお伝えしてみる。殿下ならきつと何か手を打ってくださるだろう。エステリーゼ様のことも……ユーリを信じるよ」

「よろしく頼むわ。いろいろ押し付けて悪いな。じゃ、行くわ。ザ

ウデで会おうぜ」

ユーリが好きに動けるのは全て、フレンのお陰である。彼が面倒事を引き受けてくれるから、自分たちは好き勝手が出るのだ。

ユーリは自分を信じると言ってくれたフレンに背を向け、歩き出そうとする。そんなユーリに対し、フレンは軽く目を伏せた後、

「世間じゃ帝都解放は僕だけの功績だと思っている。いや今回に限ったことじゃない。君のことは……いや凛々の明星のことさえ誰も知らない。知ろうとしていない。本当にそれでいいのかい？」

帝都解放の自分の功績はほんの少しだとフレンは思っている。今回のことだけではない。

今までユーリが、凛々の明星がして来たことを人々は知りもしない。ユーリは本当にそれでいいのかだろうか。

独り言のように呟かれた言葉にも、幼なじみは答えない。手をひらひらと振って、城下へと降りて行った。

そんな彼を見送るのはフレンだけではない。ヨードルもまた、城の正門から、ユーリの姿を目に焼き付けるように見つめていた。

ユーリが仲間のもとに辿りついた時、他のみんなはすでに集まっていた。

…… エステルを除いて。

ユーリが来たことで、リタは驚愕のことを口にした。

エステルの力の制御には成功している。

だがそれはレイヴンと同様に生命力を動力とする方法である。

共に行動するということは、その生命力を使ってしまふということである。

「それで、当人は納得したのかね？」

「……いいえ」

レイヴンの問いに答えたのはリタではなく、エステル本人だった。予想もしない人物の登場にみんなは驚いた。

「ちょ、あなたたち……見送り、よね？」

「ごめんなさい、リタ。やっぱり……連れて行ってください」

「話したでしょ？ 力を使うだけで命が削られるのよ！ 力さえ使わなければ、何の問題もなく生きられるのに」

「リタに言われてから、一晩ずっと考えたんです。最初は思いました。ああこれでやっと普通に生きられるんだなって」

「そうよ。エステルは十分ひどい目にあってきた。もう、休んでもいいのよ」

休んで良い。そう言ってくれるリタの瞳はどこまでも優しい。気遣いに満ち溢れている。

リタは優しい。けど、その優しさに甘えてはいけないのだ。

「ありがとう。でも……みんな命がけて戦おうとしている。世界の命運をかけて……。それを知って私だけ戦わないなんて出来ない」

「エステル……」

そう、みんなが命をかけて戦おうとしているのに自分だけが安全な場所になんてられない。

エステルはもう決めてしまったのだ。

「……私は反対しないぞ。ついてきたければついてこい」

今まで会話を聞いていただけのシークがエステルがついてくることに賛成をした。

シークの答えにみんなが驚いてシークの方を見た。

意外な答えにエステルの表情は明るくなった。

しかし、リタは反対なようでシークに怒鳴りつける。

「ちょっと！何考えてんのよ！そんなことしたらエステルが！！」

「こつ言ったら、エステルは聞かないのは知っているだろう。だったら、連れていくしかないさ。私たちがエステルの負担を減らせばそれで問題ないはずだ」

シークは今度は目を他の仲間たちに向けた。

「お前たちの意見はどうなんだ？」

「駄目だ……と言いたいところだが、自分で考えて自分で決めただ。オレは反対しないぜ」

「そうね。一度言い出したら聞かない子だし」

「連れてってやるっや。仲間に置いてきぼりにされるのは、ちっと切ないぜ？」

「うん。二人が辛くないように、みんなで助け合おうよ」

ユーリがどこか呆れたように笑うと、ジュディスも彼に同意する。レイヴンが苦笑混じりに言えば、カロールがねっ、と仲間たちに笑いかけた。

「……ひとつだけ約束して。絶対に、絶対にぜーったいにひとりでも無理しないこと、いい？ や、破ったらぜぜ絶交だからね」

「はい！」

今まで反対をしていたリタだったが、どうやらエステルがついてくることによくやく首を縦に振った。

顔をうつすらと赤く染め、後ろを向くリタに、エステルは元気よく頷く。

「シークがエステルがついてくることに賛成するなんて意外だよね」

「それより、シークちゃんてばいつの間にも嬢ちゃんのことあだ名で呼ぶようになったわけ？」

シークは軽く口元を釣り上げた。

「別にたいした理由はないさ。エステルがああ言ったら聞かないのは知っていたことだからな。」

それに、あだ名に関してはエステルと約束したからな」

シークはそう言ってエステルを見ると、エステルは笑顔で「はい！」と答えた。

向かうはザウデ不落宮。

みんなはフィエルティア号に乗り込んだ。

第21話：生きる（後書き）

長らくお待たせして、すみませんでした。

実のところ11月中にはほとんど完成していましたが、最後のところをどうするかで悩んでいました。

…というか、いつまでヴェスペリア（箱版）を書いているんじゃない！
世間ではすでにTOXが発売しとるというのに……。
そろそろヴェスペリア（箱版）を完結させて、新しいシリーズを書きたい！

今のところ、TOAがTOGで悩んでいます。TOXに関してはまだやっていないので、もしやったらTOXの可能性もあります。
オリキャラに至りましてはTOAの場合は男、TOG・TOXは女を予定中です。

キャラの中身、外見に関してはTOVを終えてから本格的に決めていきます。

では、皆様読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1280f/>

テイルズ オブ ヴェスペリア 赤月の夜

2011年12月9日01時06分発行